梅林遺跡

第3次調査

――一般国道202号線福岡外環状道路、及び
福岡市営地下鉄3号線建設に伴う発掘調査報告3―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第６９８集

２００２

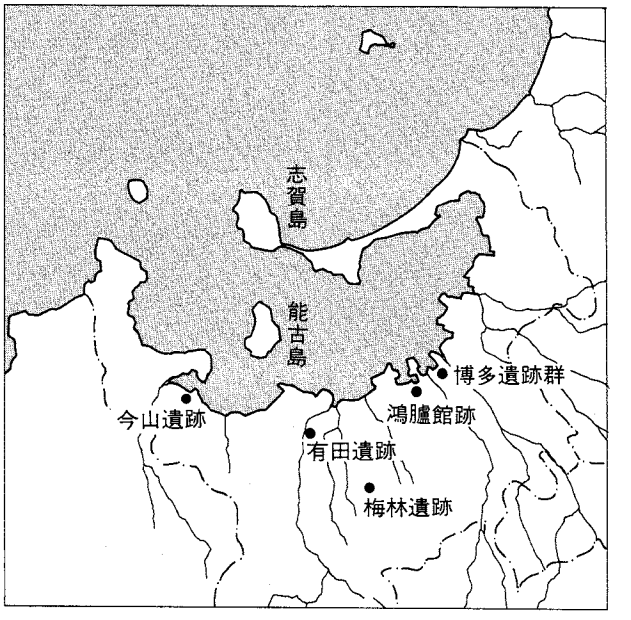
福岡市教育委員会

梅林遺跡

第3次調査

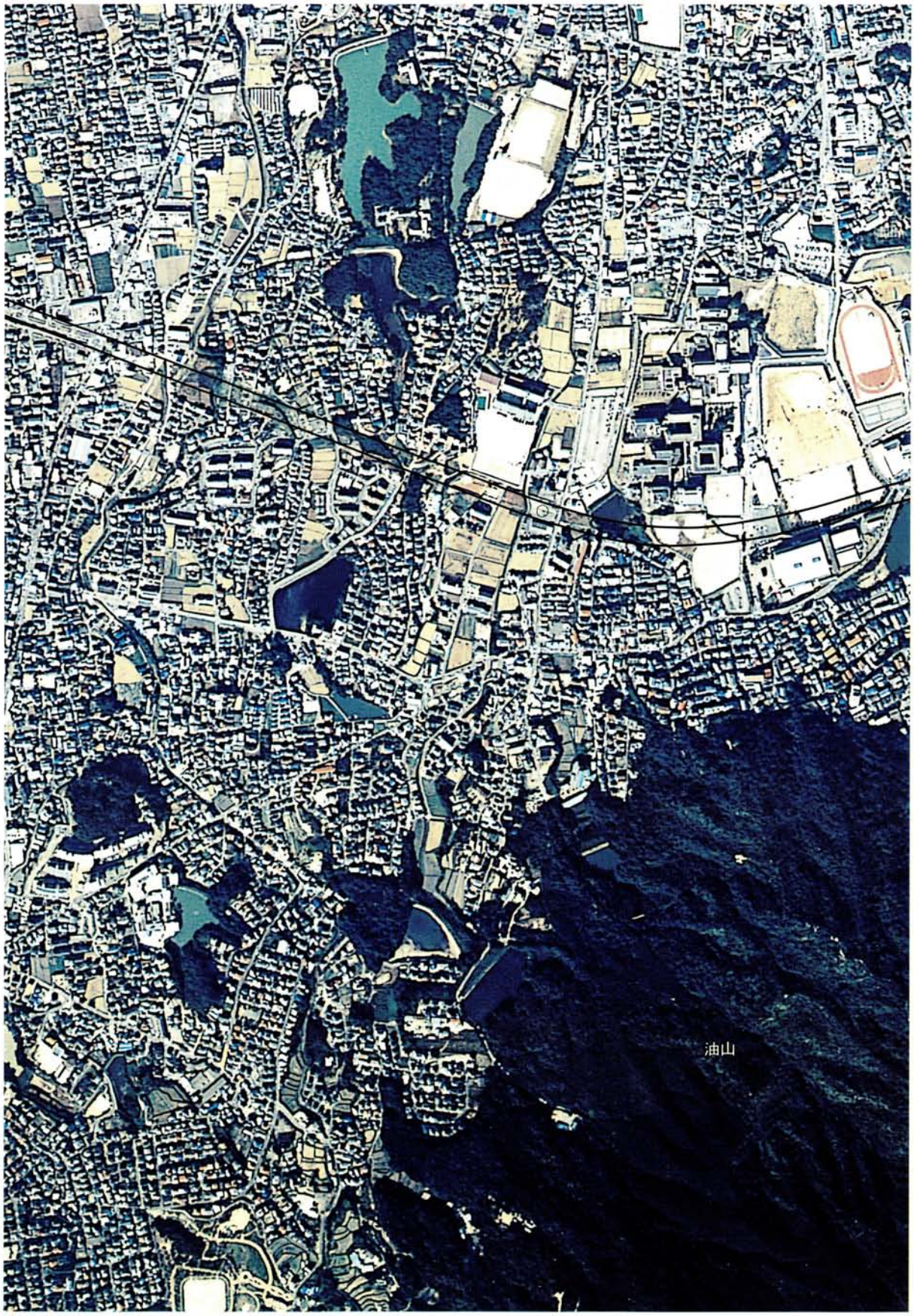
——一般国道202号線福岡外環状道路、及び
福岡市営地下鉄3号線建設に伴う発掘調査報告3—

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第６９８集



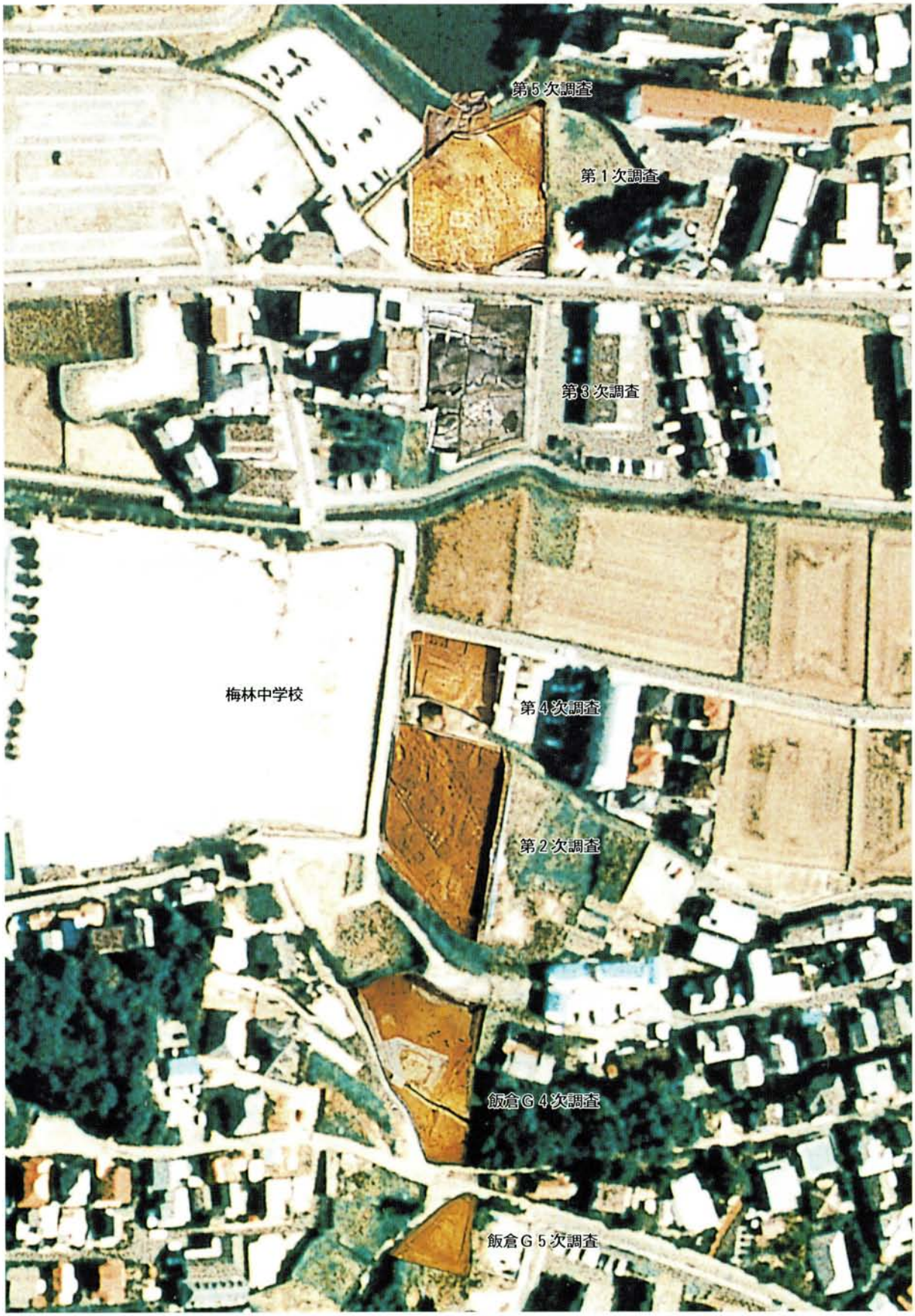
２００２

福岡市教育委員会



油山・梅林地域の航空写真

※写真掲載については国土地理院の許可を得た。
○印が調査地点



梅林遺跡第1～5次調査地点

梅林遺跡第1・3次調査全景

序　　文

玄界灘に面した福岡市は、古くから大陸との交流が盛んで、豊かな自然環境と歴史的な遺産に恵まれています。この中でも特に博多湾の西部に面した早良平野は、弥生時代のクニの形成を示す早良王墓や大型建物跡、また古墳時代の前方後円墳、奈良時代の群衙など貴重な遺跡の発見が相次いでいる地域です。しかし、近年は市街地化の拡大と共に埋蔵文化財の発掘調査も増加している地域でもあります。

福岡市教育委員会では、平成3年度より一般国道202号線福岡外環状道路予定地の埋蔵文化財の試掘調査、及び発掘調査を進めており、平成3年度には、Ⅳ工区から発掘調査に着手し、賀茂遺跡の古墳時代井堰跡等の発掘調査を行ってまいりました。

又、外環状道路のⅢ・Ⅳ工区は、福岡市交通局が計画している地下鉄3号線建設区域と重なっており、計画の進捗に合わせて平成9年度からⅢ工区の城南区梅林地域の発掘調査を実施しました。

本書は、平成11年度に実施した梅林遺跡第3次調査の成果について報告するものです。この発掘調査では、古墳～江戸時代の水田跡等を発見しました。これらの遺構は、早良平野の歴史的経過を解明する重要な手がかりになるものと考えられます。

本書が市民の埋蔵文化財へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

平成14年3月5日

福岡市教育委員会
教育長　生田　征生

例　　言

（1）　本書は、一般国道202号線福岡外環状道路（以下外環状道路と称す）、及び福岡市営地下鉄3号線（以下地下鉄3号線と称す）建設予定地において、福岡市教育委員会が、建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所、及び福岡市交通局の委託を受けて平成11年度に実施した発掘調査報告書である。

（2）　本書には、外環状道路Ⅲ工区において実施した城南区梅林所在の梅林遺跡第3次調査の成果について収録するものである。

（3）　発掘調査は、福岡市教育委員会埋蔵文化財課所属（当時）の井澤洋一が担当した。

（4）　本書に掲載した遺構平面の原図（縮尺1/20）の実測については、「株式会社埋蔵文化財サポートシステム」に委託した。その他の遺構平面図、及び断面図・土層実測図等の作成等は、井澤、藤崎真歩、田中昭子、上野道郎が行った。合成図等の作成は、藤崎が行った。

（5）　本書に掲載した遺物実測は、田中・藤崎が行い、石器については、「株式会社国際航業」に委託した。

（6）　遺構・遺物の製図は、藤崎・田中が担当し、一部を井澤が行った。

（7）　遺構の写真撮影は、井澤が担当し、遺物の撮影については、井澤が行い、一部を「有限会社フォトハウス岡」に委託した。

（8）　各種の自然科学分析については、「株式会社パリノ・サーヴェイ」に委託した。

（9）　本書作成にあたっては、木田彩・江口しづの・辻ミチ子・堀タケ子の協力を得た。

(10)　遺構番号は発掘調査中において検出した順に通し番号をふり、整理報告の段階において遺構略号を遺構番号の頭に付けた。遺構略号として用いたのは、SS（水田跡）、SD（溝）、SK（土壙）、SX（柵）、SP（小穴）である。

(11)　本書に用いた遺物番号は、挿図・図版の遺物番号に一致させている。

(12)　本書に用いた方位は、磁北である。

(13)　本報告にかかわる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管する予定である。

(14)　本書の編集は、井澤・藤崎が行い、執筆は第 1～2・3章の一部を井澤が、その他を藤崎が担当した。

付編については、株式会社パリノ・サーヴェイの辻本裕也氏にお願いした。

本 文 目 次

頁

第１章　はじめに……1
１．調査に至る経過……1
２．発掘調査の組織……1
（１）平成11年度の発掘調査組織……1
（２）平成12年度の資料整理組織……2

第２章　調査経過……5
立地……5

第３章　調査報告……7
１．地形と土層……7
２．遺構・遺物説明……14
（１）第１面の遺構……14
（２）第１面出土遺物……29
（３）第２面の遺構……39
（４）第２面出土遺物……50
（５）第３面の遺構……52
（６）第３面出土遺物……64
（７）第４面の遺構……68
（８）第４面出土遺物……83
（９）第５面の調査……88
（10）第５面出土遺物……89
（11）表土・遺構面・トレンチ出土遺物……89

付編
梅林遺跡第３次調査の古環境解析……119

挿 図 目 次

Fig. 1　周辺の遺跡（縮尺1/25.000）…… 3
Fig. 2　梅林遺跡の周辺遺跡と外環状道路位置図（縮尺1/8.000）…… 4
Fig. 3　梅林遺跡第１～５次調査位置図（縮尺1/2.000）…… 8
Fig. 4　梅林遺跡第３次調査地形図（縮尺1/700）…… 9
Fig. 5　調査区南壁・西壁土層水田跡概念図（縮尺1/150）……11
Fig. 6　第１面遺構配置図（縮尺1/250）……15
Fig. 7　溝 SD101・104・110～112土層実測図（縮尺1/20）……20
Fig. 8　溝 SD120・121・123～125土層実測図（縮尺1/20）……23
Fig. 9　水口 SX101・102実測図（縮尺1/40・1/50）……24
Fig.10　土壙 SK101～105実測図（縮尺1/40・1/60）……26
Fig.11　水田跡 SS101・102出土遺物実測図（縮尺1/3）……29
Fig.12　水田跡 SS103・104出土遺物実測図（縮尺1/3・1/2）……30
Fig.13　水田跡 SS108出土遺物実測図（縮尺1/3・1/2）……31
Fig.14　水田跡 SS110・112・126出土遺物実測図（縮尺1/3）……32
Fig.15　溝 SD101・110～112・121、水口 SX101・102、土壙 SK104、七隈川蛇行部 SX103出土遺物実測図（縮尺1/3）…33
Fig.16　第１面出土石製品実測図（縮尺1/1・1/2・2/3）……34
Fig.17　水口 SX102、南側調査区杭列 SA101出土木製品実測図（縮尺1/6）……36
Fig.18　南側調査区杭列 SA101出土木・竹製品実測図（縮尺1/6）……37
Fig.19　溝 SD104、土壙 SK104、七隈川蛇行部 SX103出土木製品実測図（縮尺1/6）……38
Fig.20　北側調査区杭列 SA102出土木製品実測図（縮尺1/6）……39
Fig.21　第２面遺構配置図（縮尺1/250）……41
Fig.22　溝 SD201土層実測図（縮尺1/20）……47
Fig.23　溝 SD202土層実測図（縮尺1/20）……49
Fig.24　土壙 SX201実測図（縮尺1/40）……49
Fig.25　水田跡 SS202・204・207・209・224、畦畔 SF202出土遺物実測図（縮尺1/3）……50
Fig.26　溝 SD201・202・211出土遺物実測図（縮尺1/3・1/2・1/1・1/6）……51
Fig.27　第３面遺構配置図（縮尺1/250）……53
Fig.28　溝 SD306土層実測図①（縮尺1/40）……59
Fig.29　溝 SD306土層実測図②（縮尺1/30）……62
Fig.30　土壙 SX305土層、土壙 SX303・304実測図（縮尺1/40）……63
Fig.31　水田跡 SS302・304出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）……64
Fig.32　溝 SD306出土遺物実測図（縮尺1/3）……65
Fig.33　包含層、溝 SD306、土壙 SX305出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1・1/2）……66
Fig.34　溝 SD306、水口 SX305出土木製品実測図（縮尺1/4・1/6）……67
Fig.35　第4面遺構配置図（縮尺1/250）……69
Fig.36　溝 SD403・405・413・416土層実測図（縮尺1/20）……75
Fig.37　溝 SD305土層実測図（縮尺1/20）……77

Fig.38　柵 SX301・302実測図（縮尺1/30）……79
Fig.39　柵 SX401・402実測図（縮尺1/30）……81
Fig.40　水口 SX403実測図（縮尺1/40）……82
Fig.41　水田跡 SS404・407、畦畔 SF402、溝 SD305出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）……83
Fig.42　溝 SD403・405出土遺物実測図（縮尺1/3）……84
Fig.43　溝 SD405・413・417出土遺物実測図（縮尺1/3・2/3・1/1）……85
Fig.44　溝 SD405、柵 SX301・302出土木製品実測図（縮尺1/4・1/6）……86
Fig.45　柵 SX401・402出土木製品実測図（縮尺1/6）……87
Fig.46　第5面調査位置図（縮尺1/400）……88
Fig.47　第5面遺構配置図（縮尺1/80）……89
Fig.48　第5面トレンチ南・西壁土層実測図（縮尺1/30）……91
Fig.49　柵 SX501実測図（縮尺1/30）……92
Fig.50　第5面出土遺物実測図①（縮尺1/3）……93
Fig.51　第5面出土遺物実測図②（縮尺1/3・1/1・1/2）……94
Fig.52　柵 SX501、第5面出土木製品実測図（縮尺1/6）……95
Fig.53　第5面出土木製品実測図①（縮尺1/6）……96
Fig.54　第5面出土木製品実測図②（縮尺1/6）……97
Fig.55　第5面出土木製品実測図③（縮尺1/8・1/6）……98
Fig.56　第5面出土木製品実測図④（縮尺1/4）……99
Fig.57　第5面出土木製品実測図⑤（縮尺1/4）……100
Fig.58　表土・遺構面出土遺物実測図（縮尺1/3）……101
Fig.59　トレンチ出土遺物実測図（縮尺1/3）……102

付図　梅林遺跡第3次調査南壁・北壁土層実測図（縮尺1/60）

表　目　次

Tab. 1　梅林遺跡第3次調査遺構一覧表……103
Tab. 2　梅林遺跡第3次調査出土土器・陶磁器一覧表……105
Tab. 3　梅林遺跡第3次調査出土鉄製品一覧表……115
Tab. 4　梅林遺跡第3次調査出土木製品一覧表……116

第1章　はじめに

1．調査に至る経過

福岡市教育委員会では、平成3年度より福岡市域内を東から西へ横断する一般国道202号線福岡外環状道路予定地内の埋蔵文化財の試掘調査、及び発掘調査を進めている。福岡市西部地区においては、用地買収が完了しているにもかかわらず、平成7年度のユニバーシアード大会迄に野芥～福重間のⅣ工区を開通させるため急遽工事着手されることになった。

このため平成4年度からⅣ工区早良区賀茂地区に所在する免遺跡第2次調査を始めとして10箇所の遺跡の発掘調査に着手し、今日まで2頁に記載した報告書が示すように多大な成果をあげている。

その間、福岡市交通局は福岡市の中央区、及び西部地区の交通事情の解消の為に地下鉄3号線建設を築港より西区橋本迄延長させることを決定した。この路線計画では城南区の福岡大学構内から橋本迄の路線が、福岡外環状道路予定地（Ⅲ工区）と重複していることが判明した。このため、すでに用地買収が終了した箇所から順次遺跡の埋蔵状況を確認することとした。試掘調査は、平成8・9年度の2カ年に亘って実施した。その結果、野芥・梅林地域において、新たに数カ所の遺跡の存在を確認したため、平成9年度より発掘調査を開始した。

平成11年度事業として発掘調査を実施する事になった。当該地は、外環状道路第Ⅲ工区の東端部に位置し、福岡市交通局事業の地下鉄3号線建設予定地域でもある。

発掘調査は、福岡国土工事事務所、及び福岡市交通局と福岡市教育委員会の三者による受託契約によって実施することとなった。

2．発掘調査の組織

(1)　平成11年度の発掘調査組織

調査委託者	建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所 福岡市交通局
調査主体	福岡市教育委員会
調査担当	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
調査責任	文化財部埋蔵文化財課長　柳田純孝（現文化財部長）
発掘担当	埋蔵文化財課主任文化財主事　井澤洋一（現文化財整備課整備係長）
庶務担当	埋蔵文化財課第一係　木原順二（現文化財整備課管理係）
調査員	吉田扶希子、田中昭子
調査協力者	上野道郎、吉鹿裕隆、井手上貢一、柴田宏徳、大塩皓、三宅善彦、西原雅美、永井ゆり子、折口怜子、大穂栄子、俣野志津代、青柳美智子、土生喜代子、庄野崎ヒデ子、箱田香代子、石橋ミツヨ、梅野眞澄、江口充子、橋本千代子、津波清子、辻ミチ子、広瀬美知子、宗裕子、横田千代子、甲斐初子、古藤あけみ、堀タケ子、西口キミ子、服部由美、柳谷美佳、楢崎直子、藤崎真歩、田仲由利恵、江口しづの、内田裕子、綾部里香、石光恵子、大浦正子、竹村文子、内尾義則、松林正治

(2) 平成12年度の資料整理組織

整理報告委託者　建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所
福岡市交通局
整理報告主体者　福岡市教育委員会
整理報告責任者　文化財部埋蔵文化財課長　山崎純男
整理報告担当　文化財整備課整備係長　井澤洋一
庶務担当　文化財整備課管理係　宮川英彦
調査員　田中昭子、藤崎真歩、楢崎直子
資料整理　木田彩、江口しづの、堀タケ子、西口キミ子、辻ミチ子

尚、平成13年度の報告書印刷に関しては、校正、訂正作業などに以下の方々の手を煩わせた。
藤崎真歩、田中昭子、江口しづの、辻ミチ子、堀タケ子

遺跡調査番号	9843		遺跡略号	UBY-3	
地番	梅林3丁目455-7他		分布地図記号	七隈74	
開発面積	2.267㎡	調査対象面積	2.267㎡	調査面積	2.267㎡
調査期間	平成11年4月2日～平成11年7月4日				

福岡外環状道路に関する調査報告書一覧

1.「福岡市教育委員会福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告―1―　福岡市早良区次郎丸所在次郎丸遺跡・次郎丸高石遺跡第2次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書　第467集　福岡市教育委員会　1996年
2.「福岡市教育委員会福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告―2―　福岡市早良区賀茂所在次郎丸高石遺跡第3次調査・免遺跡第2次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書　第536集　福岡市教育委員会　1997年
3.「福岡市教育委員会福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告―3―　福岡市早良区次郎丸所在次郎丸遺跡第2次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書　第535集　福岡市教育委員会　1997年
4.「福岡市教育委員会福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告―4―　福岡市早良区賀茂所在野芥大藪遺跡第1次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書　第581集　福岡市教育委員会　1998年
5.「福岡市教育委員会福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告―5―　福岡市西区橋本一丁目遺跡第2次調査・橋本遺跡第1次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書　第582集　福岡市教育委員会　1998年
6.「福岡市教育委員会福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告―6―　福岡市早良区野芥所在野芥遺跡第5次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書　第609集　福岡市教育委員会　1999年
7.「井相田D遺跡第2次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書　第610集　福岡市教育委員会　1999年
8.「梅林遺跡第1次調査― 一般国道202号福岡市外環状道路、及び福岡市営地下鉄3号線建設に伴う発掘調査―」福岡市埋蔵文化財調査報告書　第648集　福岡市教育委員会　2000年
9.「梅林遺跡第2次調査― 一般国道202号福岡市外環状道路、及び福岡市営地下鉄3号線建設に伴う発掘調査―」福岡市埋蔵文化財調査報告書　第660集　福岡市教育委員会　2001年

1．梅林遺跡　2．千隈古墳D群　3．梅林古墳　4．梅林八幡宮古墳　5．五ヶ村池古墳　6．千隈B古墳群
7．飯倉遺跡　8．別府遺跡　9．西新町遺跡　10．藤崎遺跡　11．飯倉原遺跡　12．七隈古墳群

Fig. 1　周辺の遺跡（縮尺1/25.000）

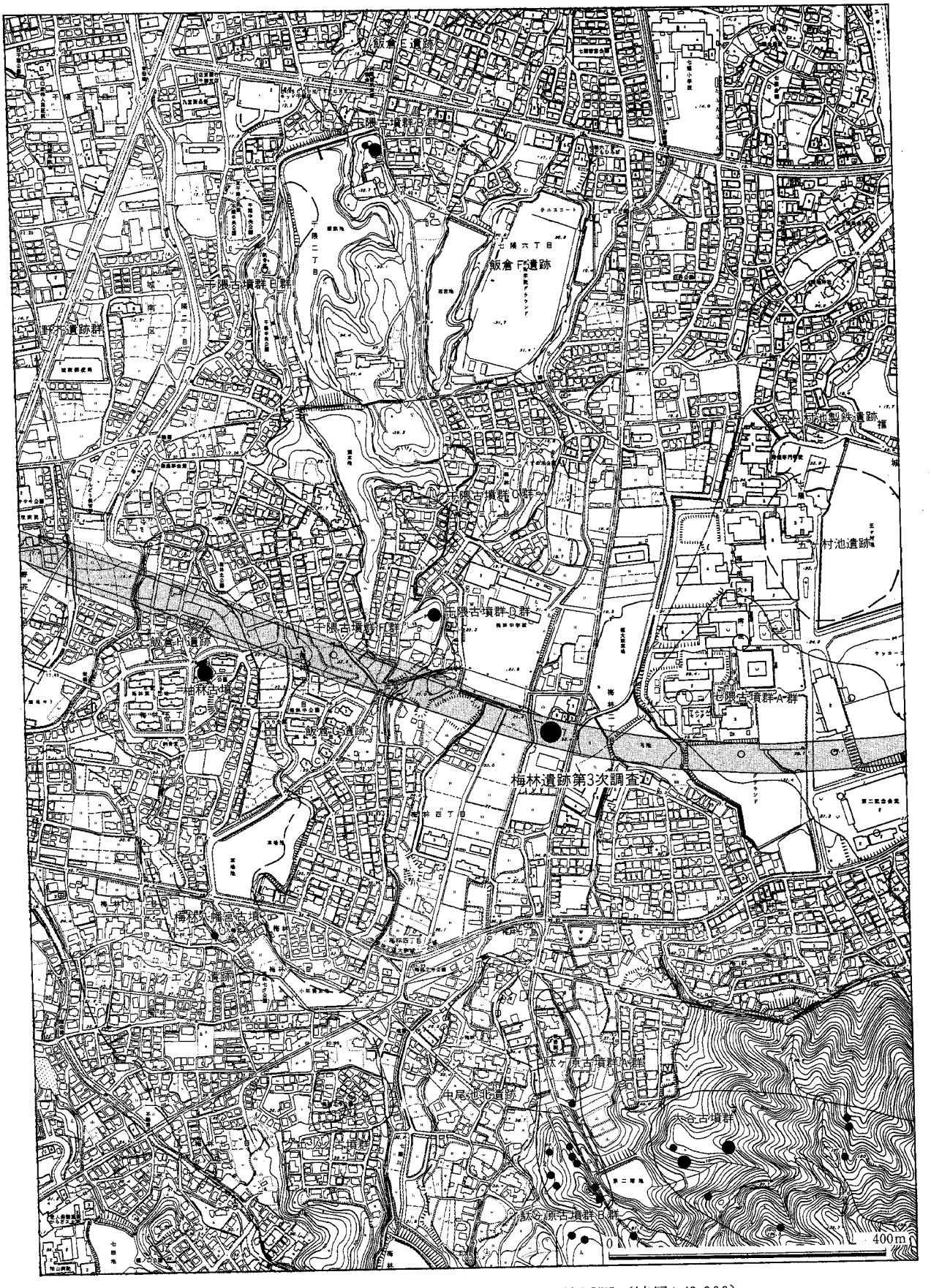


Fig. 2　梅林遺跡の周辺遺跡と外環状道路位置図（縮尺1/8.000）

第２章　調査経過

立 地

早良平野を南北に貫流する室見川は、背振山系を源流として山麓の内野・脇山地区に広大な段丘を形成し、更に、全長約15.5kmに亘る流域には肥沃な沖積地を形成している。この室見川の右岸には背振山系に密教が隆盛を極めたが、この油山の西麓に存在した天福寺は、対外交易にも関わりを持ち、背振山系密教の中心であった東門寺との間に争論を繰り返す程の勢いをもった寺であった。

この油山からは、更に博多湾に向かって幾つもの舌状丘陵が派生している。この丘陵には数多くの遺跡が存在するが、特に干隈から飯倉に至る全長約2.5kmを測る丘陵上には、銅剣が出土した飯倉Ｃ遺跡や、銅鏡の鋳型が出土した飯倉Ｄ遺跡、更に南側の尾根上には前方後円墳の干隈古墳が存在する。

また、福岡大学病院が立地する標高30～40m の丘陵には、縄文時代の遺跡である五ヶ村池遺跡や古墳時代と考えられる製鉄遺跡が存在するが、最も顕著な遺跡としては、古墳群の分布である。この丘陵にもかつては七隈古墳群Ａ群が分布していたが、現在は福岡大学の校庭拡張や周辺の開発によってその数は減じている。丘陵は、更に東や西方向に舌状台地を複雑に分岐しており、この先端部に集落遺跡が散在していることが、発掘調査などにより推定できる。

当該地周辺の遺跡については、従来、梅林地域に於いて主に七隈古墳群を中心とした後期古墳群の分布地域として知られており、集落遺跡の状況については余りわかってはいない地域であった。近年、住宅の開発に伴い、その実態が明らかになりつつある。発掘調査例としては、平成元年～３年に梅林三丁目地域において公園建設に伴い、弥生～古墳時代の集落遺跡である飯倉Ｆ遺跡の発掘調査を行い、又、飯倉Ｃ遺跡では、古代氷室跡なども発見している。梅林遺跡から西方向に約500m の地点には1989年に発掘調査した５世紀後半から６世紀中頃の時期で、全長約30m を測る前方後円墳の梅林古墳が存在している。この古墳の副葬品の中には外来系の土器が含まれていた。さらに当遺跡から南方向に約600mに位置するクエゾノ古墳群は、1992年の発掘調査の結果、５～６世紀代の古墳であることが判明した。副葬品には製鉄に関わる工具が出土しており、渡来系の製鉄集団の存在を伺わせていることは、梅林遺跡の古墳時代遺構との密接な繋がりを示すものと考えられる。

当該地周辺の地形は、おおむね南北方向の飯倉丘陵の尾根から北東方向に小さく突き出した低丘陵上に立地し、七隈川の開析によって造り出された狭長な平野に立地している。台地縁辺の水田化は早くから行われていたが、昭和50年代の圃場整備に際して水田区画のために台地が大きく削平を受けており旧地形を留めていない。

調査地点の西側には、現在は三面をコンクリートで固められた七隈川が細々とその流れを留めているが、七隈川を中心とした周辺の地形は、両岸に標高約30m の丘陵が迫っており、最大幅が80～100m程の狭小な平野でしかない。また、現在は圃場整備によって平坦地形が形成されているが、かつては全体が傾斜地形であったと考えられる。この緩傾斜地が現在も水田として利用され続けられている。

梅林地区の発掘調査は、平成９年に梅林遺跡第１次調査を実施し、古墳時代の居館跡や平安時代の水田跡を発見した。平成10年には第２次調査においてオンドル構造をもつ竪穴住居跡の集落を発見した。この集落は第１次調査で発見した古墳時代の居館跡に、直接的に関わる遺跡として注目される。今回の発掘調査では、第１・２次調査に関わる居館跡の一部の他、古墳～江戸時代の水田跡などを検出した。

梅林遺跡第3次調査地点（西から）

梅林遺跡第1～第5次調査地点（東から）

第３章　調査報告

１．地形と土層（付図参照）

当該地は、市道七隈梅林線から七隈川の東側に至る東西幅約55ｍに亘る範囲であるが、昭和50年代に圃場整備が行われており、緩傾斜地形の変化に沿ってつくられた不整形の水田区画から整形な大区画水田へと整形されている。

また、近年は宅地造成のため、水田面の上部に盛土が行われており、深さは東側2.3ｍ、西側で2.8ｍを測る。

調査に当たっては、調査区の南壁面、北壁面の土層観察を行い、水田耕作土の存在の確認と、洪水による砂層の堆積状態を把握することに努めた。旧水田面の標高は、東側で約21.0ｍ、西側で約20.0ｍを測り、比高差は１ｍを測る。

圃場整備段階での水田区画は、当時の図面が残っていないため不明であるが、南壁土層図で観察すると、西側に向かって５段に形成されており、東側から約14.5ｍ、約16.0ｍ、約6.8ｍの水田幅をもっている。区画整理以前の水田面（耕作土）は、東側から第４層（灰褐色粘質土）、第15層（灰色砂質土）、第16層（黄褐色土）、第31層（暗灰色砂質土）、第21層（暗褐色粘質土）が考えられる。現代の水田耕作土の下層は、部分的に中間に洪水による砂堆を受けているものの、下層まで大きな乱れがなく、ほぼ水平な堆積層を形成している。南壁土層面の西側では、標高約19.60ｍのところに七隈川東岸部を検出した。水田耕作土は、現代の耕作土を含めて東側では６面（第１・２層、第４層、第15層、第16層、第７層、第18層、第12層）、西側では７面（第１層、第31層、第35層、第39層、第41層、第44層、第57層）を検出した。東側の最下層耕作土は、第12層（灰色粘質土）で、標高20.90ｍを測る。西側の最下層の耕作土は、第57層（灰黒色粘質土）で、標高約19.80ｍを測る。

発掘調査では、重層する水田耕作土を詳細に把握することは困難であるため、洪水によって砂層が被覆した水田面を任意に面としてとらえた。水田面は階段状に西へ徐々に下がっている。調査区東側においては、粗砂層の第６層によって被覆された第７層の黒色粘質土層上面を１面とした。第７層（黒色粘質土）と下層の第18層（灰黒色砂質土）の分離は困難であった。第７層は、平面的には方形区画を形成する水田の耕作土と考えられる。

最下層の第12層・第12′層（灰色粘質土）は古代・中世に属する耕作土と考えられるが、畦畔を確認できなかった溝SD202から切られている層である。溝SD202は、溝SD226と合流するが、その成形時

南壁面土層堆積状況（北西から）

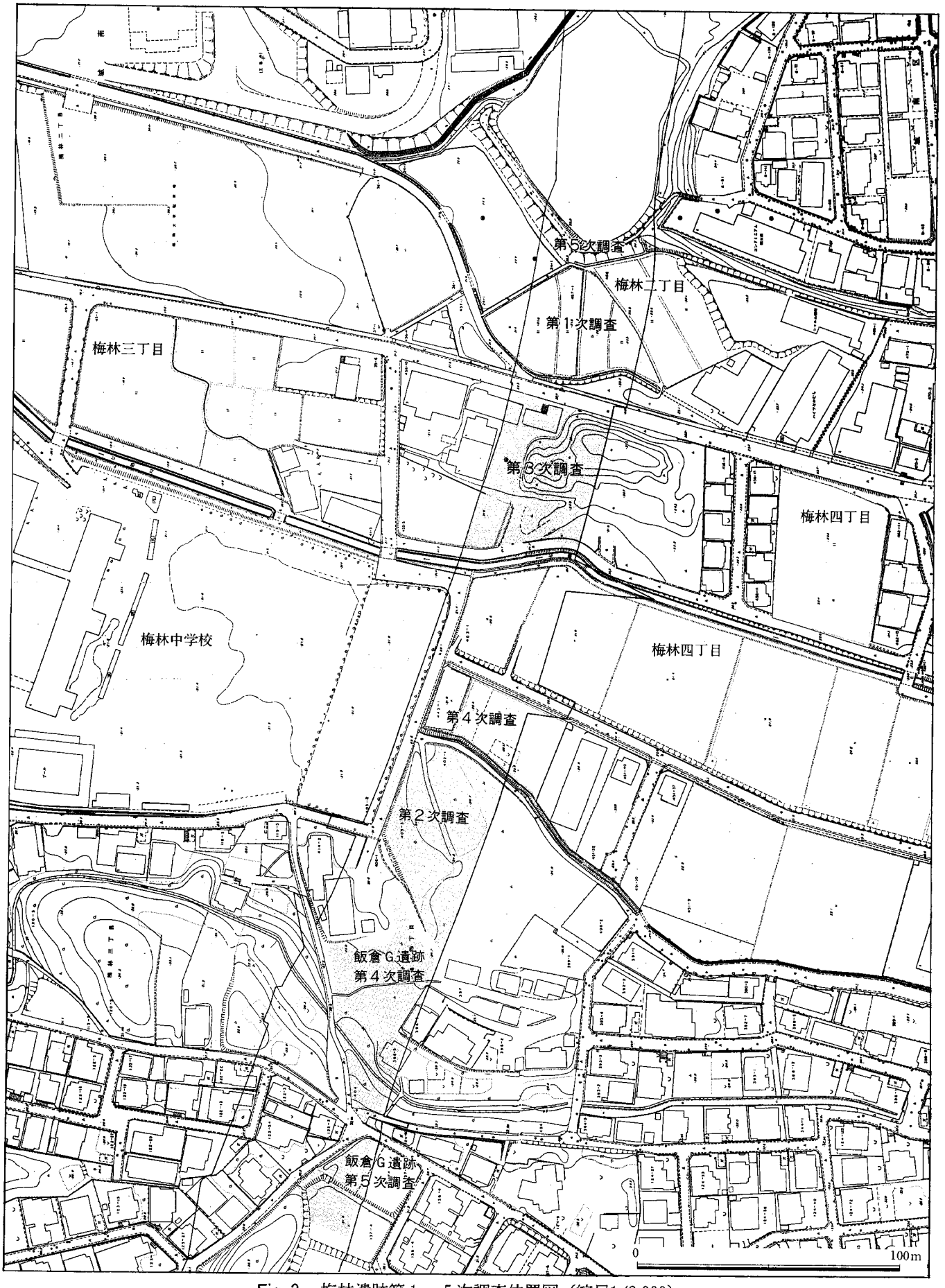


Fig. 3　梅林遺跡第1～5次調査位置図（縮尺1/2.000）

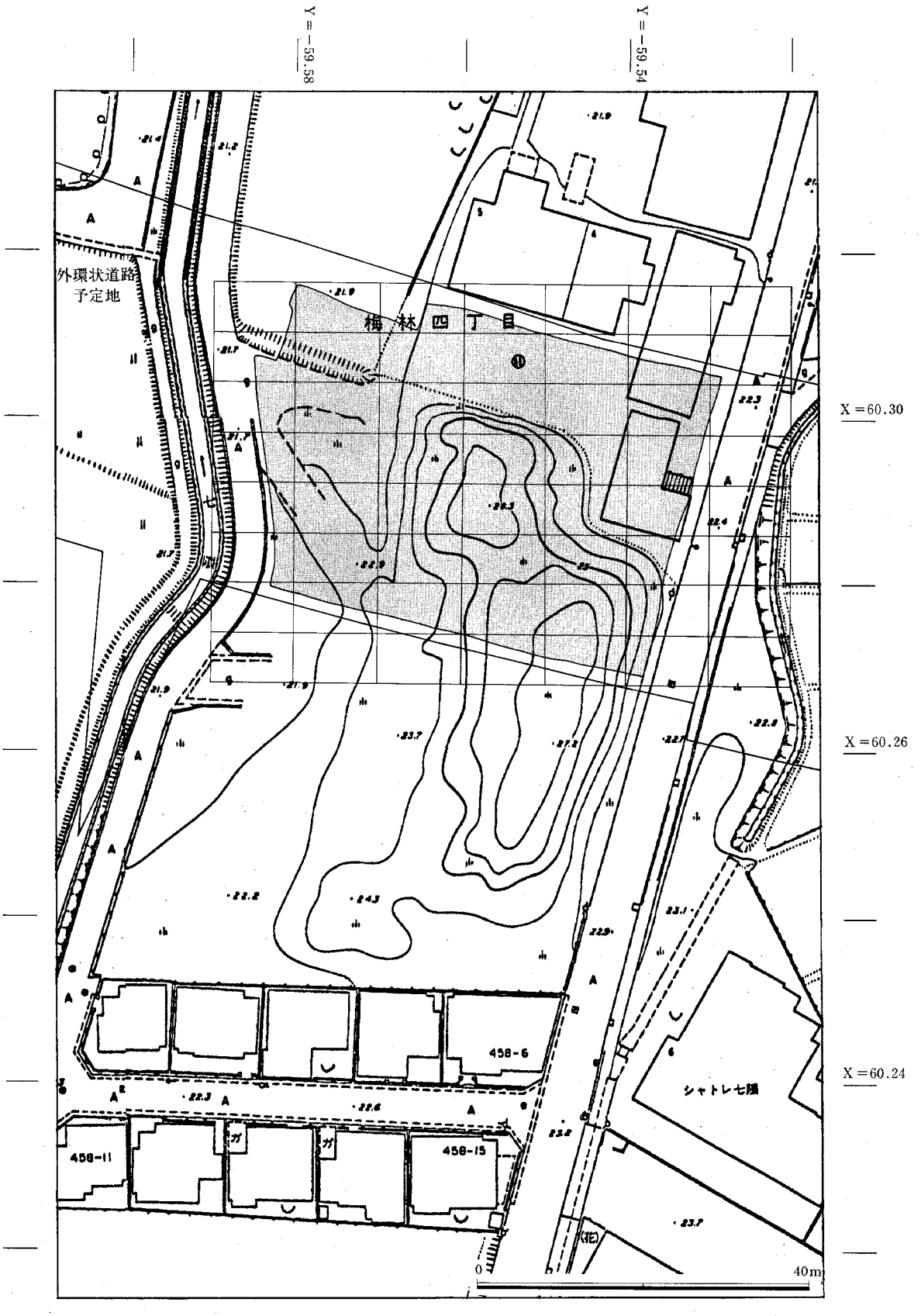


Fig. 4　梅林遺跡第3次調査地形図（縮尺1/700）

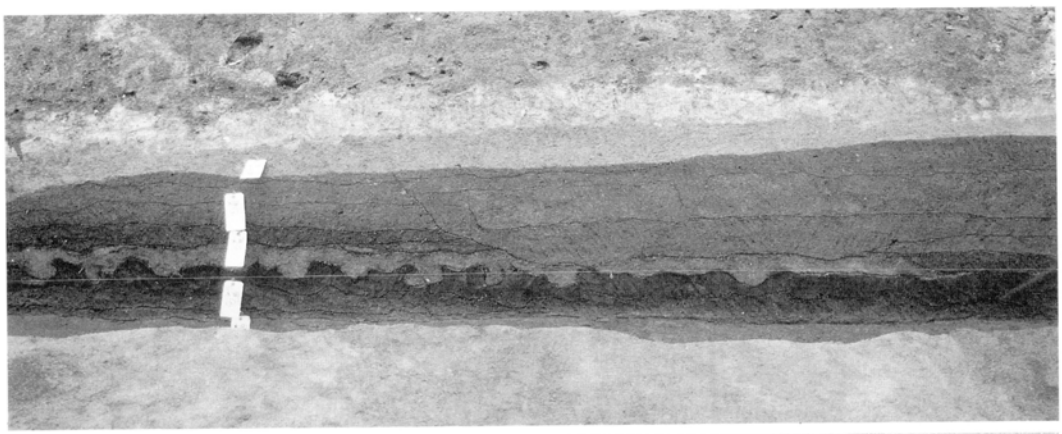
期は不明である。第18層、第12層耕作土に伴うものと考えられる。第12層耕作土の下の第10層（黒色粘質土）は粘りが強い薄い層で、下層の黄褐色粘質土の上面に貼り付いた状況で堆積している。下層の黄褐色粘質土は地山と考えられ、溝SD306の底面までは存在しているが、これより西に急激に落ち込み、調査区西側では面的には検出できない。

調査区西側においては、第35層（灰黒色砂質土）を第1面とした。下層の第39・41層との間には薄い砂層が堆積しており、分離することは可能であったが、時期的な区分は不可能であった。第39・41層は畦畔SF205・305に伴う水田面と考えられる。第44層（暗灰色粘質土）、第57層（灰黒色粘質土）は面的に把握できなかった。第44・57層の西側には七隈川の東岸部分が確認できるが、第44・57層との間に畦畔状の高まりが見られる。これは自然堤防を形成していたと考えられる。

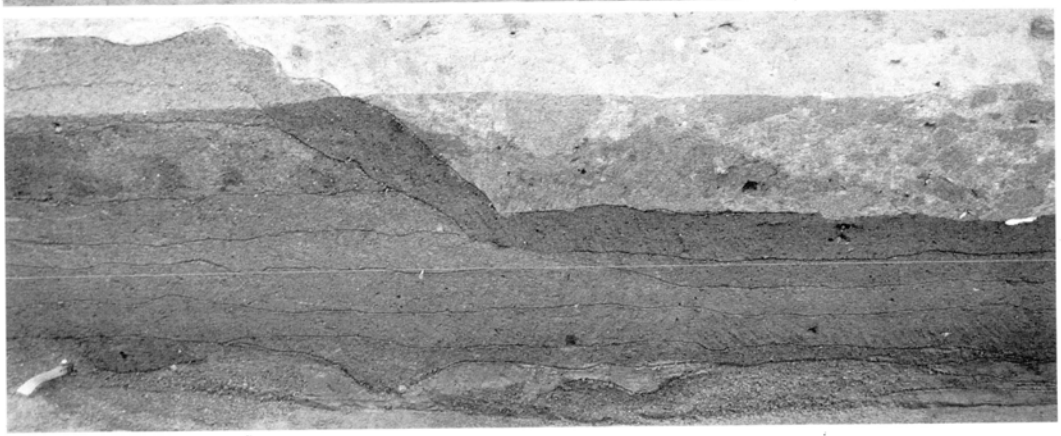
調査区には、東端、及び中央東寄り、中央西寄りに南北方向の用水路と考えられる溝が形成されているが、特に中央よりの溝SD306・406が埋没した後の遺構である畦畔SF101に伴う水田耕作土は第20層、溝SD306に伴う耕作土は第18層、溝SD406には第18・47層の耕作土が伴う。

水田面は、平面的には第1～4面を検出した。各々の面は西側に向かって段々畠状になっており、標高は1面は東側が20.45m、西側が20.10m、第2面は東側が20.20m、西側が19.80m、第3面は東側が19.60m、西側が19.60m、第4面は東側が19.70m、西側が19.55mである。但し、調査区東側については溝SD306・406の東側は耕作土の層位的変化は余りみられず、耕作の継続性が認められる。

遺構　第1面　近世の水田跡（14区画）、畦畔、水路跡、水口、土壙
第2面　中世の水田跡（14区画）、畦畔、水路跡、水口、土壙
第3面　古代の水田跡（16区画）、畦畔、水路跡、水口、土壙
第4面　古墳時代の水田跡（8区画）、畦畔、水路跡、水口、土壙、柵（しがらみ）
第5面　七隈川氾濫原、水路跡、柵（しがらみ）



南壁面土層の状態①（北から）



南壁面土層の状態②（北から）

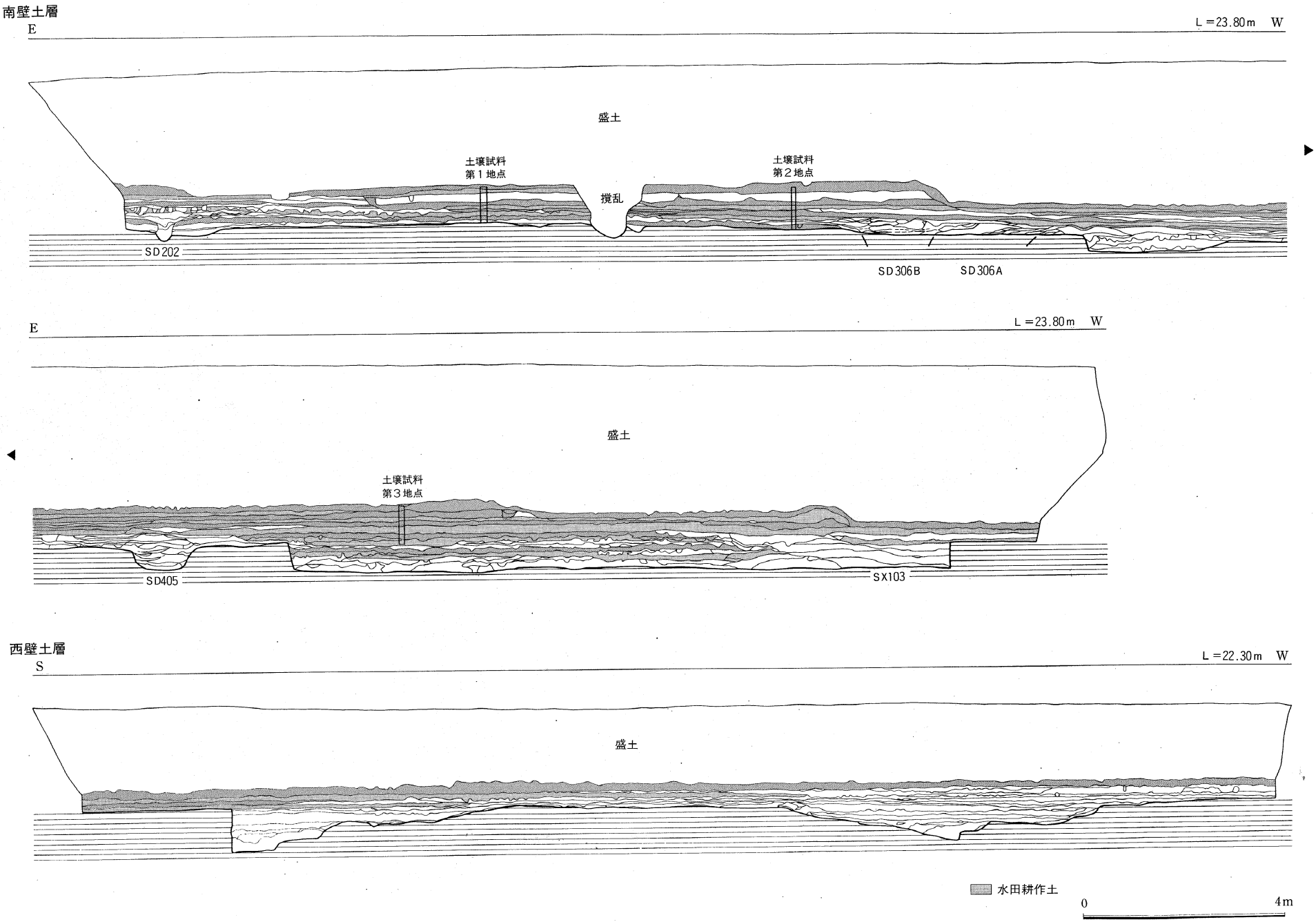
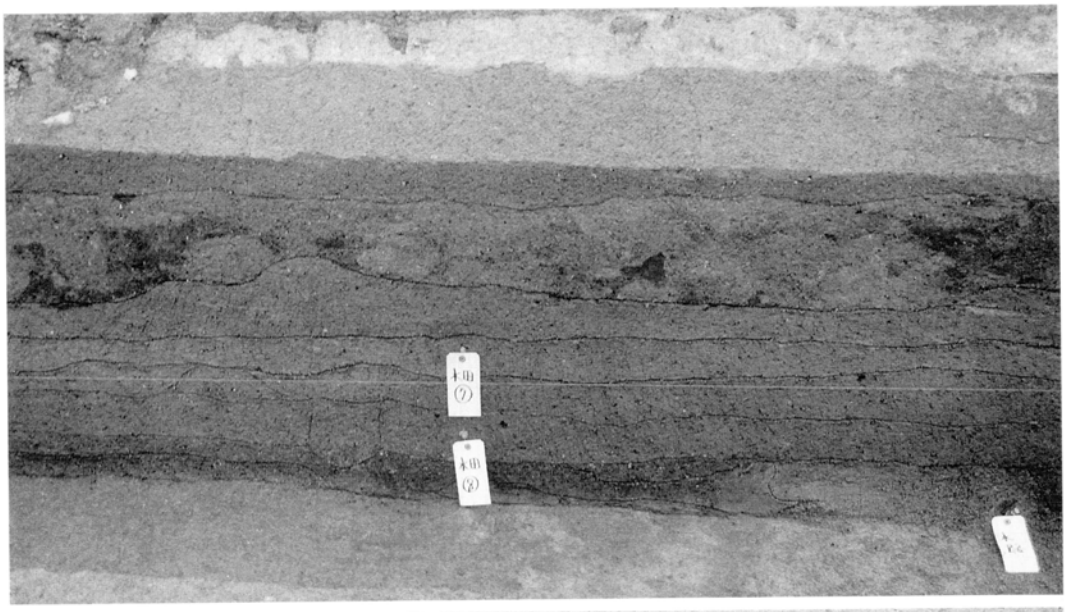
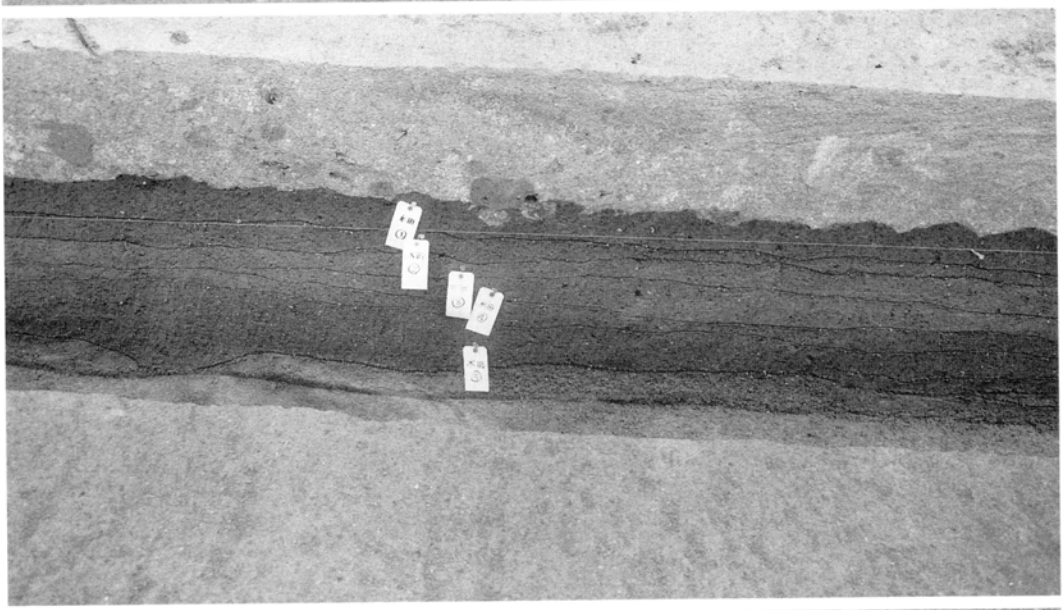


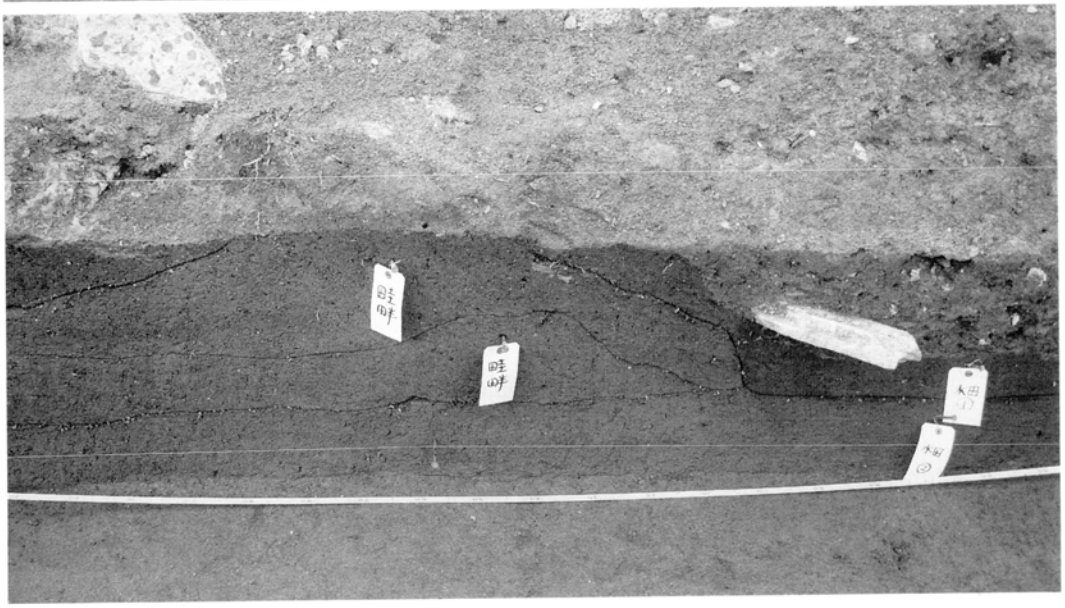
Fig. 5　調査区南壁・西壁土層水田跡概念図（縮尺1/150）



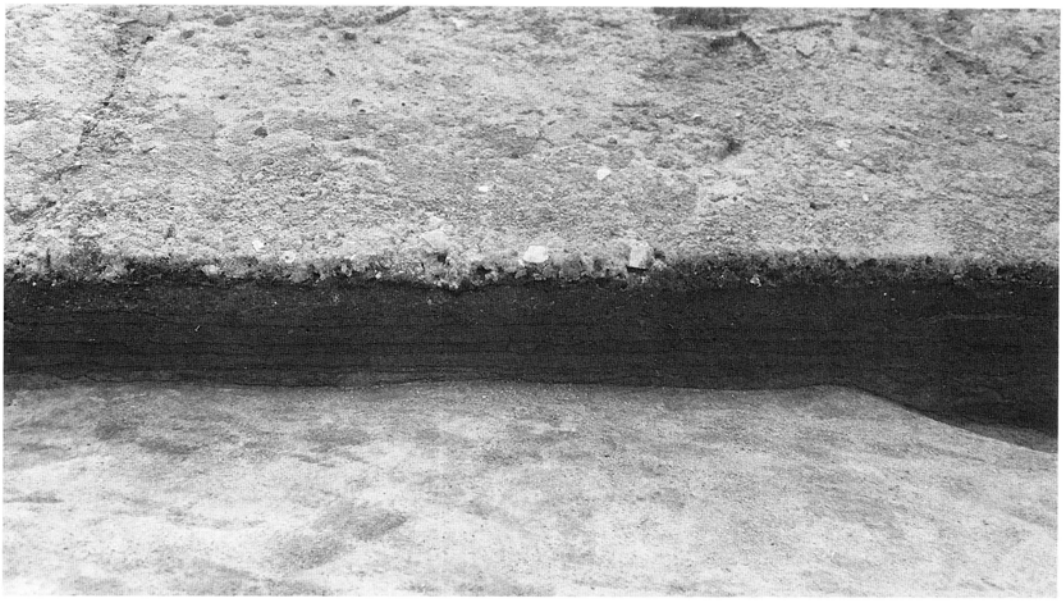
南壁面土層の状態③（北から）



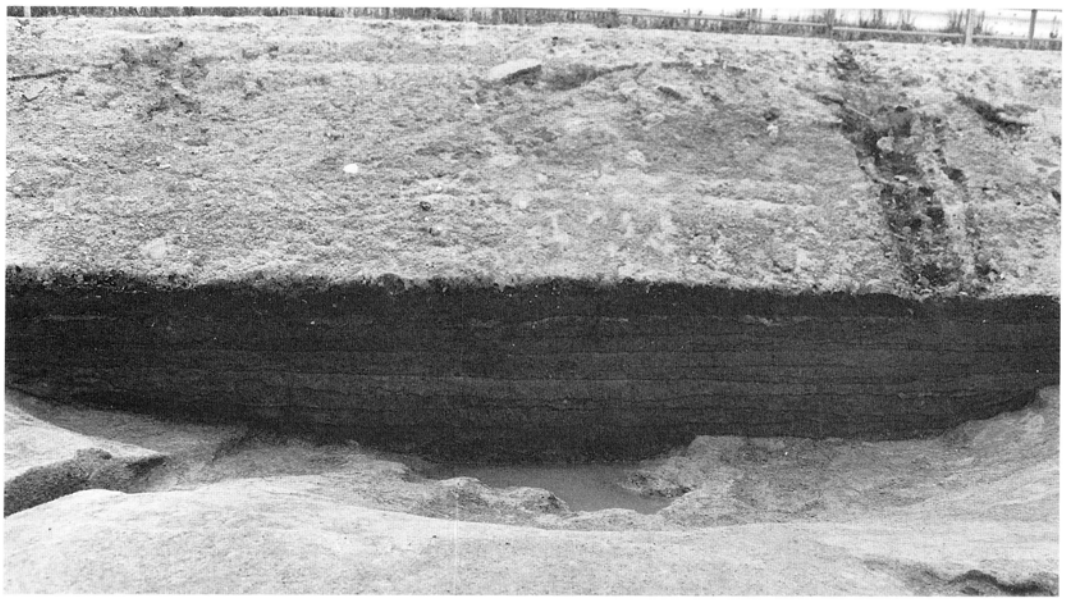
南壁面土層の状態④（北から）



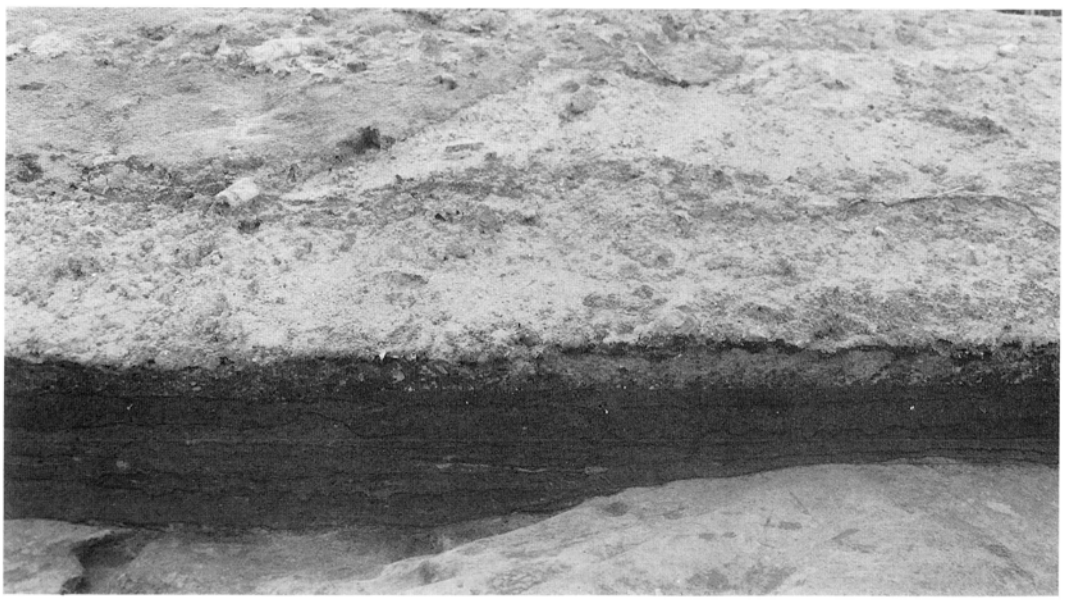
南壁面土層の状態⑤（北から）



西壁面土層の状態①（東から）



西壁面土層の状態②（東から）



西壁面土層の状態③（東から）

2．遺構・遺物説明

発掘調査は、残土処理の関係から調査区を南側と北側の半分に分けて行った。遺構面として4面の水田面と氾濫原の1面を調査対象としたが、水田面については砂層を被覆した耕作土の面を任意に把握した結果であり、明確な時期差を示すものでもない。特に南側調査区の水田面においては、耕作土上面に洪水による砂堆が部分的にしか見られず、畦畔も検出できなかったため、水田区画を明確に検出することは非常に困難であった。水田面は大略古墳時代から近世江戸時代までに至るものと考えられる。

(1) 第1面の遺構

① 水田跡（SS）（付図参照）

南側調査区の東側においては、山側（東側）からの洪水のため、第6層（灰褐色粗砂）の砂堆がみられたが、南側調査区全体に砂堆が少なく、よって、南側調査区は東側では第7層（黒色粘質土）、中間地帯では第26層（灰色粘質土）、西側では第35層（灰黒色砂質土）を対象耕作土とした。

北側調査区では、水田SS121周辺に第29層（淡灰黄色細砂）、第31層（暗灰白色細砂）が堆積し、この砂層は東側方向からの堆積を示し、西側へ徐々に傾斜しつつ、水田面を被覆している。西側では第58層（褐色砂）に連続しており、これらの砂層下位の耕作土第6層（黒灰色粘質土）、第64層（黒褐色粘質土）、第82層（黒褐色砂質土と灰褐色砂質土の混合土）を第1面の水田面とした。

但し、面的な把握においては、南側調査区にはほとんどが砂堆がみられず、このためこの調査区については水田区画の詳細なデータが得られなかった。よって、南側土層面より機械的に面的な掘削を行った結果、北側調査区との間に水田面のレベル上の誤差を生じている。

第1面の遺構には、水田跡、畦畔、水路、溝の他、七隈川東岸部の自然堤防、及び蛇行部の入り江などを検出した。先述したように調査区東側の基盤をなすのは、頁岩質風化土の地山であり、耕作土の重複した形成はみられない。水田SS114・118を含む西側は、河川の開析による二次堆積地であり、水田耕作土が長期的に形成されている。東側の水田面の標高は20.25～20.55m、西側の水田面の標高は19.70～19.85mを測る。用水路D101、及びSD111と水田区画を形成する溝SD104・124・125との主軸方向の整合性はみられず、同時性を示すものではない。

大畦畔を示すものは無いが、溝SD101・111はほぼ同一方向を示しており、特にSD111は自然堤防の後背地に設けられていることから、この間に水田区画が形成されていたと考えられる。小畦畔については、調査区東半部を除き、砂堆がみられなかったため、把握出来なかった。

遺存した用水路の溝SD104・124・125・110・112等により、水田区画はほぼ長方形区画を呈し、最大長で約14m、幅は8～10m前後と考えられる。水田区画の枚数は不明である。

水田面は、西側の七隈川の主軸に向かって段々畠状に形成されており、水田区画の主軸方向はN7°WからN24°W方向の二種類がある。

SS101（Fig.6・11） 南側調査区の東端に位置し、溝SD104によって区画された方形区画の水田跡である。略北東方向で、標高20.45mを測る。耕作土は第7層（黒色粘質土）であるが、調査において、基盤面まで掘り下げてしまった。 溝SD104は、水田SS105と共有するもので、中間に水口のSX102が

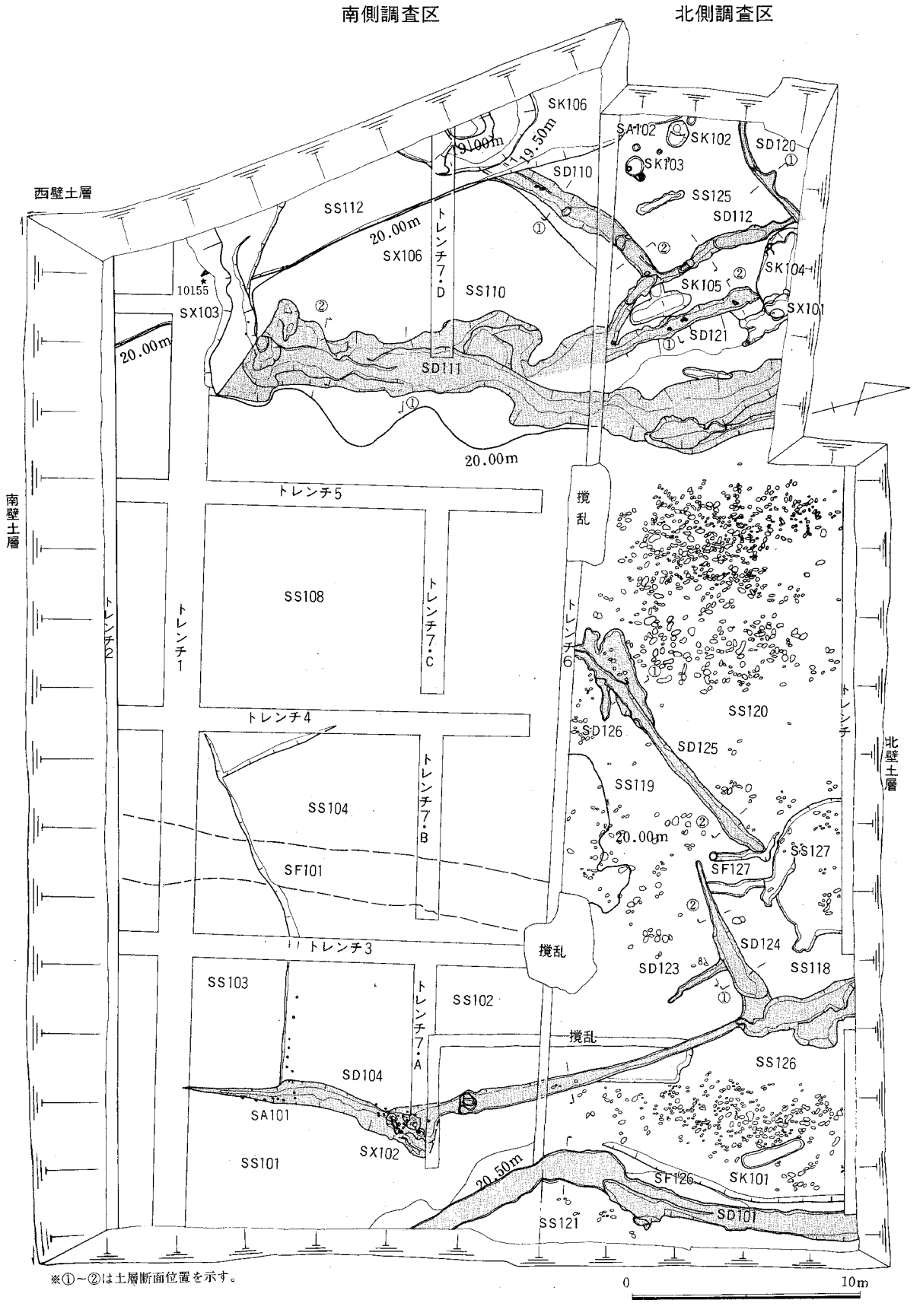


Fig. 6　第1面遺構配置図（縮尺1/250）

存在する。このSX102は東側に存在する溝SD101に連結するものと考えられる。

SS102（Fig. 6・11・16） ほぼ長方形を呈した水田区画で、主軸は略南北方向である。南・北の両調査区にまたがっており、水田面の標高は、南側調査区で20.26m、北側調査区で20.15mを測る。水田区画は、東側を溝SD104、北側を溝SD124で区切り、南側は水田SS103との境に段を有しているが、溝SD124とは方向的に合っておらず、歪な区画形状である。長軸の長さは11.1m、幅は約8.1mである。耕作土は、北壁土層では第64層（黒褐色粘質土）に相当する。

SS103（Fig. 6・12・16） 水田SS101・102に接する。標高20.37mを測り、SS101と主軸方向を一致させる。略方形の水田区画と考えられる。水田跡SS101との間に溝SD104を共有し、水田SS102との間に段を有する。隣接水田区画の境界から木杭・竹杭列を検出しており、畦畔の存在を明らかにできた。

SS104（Fig. 6・12・16） 水田SS102の西側に接する。略南北方向の長方形区画である。標高は20.17～20.23mを測る。北側は溝SD125で、南・西側は隣接する水田区画SS103・108との間に段を形成している。主軸の長さは約17m、幅約9.5mを測る。

SS108・118・120（Fig. 6・13・16） 略長方形の区画を呈するものと考えられるが、規模等は不明。SS118は溝SD104・124に区画される。SS108は、東南部において、隣接する水田との間を段差によって区画している。SS120は、溝SD125によって区画される。各々の標高は、SS108が20.60m、SS118が19.85m、SS120が19.80mを測る。

SS110・112・125（Fig. 6・14・16） 調査区西側の自然堤防上面に形成される水田区画で、溝と地割りの段落ちで区画される。略長方形の区画である。水田跡SS110は、溝SD112・110によって区画される。SS112との境は段落ちをもって境となすが、それぞれ水田区画の主軸方向が相違しており、同時期の区画ではない。水田面の標高は、SS110・125が20.00m、SS112は19.90mを測る。

これらの水田区画も溝SD111の関係において整合性が無く、標高からみる限り、水田SS110・112・125が後出するものと考えられる。

SS126（Fig. 6・14・16） 水田SS101に接し、溝SD104で区画される。溝SD104に制約を受け、不整形の区画を呈する。数区画に分けられる可能性がある。溝SD101より後出する可能性がある。標高は20.20～20.40mを測る。耕作土は北壁土層の第6層（暗茶褐色粘質土）である。

SS127（Fig. 6） 調査区の北側に位置する不整円形の水田区画である。水田SS118と切り合っており、SS118に先行する区画である。水田の上面には足跡が多数遺存する。この水田面の標高は29.75mを測る。

② 畦畔（SF）

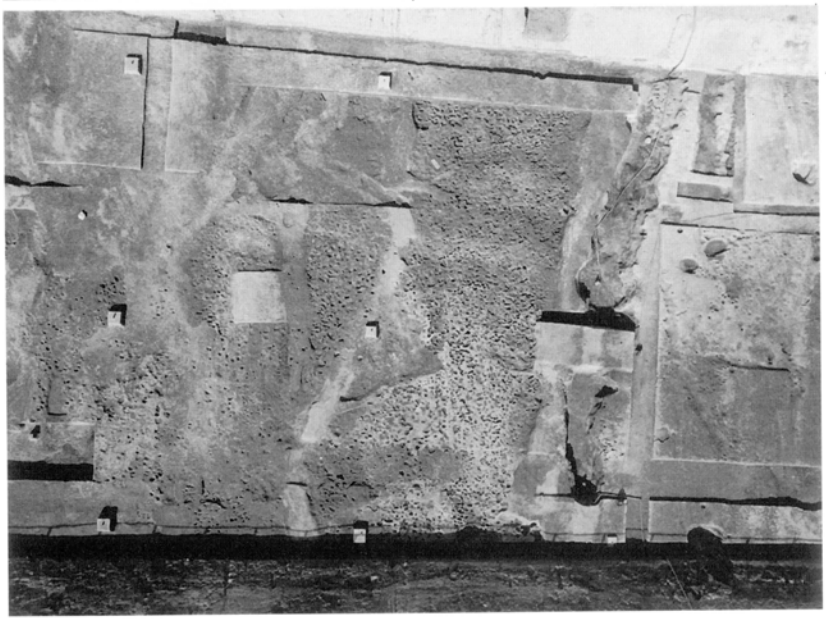
水田面に伴う畦畔を2条検出した。

第１面南側調査区全景（南から）

第１面北側調査区全景（南から）

第1面調査区東側水田跡①（南西から）

第1面調査区東側水田跡②（北から）



第1面調査区中央水田跡（南から）

SF126（Fig. 6） 溝SD101の西側肩部に設けられた畦畔である。幅約56cm、高さは約10cmを測る。現存の長さは約3.9mにすぎないが、元来は溝SD101に沿って設けられていたと考えられる。断面形は蒲鉾状を呈する。

遺物は出土していない。

SF127（Fig. 6） 溝SD124とSD125が交差する部分に小溝が2条平行しており、この間が高くなっていることから畦畔と考えられる。溝との前後関係は不明である。現存長3m、幅約90cmを測る。

③ 溝跡（SD）

第1面においては、水田を区画する溝、及び用水路の溝を12条検出した。調査区の北西側には、池状の土壙SK104と連結している溝もある。いずれも水田遺構に伴うものと考えられるが、時期的な変遷をとらえることができなかった。いずれも近世の遺構と考えられる。

SD101（Fig. 6・7・15・22） 調査区東側の境界地に於いて検出した。蛇行した略北方向の溝であるが、当該地東側にある現代の用水路に沿っている。第2面で検出したSD201と重複する溝であるが、Fig. 6に示すようにSD201の主軸を西にずらして作り替えている。溝の規模は溝SD201の約半分幅である。

溝の断面形は、袋状を呈する。溝の現存長は20.8m、最大幅は1.7m、深さは平均で約45cmを測る。この溝の西岸には幅約45cmの畦畔SF126が附設する。

覆土は、褐色粗砂と黒色砂質土の互層となっている。溝底、溝壁は一定せず乱れている。遺物は、土師器高坏、土師質土器椀、須恵器、瓦質土器、伊万里焼の陶磁器などが出土している。

SD104（Fig. 6・7・19） 調査区の東側に位置し、略北方向の溝である。境界地にあるため、全体形は不明であるが、水田SS101とSS102・105・118の区画を構成する溝である。

溝の断面形は、舟底状を呈する。現存長は30.2m、幅は約73cm、深さは平均で16cmを測る。この溝の東寄りには、水口SX102が付随する。この水口の東側は溝SD101と連結するものと考えられる。水口SX102の周辺には杭が多数打ち込まれていた。また溝の南端部のSS103の北側においては、木杭・竹杭列SA101を検出した。

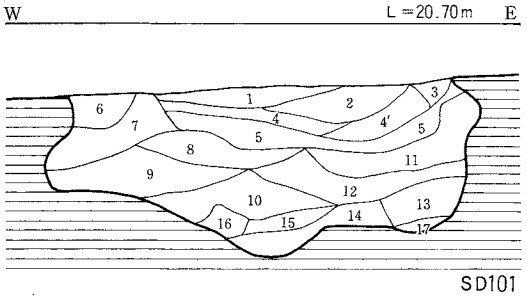
覆土は、上層が砂礫を含む暗灰黄色粘質土を主体とし、下層は黒灰色粘質土である。遺物は、土師器、須恵器、陶器などが出土している。

SD110（Fig. 6・7・15） 調査区の西側に位置する。略東西方向の溝である。溝SD112と連結し、水田SS110とSS126を形成する。土壙SK106と切り合う。

溝の断面形は、二段掘りで、西側は水田SS112により切られている。現存長は10m、幅は約100cm、深さは平均で20cmを測る。

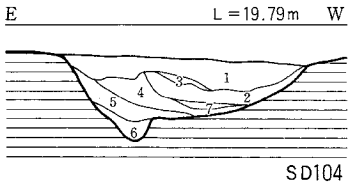
覆土は、第1層が黒灰色粘質土、第2層が灰青色粘質土である。遺物は、縄文土器鉢、土師器、須恵器などが出土している。

SD111（Fig. 6・7・15） 調査区の西側に位置する。北東方向の溝で、下面で検出した溝SD211に重



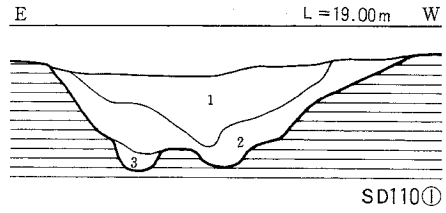
SD101土層名称

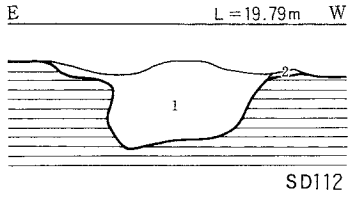
1．暗灰黄色砂と砂礫の混合土
2．1より暗い　鉄分少し含む
3．黒灰色砂質土と砂礫の混合土　鉄分沈殿
4．灰黒色砂
4′．4に鉄分沈殿
5．1より粒が大きい
6．暗灰黄色砂　1より暗い
7．黒灰色砂質土と6の混合土
8．灰黒色砂　黒色粘質土ブロック含む
9．暗灰色粗砂
10．灰色粗砂　黒色粘質土ブロックを含む
11．灰白色砂　砂礫含む
12．11より暗い
13．灰黒色砂と砂礫の混合土
14．10より暗い
15．黒灰色砂礫　鉄分含む
16．黒色粘質土
17．13と青灰色シルトの混合土



SD104土層名称

1．暗灰黄色粘質土　砂礫を含む
2．1より暗く粘性が強い
3．灰褐色砂
4．1より赤味を帯び、砂礫を含む
5．黒灰色粘質土
6．黒灰色粘質土　青味を帯びる
7．灰褐色砂



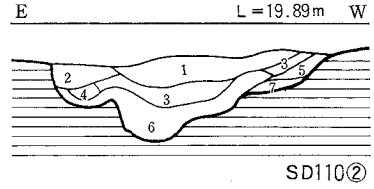


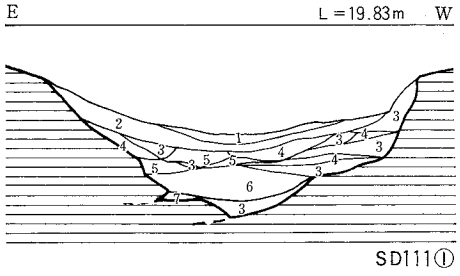
SD110①土層名称

1．黒灰色粘質土　砂礫含む
2．灰青色粘質土と黒灰色粘質土の混合土
　砂礫含む
3．灰青色粘質土　黒色土ブロック含む

SD112土層名称

1．暗灰色砂礫土
2．暗黄灰色土



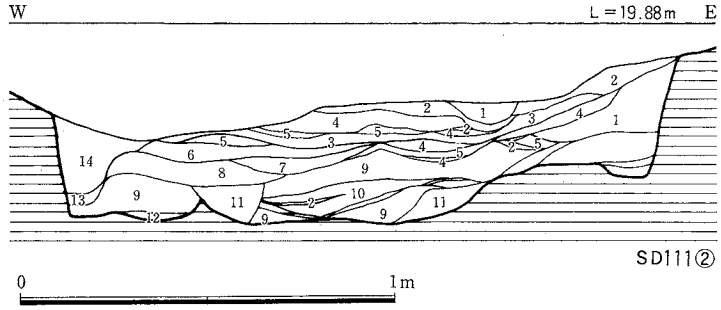


SD111①土層名称

1．灰白色微砂層
2．灰黒色粘質土
3．灰褐色砂と灰青色土の混合土
4．灰褐色砂
5．灰色砂質土
6．灰褐色粗砂
7．灰白色砂
8．黒灰色砂

SD110②土層名称

1．暗褐灰色粘質土　炭化物含む
2．灰黄色粘質土
3．暗灰色粘質土　暗青灰色粘質土を少し含む
4．1より暗い
5．1に黄灰色粘質土を含む
6．暗青灰色粘質土　暗灰色粘質土を含む
7．暗青灰色砂質土

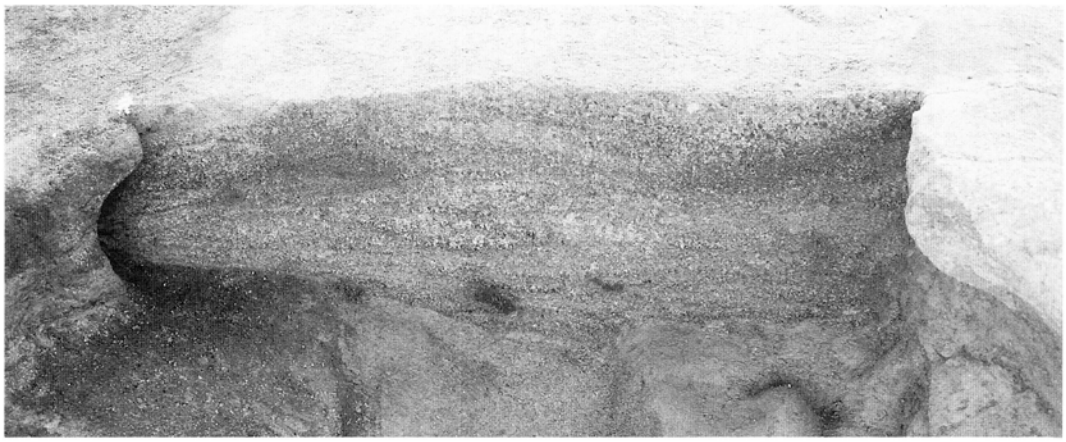


※①～②は土層ベルトの位置を示す。

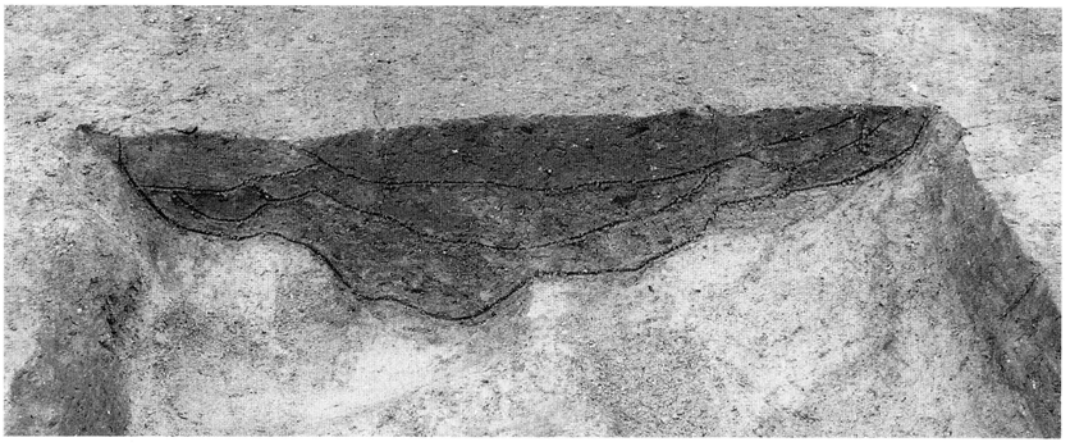
SD111②土層名称

1．灰青色砂質土　シルト含み固くしまる
2．黒灰色砂質土
3．黒灰色粘質土
4．灰白色微砂と灰黒色粘質土の混合土
5．灰褐色砂
6．5に灰青色粘土層を含む
7．暗褐色粗砂　灰青色粘質土ブロック含む
8．6と暗褐色砂層との互層
9．灰褐色粗砂
10．黒色砂質土と灰褐色砂質土の互層
11．灰青色粘質土
12．灰青色砂層
13．灰黒色粘質土
14．黒色粘質土　黒褐色土ブロック含む

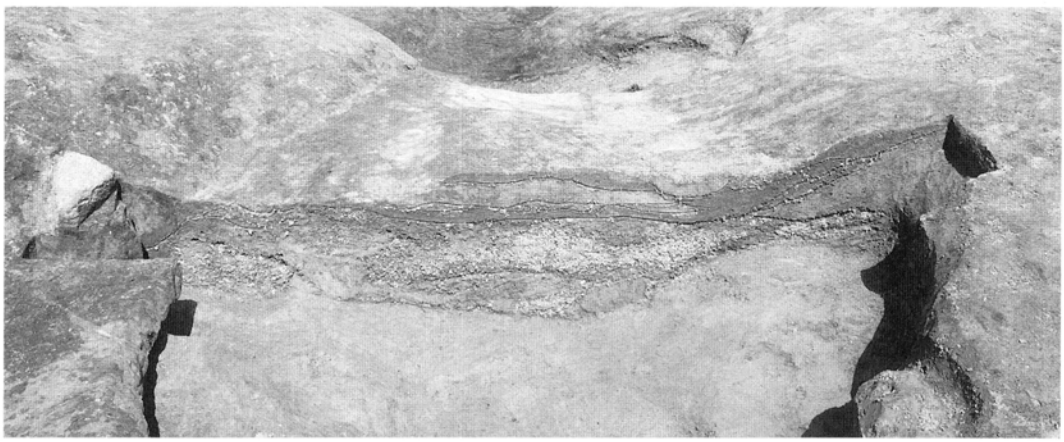
Fig. 7　溝 SD101・104・110～112土層実測図（縮尺1/20）



溝SD101土層状態（南から）



溝SD110土層状態（南から）



溝SD111土層状態（北から）

溝SD112土層状態（西から）

複している。七隈川の自然堤防の後背地に設けられる。溝 SD112・121との前後関係は不明である。

溝の断面形は、舟底状を呈するが、壁面は凹凸が著しい。現存長は24m、幅は平均で2.3m、深さは平均で37cmを測る。

覆土は、上層が暗灰色シルト層、下層は灰褐色粗砂層である。遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦質土器などが出土している。

SD112（Fig. 6・7・15） 調査区の西側に位置する。略南北方向の溝である。溝の全体形は緩やかな弧形を呈している。北端は、土壙 SK104を切り、南端は溝 SD121と接続する。

溝の断面形は、逆梯形状を呈している。現存長は10.5m、幅は約60cm、深さは平均で24cmを測る。

覆土は、暗灰色の砂礫土である。遺物は、縄文土器、土師器、須恵器が出土している。

SD120（Fig. 6・8） 調査区の北西隅に位置する。略東西方向の溝で、水田区画を形成する溝である。境界地にあるため全体形は不明であるが、北端は溝 SD112同様に土壙 SK104と切り合う。

溝の断面形は、レンズ状を呈している。現存長は5.4m、幅は約30cm、深さは約12cmを測る。

覆土は、第1層が暗黄灰色土、第2層が暗灰色粘質土である。遺物は出土していない。

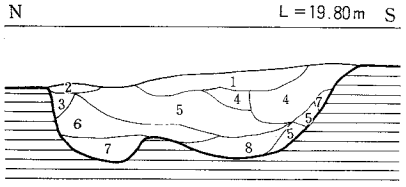
SD121（Fig. 6・8） 調査区の西側に位置する。略南北方向の溝で、溝 SD112に平行しており、北端は土壙 SK104に接続し、南端は溝 SD111に繋がる。

溝の断面形は、逆梯形状を呈する。現存長は11.1m、幅は平均で60cm、深さは約7cmを測る。

覆土は、第1層が灰青色粘質土、第2層が暗灰色砂質土である。遺物は、土師器皿、鉄滓が出土し

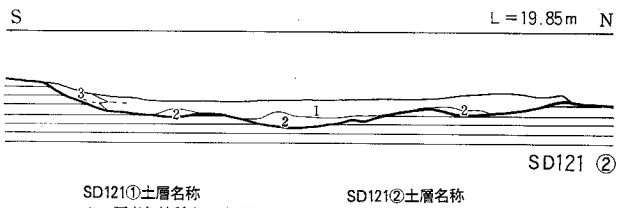
溝SD120土層状態（南から）

溝SD125土層状態（北から）



SD120①土層名称
1．暗黄灰色粘質土
2．暗黄灰色砂質土
3．暗褐灰色砂質土
4．1に砂礫含む
5．2に砂礫含む
6．暗灰色砂質土　暗褐色粘質土ブロック含む
7．暗灰色砂礫
8．5に砂礫多く含む

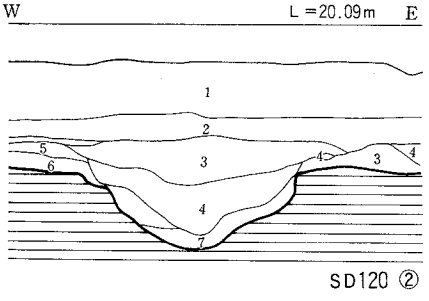
SD120②土層名称
1．耕作土（現代）
2．灰黒色粘質土
3．黄褐色土（床土）
4．暗黄灰色土
5．暗灰色砂礫
6．黄褐色土と淡灰青色土の混合土
7．暗灰色粘質土と暗灰色砂質土の混合土

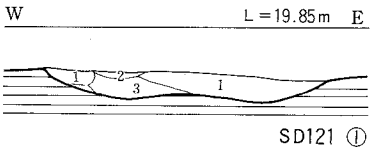


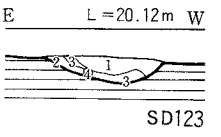
SD121①土層名称
1．灰青色粘質土　砂礫含む
2．暗灰色砂質土
3．暗灰色砂礫

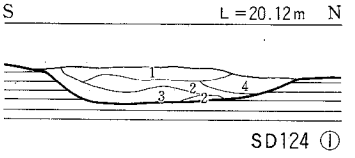
SD121②土層名称
1．灰黒色粘質土と薄い層との互層
2．暗黄灰色砂質土
3．1と2の混合土

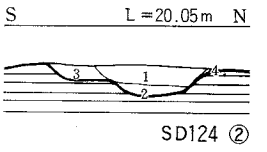
SD123土層名称
1．暗灰色粘質土　砂礫と鉄分を含む
2．暗灰黄色粘質土　鉄分沈殿
3．暗灰黄色シルト　鉄分沈殿
4．暗灰黄色砂質土





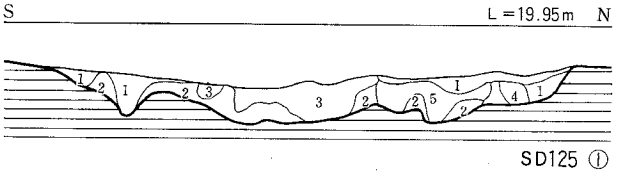


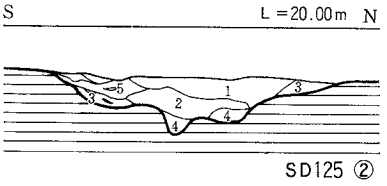




SD124①土層名称
1．暗灰黄色砂質土　少量の砂礫を含む
2．淡黒灰色砂質土　砂礫を含む
3．1に灰白色シルト含む
4．1に砂礫を多く含む

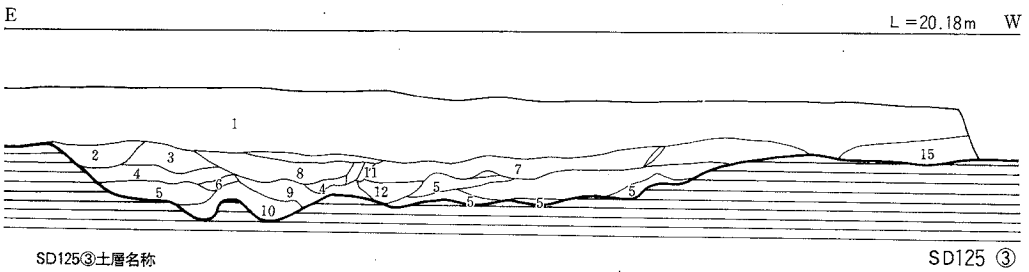
SD124②土層名称
1．暗灰色粘質土
2．黒灰色砂質土　砂礫多く含む
3．黄灰色粘質土
4．黄灰色シルト





SD125①土層名称
1．暗灰色砂質土と灰白色砂の混合土
2．黒灰色粘質土　灰褐色砂質土を少し含む
3．灰褐色砂と灰白色砂の混合土
4．灰褐色砂
5．淡灰褐色細砂

SD125②土層名称
1．暗灰色砂質土　灰白色砂を含む
2．淡灰褐色細砂　中央に砂礫多く含む
3．灰褐色細砂
4．黒灰色粘質土　砂礫含む
5．黒灰色細砂



SD125③土層名称
1．灰褐色粘質土　砂礫含む
2．暗灰色砂質土と灰白色砂礫の混合土
3．暗灰色粘質土
4．3より暗い
5．3と灰褐色砂の混合土
5′．5より暗い
6．3に灰褐色シルト含む
7．2と同じ
8．3より明るい　砂礫含む
9．暗灰色砂質土と暗灰色シルトの混合土
10．黒灰色粘質土と灰褐色細砂の混合土
11．4より暗い
12．暗灰褐色シルト
13．灰色粗砂
14．暗灰色砂質土
15．黒灰色砂質土

※①～③は土層ベルトの位置を示す。

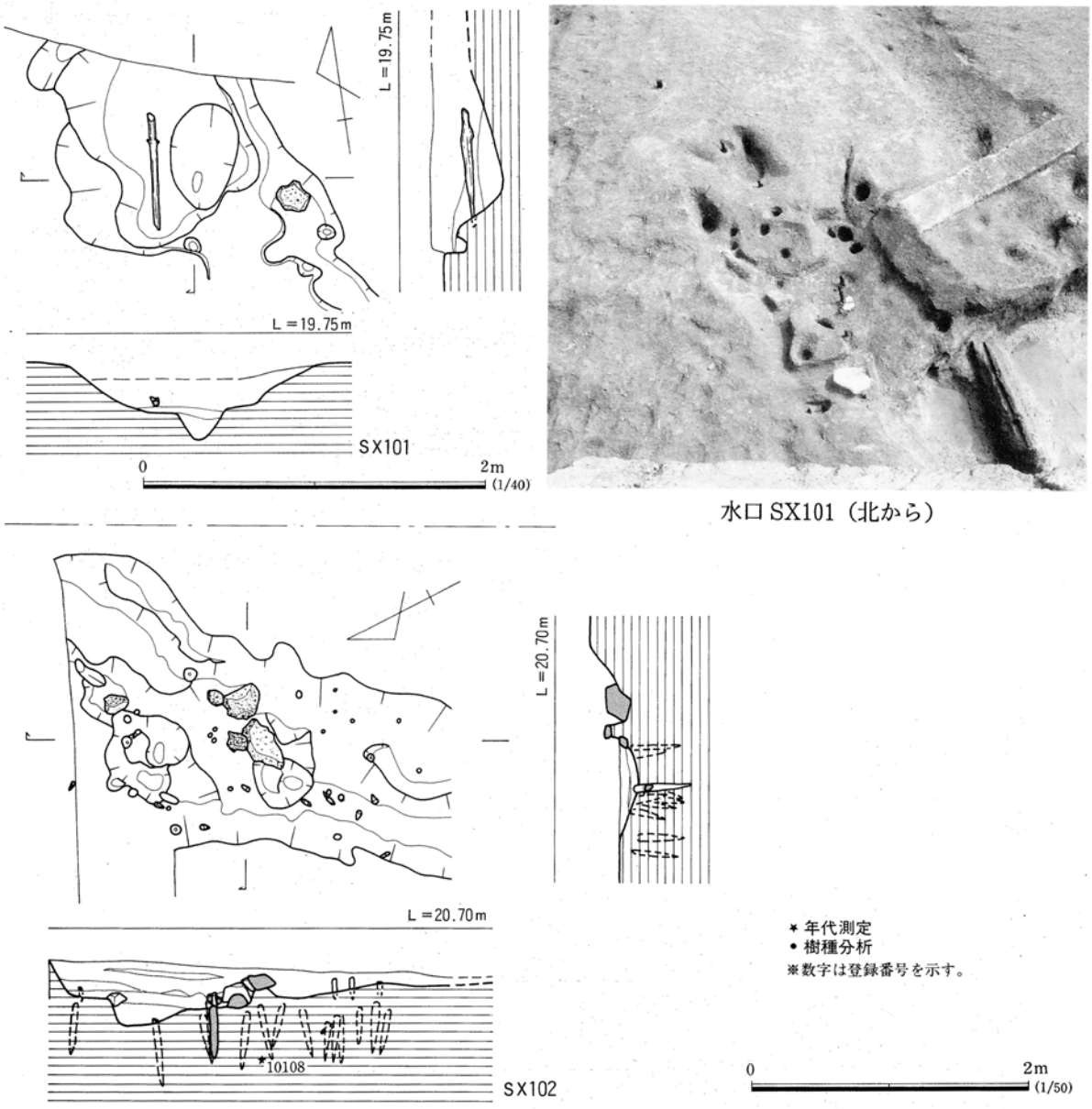
0　1m

Fig. 8　溝 SD120・121・123～125土層実測図（縮尺1/20）

ている。

SD123（Fig. 6 ・ 8） 調査区の東側に位置する。北端が溝 SD124と接続する略北方向の溝である。
溝の断面形は、舟底状を呈する。全長は 3 m、幅は35cm、深さは約 7 cmを測る。
覆土は、暗灰黄色粘質土を主体とする。遺物は、土師器、須恵器、内黒土器などが出土している。

SD124（Fig. 6 ・ 8） 調査区の北東側に位置する。略東西方向の溝で、東端は溝 SD104に接続し、水田 SS102・118を区画する溝である。
溝の断面形は、逆梯形状を呈する。全長は7.1m、幅は平均で60cm、深さは約 9 cmを測る。



水口 SX101（北から）

Fig. 9 水口 SX101・102実測図（縮尺1/40・1/50）

覆土は、第1層が暗灰色粘質土、第2層が黒灰色砂質土である。遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器などが出土している。

SD125（Fig. 6・8） 調査区の北側に位置する。北東方向の溝で、南西部はトレンチによって切られているため全体形は不明であるが、水田SS104を区画する。本来は、水田SS103・108との境をなすものと考えられる。

溝の断面形は、逆梯形状を呈する。現存長は12m、幅は約55cm、深さは約18cmを測る。

覆土は、上層が灰褐色砂質土、下層は黒灰色粘質土である。遺物は、土師器、須恵器が出土している。

SD126（Fig. 6） 調査区の中央に位置する。略東西方向の溝で、削平が著しい。溝SD125と切り合っており、主軸方向を異にする。

溝の断面形は、逆梯形状を呈している。現存長は1.8m、幅は約35cm、深さは9cmを測る。

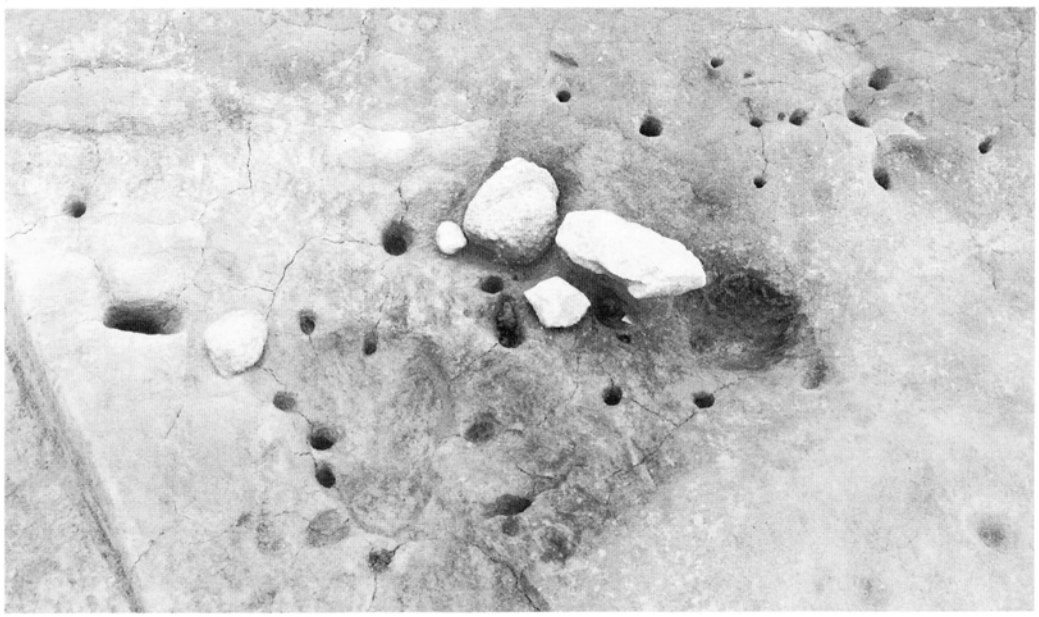
遺物は、土師器が出土している。

④ 水口（SX）

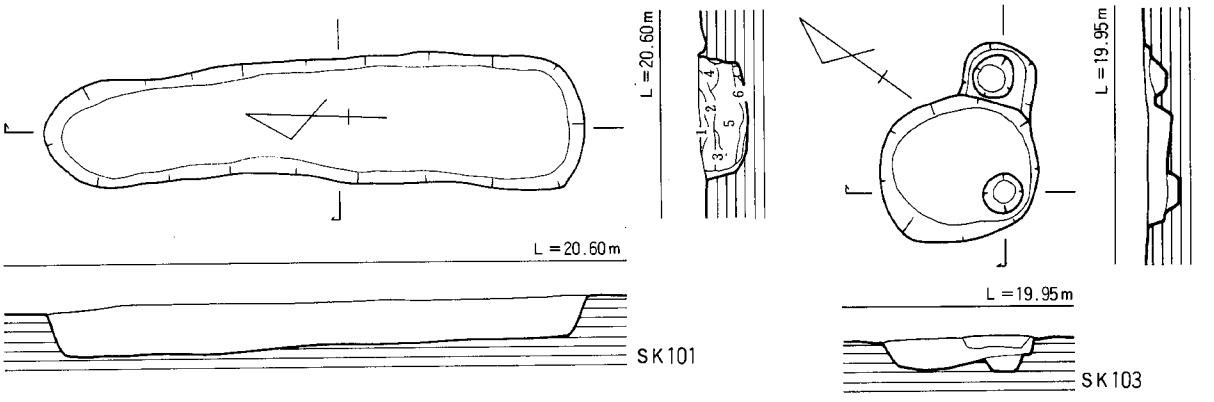
SX101（Fig. 6・9・15） 調査区の北西側に位置する。境界地に位置するため、全体形は不明である。土壙SK104に付設する。断面形は舟底状を呈する。現存長は1.08m、幅1.04m、深さは30cmを測る。壙底からは1本の倒杭とSX101の周りからは杭列の痕跡を検出した。水口に伴う溝はSD111・121であろう。第1面の水田に伴う水口と考えられる。

遺物は、土師器、土師質土器椀、須恵器器台・鉢、陶磁器、平瓦などが出土している。

SX102（Fig. 6・9・15） 調査区の東側に位置する。溝SD104に伴うもので、不整形を呈する。土壙内外には木杭が打ち込まれ、多数の杭の痕跡を検出した。杭の配列には規則性はない。10cm程度から人頭大の石が投げ込まれていた。取排水の水量調整を行っていたと考えられる。最大長は約1m、幅



水口SX102（西から）



SK101土層名称

1．灰色粘質土　黄褐色土の小ブロックを少し含む
2．1に黒褐色粘質土のブロックと黄褐色土の大ブロックを多く含む
3．1に褐灰色砂と鉄分を含む
4．1に黄褐色土のブロックを少し含む
5．灰色粘質土と黒灰色粘質土ブロックの混合土　砂礫を多く含む
6．暗灰色粘質土（貼り床）

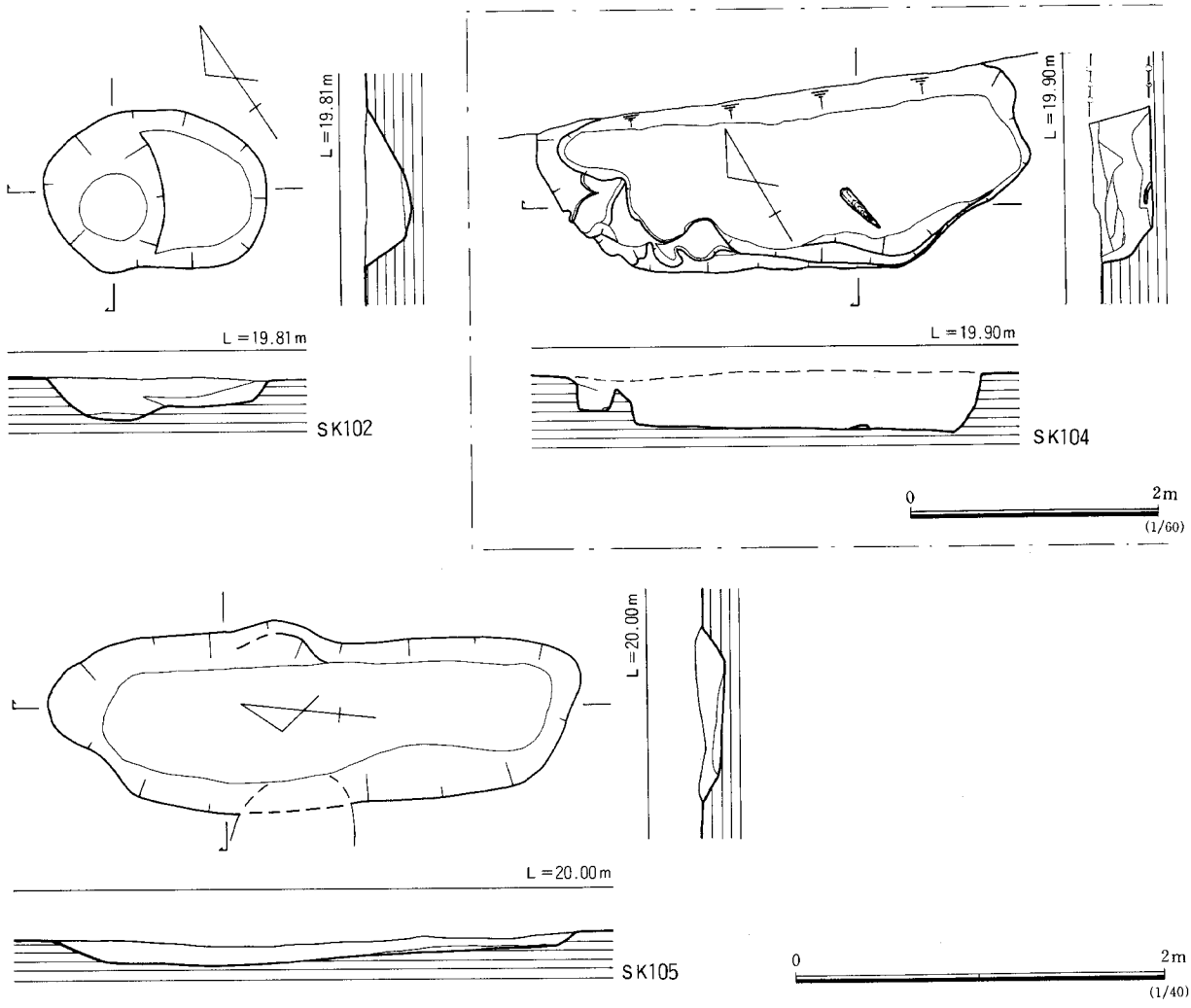


Fig.10　土壙SK101～105実測図（縮尺1/40・1/60）

は約1.5m、深さは最も深い箇所で40cmを測る。

壙内の杭の放射性炭素年代測定を行った結果、140yearsB.P 江戸時代末頃という結果を得た。

遺物は、須恵器の高坏が出土している。

⑤ 土壙（SK）

調査区の北西部を中心に全部で6基検出した。形状的には不定形のものもあり、用途不明の土壙もあるが、池状遺構と考えられる土壙も検出している。

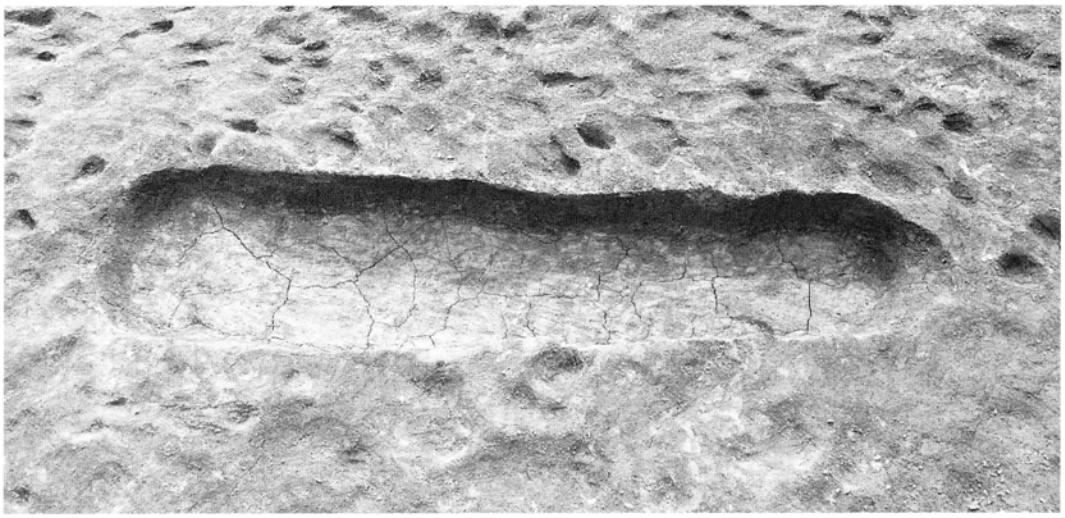
SK101（Fig. 6・10） 調査区の北東側に位置する。主軸は南北方向である。平面形は不整隅丸長方形で、南側が僅かに広くなっている。耕作土の下層の基盤面で検出したもので、近世以前の遺構である。断面形は、逆梯形状を呈する。長軸の長さは2.85m、幅は65cm、深さは28cmを測る。

覆土は、上層が灰色粘質土、下層が暗灰色粘質土である。遺物は、土師器、須恵器、陶器などが出土している。

SK102（Fig. 6・10） 調査区の北西隅に位置する。平面形は不整楕円形で、掘り方は二段掘りになっており、断面形は舟底状を呈する。長軸の長さは約1.2m、幅は約85cm、深さは23cmを測る。

遺物は、土師器が出土している。

SK103（Fig. 6・10） 調査区の北西側に位置し、Pitを切る。平面形は不整円形を、断面形は逆梯形



土壙SK101（東から）

土壙SK101土層状態（南から）

状を呈する。長軸の長さは85cm、幅は約75cm、深さは13cmを測る。壙底の南西隅に Pit を有する。
遺物は出土していない。

SK104（Fig. 6・10・15・19） 調査区の北隅に位置する。境界地にあるため全体形は不明であるが、不整の隅丸長方形と考えられる。溝 SD112・120・121と切り合っており前後関係は不明である。池状遺構と考えられ、東側に水口状遺構 SX101が付設している。長軸の長さは約3.7m、幅は約1.3m、深さは50cmを測る。壙底からは、水口状遺構 SX101に用いたと思われる木杭が 2 本出土した。
遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器などが出土している。

SK105（Fig. 6・10） 調査区の北西側に位置し、溝 SD110に切られる。平面形は不整隅丸長方形を、断面形は逆梯形状を呈する。溝 SD110・112と関する遺構であろう。長軸の長さは2.88m、幅は約93cm、深さは18cmを測る。
遺物は出土していない。

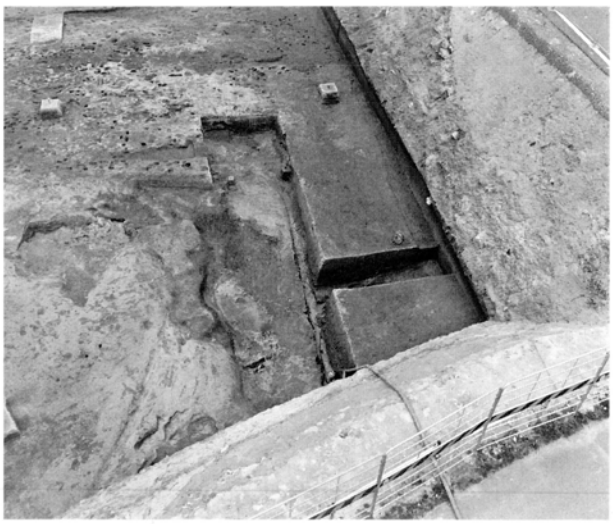
SK106（Fig. 6） 調査区の西隅に位置する。境界地にあるため全体形は不明であるが、不整円形と考えられる。溝 SD110と切り合い関係にあり、土壙 SK104と同様に温め構造の土壙の一つとも考えられる。断面形は摺鉢状を呈し、底面には起伏がある。長軸の長さは6.3m、幅は2.3m、深さは約60cmを測る。
遺物は出土していない。

⑥ 七隈川の蛇行部（SX）

SX103（Fig. 6・15・16・19） 調査区の南西隅に位置する。トレンチによって切られるため、形状は不明であるが、北側には自然堤防の段落ち部分がみられることから、七隈川の蛇行部分（入江）であると考えられる。下層で検出した流木の放射性炭素年代測定をしたところ3880±220years B. P. という結果を得ている。この木材の樹種はヤマグワである。七隈川の上流から流れてきたものと考えられる。
遺物は、須恵器、円柱状土製品などが出土している。

⑦ 自然堤防（SX）

SX106（Fig. 6） 調査区の西部に位置する。北西方向の自然堤防である。この堤防は、七隈川の東側に位置し、中世に発達したものと考えられる。近世には、この堤防上にも水田区画が存在したことが、南壁面土層の耕作土（第35層）、及び水田を区画する溝 SD110の存在によって明らかとなった。
遺物は、上面より土師器、青磁などが出土している。


七隈川蛇行部 SX103（西から）

(2) 第1面出土遺物（Tab. 2 ～ 4 参照）

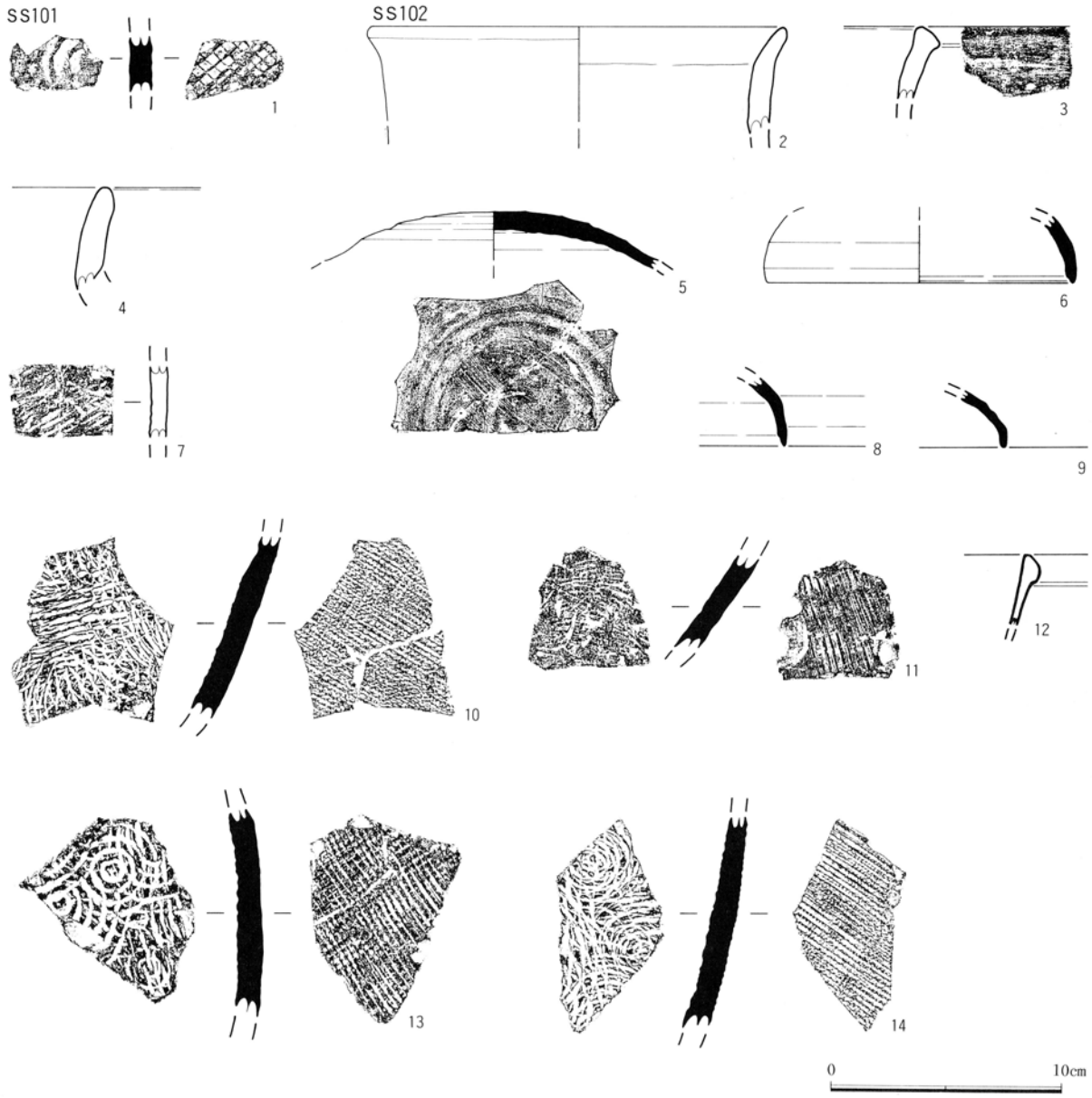


Fig.11　水田跡 SS101・102出土遺物実測図（縮尺1/3）

第1面出土遺物①

※数字は実測図番号に一致する。

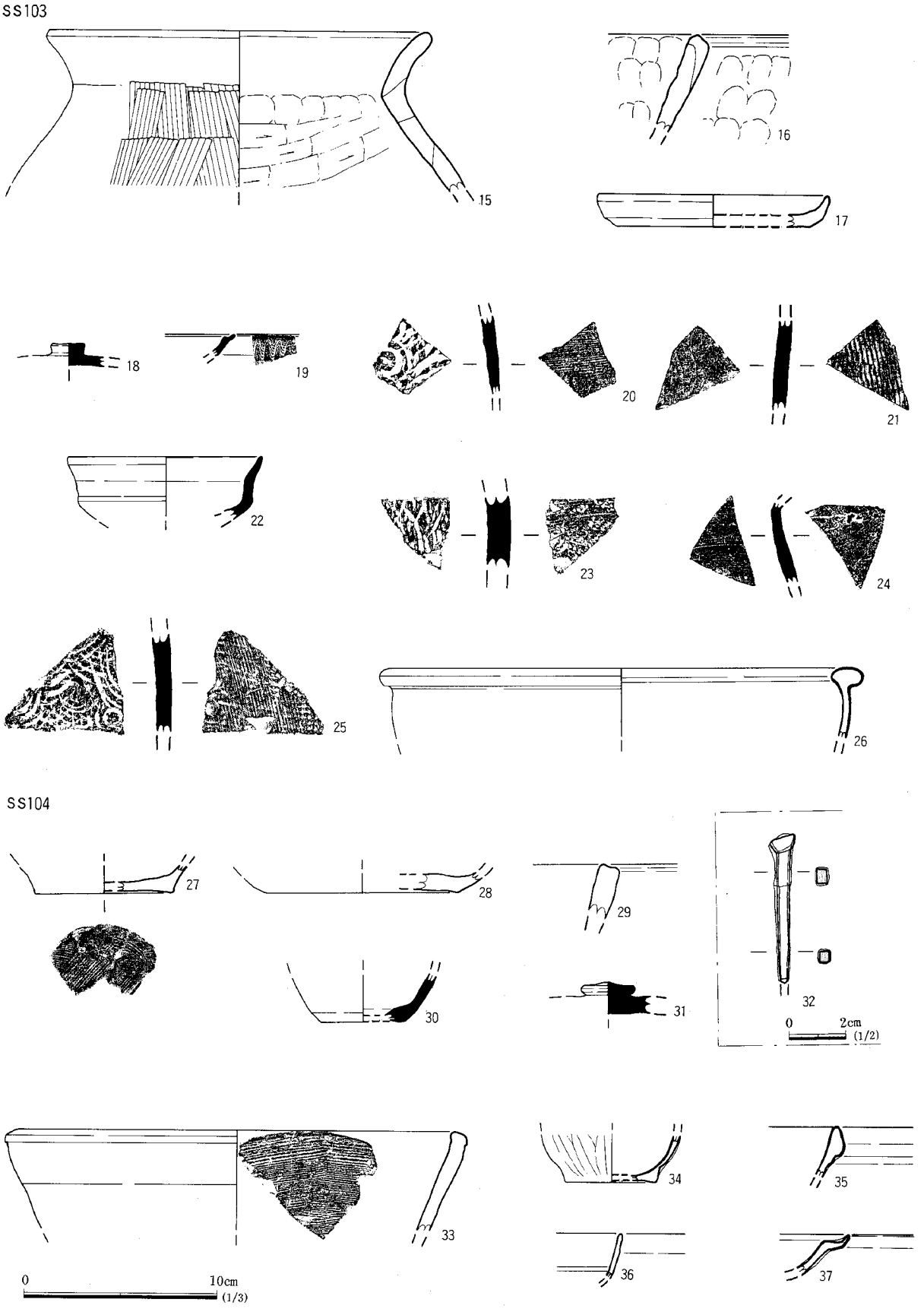


Fig.12　水田跡 SS103・104出土遺物実測図（縮尺1/3・1/2）

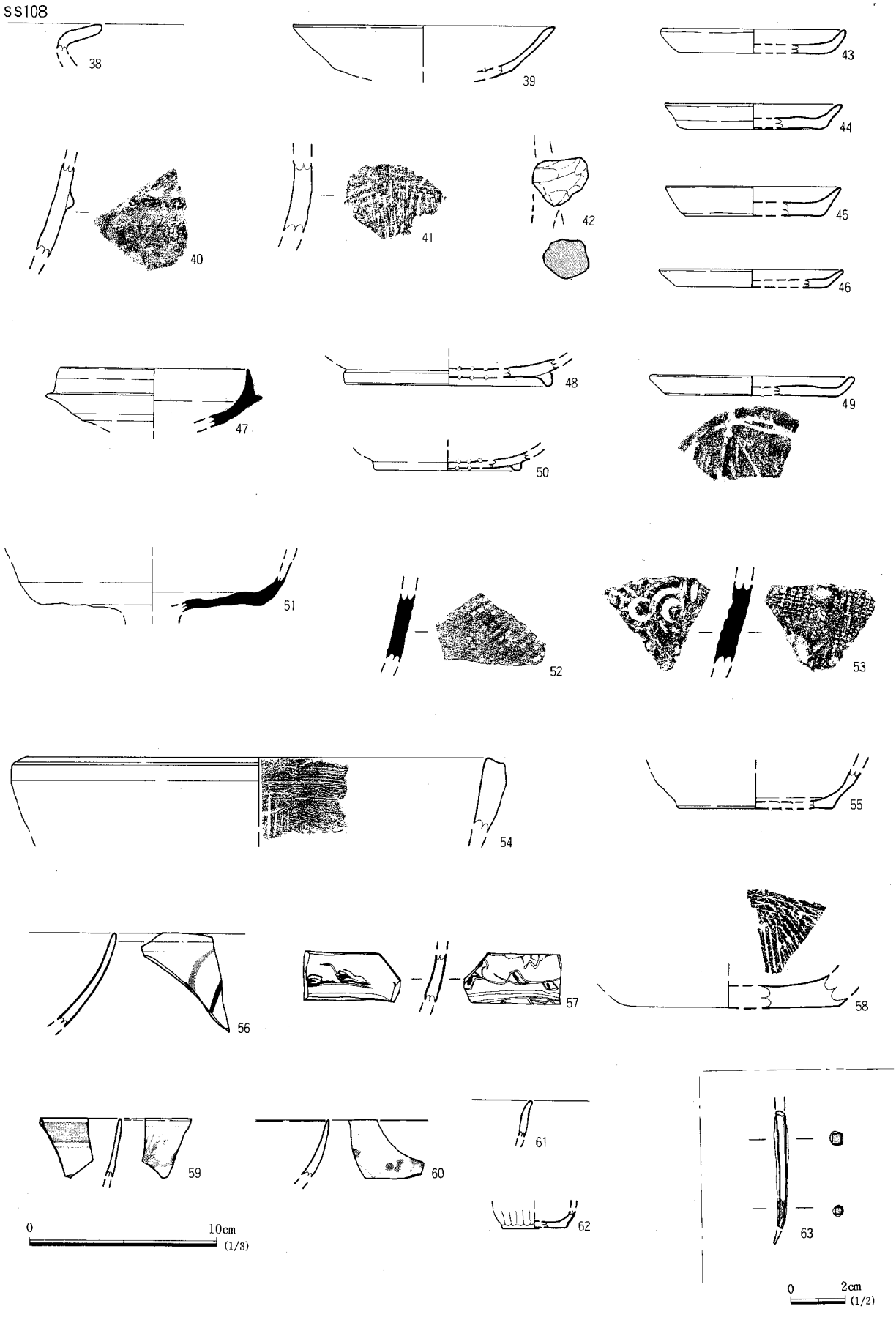


Fig.13　水田跡 SS108出土遺物実測図（縮尺1/3・1/2）

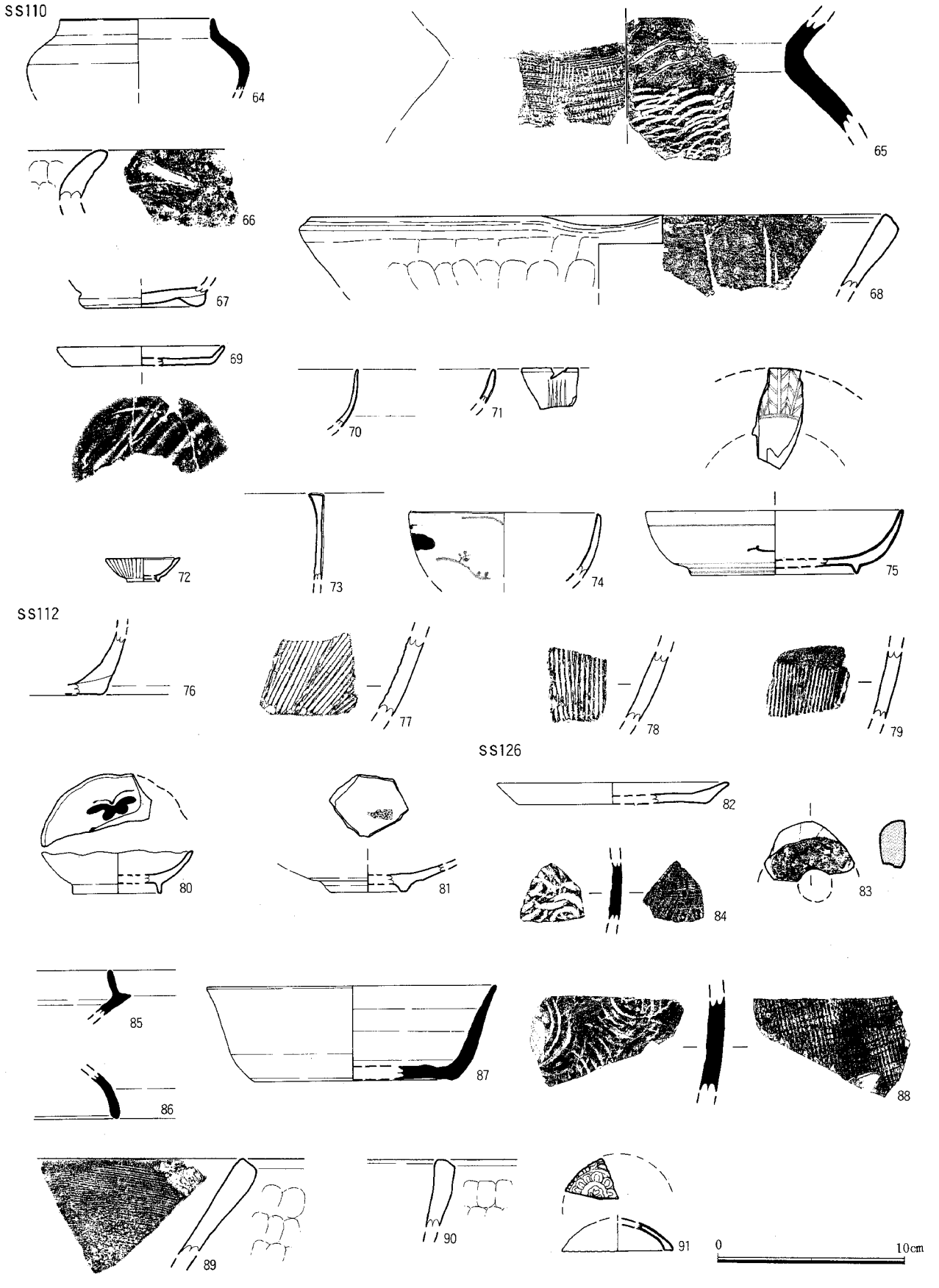


Fig.14　水田跡 SS110・112・126出土遺物実測図（縮尺1/3）

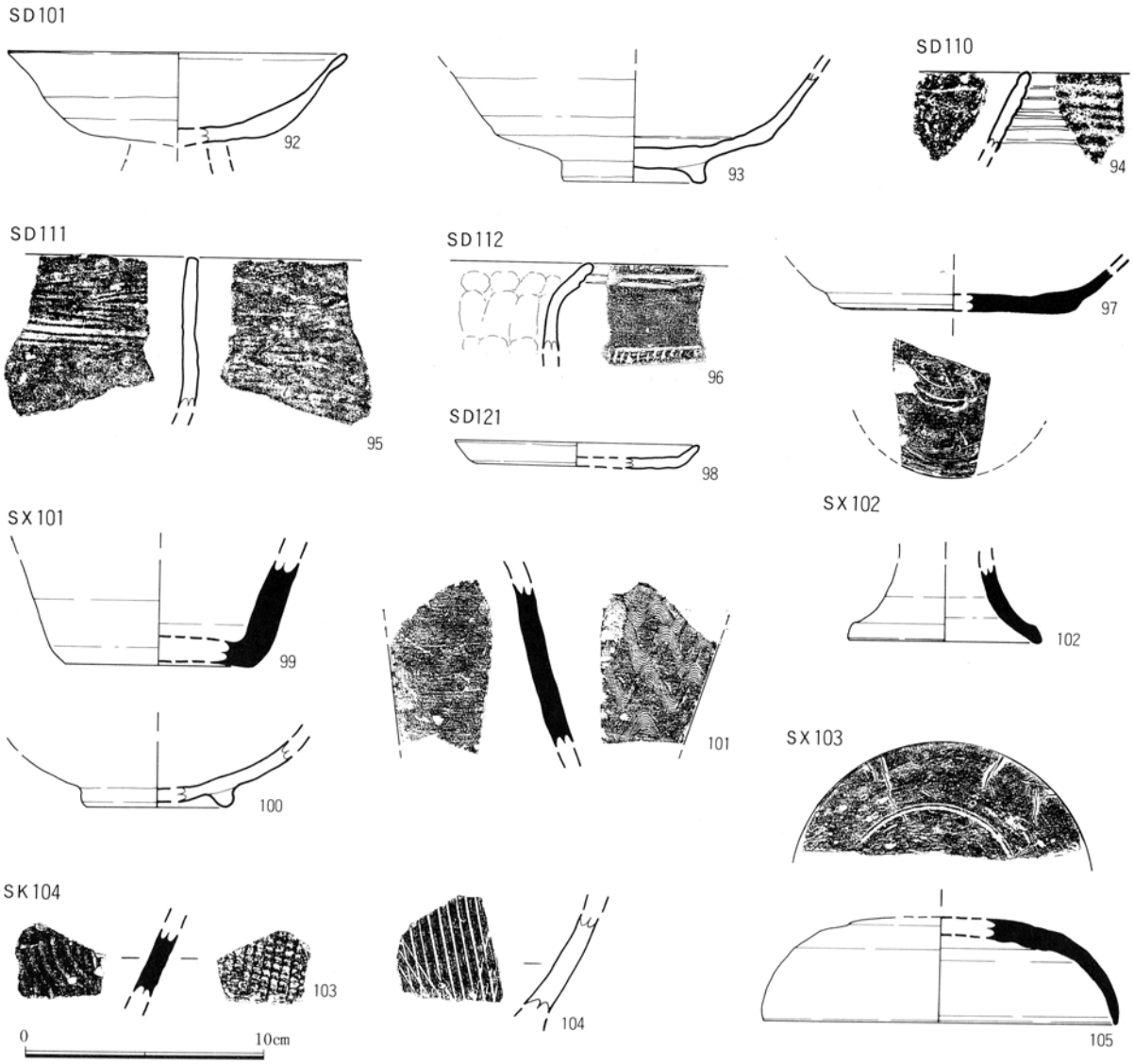
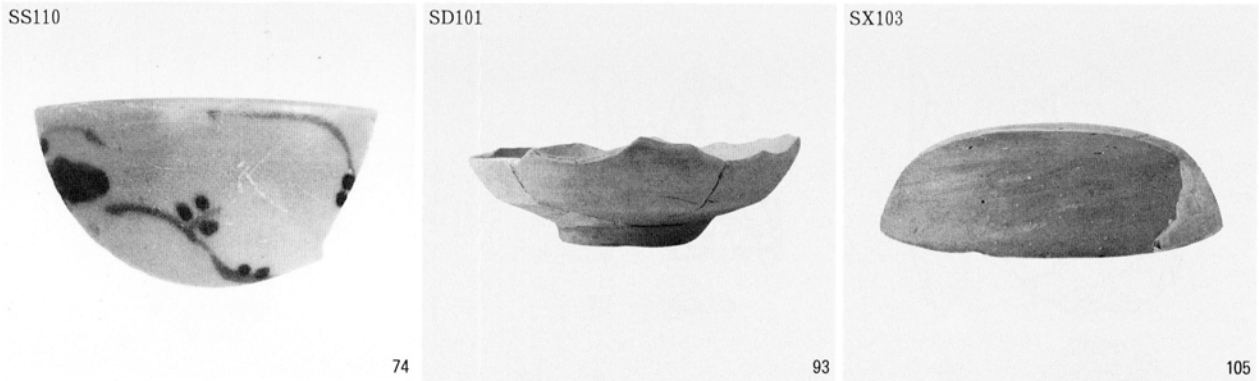


Fig.15　溝 SD101・110～112・121、水口 SX101・102、土壙 SK104、
七隈川蛇行部 SX103出土遺物実測図（縮尺1/3）



第１面出土遺物②

※数字は実測図番号に一致する。

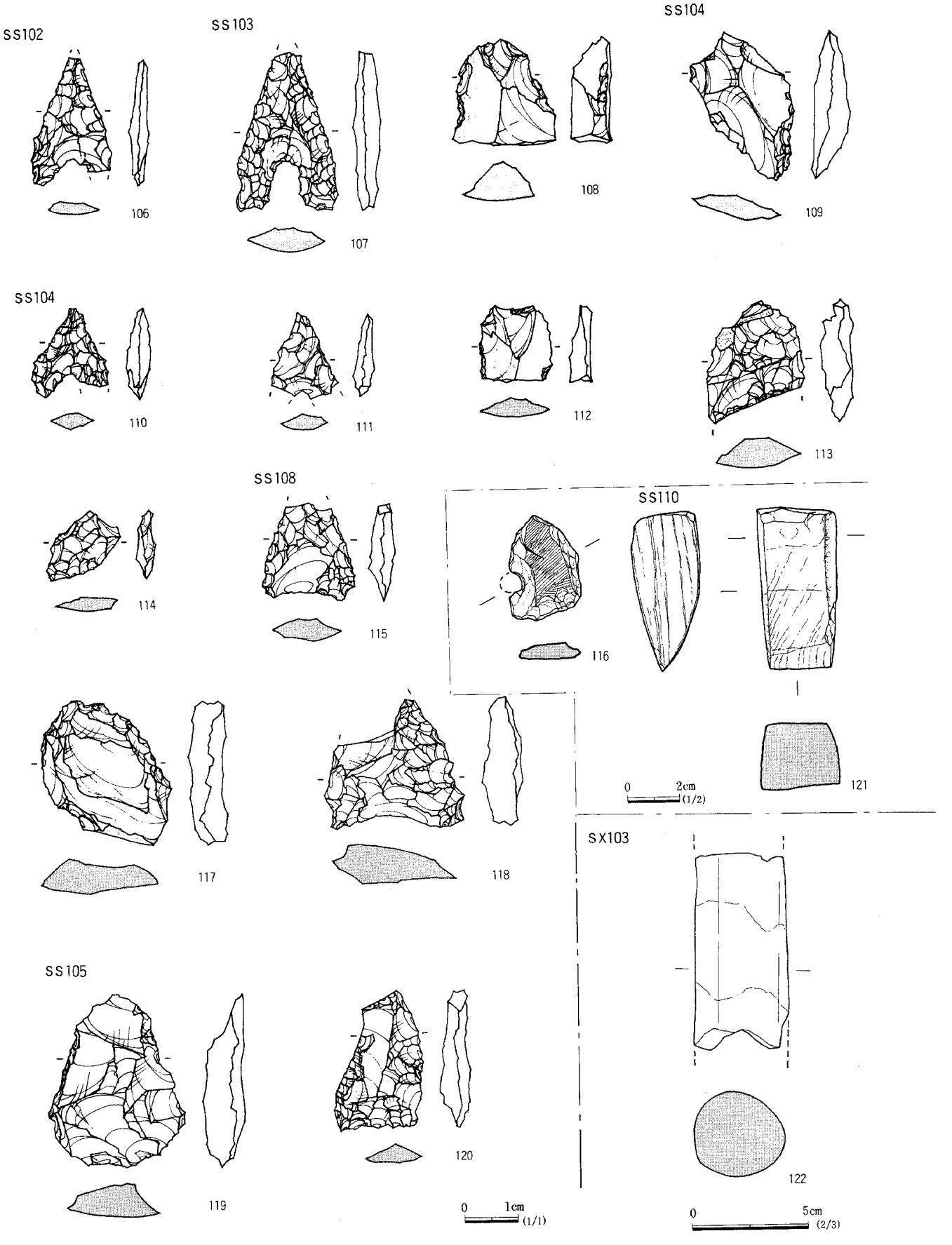
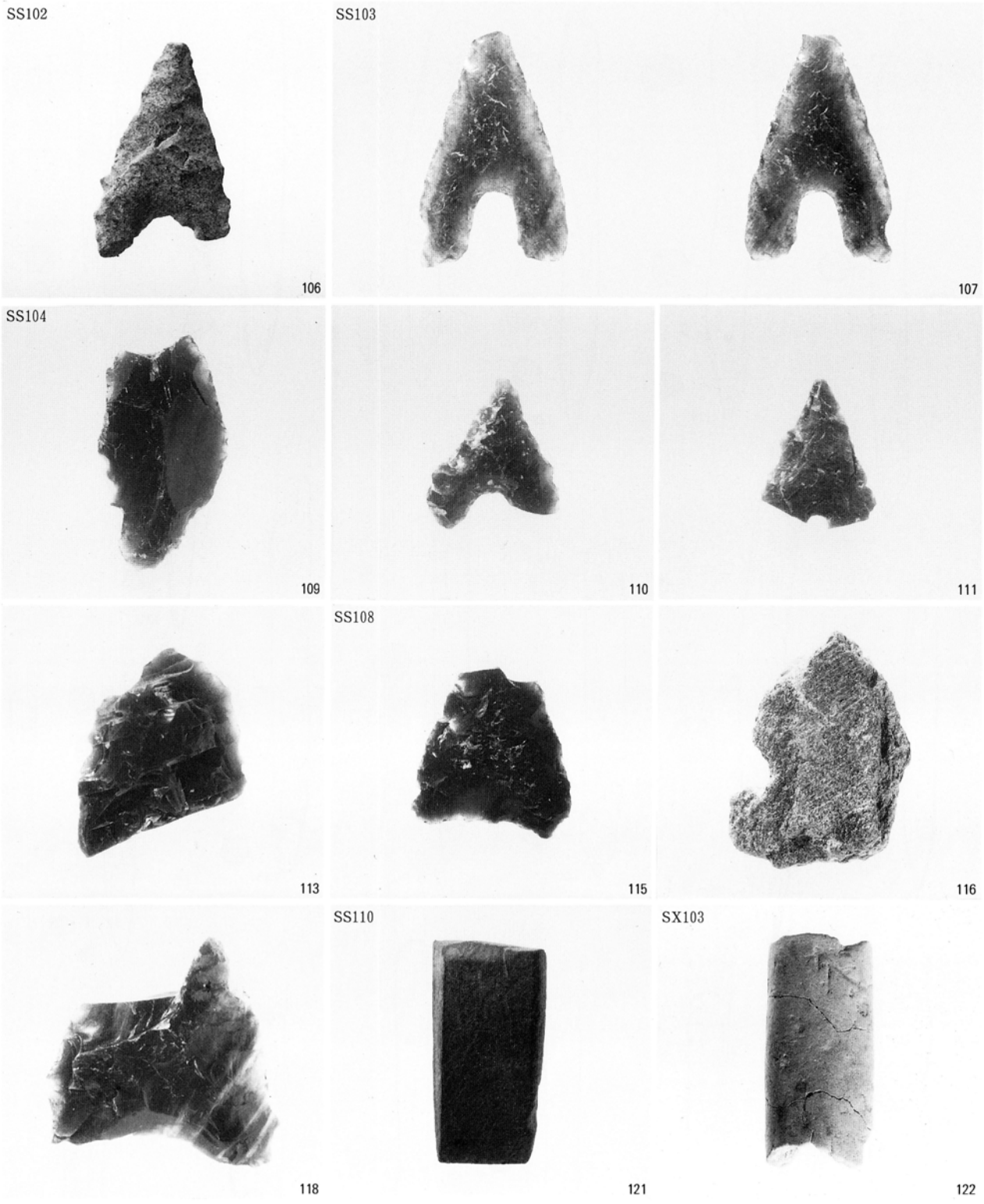


Fig.16　第1面出土石製品実測図（縮尺1/1・1/2・2/3）



第１面出土石製品

※数字は実測図番号に一致する。

①　第１面出土の杭

いずれも近世水口遺構SX102、及びその周辺に打ち込まれた木・竹杭である。123～130は、水口SX102の水口壙内より出土した。水口の護岸に用いたものである。幼木の幹、或いは枝を利用したも

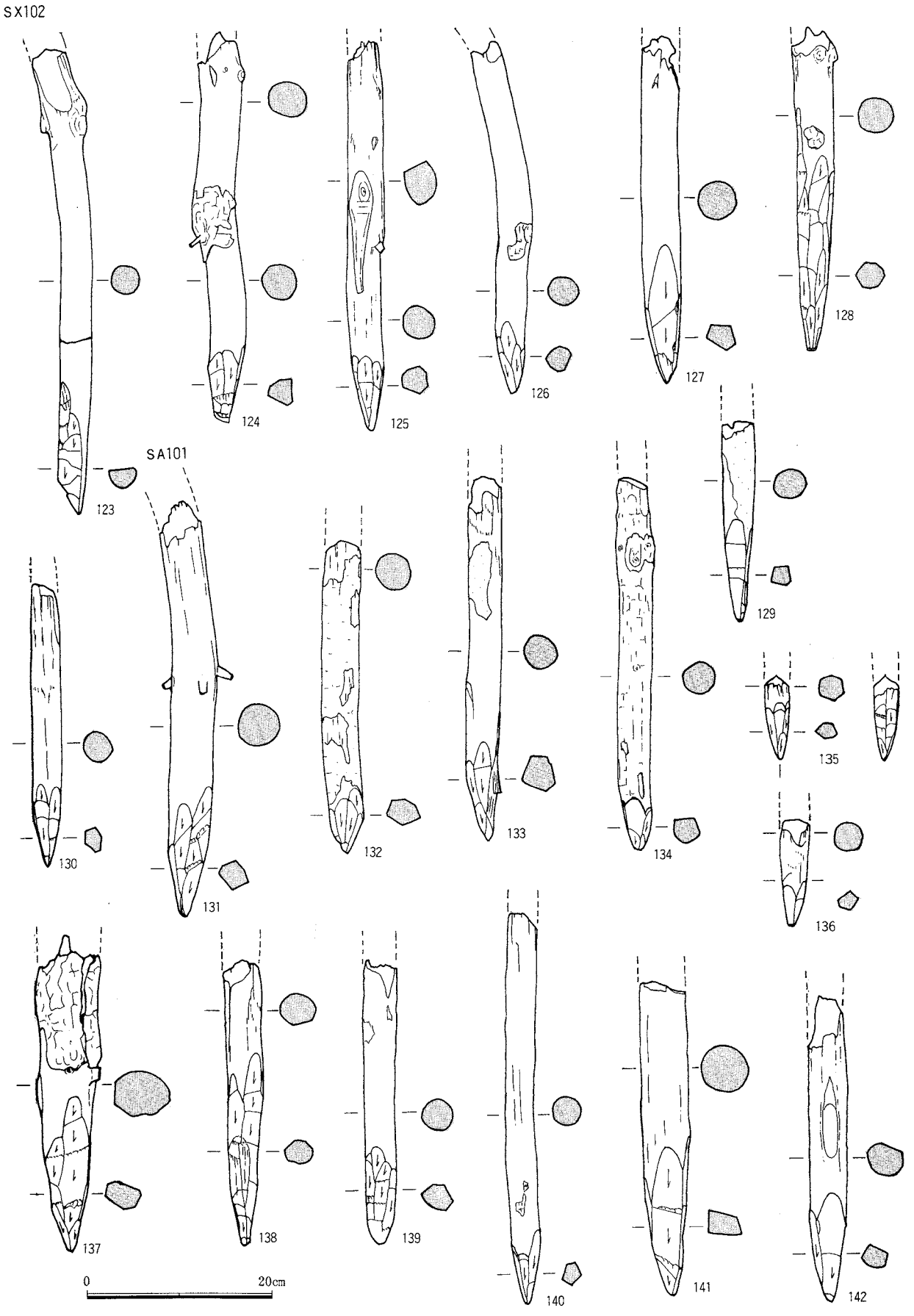


Fig.17　水口 SX102、南側調査区杭列 SA101出土木製品実測図（縮尺1/6）

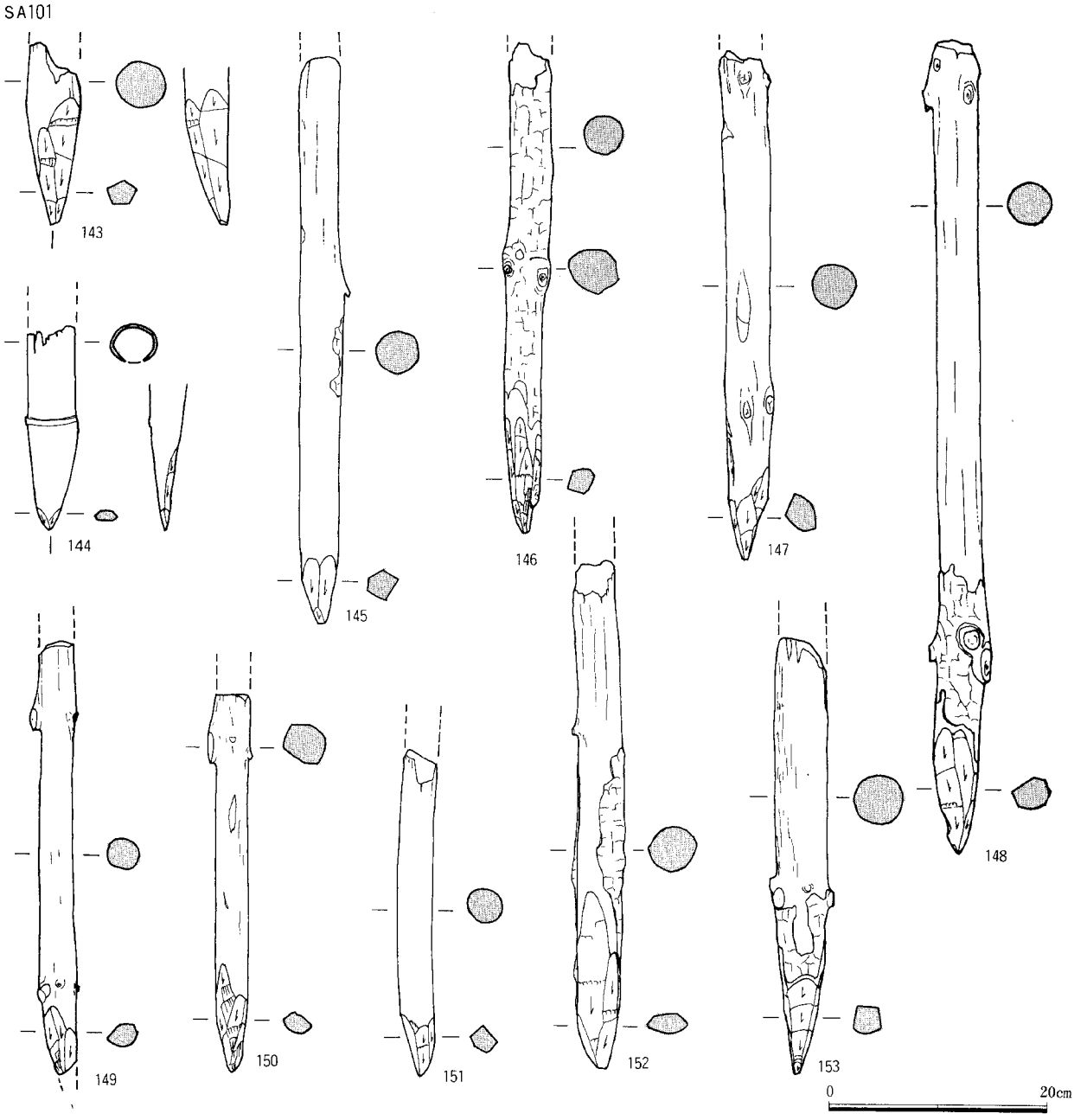
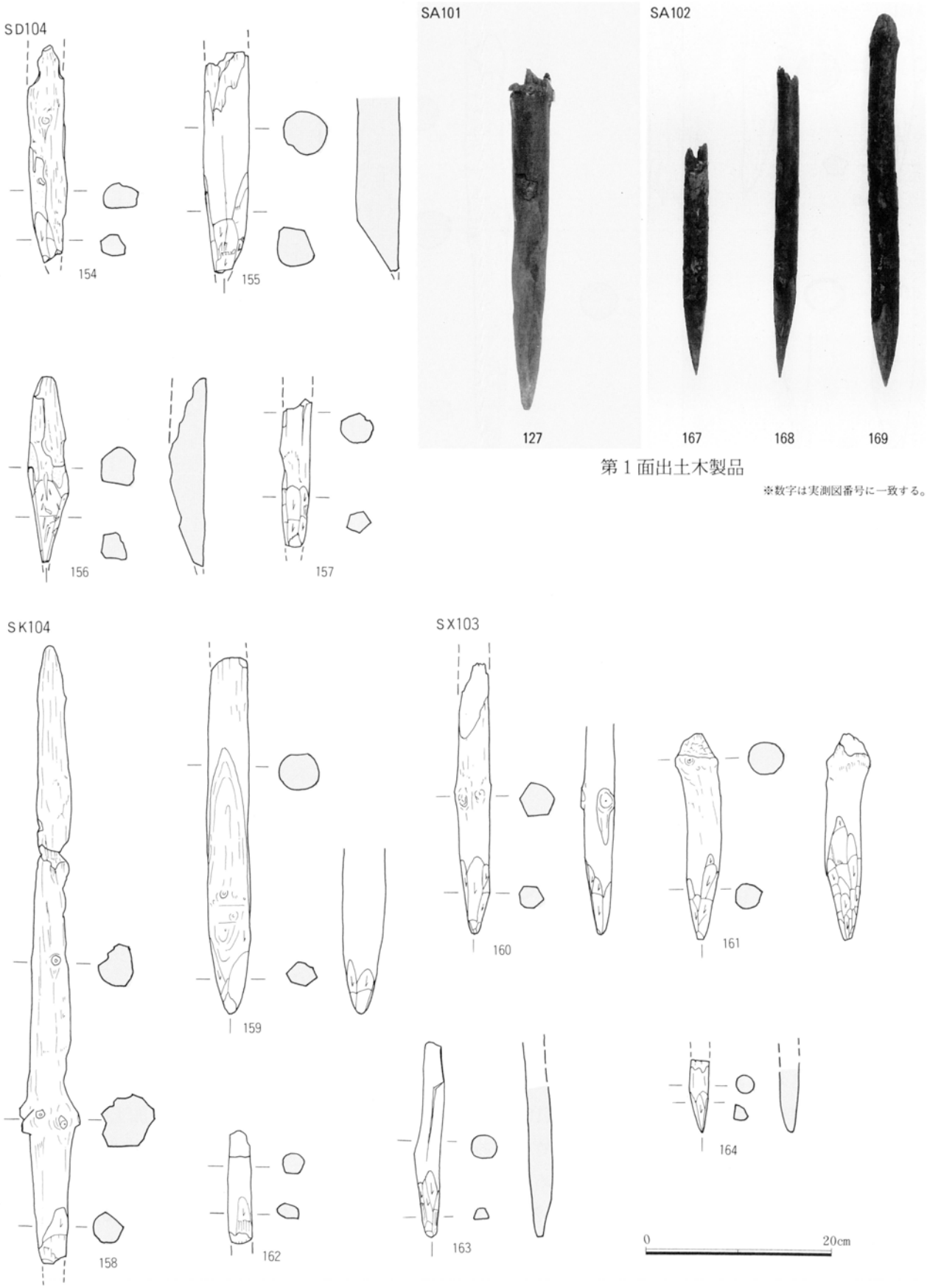


Fig.18　南側調査区杭列SA101出土木・竹製品実測図（縮尺1/6）

のと考えられる。杭の直径は3.15～4.05cmを測る。枝の先端を尖らせて杭としている。先端を丁寧に5～7面加工するものと、片面の2面のみを加工するものがある。マツ材と考えられる。

160～164は調査区西側の七隈川蛇行部SX103出土。直径は2.5～3.7cm、先端は3～7面を加工している。

131～153は水田SS102出土の木杭、及び竹杭である。SS102は、水口遺構SX102より用排水を行うもので、木杭・竹杭はいずれも畦畔の土留めに用いられたものである。木杭131～143・145～153は、直径2.3～5.6cmを測る。杭の先端部は片面の2面加工と、全面の3～6面を加工したものがある。竹杭は、SS102の南側に隣接する水田SS103との境に打ち込まれていたもので、杭列の本数は17本の内2本を数える。材はマツ・カシなどと考えられる。竹の直径は4.3cmを測る。竹の先端を杭先として片面を加工している。



第1面出土木製品

※数字は実測図番号に一致する。

Fig.19　溝 SD104、土壙 SK104、七隈川蛇行部 SX103出土木製品実測図（縮尺1/6）

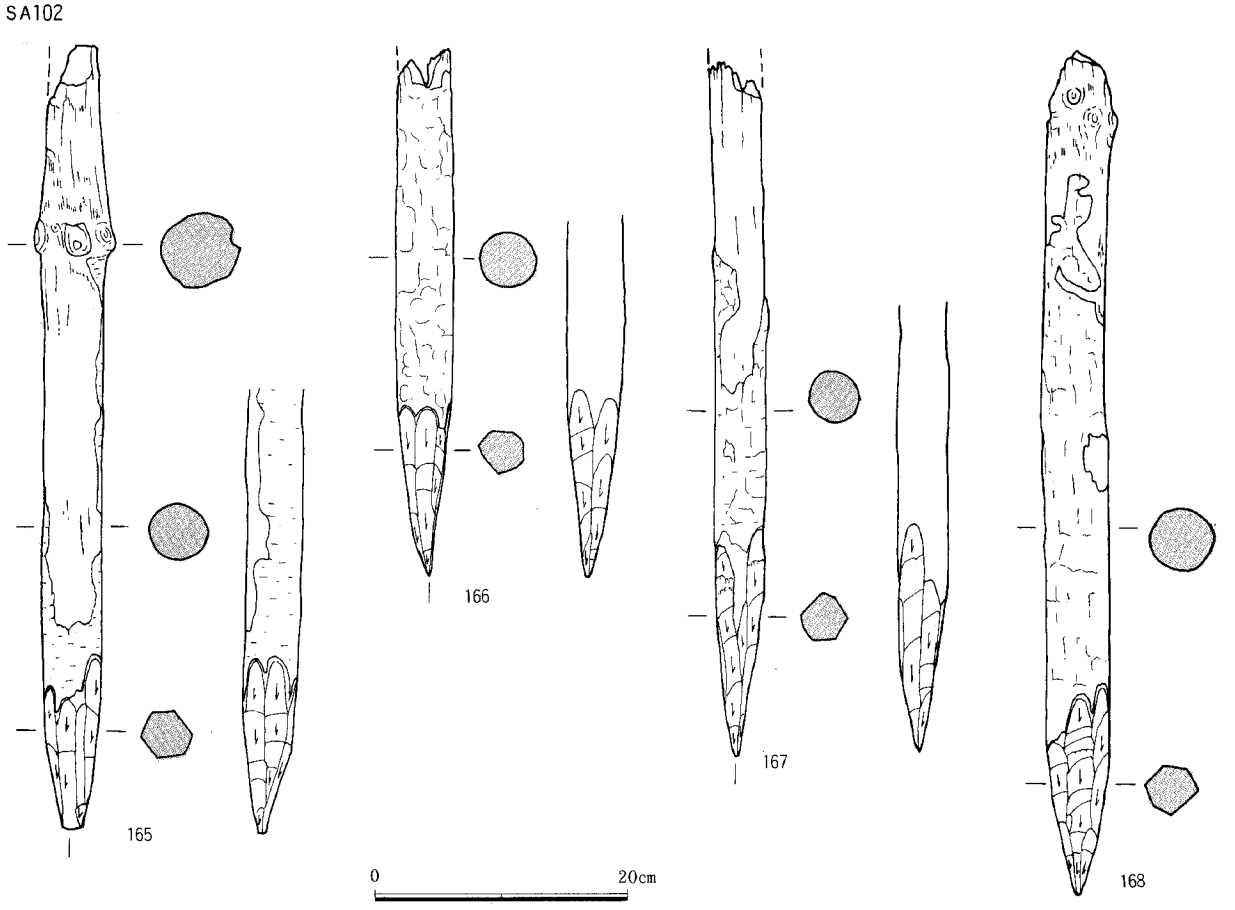


Fig.20　北側調査区杭列SA102出土木製品実測図（縮尺1/6）

(3)　第2面の遺構

第2面においては、調査区の東側に溝SD101に先行する溝SD202が、西側には自然堤防の内側に溝SD111に先行する溝SD211が掘削され、この2本の溝の内側に水田区画が形成される。第2面の調査対象とした耕作土は、南壁面土層の第12層（灰色粘質土）・第20層（暗褐色粘質土）・第35層（灰黒色砂質土）・第41層（灰色砂質土）である。

東・西の溝SD202・211は各々南北方向の大畦畔SF206・210を伴っている。これらの畦畔を軸として第2面の水田区画が作られている。水田区画は、いずれも隅丸長方形状を呈しており、1枚の水田区画の平均面積は約30.25㎡を推定できる。比較的規模の小さな水田区画である。水田区画は15枚検出した。

①　水田跡（SS）

SS202（Fig.21・25）　水田区画の形状は不明。耕作土は黒色粘質土であるが、調査の過程で削平した。水田面の標高は、20.10m～20.26mを測る。溝SD226により、水田SS226と区切られる。現存の面積は約100㎡である。溝SD201に伴う畦畔を検出できなかった。水口は不明である。

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器などが出土している。

SS204・207・210（Fig.21・25） 南北方向に蛇行しながら設けられた畦畔SF202・203・206・201の間に形成された水田区画である。不整長方形を呈した水田区画で、水田面はほぼ平坦である。水田面の標高は、19.75m～19.85mを測る。面積はSS204が約41㎡、SS207は34.3㎡である。SS210は44.17㎡である。SS207は北側をトレンチによって切られているが、北側調査区で検出した水田SS223と同一区画を形成するものと考えられ、ほぼ40㎡の区画である。水口は確認できていない。

遺物は、土師器、須恵器、赤焼け土器、陶器などが出土し、SS207からは越州窯系青磁碗が出土している。

SS208（Fig.21） 溝SD211東側の水田区画である。略東西方向の畦畔SF203によって区画を形成するが、主軸方向の違う畦畔SF204の存在から水田区画の変遷があったことが伺える。SF204からSF203への変更とみなすことができる。水田区画は更に細分されると考えられる。水田面の標高は、約19.70mを測り、ほぼ平坦である。水田耕作土は、第41層（灰色砂質土）が相当すると思われる。

遺物は、土師器が出土している。

SS209（Fig.21・25） 水田跡SS208と同様、溝SD211の東側に存在する水田区画である。SS210・204とは主軸方向を異にする。畦畔SF204・206に区画された不整長方形状と考えられる。水田耕作土は暗灰色砂質土で、厚さは4～7㎝である。水田面の標高は、約19.65mを測る。耕作土の上面には、少数の足跡が遺存していた。

遺物は、土師器、須恵器などが出土している。

SS211（Fig.21） 略南北方向の不整長方形の水田区画である。南北に走る畦畔SF203とSF206、また東西方向の畦畔SF202によって区画されている。水田面の標高は、19.55m～19.70mを測る。水田面の面積は、10.81㎡を測る。水口は不明である。

遺物は出土していない。

SS212（Fig.21） 畦畔SF202・203で区画される。不整形の水田区画で、水田面の面積は、約12㎡を測り、狭小な水田である。足跡が多く遺存する。畦畔SF203とSF202の主軸方向が違っており、畦畔の時期を異にする場合、区画形状の検討を要する。水口は確認できていない。

遺物は出土していない。

SS220（Fig.21） 溝SD211の東側に接しており、畦畔SF205とSF210によって形成された水田区画である。水田面の標高は、約19.65mを測り、ほぼ平坦である。南側を切られ区画ははっきりしていないが、SF205の中央に突起状の出張りがある。現状の面積は、40.28㎡を測る。

遺物は、土師器と黒曜石が出土している。

SS221・222（Fig.21） 畦畔SF205とSF212・213によって区画を形成されている。水田SS221とSS222の間に畦畔を検出することは出来なかったが、遺存する足跡の数によって境界が明確であったことから、別の水田とみなした。SS221の水田面の標高は19.61～19.76mを測る。SS222の標高は、19.66～19.79mを測る。SS221・222共に北側は判明しないが、現存の規模は、SS221が53.04㎡、SS222は55.18㎡を測る。

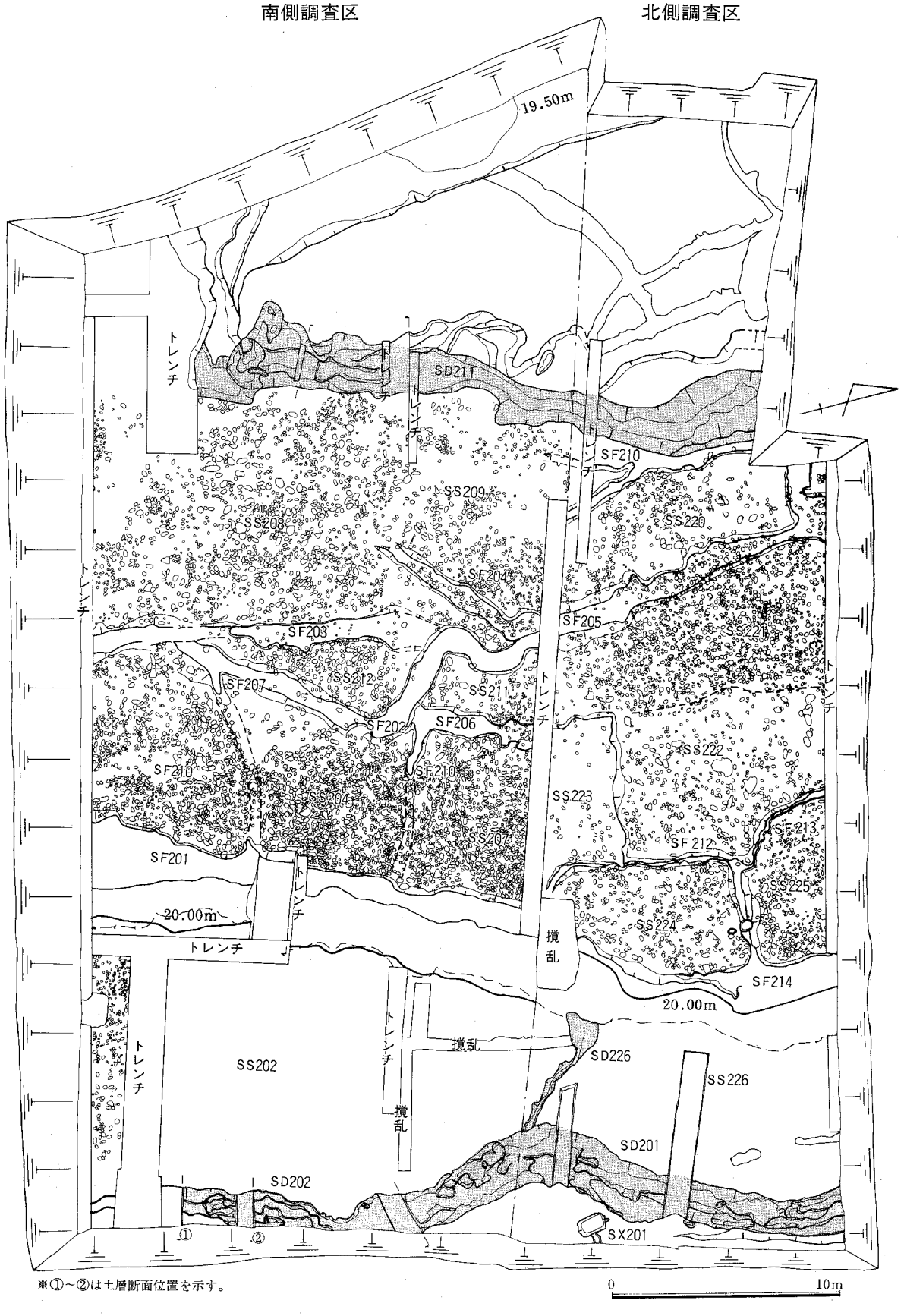


Fig.21　第２面遺構配置図（縮尺1/250）

第 2 面南側調査区全景（南から）

第 2 面北側調査区全景（南から）

遺物は、SS221から土師器が出土している。

SS223（Fig.21） 水田SS222の南側に隣接する水田区画である。水田SS223は、南側水田SS207と同一水田区画であると考えられる。SS223の規模は、18.6㎡を測るが、SS207と合わせた面積は52.9㎡を測る。水田面の標高は、19.78～19.82mを測り、平坦である。

水口は確認できていないが、SS223とSS222との境には段差があり、田越しの水掛かりの方向を示すものであるかもしれない。

遺物は出土していない。

SS224（Fig.21・25） 畦畔SF201とSF212・214によって区画された水田区画で、略隅丸長方形を呈している。水田面の標高は、19.76～19.87mを測り、南側がやや高くなっている。南側を撹乱によって切られているため、全体形状は明確ではないが、現存の面積は、29.60㎡を測る。

水口は水田SS205との境をなす畦畔SF214に設けられている。水田面の標高より、SS224からSS225へ排水していたと考えられる。

遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器、青磁、陶器などが出土している。

SS225（Fig.21） 水田SS224の北側に位置するが、境界地であるため規模は不明である。形状は隅丸長方形と考えられる。現存の面積は、18.53㎡を測る。水田面の標高は、19.70～19.76mを測り、平坦である。水口は上述の記述通りである。

遺物は、土師器、須恵器が出土している。

② 畦畔（SF）

水田に伴う畦畔を数条検出した。しかし、いずれも畦畔の遺存状態は悪く、全体形を検出することは困難であった。調査区東寄りに南北方向の大畦畔SF201が、中央には同じく南北方向の畦畔SF203・205が存在する。

SF201（Fig.21） 調査区のほぼ中央に位置し、上面が里道化した大畦畔である。溝SD306A・Bが埋没した後、洪水によって堆積した土砂を積み上げて形成されたものである。全長は3.36m、幅は2～3m、高さは約20cmを測る。断面形は蒲鉾状を呈する。旧道に平行した規模の大きな畦畔で、畦畔のみならず里道としての機能を持っていたものと思われる。当該地の東側に隣接する梅林遺跡第1次調査において、16世紀の溝が埋没した後に里道と考えられる大畦畔が構築されたことが判明した。この大畦畔は、修復を受けながら規模を拡大し、昭和50年代まで生活道路として機能している。この第1次調査の大畦畔Ⅰ・Ｊの完成によって、この大畦畔SF201は廃絶したものと考えられる。

遺物は、土師器、陶磁器、炭化物、鉄滓などが出土している。

SF202（Fig.21・25） 第3面の畦畔SF305の上面で検出した畦畔である。大きく蛇行しており、大畦畔SF203に接続している。先後関係は不明である。三角形状の小規模の水田区画を形成している。北側には畦畔SF206が接続する。全長は14.2m、幅は約83cm、高さは約8cmを測る。畦畔SF203との主軸方向の違いにより、畦畔の移動を示すものと考えられる。

第 2 面南側調査区水田跡（北東から）

第 2 面北側調査区水田跡（南から）

遺物は、土師器、須恵器が出土している。

SF203・205（Fig.21） 南側調査区で検出した畦畔をSF203とし、北側調査区で検出した畦畔をSF205としたが、同一の畦畔である。主軸を略南北方向にもつ大畦畔である。第3面の畦畔SF305をほぼ継承するが、その後蛇行部分を直線的な畦畔へと改良したものであろう。全長は約34.7m、幅は約1.02m、高さは8cmを測る。

遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器、鉄滓などが出土している。

SF204（Fig.21） 大畦畔SF202から派生し、北東方向に主軸をとる。遺存状態が悪かったため、全体を検出できなかった。現存長は7.8m、幅は約90cm、高さは8cmを測る。畦畔SF202と平行した関係にある。間にあるSF203とは主軸方向も違うので水田区画の変更があったと考えられる。畦畔上に足跡が多く遺存していることから、SF203の畦畔形成時には水田として使用された可能性もある。

遺物は出土していない。

SF206（Fig.21） 畦畔SF202と接続しており、N16°Eに主軸をとる。北側は調査区境になっており、トレンチによって切られるため、全体形は不明である。また、畦畔SF202との接合部付近からは東方向に畦畔SF210を形成しており、大畦畔SF201へ繋がって、水田区画SS207を区画するものと考えられる。現存長は約3.2m、幅は45cm、高さは約5cmを測る。

遺物は土師器が出土している。

SF207（Fig.21） 畦畔SF202から東側へ派生した畦畔である。遺存状態が悪く、現存長は約1.5m、幅は45cm、高さは5cmを測る。足跡が希薄になる面が帯状に大畦畔SF201に延びていることから、水田SS204・210を区画する畦畔跡ではないかと考えられる。

遺物は出土していない。

SF210（Fig.21） 溝SD211の東側肩部に設けられた畦畔である。大畦畔SF203（205）・201とほぼ平行した関係にある。遺存状態が悪かったため南側調査区においては検出できなかったが、SD211に沿って設けられていたものと考えられる。現存長は約5.5m、幅は平均で1.0m、高さは10cmを測る。水田SS220を区画する。

遺物は出土していない。

SF212（Fig.21） 調査区の中央よりやや北東側に位置し、水田SS223・224を区画する畦畔である。主軸をN7°Eにとる。畦畔SF213・214と接続する。全長は2.7m、幅は約51cm、高さは5cmを測る。高さが非常に低い畦畔である。

遺物は出土していない。

SF213（Fig.21） 北側が調査区境にあるため、全体形は不明である。水田SS222・225を区画する南北方向の畦畔で、畦畔SF212と接続する。現存長は4.5m、幅は約58cm、高さは約5cmを測る。

遺物は出土していない。

SF214（Fig.21） 大畦畔SF201と畦畔SF212・213を繋ぐ東西方向の畦畔で、水田SS224とSS225の区画を形成する。畦畔の中央よりやや東側に水口を設ける。全長は7.3m、幅は約77cm、高さは12cmを測る。水口の幅は約50cmである。

遺物は出土していない。

③ 溝跡（SD）

水路として用いられたと思われる溝を4条検出した。調査区の東側には溝SD201が、西側には溝SD211が設けられ、平行した関係にある。溝SD201は第1面の溝SD101と、溝SD211は第1面の溝SD111と重複している。これら2本の溝の間に水田区画が形成されている。

SD201（Fig.21・22・26） 調査区の東側に位置する略南北方向の溝で、大きく蛇行しており、東側の第1次調査で検出した溝SD12と同一溝である。また、西側肩には畦畔を附設していたものと考えられるが、検出できなかった。用水路としての機能をもつ溝SD201を掘削することによって、水田耕作地が溝の東西両側に拡大したものと考えられる。溝の断面形は、逆梯形状を呈する。溝の全長は2.2m、幅は平均で2.11m、深さは平均で58cmを測る。溝の底面・壁面は凹凸を呈して乱れており、相当な水量があったことが伺える。

覆土は、上層が黒色粘質土で、下層が灰白色砂層となっており、砂層の堆積は厚い。

遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、黒色土器、石製品（スクレイパー、石鏃）、鉄釘などが出土している。

SD202（Fig.21・23・26） 調査区の東側に位置する。溝SD201と接続しており、SD201に先行する。南壁面の土層断面を観察すると、SD202の東・西側には水田耕作土が広がっており、畦畔を伴っていたものと考えられる。溝の断面形は袋状を呈しており、現存長は11.35m、幅は平均で約90cm、最大の深さは60cmを測る。

覆土は、上層が黒褐色砂質土、黒灰色粘質土で埋まっており、下層は褐色粗砂となっている。

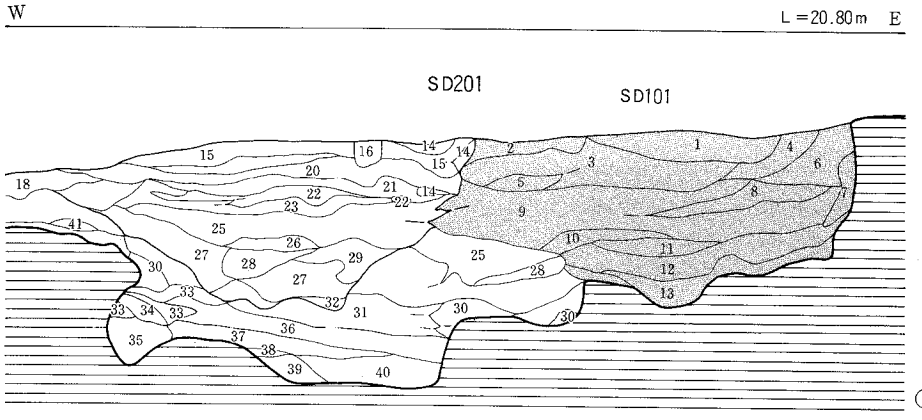
遺物は、土師器、須恵器、韓式系土器などが出土している。

SD211（Fig.21・26） 調査区の西側に位置し、南北方向に流れる溝で、第1面検出の溝SD111と重複する。溝SD201・202と平行した関係にあり、南側は七隈川の蛇行部と切り合っている。溝の東側には畦畔SF210を伴っており、東側には水田面が拡がる。溝の断面形は、舟底状を呈しており、現存長は、25.3m、幅は平均で2.37m、深さは平均で70cmを測る。

遺物は、縄文土器、土師器、須恵器などが出土している。

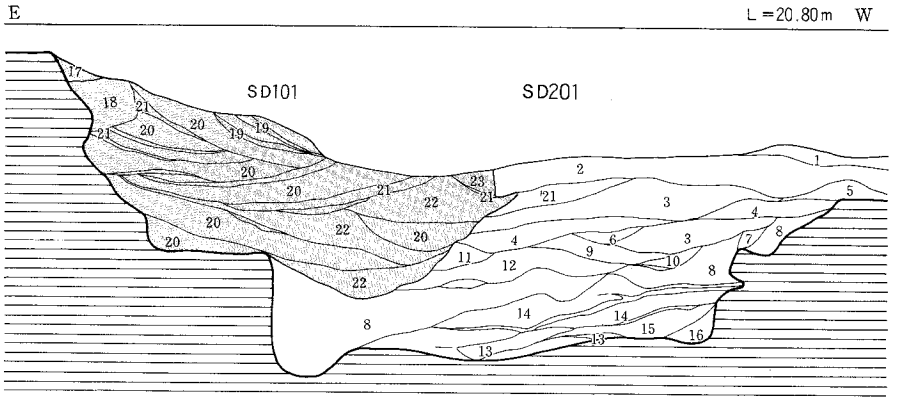
SD226（Fig.21） 溝SD201から北西方向に派生する小規模な溝である。下層の第3面の遺構である溝SD306を既に掘削していたため、SD226とSD306や畦畔SF201との関係などが確認できなかった。水路としての機能を果たしていたと考えられ、一方水田SS202とSS226を区画する水路の可能性が高い。溝の断面形は、逆梯形状を呈しており、現存長は、5.0m、幅は約40cm、深さは約25cmを測る。

遺物は、土師器、須恵器が出土している。



SD201①土層名称

1．暗灰黄色砂と砂礫との混合土
2．灰黄色細砂粒
3．暗灰黄色砂
4．3に鉄分沈殿
5．砂礫層　鉄分沈殿
6．暗灰黄色粗砂
7．6より明るい
8．灰白色砂
9．灰白色粗砂　砂礫ブロック含む
10．灰黒色細砂粒
11．12より明るい
12．灰色砂　砂礫と少量の鉄分を含む
13．灰色粗砂　砂礫と少量の鉄分を含む
14．暗灰色細砂粒
15．黒色粘質土　14と砂礫を多く含む
16．灰色シルト　砂礫多く含む
17．15と同じ
18．15と灰色細砂層との互層
19．灰色砂に15を含む
20．14と15との互層
21．15に14を含む
22．褐灰色砂
23．黒色粘質土　灰色細砂含む
24．黒灰色粘質土
25．黒灰色砂質土　砂礫多く含む
26．暗灰色砂礫
27．25と青灰色粘質土との混合土　砂礫含む　腐食層
28．25と26との混合土
29．青灰色粘質土　黄灰色粘質土ブロック含む
30．青灰色粘質土
31．暗灰色粘質土　腐食植物含む
32．31と灰色砂との互層
33．灰白色砂
34．黒灰色シルト
35．灰黄色砂礫
36．褐色砂礫　鉄分含む
37．3と同じ
38．暗灰色シルト
39．暗灰色砂
40．褐灰色砂礫　鉄分沈殿ブロック含む
41．灰黒色シルト　灰白色細砂ブロック含む



SD201②土層名称

1．灰黒色粘質土　微砂多く、軟質土
2．黒色粘質土　微砂と鉄分含む
3．黒色粘質土　砂が多く、粘性は少ない
4．灰色砂層　上層に黒色土混入
5．黒褐色砂質土　黒色が強い
6．灰青色シルト
7．灰青色粘質土ブロック
8．黒色粘質土ブロック
9．青味を帯びた暗灰色粘質土　砂層を含む
10．9より黒味が強い
11．黒色粘質土　灰青色粘質土ブロック混入
12．灰青色粘質土と青灰色粘質土の混合土　黒色土混入
13．灰青色粘質土
14．灰白色砂層
15．灰褐色粗砂層
16．灰青色粗砂
17．黄褐色粘質土　粗砂含む（床土）
18．黒褐色粘質土　褐色土ブロック多く含む
19．黒色砂質土と粗砂との互層
20．褐色粗砂
21．黒色砂質土
22．暗褐色砂礫層
23．暗灰黒色砂層
24．灰色砂質土　固くしまる（地山）

※①～②は土層ベルトの位置を示す。

0　1m

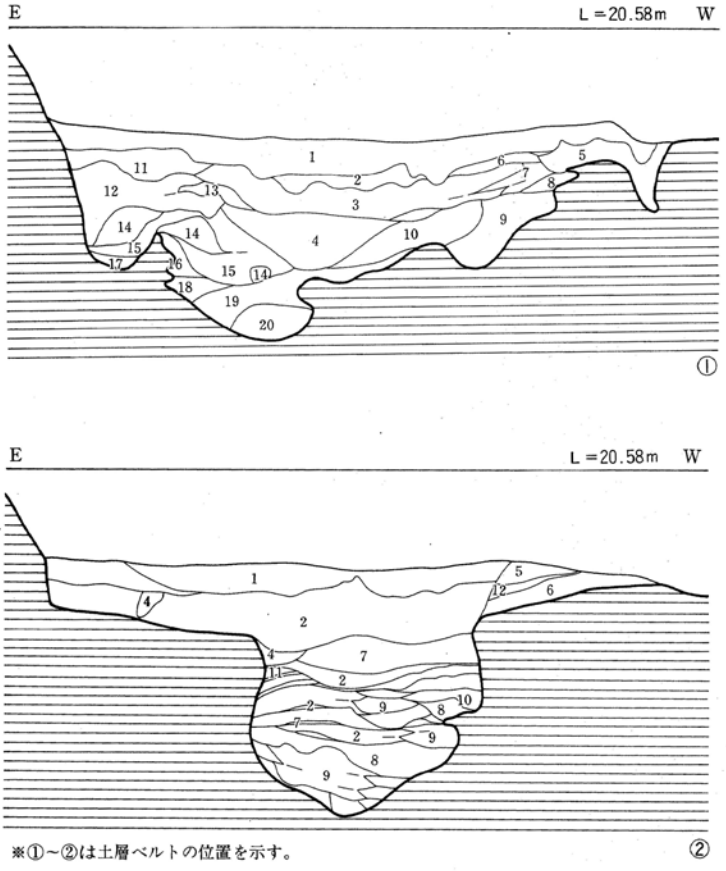
Fig.22　溝SD201土層実測図（縮尺1/20）

溝ＳＤ２０１土層状態①（南から）

溝ＳＤ２０１土層状態②（北から）

溝 SD201（北から）

溝 SD202（南から）



SD202①土層名称
1．黒灰色砂質土　黒色粘質土と砂礫を含む
2．黒色粘質土　砂礫を含む
3．黒色砂質土
4．褐灰色砂層
5．灰青色粘質土と黒灰色粘質土の混合土　砂礫含む
6．褐灰色微砂ブロックと黒灰色砂質土ブロックの混合土
7．褐灰色微砂
8．黒灰色粘質土
9．褐灰色粗砂
10．黒色粘質土　粗砂含む
11．黒褐色粘質土
12．黒色粘質土　微砂含む
13．黒色粘質土　微砂層混入
14．灰白色微砂　黒灰色土混入
15．黒灰色粘質土と微砂層との互層
16．黒灰色粘質土　灰青色土混入　粗砂含む
17．暗褐色砂層
18．灰白色砂層　砂礫を含む
19．褐色粗砂
20．暗褐色粗砂

SD202②土層名称
1．黒褐色砂質土　砂礫多く含む
2．黒灰色粘質土
　砂礫と炭化物、灰白色粘質土ブロックを含む
3．暗灰青色粘質土　砂礫含む
4．灰色粘質土　2のブロック含む
5．暗灰褐色粗砂
6．灰黒色粘質土と暗灰色微砂及び褐色粗砂の互層
7．黒褐色砂質土　粗砂多く含む
8．黒色砂質土と暗灰褐色砂層との互層
9．黒色粘質土と灰色粘質土の混合土
10．暗褐色砂層
11．暗褐色微砂　黒色砂質土層混入
12．灰褐色砂層

0　1m

Fig.23　溝SD202土層実測図（縮尺1/20）

④　土壙（SX）

調査区の東側、SD201に接して土壙を1基検出した。

SX201（Fig.21・24）　調査区の東側境界地に接し、溝SD201の東肩に位置する。第3面で検出した土壙SX303を切る。平面形は不整隅丸長方形を、断面形は逆梯形状を呈する。長軸の長さは1.18m、幅

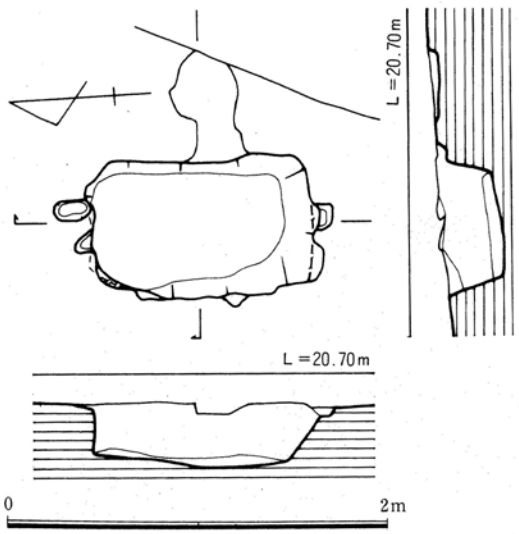
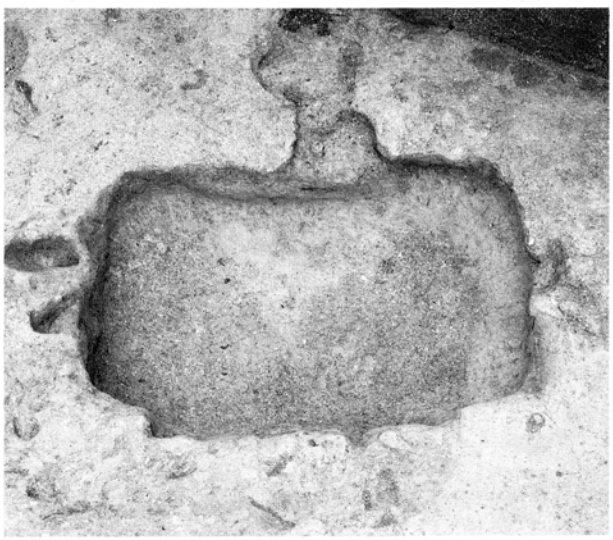


Fig.24　土壙SX201実測図（縮尺1/40）



土壙SX201（西から）

は72cm、深さは約34cmを測る。

遺物は出土していない。

(4) 第2面出土遺物（Tab. 2～4参照）

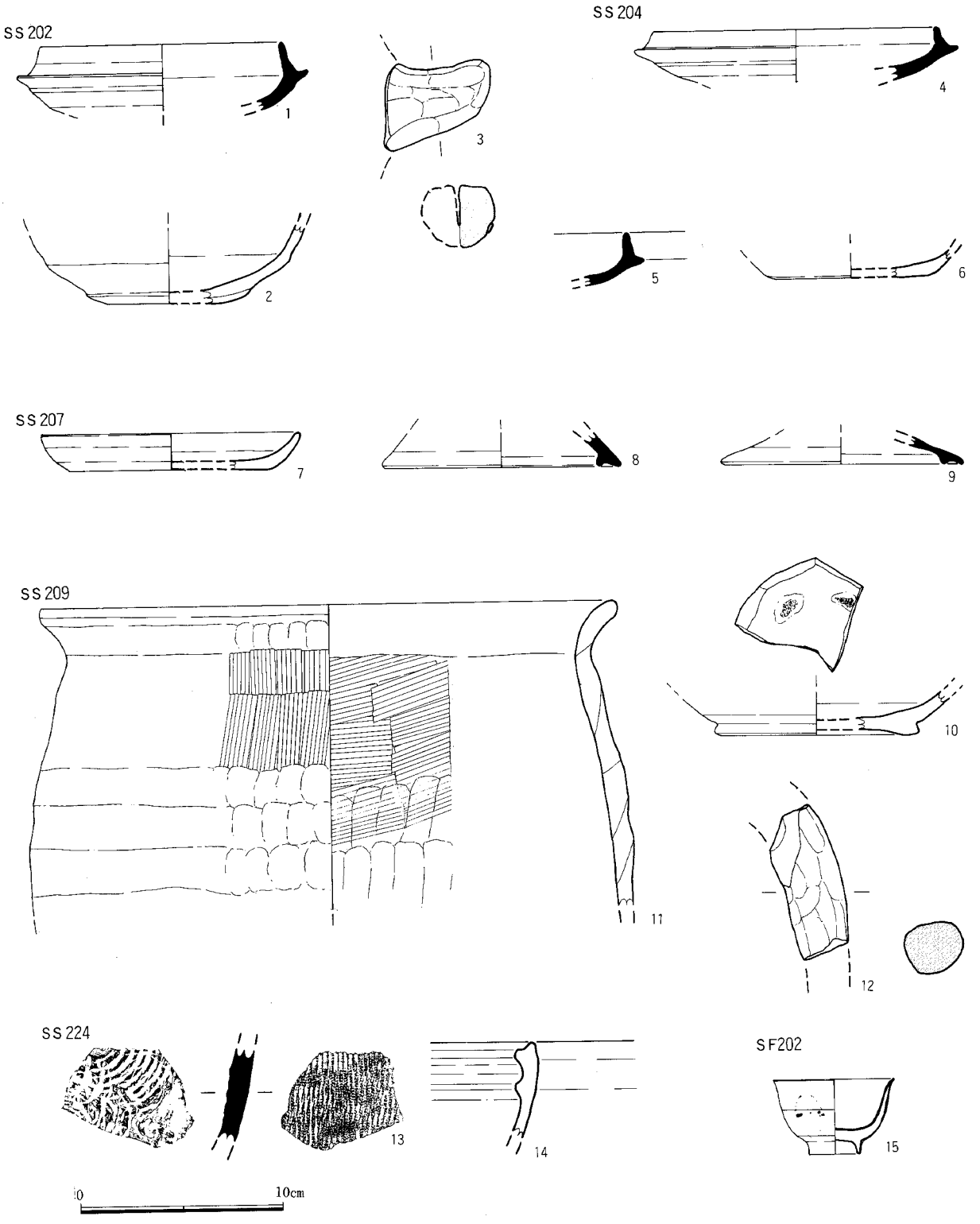


Fig.25　水田跡 SS202・204・207・209・224、畦畔 SF202出土遺物実測図（縮尺1/3）

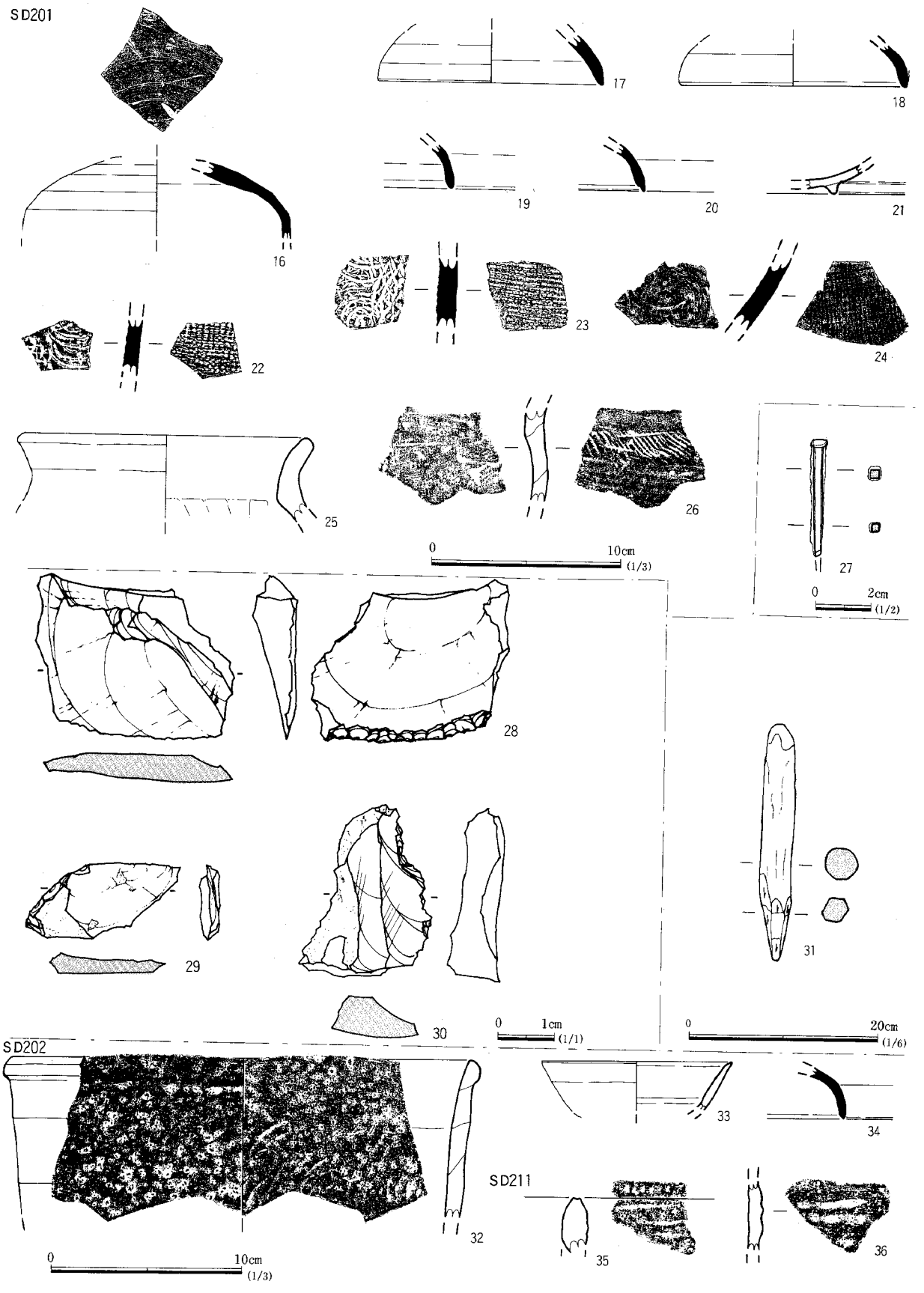


Fig.26　溝 SD201・202・211出土遺物実測図（縮尺1/3・1/2・1/1・1/6）

第2面出土遺物

※数字は実測図番号に一致する。

⑸ 第3面の遺構

第3面は、第2面水田面のすぐ下層で検出した水田面で、第2面と第3面との間には間層が存在しない。この層の上面には、砂堆が部分的、若しくは薄いため水田面の検出は容易ではなかったが、土質の違いや畦畔を基に水田区画の確認を行った。調査区西側には、自然堤防が形成されている。東側は水田が形成されているものと考えられるが、耕作土を分離できなかった。水田面の標高は、東側で20.20m、西側では19.60mを測り、西側の七隈川に向かって段々状に低くなっている。水田面は、調査区東側の南北方向の溝SD306Bと西側の南北方向の溝SD311の間で検出した。水田区画は16枚検出した。1枚の水田区画はほぼ長方形状を呈しており、畦畔によって区画されている。1枚の耕作面積の平均は約40㎡を測る。第2面と同様に区画が明確ではない部分も見られるため、水田区画は更に増える可能性もある。

溝SD311の東肩には第2面の溝SD211同様に畦畔SF301が附設する。一方調査区東側では、畦畔SF201の下位に溝SD306Bが存在しており、西肩には畦畔SF313が附設する。調査区のほぼ中央を南北に蛇行しながら走る大畦畔SF305は堆積した砂礫を掻き寄せて盛り上げ、表面に耕作土の黒色土を被せて作った畦畔である。

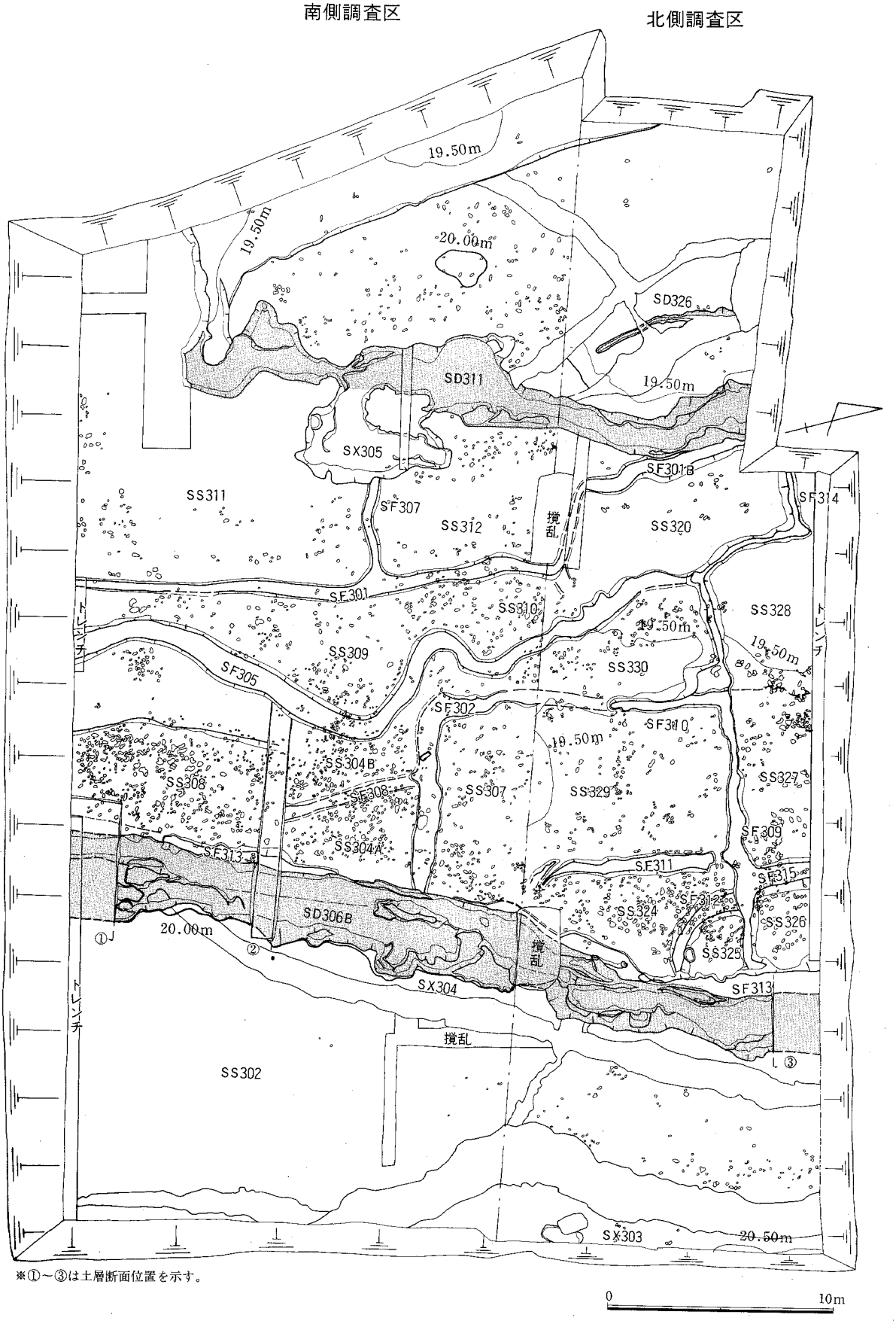
畦畔はほぼ南北方向であるが、直線的に設けられ、畦畔SF301・302・309・310と蛇行する畦畔SF305・312との間に不整合があり、時期的に前後関係を示すものと考えられる。溝SD306とSD311は平行関係にある。

① 水田跡（SS）

SS302（Fig.27・31） 溝SD306の東側に存在する水田面である。第18層（灰黒色砂質土）が相当するものと思われる。第20層との間に砂堆は全く見られず、耕作土の分離は困難であった。また畦畔が不明なため、正確な規模は不明である。現存の面積は136.35㎡を測り、水田面の標高は約20.20mを測る。水口は確認できていない。

遺物は、土師器、須恵器、石製品などが出土している。

SS304A・B（Fig.27・31） 畦畔SF305・313の間に存在する水田区画である。畦畔SF302より、畦畔SF308が分岐しており、SS304A・304Bに分けられるものと考えられる。小規模の水田区画である。



※①～③は土層断面位置を示す。

Fig.27　第３面遺構配置図（縮尺1/250）

これらの水田区画は不整長方形状を呈しており、水田面の標高はほぼ平坦で約19.65mを測る。面積はSS304Aが16.96㎡、SS304Bが17.08㎡を測る。

遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器などが出土している。

SS307（Fig.27） 溝SD306Bの西側に展開する水田で、南側と西側は畦畔SF302によって区画される。北側の境界は、SF311の南側コーナー部分が境を示すものと考えられる。北側に接する水田SS329と同一の水田区画である可能性も考えられる。水田面の標高は19.40～19.60mを測り、西側が低くなっている。水口は確認できていない。

遺物は出土していない。

SS308（Fig.27） 大畦畔SF305とSF313の間に形成された水田区画である。小畦畔を検出できなかったため、水田SS304A・Bとの区別は判然としない。また、SF305に近い部分は幅3mにわたって約10cm程高くなっており、別の水田区画の可能性がある。耕作土上面には足跡が多く残っている。水田面の標高は、19.65～19.80mを測り、西側が低くなっている。現状の面積は、41.28㎡を測る。水口は確認できていない。

遺物は、土師器、須恵器が出土している。

SS309・310（Fig.27） 大畦畔SF305とSF311の間に存在する水田区画である。畦畔SF305の西側へ大きく蛇行した地点を境にしてSS309とSS310の境とした。いずれも不整形であり、区画も明確ではない。水田面の標高は、19.40～19.69mと東から西へ向かって低くなっている。水口は確認できていない。

遺物は、SS309から須恵器が出土している。

SS311・312（Fig.27） 溝SD311と畦畔SF301の間に存在する。いずれも長方形状の水田区画である。主軸はN12°Wである。水田面の標高は19.40～19.64mを測る。SS311とSS312を区画する畦畔SF307は土壙SX305に切られている。ほぼ平坦であるが、SS312は北西に向かって水田面が低くなっている。水口は確認できない。

遺物は出土していない。

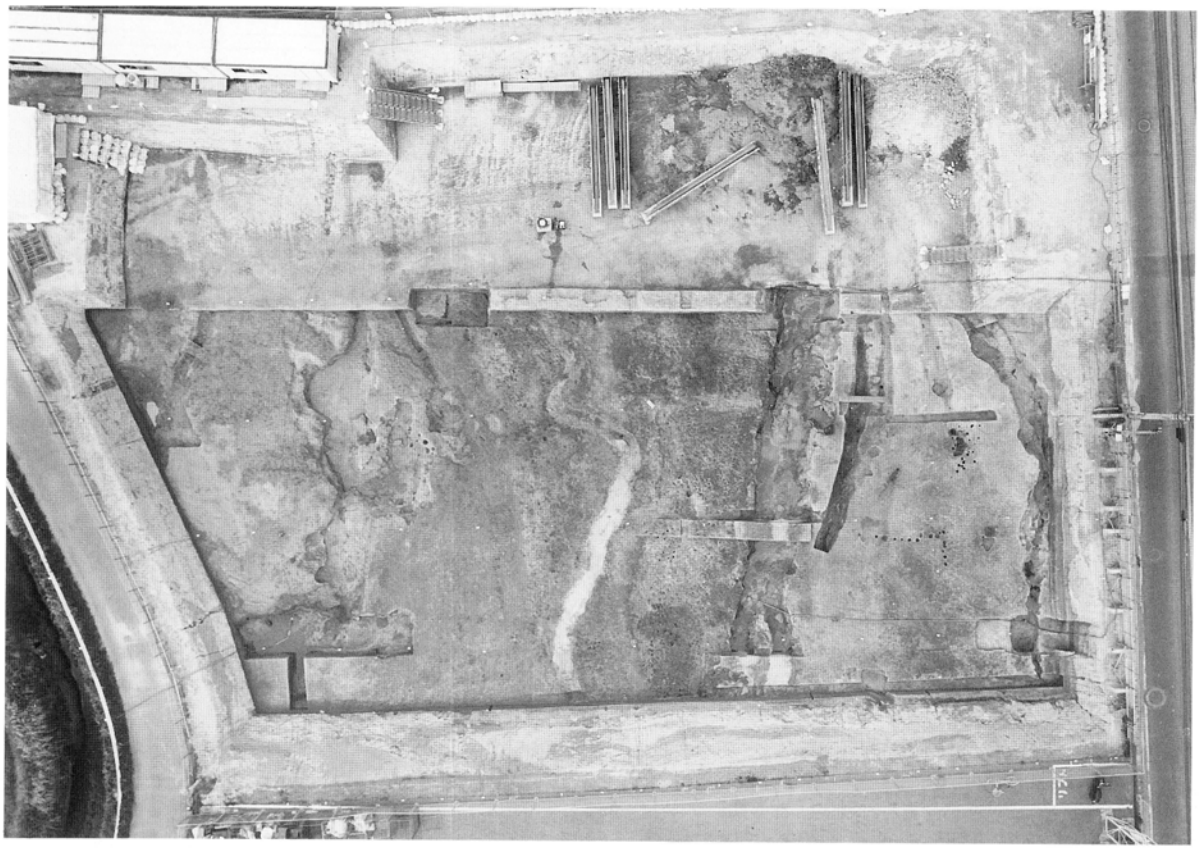
SS320（Fig.27） 不整の長方形状を呈した水田区画である。畦畔SF301・305・314によって区画される。水田SS310との境に畦畔があったと考えられる。水田面の標高は19.50～19.75mを測る。水口は確認できないが、水田SS312との境に設けられていたと思われる。

遺物は、土師器、須恵器、黒曜石などが出土している。

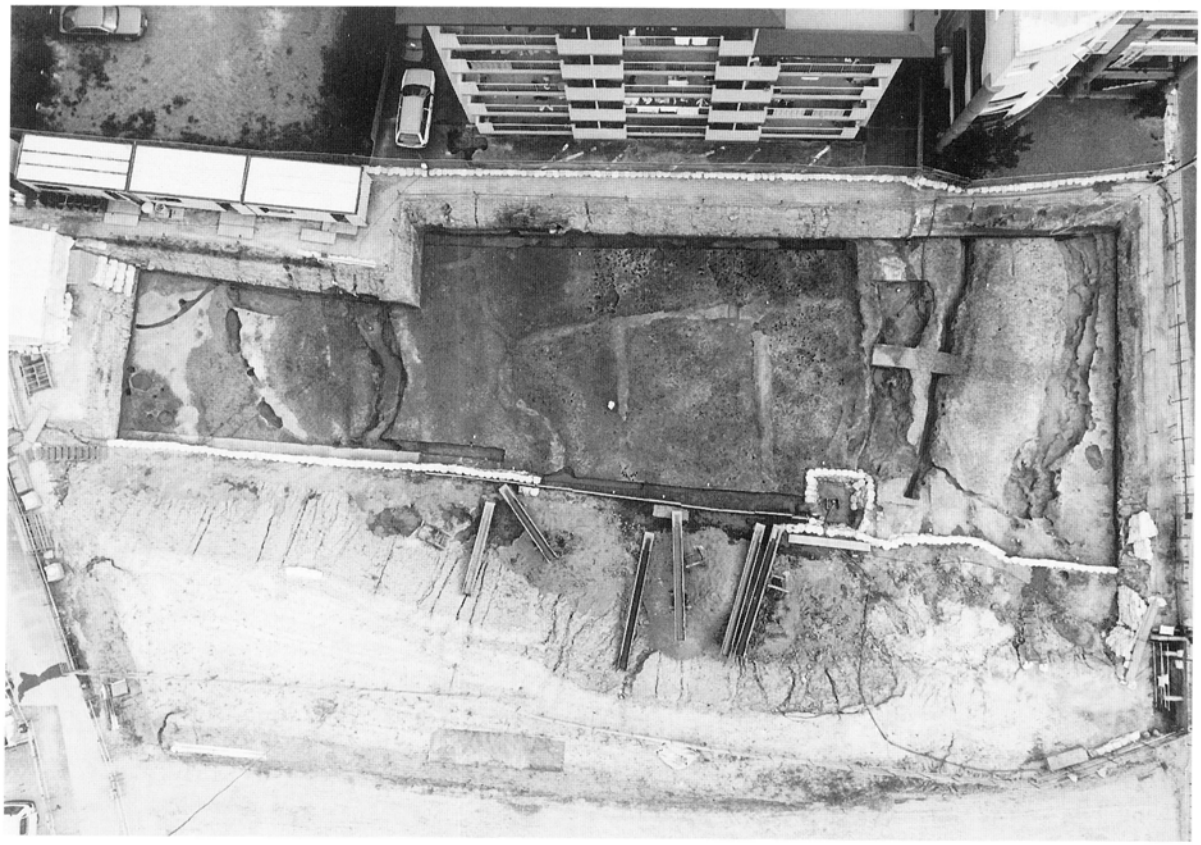
SS324（Fig.27） 溝SD306Bのすぐ西側に存在し、畦畔SF309とSF311に区画された水田である。不整長方形状の水田区画で、足跡が多く遺存する。水田面の標高は、19.63～19.77mを測り、北西に向かって低くなる。区画の内側には、SF312によって区画された水田区画SS325があり、同時期のものか不明である。水口は、SS329との境に設けられている。

遺物は、土師器、須恵器が出土している。

SS326（Fig.27） 畦畔SF309・315に区画された水田区画である。北側境界地にあるため、全体形は不



第 3 面南側調査区全景（南から）



第 3 面北側調査区全景（南から）

明であるが、長方形状と考えられる。水田面の標高は、19.57～19.65mを測り、西に向かってやや低くなる。耕作土上面には足跡が遺存する。水口は確認できていない。

遺物は出土していない。

SS327・328（Fig.27） 畦畔SF305・309・315によって区画形成された水田面である。水田跡SS326同様に、北側境界地にあるため全体形は不明であるが、長方形状の水田区画と思われる。SS327とSS328との境に畦畔は検出できなったが、畦畔SF310の北方向の延長線上において、水田面に段差があったことから境の畦畔があったものとみなし、水田を2区画に分離した。水田面の標高は、SS327が19.50～19.55m、SS328は19.50～19.65mを測る。SS328の耕作土上面には足跡が全く見られない。SS328の西側を区画するSF305に畦畔の切れ目があるので、水口と考えられる。

遺物は、SS328から土師器、須恵器が出土している。

SS329（Fig.27） SS307で既述の通り、SS307とは、区分される可能性が高い。隅丸長方形状を呈しており、面積は53.87㎡を測る。SS307を合わせると88.52㎡を測る。水田面の標高は19.45～19.55mを測り、ほぼ平坦である。水口は西側を区分するSF310の南側が切れており、この部分が相当するものと考えられる。

遺物は、土師器が出土している。

SS330（Fig.27） 畦畔SF305・309・310に区画を形成された、不整形の水田区画である。畦畔SF305が蛇行しているが、畦畔SF301とSF305が同時に存在したものか先後関係を検討する必要がある。水田面の標高は、19.45～19.60mを測る。耕作土上面には僅かに足跡が遺存する。水口は確認できていない。

遺物は、土師器が出土している。

② 畦畔（SF）

水田に伴う畦畔として12条を検出した。砂堆が部分的なものであったため、全ての畦畔を検出することはできなかった。調査区のほぼ中央の大畦畔SF305は蛇行しており、他の畦畔が直線的であることと区別できる。先後関係は不明である。この畦畔SF305は第4面の溝SD405の埋没後に表面に砂をかき集め被せて作った畦畔である。

SF301・301B（Fig.27） 北側の畦畔SF301Bは溝SD311の東肩に付設しており、南側にほぼ直線的に延びている。北側は調査区境にある。北側で検出した畦畔SF314と同一の畦畔であるかどうかは不明である。水田跡SS320を区画する畦畔SF301は、SF307と繋がって、水田跡SS311・312を区画している。

現存長は31.75m、幅は平均で98cm、高さは約6cmを測る。

遺物は、土師器、須恵器が出土している。

SF302・308・310（Fig.27） 畦畔SF302は、畦畔SF309・310に繋がって水田跡SS307・329を区画し、畦畔SF305・308と平行した関係にある。大畦畔SF305に向かって延びているが、直前で北上しており、これが北側と繋がって、水田跡SS330・304A・Bを区画する。SF308は、遺存状態が悪かったが、この部分のみ足跡が希薄になっていたことなどから、SS304AとSS304Bを区画する畦畔として存在し

ていたものと考えた。SF310は、SS329・330を区画するために設けられた畦畔である。南端を第1面の溝SD125によって切られている。

SF302の現存長は8.5m、幅は約1.0m、高さは約8cmを測る。SF310の現存長は5.4m、幅は平均で60cm、高さは4.7cmを測る。

遺物は、SF310から土師器、須恵器が出土している。

SF305（Fig.27） 先述したとおり、第4面の溝SD405が埋没した後に、堆積した砂礫を掻き寄せて盛り上げ、表面に耕作土を被せて作られた大畦畔である。主軸はN8°Wである。

現存長は37.3m、幅は平均で1.05m、高さは約8cmを測り、やや低いが、調査区南壁の土層からは高さは20cm程度であったと思われる。

遺物は出土していない。

SF307（Fig.27） 畦畔SF301から西側に派生した畦畔で、西端は土壙SX305まで延び、土壙に切られる。水田跡SS311・312を区画する畦畔である。

全長は4.5m、幅は約50cm、高さは5.5cmを測る。小規模な畦畔である。

遺物は出土していない。

第3面南側調査区水田遺構（南から）

第3面北側調査区水田遺構（南から）

SF309（Fig.27） 調査区の北側に位置し、東西方向の畦畔である。大畦畔SF305と溝SD306Bを繋ぐ畦畔である。水田SS324・329・330・326・327・328を区画する。

全長は17.4m、幅は平均で64cm、高さは7.7cmを測る。

遺物は出土していない。

SF311（Fig.27） 水田SS324を区画する南北方向の畦畔である。畦畔SF310と平行した関係にある。北端に水口を伴う。

現存長は7.8m、幅は平均で67cm、高さは約10cmを測る。

遺物は出土していない。

SF312（Fig.27） 蛇行した畦畔で、水田SS325を区画している。この水田には、足跡が多く遺存しており、また水田

区画があまりにも狭小なため、水田の区画の合理性からみて、利用目的を検討する必要がある。第3面での畦畔ではない可能性も高い。

SF313（Fig.27） 溝SD306Bの西肩に付随する畦畔である。遺存状態は悪い。南壁土層面から判断すると、幅80cm程度の規模を持った畦畔であったと思われる。

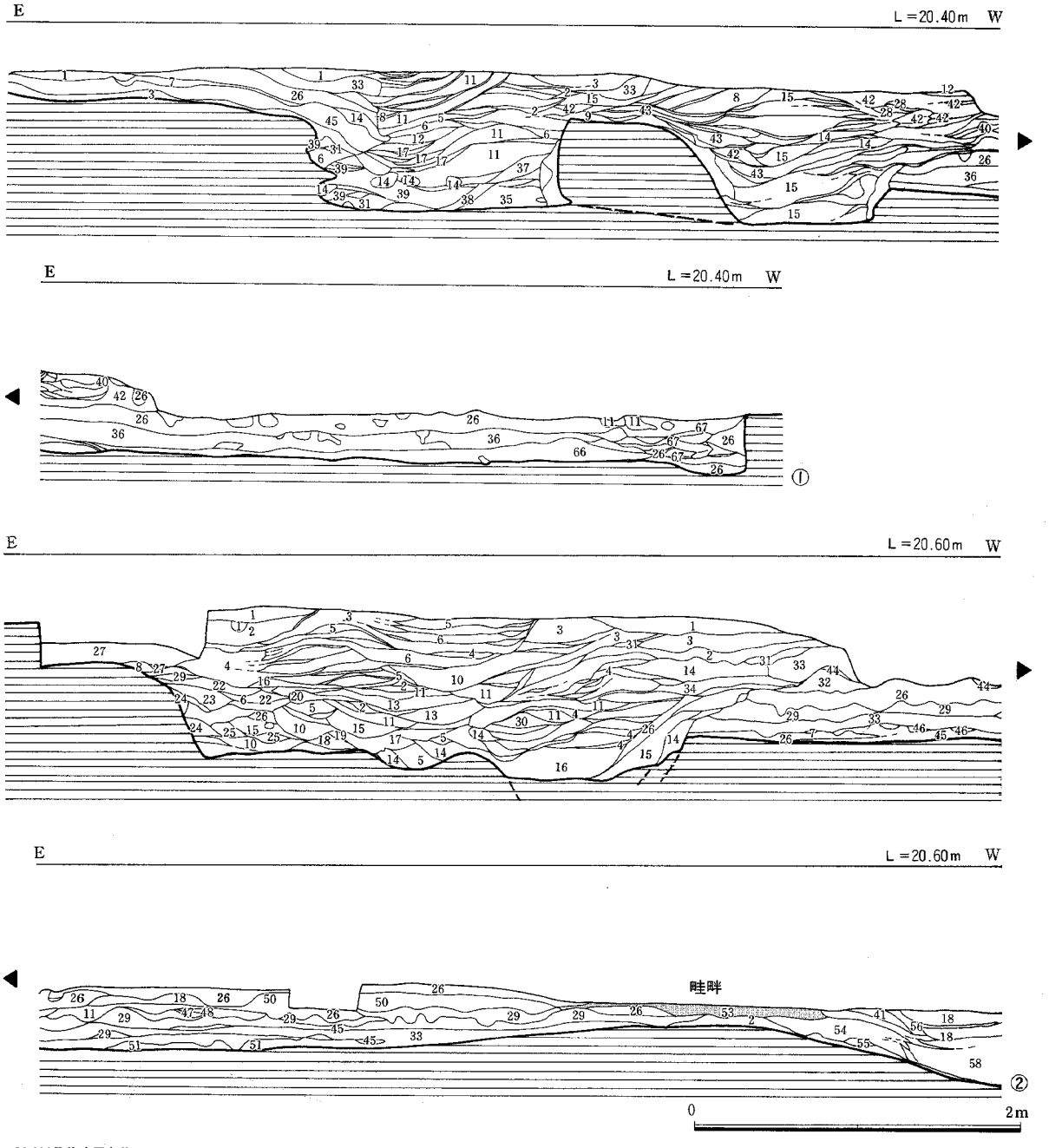
現存長は18.5m、幅は平均で67cm、高さは約12cmを測る。

遺物は出土していない。

SF314（Fig.27） 大畦畔SF305の北端で、西へ折れる畦畔である。境界地にあるため全形は不明だが、おそらく畦畔SF301に繋がるものと思われる。水田SS320を区画する小畦畔である。

第3面南側調査区水田跡①（北東から）

第3面南側調査区水田跡②（南から）



SD306①②土層名称

1. 黒褐色砂質土　固くしまる
1′. 黒褐色砂質土　しまり悪い
2. 黒灰色粘質土　微砂含む
3. 灰色砂質土と褐色微砂層との互層
3′. 3に砂礫含む
4. 暗灰色砂質土　微砂層含む
5. 暗灰色粗砂層
6. 暗灰褐色粗砂層
7. 灰褐色砂質土
8. 褐灰色粗砂層
9. 黒褐色粘質土　鉄分含む
10. 灰褐色砂礫層
11. 灰白色砂層
12. 黄灰色砂層
13. 灰白色砂層と黒色粘質土との互層
14. 黒色粘質土
14. 14に多量の鉄分を含む
15. 褐灰色砂礫層
16. 灰白色砂礫層
17. 暗灰褐色砂礫層
18. 灰色砂層
19. 灰色砂質土
20. 黒色土　砂礫多く含む
21. 黒色シルト
22. 黒色土　微砂層含む
23. 黒色土　砂礫ブロック含む
24. 灰青色粘質土（地山）
25. 灰青色土ブロック
26. 黒灰色粘質土
27. 暗灰青色粘質土　粗砂多く含む
28. 褐色微砂
29. 灰黒色粘質土　暗褐色砂礫多く含む
30. 灰黄色砂礫層　淡灰色砂質土層含む
31. 暗褐色砂礫層
32. 26に微砂含む
33. 黒灰色土と砂礫の混合土
34. 黒灰色砂質土
35. 黒褐色粗砂　固くしまる
36. 黒灰色砂質土
37. 暗灰白色砂礫
38. 灰色微砂
39. 暗灰色粗砂　礫層と暗灰色粘質土との互層
40. 暗灰色砂礫
41. 黒灰色砂
42. 暗褐色砂
43. 黄灰色微砂と黒色粘質土層との互層
44. 鉄分沈殿層
45. 26より青味を帯びる
46. 灰褐色砂
47. 灰褐色粘質土と粗砂層の混合土
48. 7に砂礫多く含む
49. 18に砂礫多く含む
50. 灰色砂礫層　鉄分含む
51. 暗灰色砂質土　砂礫多く含む
52. 灰色砂質土
53. 暗褐色土　鉄分沈殿
54. 暗灰色砂質土
55. 白色砂
56. 灰色砂質土
57. 暗灰色土　鉄分多く含む
58. 灰褐色粗砂　鉄分多く含む
59. 濃灰色砂質土　鉄分多く含む
60. 56と59の混合土
61. 暗灰色シルト
62. 黒灰色シルト
63. 62に粗砂含む
64. 灰白色シルト
65. 黒色土の薄い層と暗灰褐色砂層との互層
66. 54に灰白色微砂層含む
67. 暗灰色粘質土

※①～②は土層ベルトの位置を示す。

Fig.28　溝 SD306土層実測図①（縮尺1/40）

現存長は2.4m、幅は約70cm、高さは5.5cmを測る。
遺物は出土していない。

SF315（Fig.27） 水田跡SS326・327を区画する畦畔である。畦畔SF309の東端から北方向に折れる畦畔で、SF305・313と平行した関係にある。境界地に切られるため、全体形は不明である。
現存長は2.3m、幅は1.35m、高さは約9cmを測る
遺物は出土していない。

③ 溝（SD）

水田に伴う溝、及び溝状を呈した遺構を3条検出した。調査区西側の溝SD311は1・2面で検出した溝SD111・211と重複する。東側ではまだ第2面の溝SD201・202は掘削されておらず、南北方向の溝SD306Bが存在する。SD306Bは、SD306A（406）と重複している。

SD306B（Fig.27～29・32～34） 里道化した大畦畔SF201の下位に存在した溝である。南北方向の溝で、溝SD306A（406）と重複しており、溝SD305を切っている。東側肩部に水口状遺構SX304が伴う。この溝は何度も修復されているが、この溝SD306Bの廃絶は東側に新たに溝SD201が掘削されたためと考えられる。
溝の断面形は逆梯形状を呈しており、現存長は3.2m、幅は約1.4m、深さは平均で約70cmを測る。溝内は、流水の著しさを示す凹凸がある。また、溝の東肩の標高は20.10m、西肩は標高19.60mを測り、比高差50cmを測る。
覆土は、上層は暗灰色粗砂層、灰褐色砂礫層、黒褐色砂質土などで構成され、下層は灰白色砂層と黒色粘質土との互層をなす。
遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、青磁、石鏃などの石製品、松ぼっくりなどが出土している。

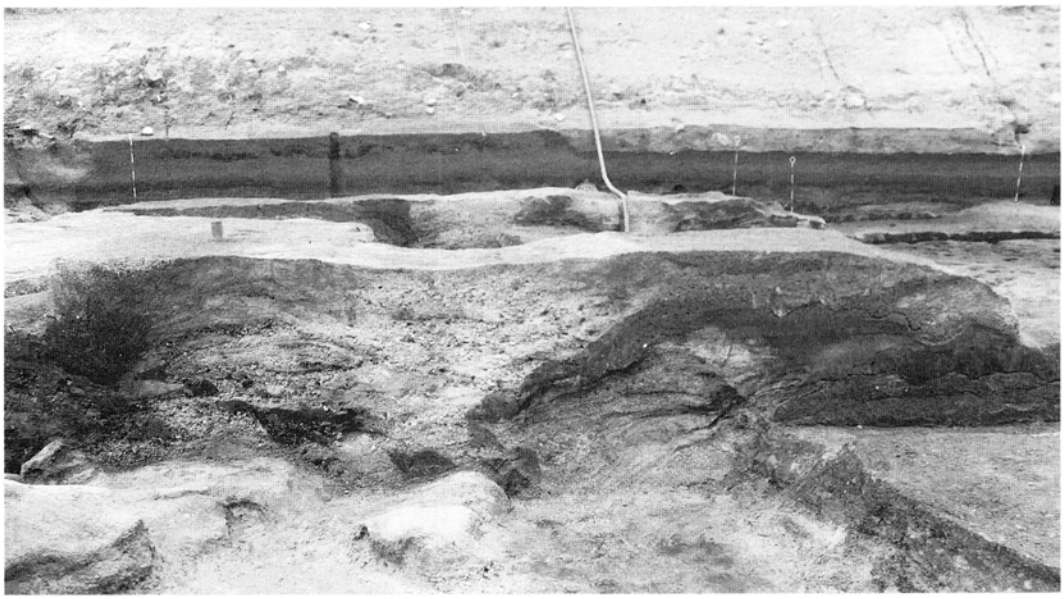
SD311（Fig.27） 温め構造の土壙SX305が付随するが、切り合い関係が不明である。この溝は3面で掘削されており、この溝の完成によって第4面の溝SD405を廃絶させ、水田耕作地を拡大させたものと考えられる。
遺物は出土していない。

SD326（Fig.27） 調査区の西側に位置し、溝状を呈している。北側を第1面の溝SD121に切られており、全体形は不明である。溝の断面形は逆梯形状を呈しており、現存長は6.7m、幅は約28cm、深さは約5cmを測る。おそらく第2面の遺構に付随するものと思われる。
遺物は出土していない。

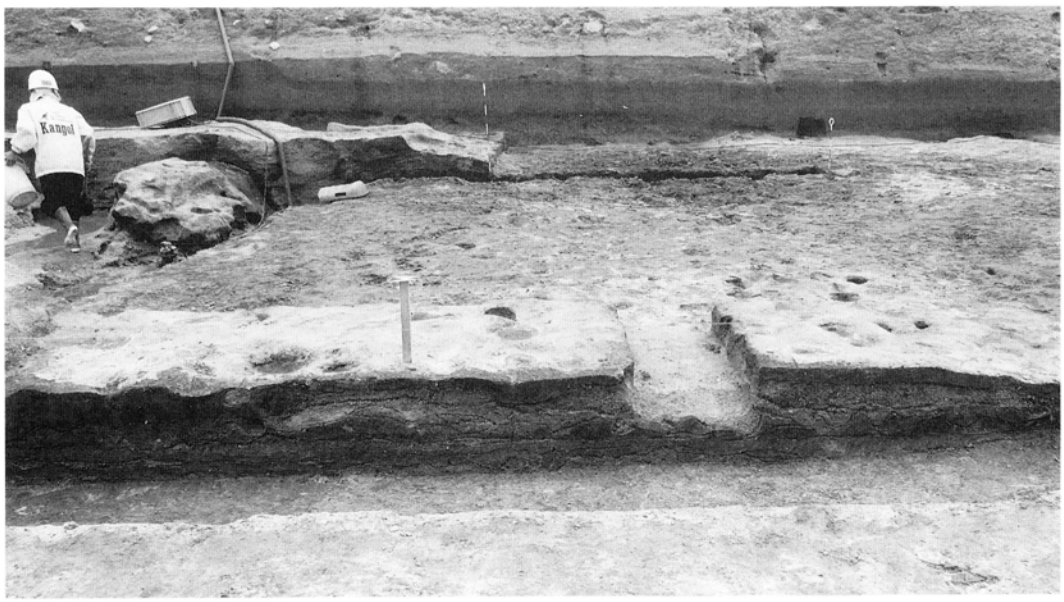
④ 土壙（SX）

全部で3基検出した。調査区の西側で検出した土壙SX305は、水田への用水を調整する土壙とも考えられる。

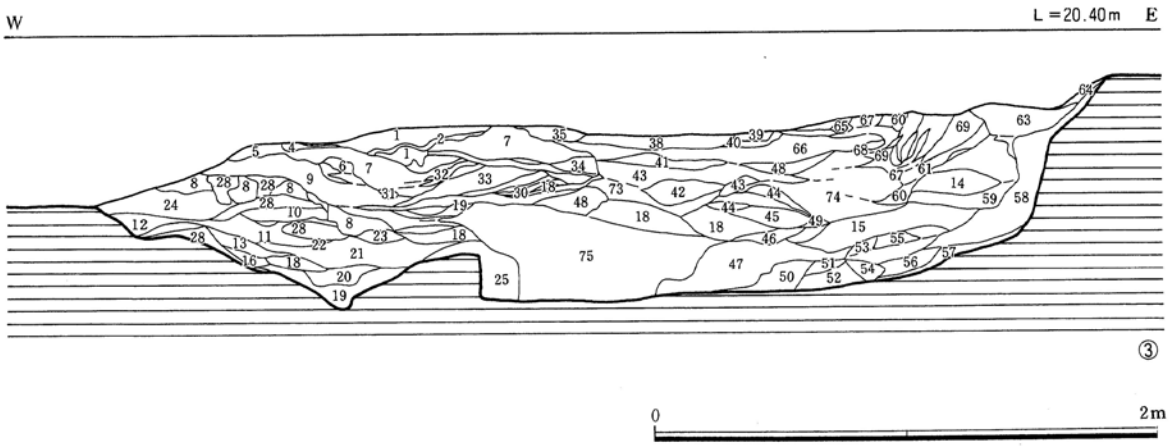
溝SD306土層状態①（北から）



溝SD306土層状態②（北から）



水田跡土層状態（北から）

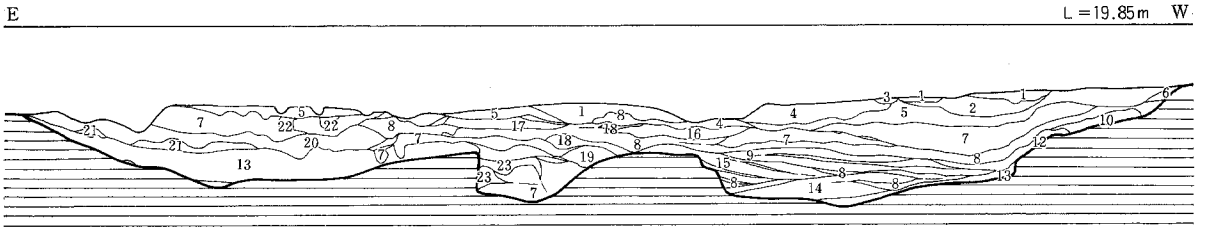


SD306③土層名称

1. 灰黄色砂質土と暗灰黄色砂質土の混合土 鉄分含む
1′. 灰黄色砂質土と灰色砂質土との互層
2. 灰色砂質土 鉄分含む
3. 灰色砂質土
4. 5より暗い
5. 灰褐色砂質土 固くしまる
6. 1より暗い
7. 黒灰色粘質土 砂礫と鉄分含む
8. 黒色砂質土（シルト性） 少量の微砂を含む
9. 灰黒色シルト
10. 暗灰色砂質土
11. 暗灰色砂質土と黒灰色シルトの混合土
12. 24より暗い
13. 灰白色砂質土
14. 青灰色粘質土 鉄分含む
15. 灰褐色砂層
16. 黒灰色シルト
17. 灰褐色粗砂
18. 暗灰色砂質土
19. 黒色砂質土
20. 18と19の混合土
21. 灰色砂質土 多量の粗砂を含む
22. 灰褐色砂層
23. 青味を帯びた灰色砂質土
24. 淡黒色砂質土
25. 黒色砂質土
26. 30よりやや淡い
27. 灰色砂層
28. 灰褐色砂層 砂礫多く含む
29. 黒灰色砂質土
30. 19よりしまっている（腐食土）
31. 7に暗褐色砂を含む
32. 黄味を帯びた暗灰色粘質土
33. 1より明るい
34. 灰黄色砂質土
35. 暗灰黄色砂質土 固くしまる
36. 灰褐色砂質土
37. 灰黄色細砂 黒色粘質土ブロック含む
38. 明灰白色砂礫と細砂の混合土
39. 38よりやや褐色を帯びる
40. 明灰白色細砂 砂礫含む
41. 明灰白色粗砂層
42. 黄味を帯びた明灰白色砂礫層
43. やや赤味を帯びた明灰白色砂礫
44. 暗灰黄色細砂
45. 黒灰色粘質土
46. 45に砂礫を含む
47. 青灰色粘質土と暗青灰色粘質土の混合土
48. 褐色砂礫層 鉄分沈殿
49. 暗青灰色粘質土
50. 灰青色粘質土 粗砂を含む
51. 暗灰黄色砂層
52. 50に灰白色土ブロック混入
53. 暗灰黄色シルト
54. 灰黄色砂層 暗青灰色粘質土ブロックと鉄分を含む
55. 53より暗い
56. 黄灰白色微砂
57. 56より明るい
58. 57に粗砂ブロック含む
59. 45に黒灰色シルト含む
60. 黒灰色シルト 上部に鉄分沈殿
61. 黒灰色シルト 暗灰黄色砂を含む
62. 灰白色微砂と黒褐色砂質土の混合土
63. 青味を帯びた暗灰黄色粘質土 鉄分沈殿、固くしまる
64. 黒灰色粘質土 固くしまる
65. 灰色微砂 褐色砂礫多く含む
66. 灰色微砂
67. 66より明るい
68. 灰色砂層
69. 灰白色微砂
70. 褐色を帯びた黒灰色シルト 固くしまる
71. 黄味を帯びた暗灰色シルト 固くしまる
72. 暗灰黄色シルト 固くしまる
73. 明灰黄色砂層 砂礫を多く含む
74. 灰白色細砂と粗砂の混合土 鉄分沈殿
75. 灰黄色砂層

Fig.29 溝 SD306土層実測図②（縮尺1/30）

溝 SD306土層状態③（南から）



SX305

SX305土層名称

1．黒色粘質土　しまり良い
2．暗灰褐色粗砂　砂レキ多く含む
3．灰色微砂
4．灰褐色粗砂　間層に灰青色粘質土層
5．灰黒色粘質土　褐色土（鉄分多く含む）
6．黒褐色粘質土
7．灰褐色粗砂　間層に暗灰色砂質土層が互層として存在
8．やや暗い灰色砂質土　灰白色微砂含む
9．灰色砂レキ層
10．灰青色シルト
11．暗灰白色砂質土　微砂含む
12．灰青色粘質土に黒色土混入
13．黒色粘質土
14．やや暗い灰色粗砂　間に灰黒色土層のうすい間層あり
15．灰褐色粗砂　間にレキ層の間層あり
16．暗灰白微砂層　灰黒色土の間層あり
18．灰褐色微砂　黒色土
19．灰褐色砂　青灰色土ブロック混入
20．灰色粘質土　微砂層ブロック　鉄分多く含む
21．暗灰色粘質土　灰黒色土とブロック含む
22．灰色砂質土
23．灰青色粘質土　鉄分含む

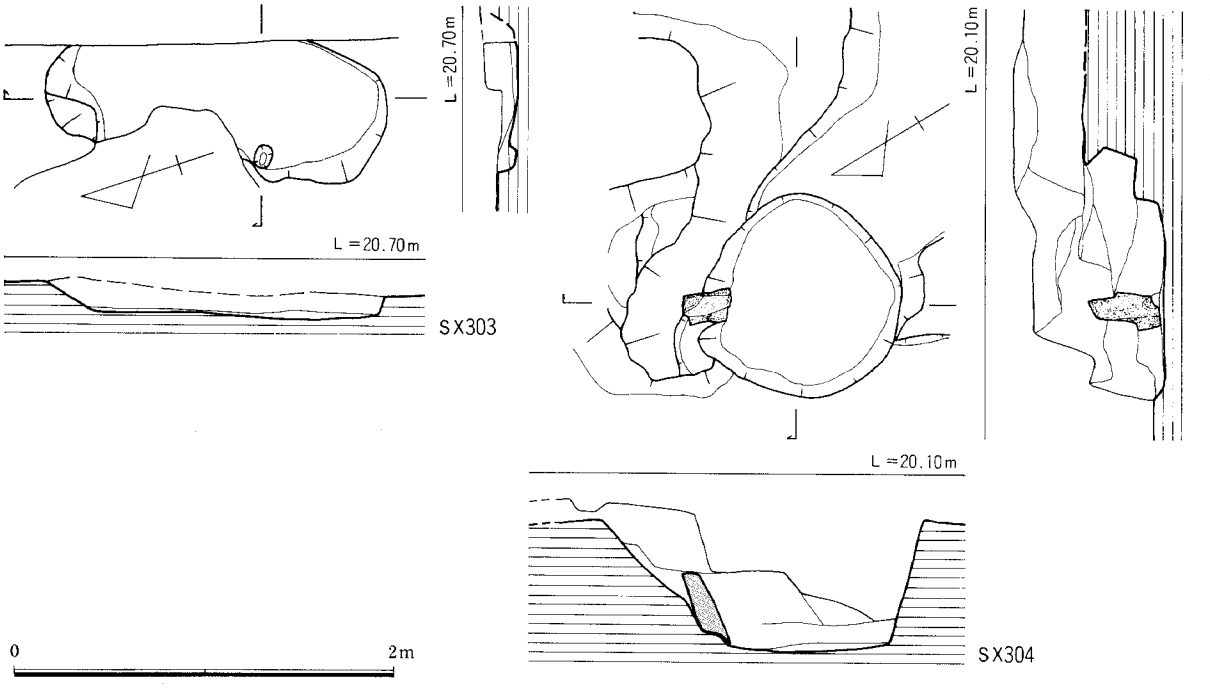


Fig.30　土壙SX305土層、土壙SX303・304実測図（縮尺1/40）

SX303（Fig.27・30）　調査区の東端境界地に位置する。土壙の西側は第2面の土壙SX201に切られるが、全体形は隅丸長方形で、断面形は、逆梯形状を呈する。長軸の長さは1.8m、幅は70cm、深さは13cmを測る。

遺物は出土していない。

SX304（Fig.27・30）　溝SD306Bの中央東側肩部に設けられている。水田SS302から落とし込む構造になっており、底は水田面との比高差約60cmを測る。土壙内には、人頭大の石が置かれており、水量の調整に用いたとも考えられる。壙底は水落ち状の窪みとなっている。平面形は、不整の円形状を呈

しており、断面形は逆梯形状を呈する。土壙の最大径は1.08m、深さは16cmを測る。

遺物は出土していない。

SX305（Fig.27・30・33） 溝SD311の中央部に位置する。溝SD311と切り合い関係にあり、先後関係は不明である。平面形は不整形で、断面形は逆梯形状を呈する。壙底には起状があり、安定しない。河川の度重なる氾濫によって形成されたもの、或いは溝SD311に付随した温め構造の土壙とも考えられる。現在長は7.0m、幅は3.75m、深さは60cmを測る。

覆土は、第1層が鉄分を多く含む灰黒色粘質土、第2層が灰褐色粗砂、第3層が灰色粘質土である。

遺物は、土壙内からスクレイパーが出土している。

(6) 第3面出土遺物（Tab.2・4参照）

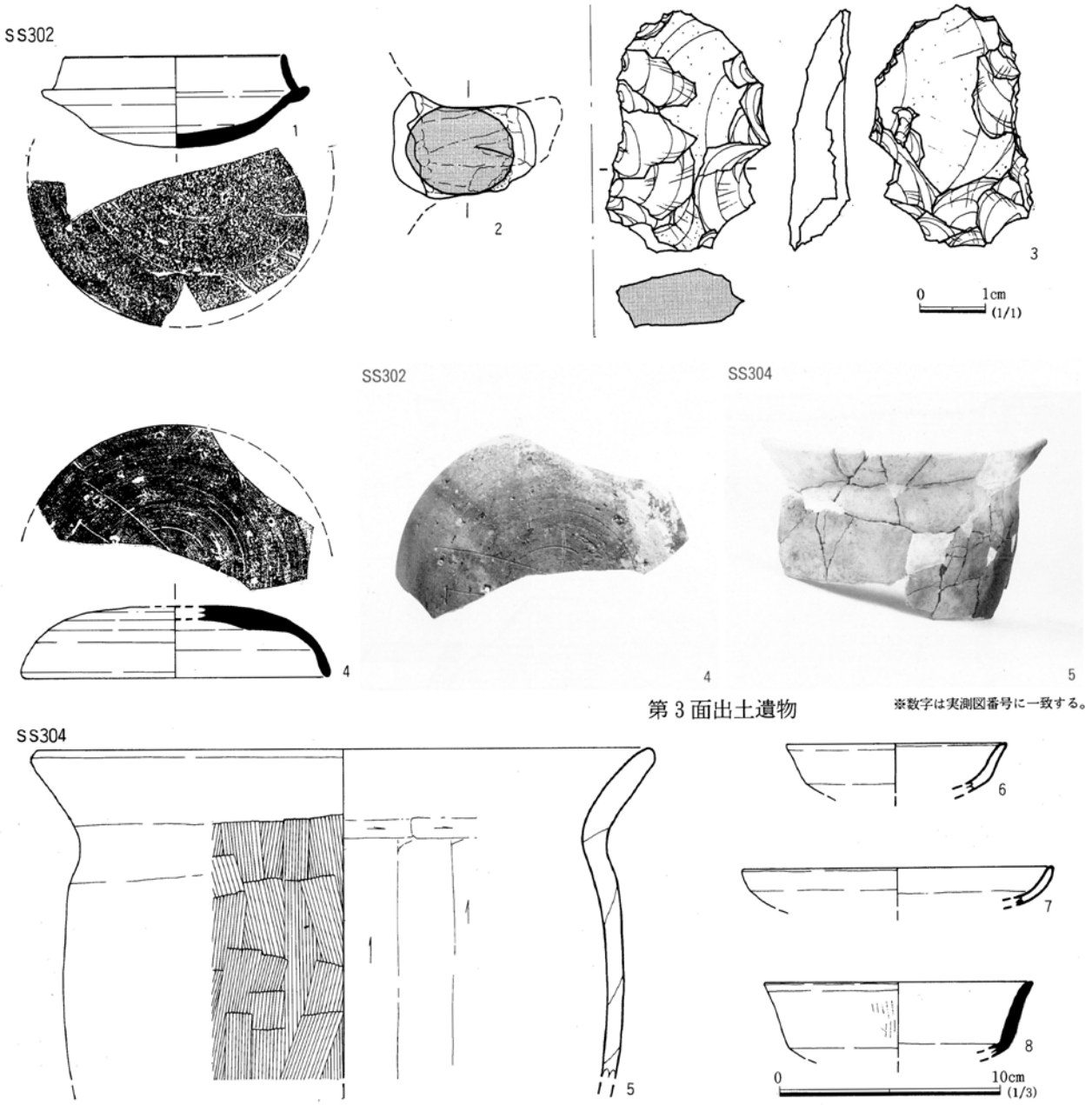


Fig.31 水田跡SS302・304出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）

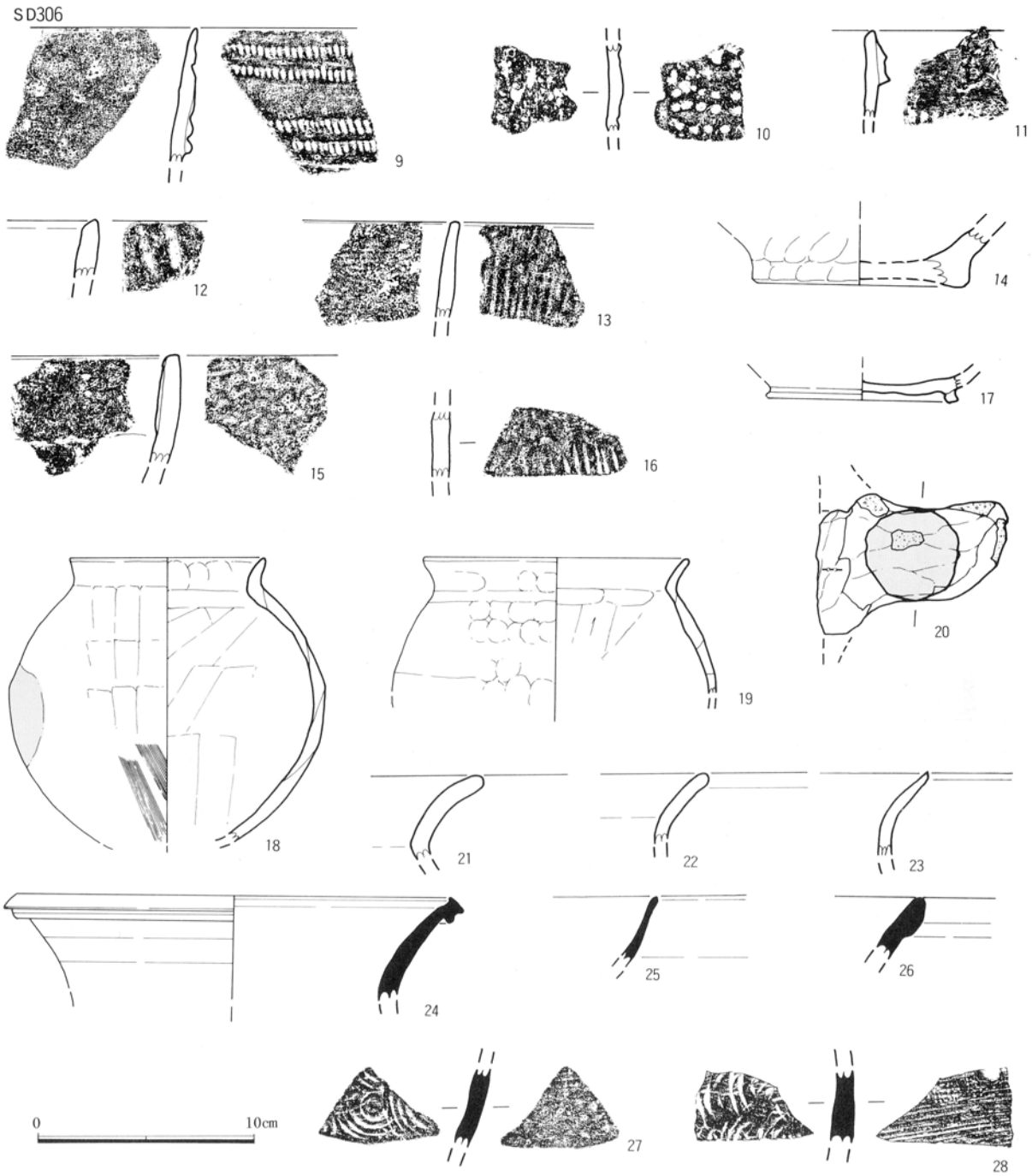


Fig.32　溝 SD306出土遺物実測図（縮尺1/3）

第 3 面出土遺物

※数字は実測図番号に一致する。

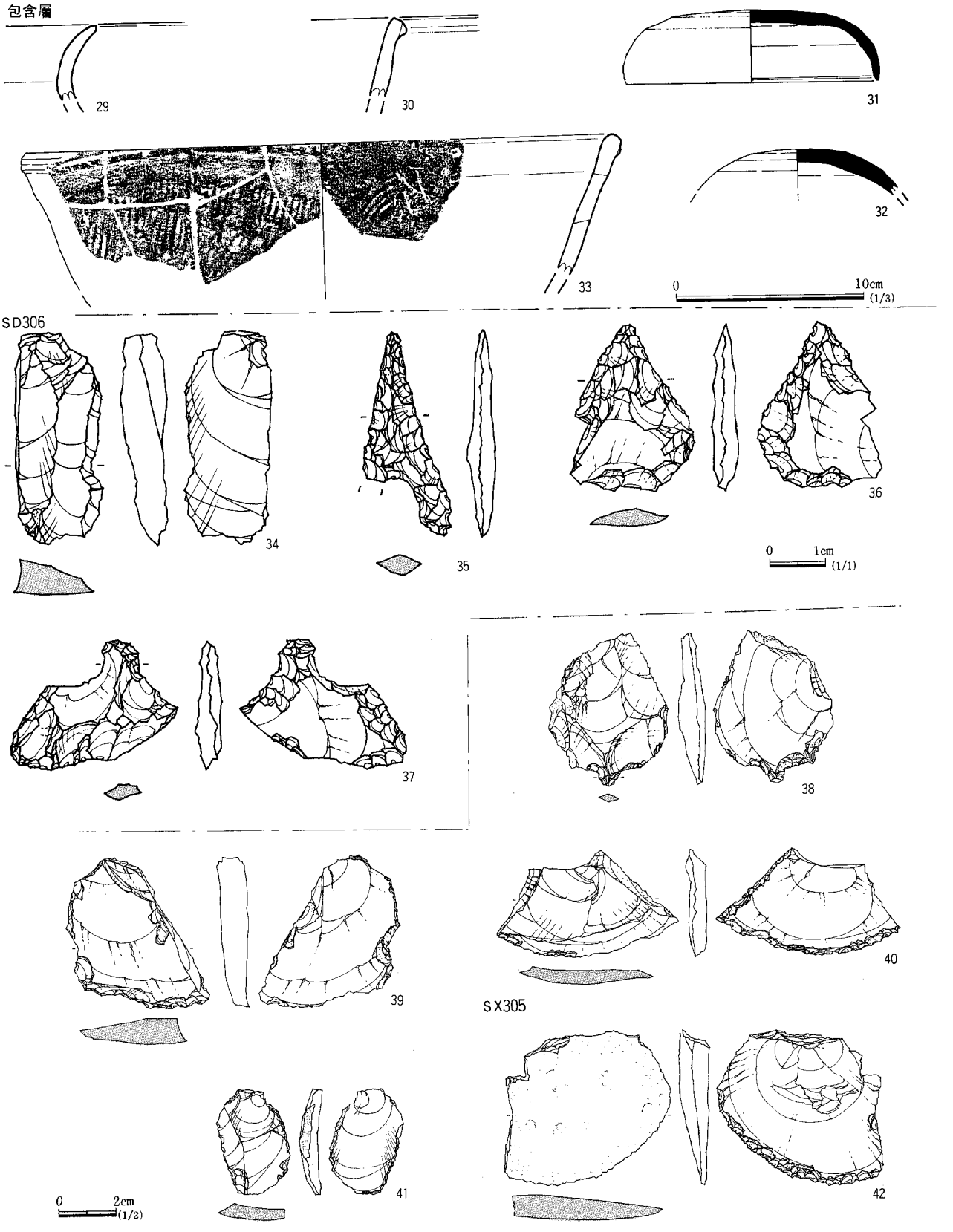
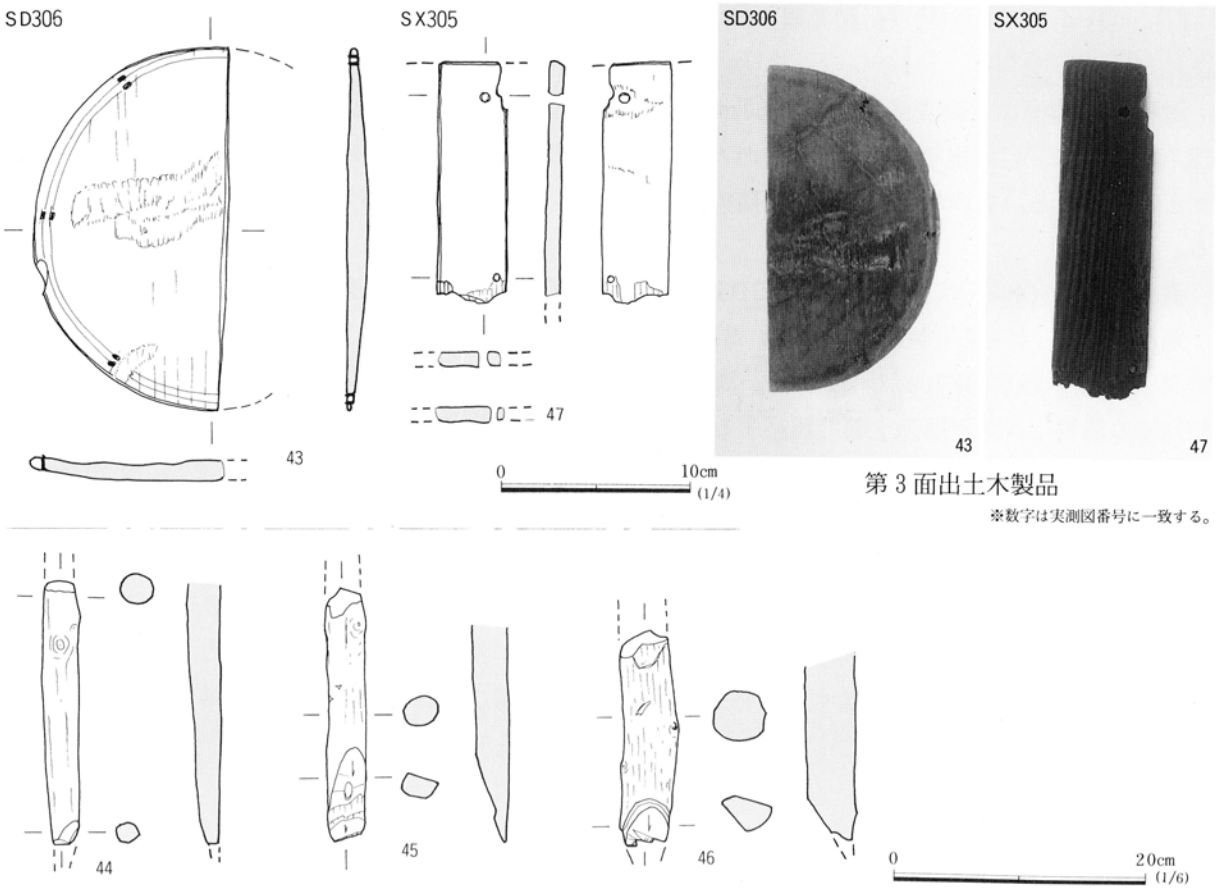


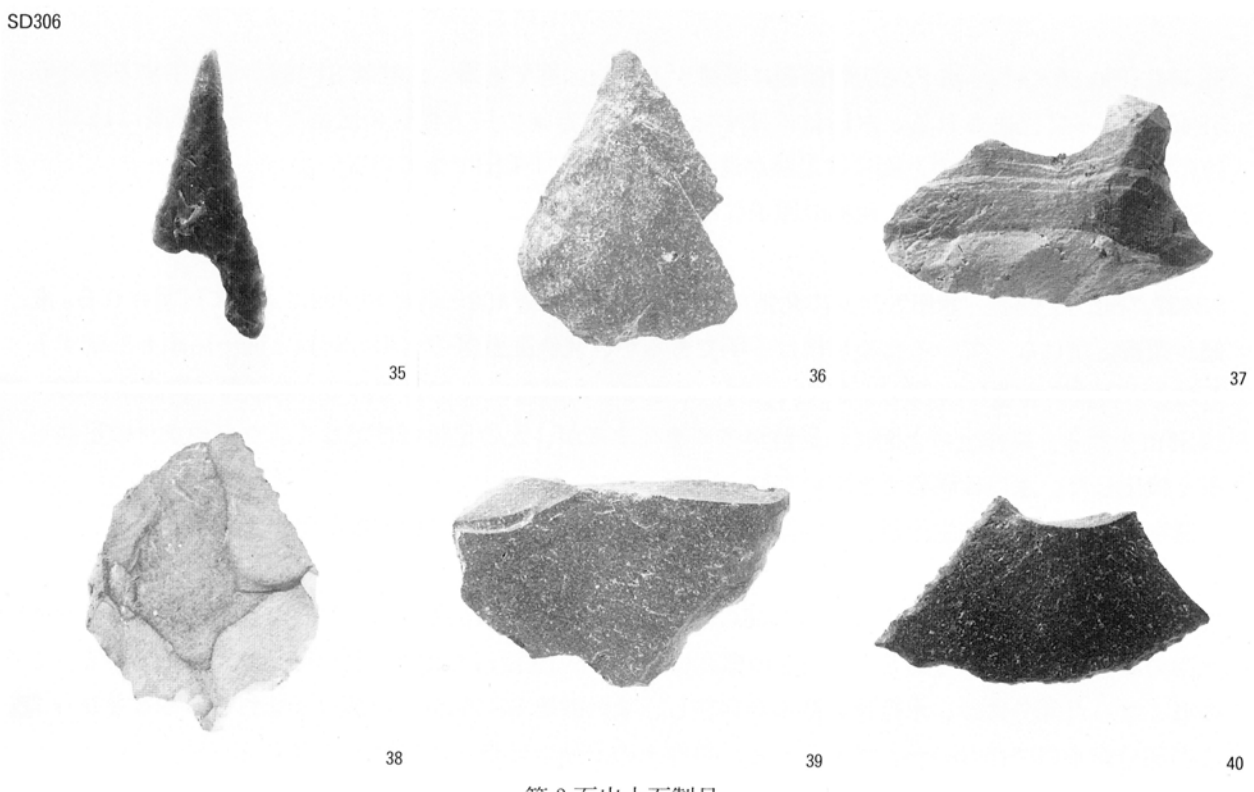
Fig.33　包含層、溝 SD306、土壙 SX305出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1・1/2）



第3面出土木製品

※数字は実測図番号に一致する。

Fig.34　溝 SD306、水口 SX305出土木製品実測図（縮尺1/4・1/6）



第3面出土石製品

※数字は実測図番号に一致する。

(7) 第4面の遺構（付図参照）

遺構面の標高は、調査区東側で20.60m、西側の自然堤防上で19.60m、水田面においては19.40～19.70mを測る。自然堤防が何時形成されたのかは定かではないが、少なくともこの頃には存在していたと考えられる。この時点での自然堤防の利用はない。調査区の中央部分には南北方向の溝が存在する。

溝SD306A（406）は、第3面の溝SD306Bと畦畔SF313に重複した溝で、溝幅は広く、内部には2箇所に柵（しがらみ）が設けられていた。溝SD405は、大畦畔SF305と重複した溝である。溝SD405の東肩には大畦畔SF409が附設する。溝SD405の内部においても2箇所の柵状遺構を検出した。SD405の溝幅は、北側壁面土層で観察すると逆梯形の断面形を呈した大規模な溝である。

水田跡は、上記の二つの溝SD405、及びSD306A（406）を中心に形成されている。また、溝SD306A（406）の東側にも水田を区画すると考えられる溝SD403A・Bが存在する。水田を区画する小畦畔を明確に検出できていないが、僅かに残る畦畔から略北方向に水田区画が形成されていたものと考えられる。また、溝SD306の東側に沿って溝SD306Bに切られる形で、北東方向の溝SD305が存在する。この溝SD305の断面形は、薬研堀状を呈し、溝壁面・底面に乱れは見られず、水路としての機能が見られないことから、東側に隣接する梅林遺跡第1次調査で検出した古墳時代の居館跡を区画する溝であると考えられる。

① 水田跡（SS）

全部で9枚の水田面を検出したが、これらの水田区画は、第3面の水田区画と重複している箇所も多い。

SS404（Fig.35・41） 溝SD306の西側に隣接する水田区画である。大畦畔SF409から派生する小畦畔SF402によって区画される。水田はほぼ平坦で、略北方向の長方形状の区画である。標高は19.50～19.57mを測る。耕作土の上面には足跡が遺存する。水口は確認できていない。

遺物は、土師器、須恵器、植物の種子などが出土している。

SS407（Fig.35・41） 水田SS404の北側に位置し、大畦畔SF409と畦畔SF402によって区画される。北側が調査区境になっているため規模は不明であるが、北側調査区の水田SS414と同一区画を形成するものか。現状の面積は34.56㎡、SS414と同一と見なした場合は96.61㎡である。水田面の標高は19.39～19.50mを測る。耕作土の上面には足跡が多く遺存するが、人の足跡だけでなく、ウシやウマの足跡も多く検出した。水口は確認できていない。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒曜石片や植物の種子などが出土している。

SS409（Fig.35） 溝SD405と畦畔SF406の間の水田区画である。溝SD405が大きく蛇行しているため水田の平面形は不定形である。水田面の標高は、19.56～19.72mを測り、北西側が低くなっている。この低くなった部分には、水落状の窪みが存在し、また畦畔SF406がこの部分で切れていることから、この部分が水口ではないかと考えられる。耕作土の上面には僅かに足跡が遺存する。

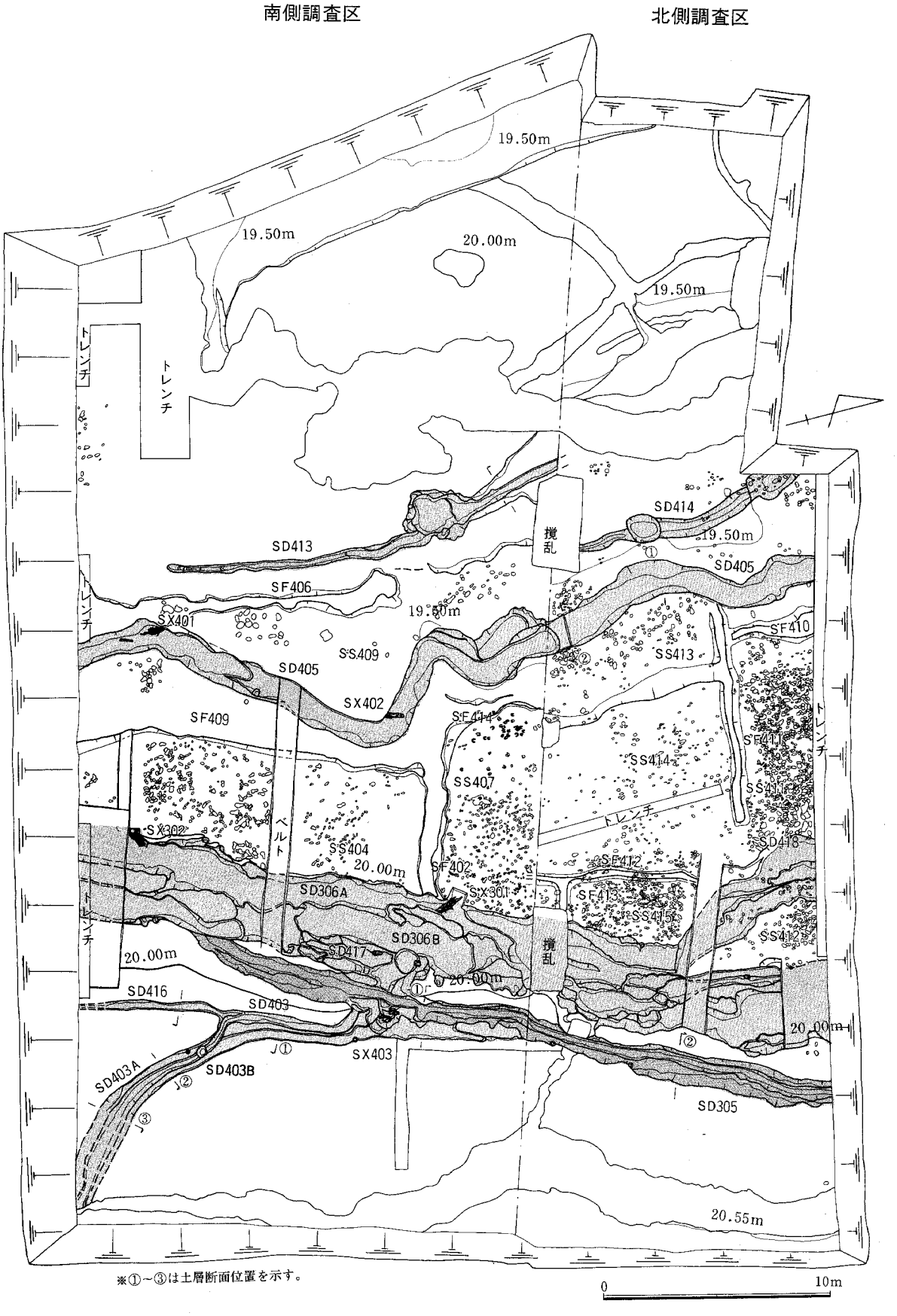


Fig.35　第4面遺構配置図（縮尺1/250）

第4面南側調査区全景（南から）

第4面北側調査区全景（南から）

SS411（Fig.35） 調査区の北端に位置し、調査区境のため全体形は不明である。溝SD418の西側に接し、東西方向の畦畔SF411と南北方向の畦畔SF410によって区画される。標高は19.50～19.65mを測り、西側が低くなる。耕作土の上面には足跡が多く遺存する。水口は、水田SS414との境をなす畦畔SF411の東端が切れているところからこの部分が相当すると考えられる。

SS412（Fig.35） 溝SD306A（406）とSD418の間に存在する不整形の小区画である。調査区の北端に位置しており、全体形は不明であるが、溝SD418との先後関係によっては形状を異にする。水田面の標高は約19.60mを測り、ほぼ平坦であるが、西側は段落ち状になっている。耕作土の上面には、足跡が多く遺存する。

SS413（Fig.35） 溝SD405の東側に存在する水田区画である。遺構の南側は、調査区境にあるため規模は判明しないが、現状は不整隅丸長方形状を呈する。東側は、SS414との境に約 5cmの段差があることからここに畦畔があったと考えられる。南側調査区では、畦畔SF414から北方向に小畦畔が延びており、SS414の段差に繋がる可能性がある。この場合の区画面積は22.27㎡である。水田面の標高は、19.57～19.65mである。耕作土の上面には足跡が遺存する。

SS414（Fig.35） 東西方向の小畦畔SF411と南北方向の小畦畔SF412によって区画された水田である。調査区の境に位置しているが、南側調査区検出の水田SS407と同一区画を形成する可能性がある。面積は62㎡以上を測り、他の区画と比べると大規模である。水田面の標高は19.60～19.70mを測る。西側に向かって水田面は低くなっている。耕作土の上面には足跡が遺存する。

水口は、SS411との境をなす畦畔SF411の東端に設けられている。

SS415（Fig.35） 溝SD306A（406）と小畦畔SF412・413によって区画される。形状は不整長方形で、面積は約12.5㎡を測り、規模の小さな水田区画である。水田面はほぼ平坦で、標高は19.65～19.70mを測る。耕作土の上面には足跡が多く遺存する。

② 畦畔（SF）

水田を区画する畦畔として数条を検出したが、遺存状態が悪かったこともあり、水田区画を明確にすることはできなかった。

SF402（Fig.35・41） 調査区のほぼ中央に位置し、大畦畔SF409より東へ派生する。水田SS404・407を区画する。全長は6.0m、幅は1.1m、高さは約10cmを測る。

遺物は出土していない。

SF406（Fig.35） 略北方向の畦畔で、水田SS409を区画する。溝SD413と平行し、又、溝SD414と同一線上にある。全体形は不明であるが、先端部に水口が存在する。現存長は約3m、幅は平均で70cm、高さは5cmを測る。

遺物は出土していない。

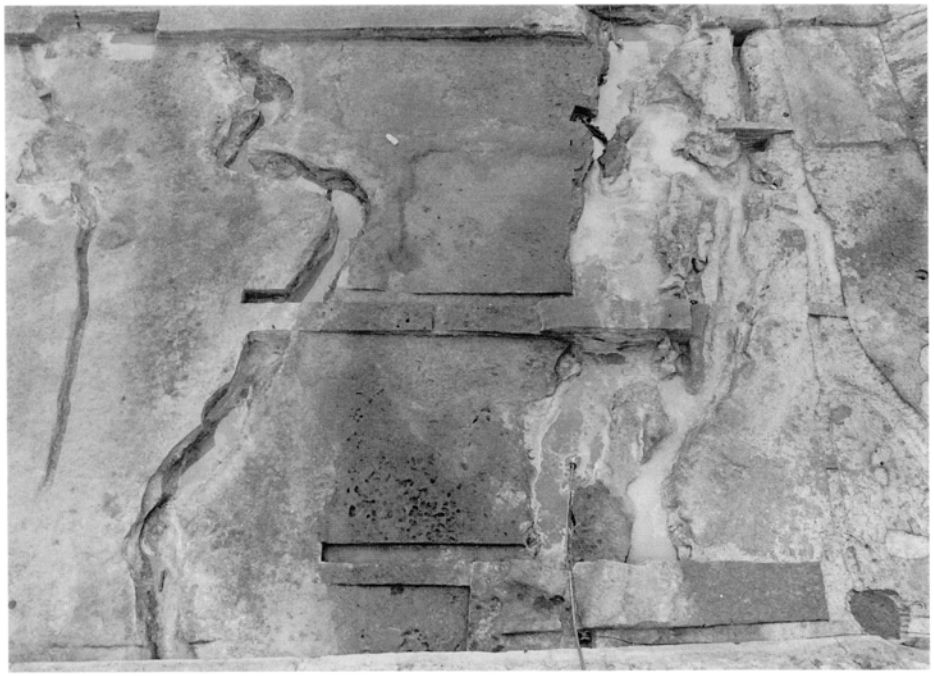
SF409（Fig.35） 溝SD405の東側肩に付設する大畦畔で、東に折れる畦畔SF402と北に延びる畦畔SF414が派生する。SD405に沿って蛇行しておらず、ほぼ矩形を形成している。現存長は約22.2m、幅は平均で1.9m、高さは10cmを測る。

遺物は出土していない。

SF410（Fig.35） 調査区の北側で、溝SD405の東側に位置する。畦畔SF411から北側に折れる畦畔で、水田SS411を区画する。全体形は不明である。現存長は3.8m、幅は平均で60cm、高さは約7cmを測る。

遺物は出土していない。

SF411（Fig.35） 調査区の北側に位置し、水田SS411とSS414を区画する畦畔である。溝SD405に接



第4面南側調査区水田跡（南から）

第4面北側調査区水田跡（南から）

第4面動物（牛・馬）の足跡（東から）

し、東端には水口が存在する。全長は9.9m、幅は平均で78cm、高さは5cmを測る。
遺物は出土していない。

SF412（Fig.35・41） 北側調査区で検出した小畦畔で北・南端は調査区境のため不明。水田SS415を区画している。現存長は7.1m、幅は約53cm、高さは8cmを測る。
遺物は出土していない。

SF413（Fig.35） 畦畔SF412から西側の溝SD306Aに向かって折れる小規模な畦畔である。水田SS415を区画する。現存長は1.2m、幅は65cm、高さは8cmを測る。
遺物は出土していない。

③ 溝跡（SD）

溝、及び溝状を呈している遺構を全部で8条検出した。調査区の中央よりやや東側において溝SD306A（406）を検出し、中央部では東西に蛇行する溝SD405を検出したが、いずれも第2面まで継承されていく重要な遺構である。第4面の水田区画はこの両溝を中心に形成されている。また、溝SD306の東側では重複した小溝を数条検出したが、これらの溝も第4面の水田遺構に伴うものと思われる。

SD306A（406）（Fig.28・29・32～35） 北東方向の溝で、長期にわたって継続的に使用されており、第3面では溝の東側に寄って溝SD306Bが存在する。溝の北側では、溝SD418が流れ込んでいる。この溝の西側には水田面が形成されており、用水路として掘削されたものと考えられる。また、溝の東側には小溝SD403・SD416が接続している。

溝の断面形は、逆梯形状を呈する。現存長は3.21m、幅は上面で4.7～5.6m、底面で2.8～3.4m、深さは約1.0mを測る。溝の壁面、底面は凹凸を呈しており、相当の水量の流れがあったことを示す。溝中央部には中州状の粘土ブロックの堆積物も存在する。

溝の中央と南側には柵SX301・302が設けられている。これらの柵が溝壁に食い込んでいたことか

溝SD306・305・403・416（南から）

溝SD405（北から）

ら、溝幅についてはまだ完全に溝を掘りきっていなかったものと考えられる。

覆土は、上層は黒褐色砂質土、灰色砂質土、黒色粘質土を主体としているが、下層は灰白色砂、砂礫層、暗灰色シルト・灰黄色砂礫層などが互層をなす。

遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石製品などが出土している。

SD403A（Fig.35・36・42） 調査区の南東側に位置し、蛇行しながら溝SD306Bに流れ込む溝で、略南北方向である。溝SD416と連続する関係にある。重複する溝SD403BとSD305を切る。

溝の断面形は舟底状を呈している。現存長は1.77m、幅は約50cm、深さは平均で24cmを測る。

覆土は、第1層が青灰色粘質土、第2層が黒灰色粘質土である。

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器などが出土している。

SD403B（Fig.35・36・42） 調査区の南東側に位置し、略南北方向の溝である。溝の南側を溝SD403Aに切られている。北端は、人頭大の石を配列した水口状の土壙SX403に接続している。

溝の断面形は逆梯形状を呈しており、現存長は10.8m、最大の幅は75cm、深さは平均で10cmを測る。

覆土は、黒灰色粘質土と青灰色粘質土を主体とする。

遺物は出土していない。

SD405（Fig.35・36・42～44） 調査区のほぼ中央に位置し、略南北方向の大溝である。第3面の畦畔SF305の下層に存在した溝で、畦畔と同じく蛇行している。東側肩には大畦畔SF409を伴っている。

北壁土層面で観察すると溝の断面形は、逆梯形状を呈しており、現存長は36.6m、最大の幅は1.4m、最大の深さは約90cmを測る。溝の壁面、底面が共に一定していないことから相当の水量があったことが窺える。

溝の中央部分と南側部分に柵（しがらみ）が設けられている。これらの柵は一部が溝壁に食い込んでいることから、掘り残しがあったことが考えられ、元来溝幅が広がるものと思われる。

覆土は、灰褐色砂・砂礫を主体とする。

遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器、石製品、木製品などが出土している。溝中央部の柵付近の底面からは木製の槽が出土した。

SD413（Fig.35・36・43） 調査区の西寄りに位置する南北方向の溝である。北端は調査区境のため不明である。土壙状の遺構を伴う。溝の断面形は、舟底状を呈しており、現存長は18.3m、最大の幅は60cm、最大の深さは30cmを測る。

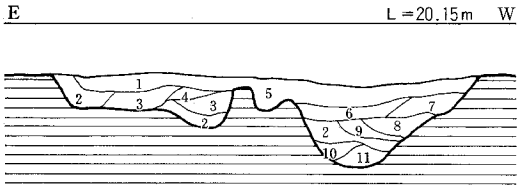
覆土は、第1層が暗灰色粘質土、第2層が灰色砂質土である。

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器などが出土している。

SD416（Fig.35・36） 調査区の南東側に位置する略南北方向の溝である。南側は撹乱のため不明。北側は溝SD403・403Aに繋がる。溝の断面形は、逆梯形状を呈しており、現存長は5.2m、最大の幅は40cm、深さは12cmを測る。

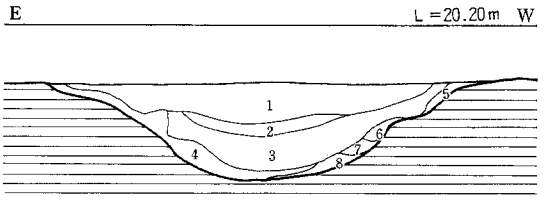
覆土は、上層が灰黒色粘質土と灰色粘質土、下層が暗灰色粘質土と青灰色粘質土の混合土である。

遺物は出土していない。



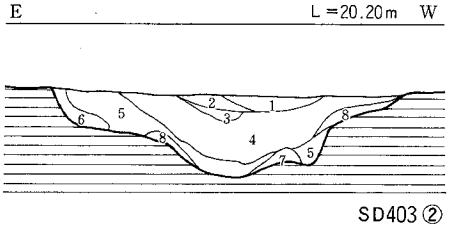
SD403①

SD403①土層名称
1．2と3との混合土
2．黒灰色粘質土　少量の鉄分を含む
3．青灰色粘質土　少量の鉄分を含む
4．3より暗い　少量の鉄分を含む
5．3より明るく、鉄分を多く含む
6．黒灰色粘質土　少量の黄灰色粘質土と鉄分を含む
7．3と同じ
8．灰黒色粘質土
9．灰青色粘質土
10．2と9との混合土
11．青灰色粘質土



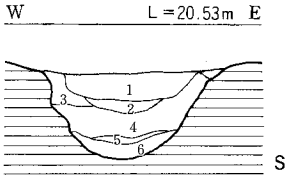
SD403③

SD403③土層名称
1．黒褐色粘質土　鉄分含む
2．灰色粘質土
3．暗灰褐色粘質土　鉄分含む
4．灰青色粘質土　3を含む
5．黒灰色粘質土　鉄分含む
6．4と同じ
7．黒灰色粘質土　8を含む
8．灰青色粘質土



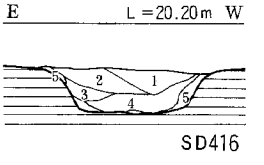
SD403②

SD403②土層名称
1．暗灰色粘質土　鉄分を多く含む
2．1より暗い
3．黒灰色粘質土
4．灰黒色粘質土　青灰色粘質土ブロックと鉄分を含む
5．暗灰色粘質土　青灰色粘質土ブロックと鉄分を含む
6．青灰色粘質土　鉄分を含む
7．青灰色粘質土
8．7と黒灰色粘質土の混合土



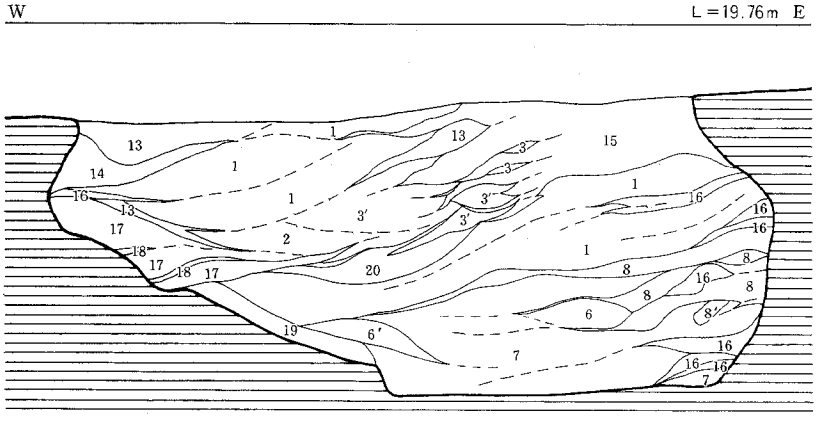
SD413

SD413土層名称
1．暗灰色粘質土　鉄分沈殿（縦方向に入る）
2．暗灰色粘質土
3．灰色砂質土
4．灰色砂質土と暗灰色砂質土の混合土　砂礫含む
5．暗灰色粗砂　砂礫含む
6．灰色砂層　砂礫含む



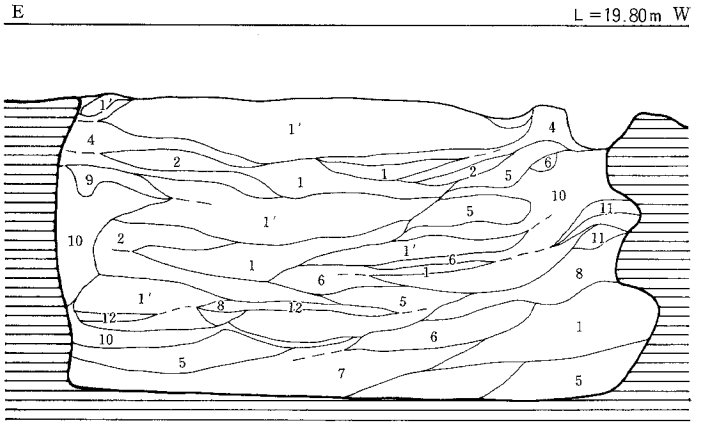
SD416

SD416土層名称
1．灰黒色粘質土　鉄分含む
2．灰色粘質土　鉄分含む
3．暗灰色粘質土　鉄分含む
4．3と青灰色粘質土との混合土　鉄分含む
5．青灰色粘質土　鉄分含む



SD405①

SD405①②土層名称
1．灰褐色砂層
1′．1に砂礫含む
2．灰褐色砂礫
3．灰褐色微砂戸
3′．灰褐色微砂層　砂礫含む
4．灰色シルト層　鉄分含む
5．灰色砂層
6．灰色微砂層
6′．6に木片を含む
7．灰色砂礫層
8．灰黒色シルト層
9．1と4の混合土
10．黒灰色粘質土
11．灰白色微砂層
12．黄褐色土　鉄分沈殿
13．灰白色微砂と黄色微砂互層
14．黒灰色シルト層　黄色微砂含む
15．14に鉄分沈殿
16．6より暗い
17．5より暗い
18．17に鉄分沈殿
19．淡黒褐色シルト層
20．黒褐色シルト層



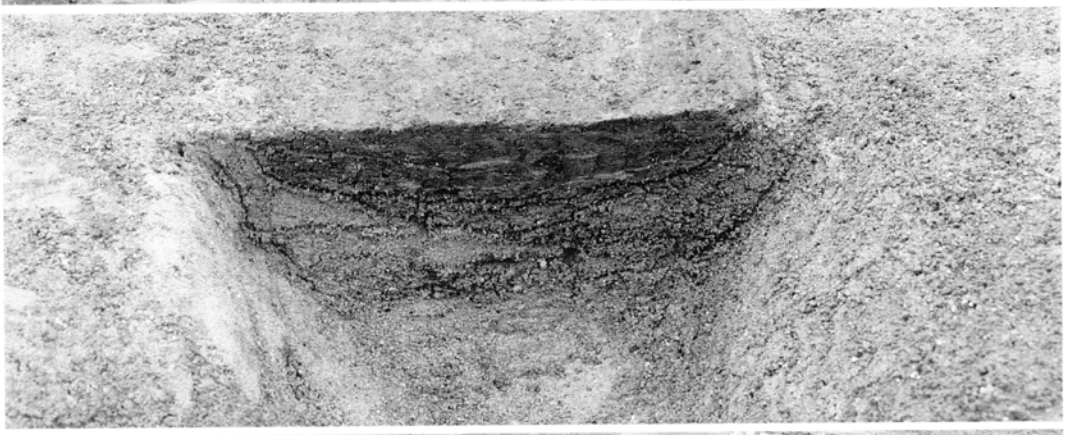
SD405②

※①～③は土層ベルトの位置を示す。

0　1m

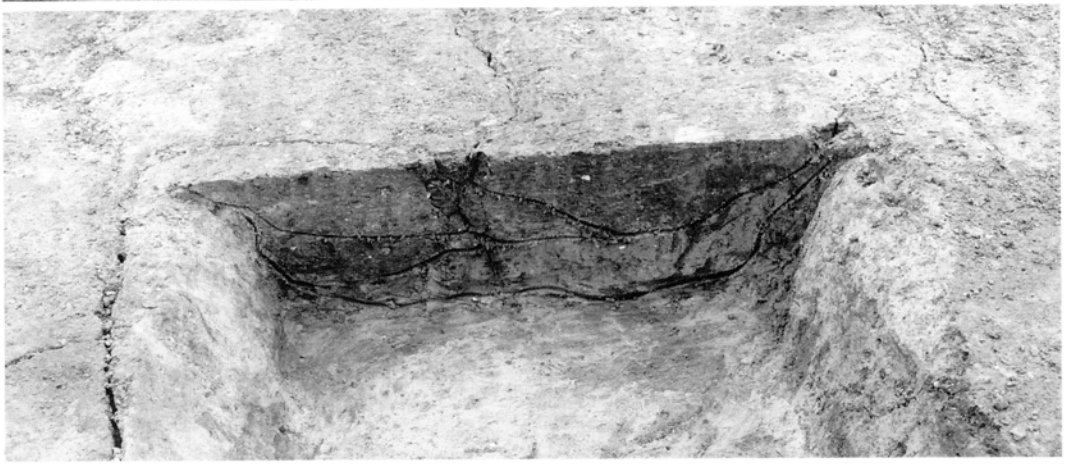
Fig.36　溝 SD403・405・413・416土層実測図（縮尺1/20）

溝SD403①土層状態（北から）

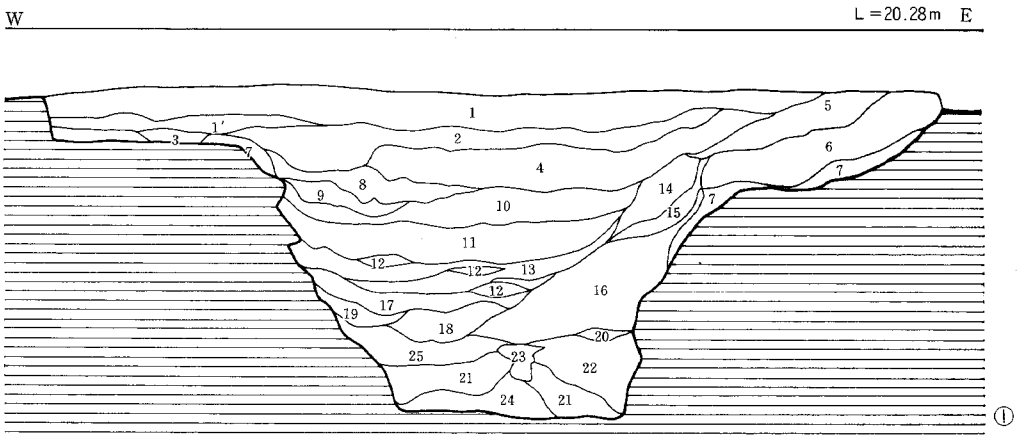


溝SD413土層状態（南から）

溝SD311・413
土層状態（南から）

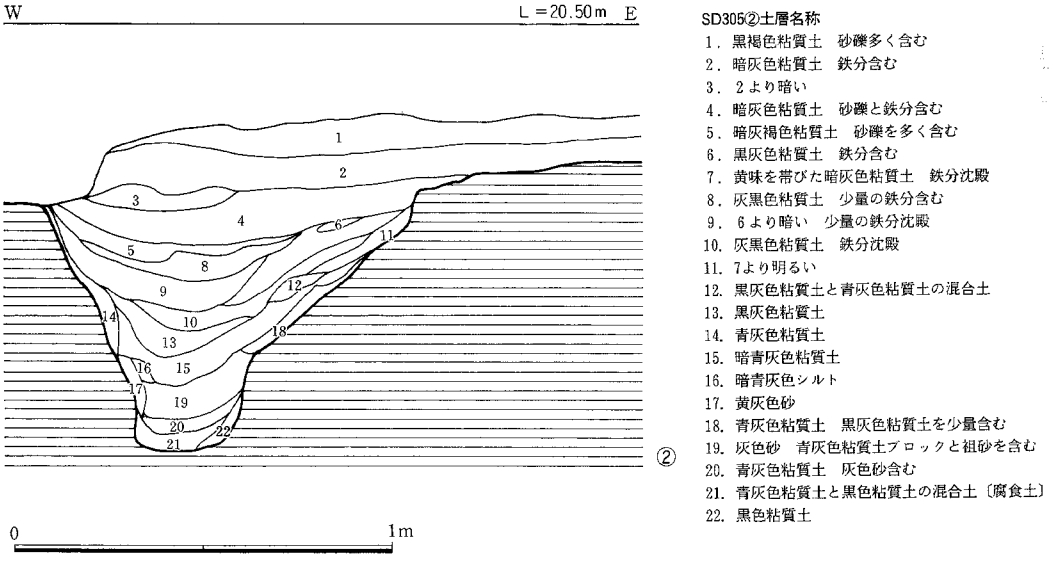


溝SD416土層状態（北から）



SD305①土層名称

1．暗灰褐色粘質土　鉄分・砂粒を多く含む
1′．1より明るい
2．褐灰色粘質土　鉄分多量に沈殿
3．灰色砂質土
4．暗灰色砂質土　炭化物・鉄分・黒色土を含む
5．黄灰色粘質土
6．黒灰色粘質土　鉄分縦方向に沈殿
7．灰青色粘質土（地山）
8．暗灰色砂質土と黒色粘質土ブロック・灰青色粘質土ブロックとの混合土
9．暗灰色砂質土
10．黒灰色粘質土　灰青色粘質土ブロックを少し含む
11．暗灰色砂質土　灰白色微砂層を含む
12．褐灰色砂層
13．黒灰色粘質土
14．4に黒色土を少し含む
15．暗褐色粗砂と灰色砂質土との混合土
16．黒色砂質土　10よりやや暗く、青灰色粘土を含む
17．灰褐色砂層と黒灰色粘質土との互層
18．灰青色シルトと薄い黒色粘質土との互層
19．黒色粘質土の薄い層と灰白色砂質土との互層
20．黒灰色砂質土
21．青灰色粘質土
22．青灰色粘質土ブロックと黒色土ブロック、粗砂との混合土
23．暗灰褐色砂礫土
24．灰白色砂層
25．黒色粘質土　腐食物混入



SD305②土層名称

1．黒褐色粘質土　砂礫多く含む
2．暗灰色粘質土　鉄分含む
3．2より暗い
4．暗灰色粘質土　砂礫と鉄分含む
5．暗灰褐色粘質土　砂礫を多く含む
6．黒灰色粘質土　鉄分含む
7．黄味を帯びた暗灰色粘質土　鉄分沈殿
8．灰黒色粘質土　少量の鉄分含む
9．6より暗い　少量の鉄分沈殿
10．灰黒色粘質土　鉄分沈殿
11．7より明るい
12．黒灰色粘質土と青灰色粘質土の混合土
13．黒灰色粘質土
14．青灰色粘質土
15．暗青灰色粘質土
16．暗青灰色シルト
17．黄灰色砂
18．青灰色粘質土　黒灰色粘質土を少量含む
19．灰色砂　青灰色粘質土ブロックと粗砂を含む
20．青灰色粘質土　灰色砂含む
21．青灰色粘質土と黒色粘質土の混合土〔腐食土〕
22．黒色粘質土

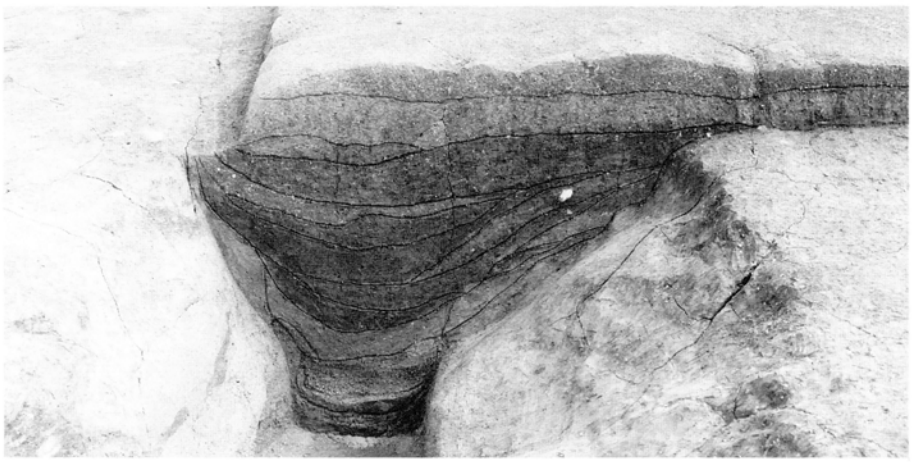
※①～②は土層ベルトの位置を示す。

Fig.37　溝 SD305土層実測図（縮尺1/20）

SD417（Fig.35・43）　溝 SD306B の東側肩に位置し、溝状の窪みになっている。
断面形は、逆梯形状を呈しており、現存長は4.5m、幅は50cm、深さは平均で37cmを測る。
遺物は、縄文土器、土師器が出土している。

SD305（Fig.35・37・41）　調査区の東側に位置する。南端を溝 SD306B、及び水口状遺構 SX403に切

溝SD305土層状態①（南から）



溝SD305土層状態②（南から）

られる。溝の断面形は、薬研堀状を呈しており、溝の壁面・底面に乱れはない。現存長は32.6m、幅は平均で1.25m、深さは平均で77cmを測る。覆土は、第1層が褐灰色粘質土、第2層が暗灰色砂質土、第3層が黒灰色粘質土、第4層が暗灰色砂質土となっている。また、この溝の底面には僅かにヘドロが堆積していることなど、水路としての機能は一切認められなかった。

この溝は、主軸をN30°Eにもつ。この主軸方向は、隣接する梅林遺跡第1次調査で発見した古墳時代の掘立柱建物群の主軸方向と大略一致している。これらのことから第1次調査で発見した古墳時代の豪族の居館跡を区画する溝の一部であることが判明した。

遺物は、土師器、須恵器、石製品などが出土しているが、この溝の東側の遺構面からは6世紀代の須恵器の坏蓋が出土している。

④ 柵（しがらみ）（SX）

溝SD306A（406）、及び溝SD405内において、各々2基の柵（しがらみ）状遺構を検出した。

SX301（Fig.35・38・44） 溝SD306A（406）の中央部の底面で検出した。北西方向に横木を2本並べて溝を横断させ、南側から木杭で固定している。杭は30～40cm間隔に打ち込まれる。

用いた木材は、樹種同定の結果、ヒサカキ、スダジイ、クリなどであることが判明した。また、放射性炭素年代測定を行った結果、7世紀の木材を用いていたことが分かった。柵（しがらみ）の西側が溝SD306Aの壁面に食い込んでいることから、溝幅は更に拡がることが考えられる。

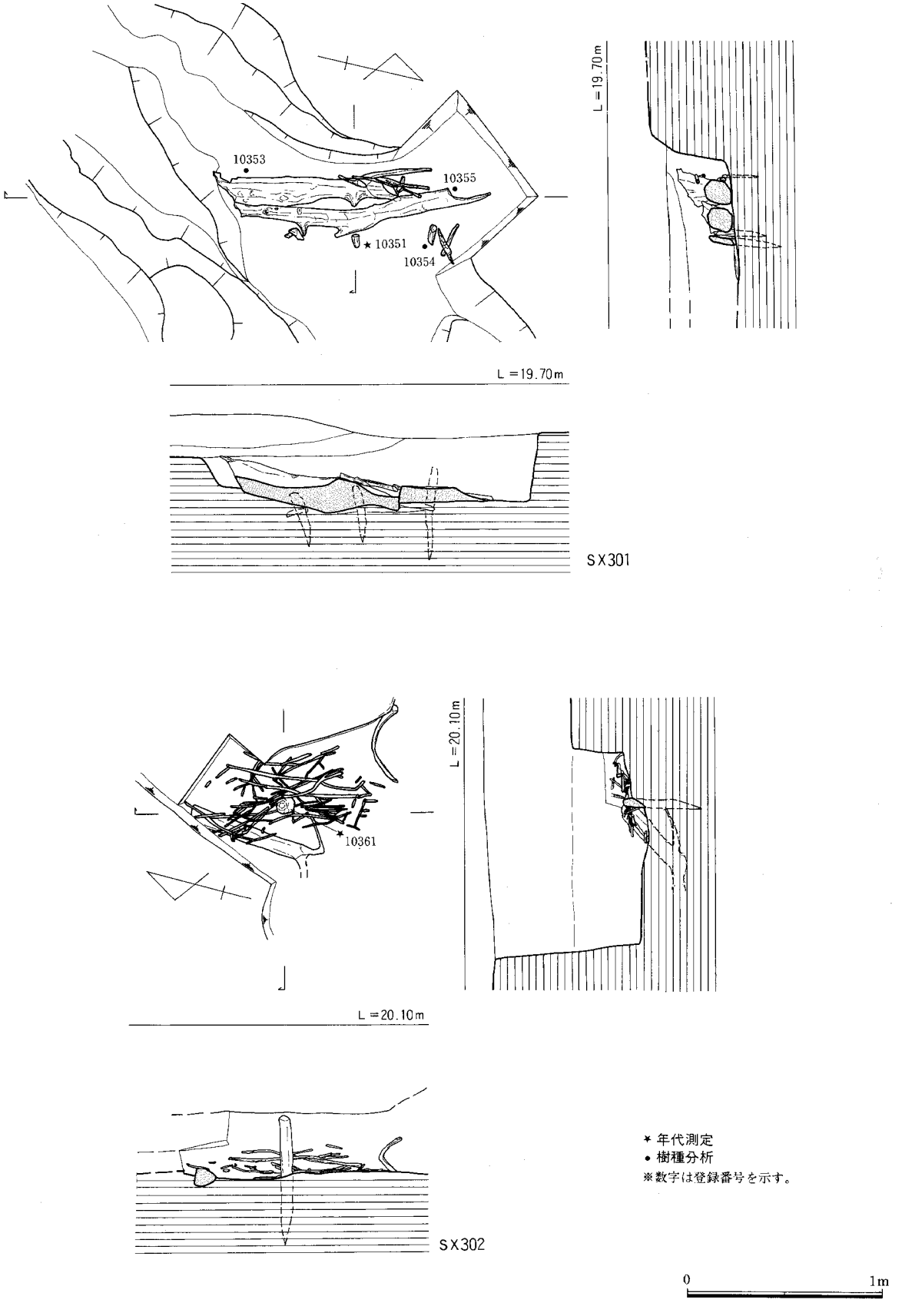
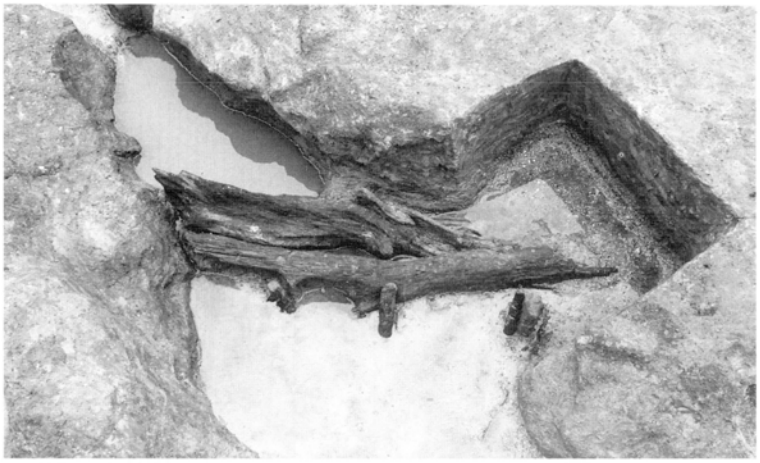


Fig.38 柵（しがらみ） SX301・302実測図（縮尺1/30）



柵（しがらみ）ＳＸ３０１（北東から）

柵（しがらみ）ＳＸ３０２（南東から）

柵（しがらみ）ＳＸ４０１（東から）

柵（しがらみ）ＳＸ４０２（南東から）

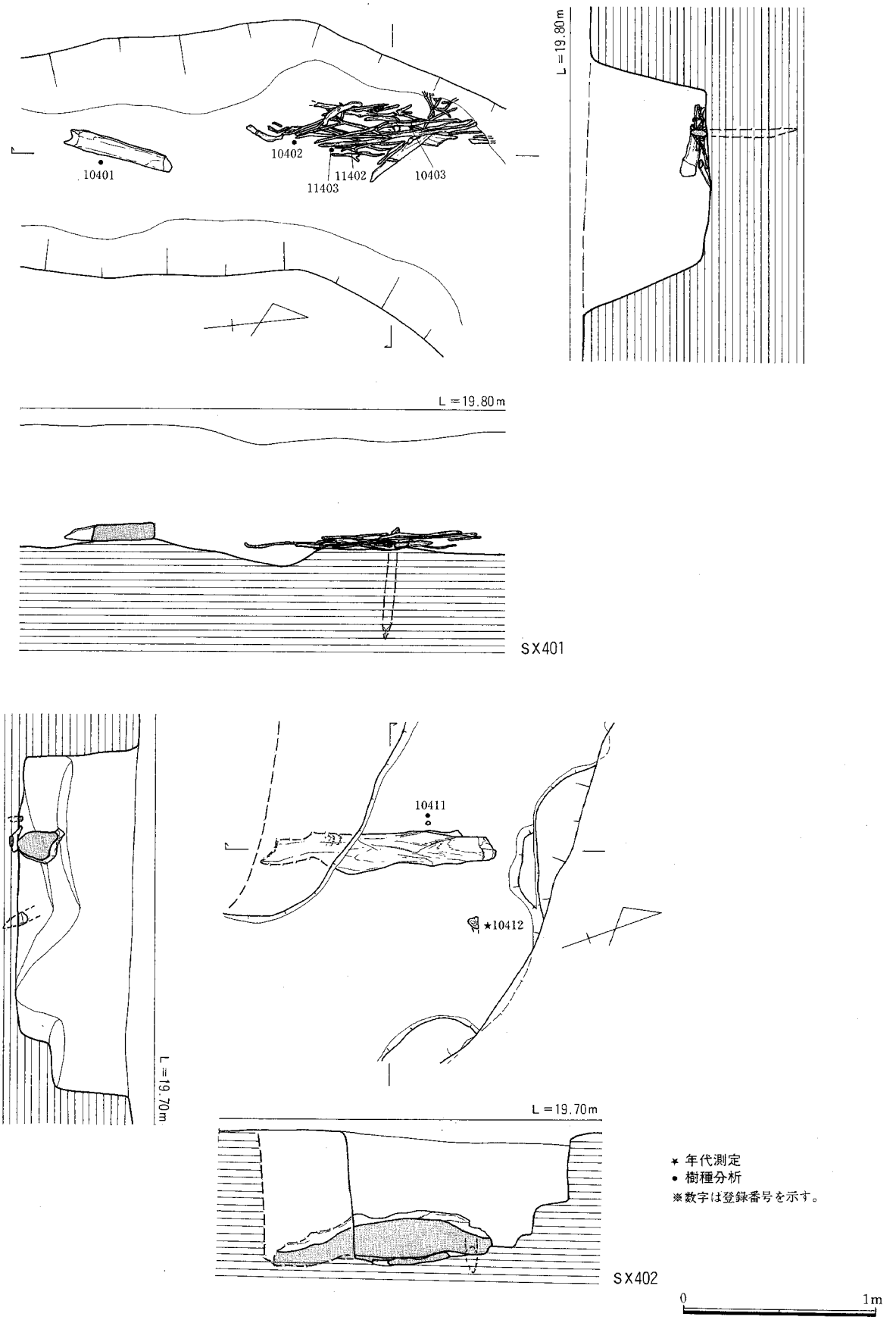


Fig.39 柵（しがらみ） SX401・402実測図（縮尺1/30）

SX302（Fig.35・38・44） 溝 SD306A（406）の南端で検出したが、調査期間の関係から全てを検出できなかった。溝の西側壁に貼り付いており、護岸状を呈する。略北方向に太目の横木と細い枝木の横木を平行に並べ、柵の中央に打ち込んだ木杭に絡むようにして枝木を巻いている。

柵の中央に打ち込まれた杭の樹種はシャシャンボで、放射性炭素年代測定の結果、1320±120 years. B. P. の結果を得ており、SX301とほぼ同時期につくられたものと思われる。

SX401（Fig.35・39・45） 溝 SD405の南側底で検出した。この柵状の遺構は溝壁に沿うような形で設けられている。立杭は1本のみで、倒れた状態で、杭が他に2本見つかっている。横木は北方向に立杭と絡み合うように並べられている。

この柵に用いられた木材の樹種は、ウツギ属、ヤナギ属、クリ、スダジイなどで、様々な種類の木材を用いていたことが分かる。放射性炭素年代測定によれば、8世紀代の木材を使用していたことが判明した。

SX402（Fig.35・39・45） 溝 SD405中央部の大きく蛇行する部分の底で検出した。溝を斜めに横断するような形で設けられる。北東方向に大・小2本の横木を並べて置き、杭で固定するものと思われるが、調査中に流されたりしており、結局残った立杭は2本のみであった。

この2本の杭の樹種はいずれもスダジイで、放射性炭素年代測定を行った結果、柵 SX401とほぼ同時期（8世紀代）の木材を使用していることが分かった。この柵も40㎝程度、南側の溝壁に食い込んでいる。溝 SD405は相当の水量をもつ水路であると思われるが、その水量を調節するために柵（しがらみ）が設けられたとも考えられる。

④ 水口（SX）

SX403（Fig.35・40） 調査区の東側に位置し、溝 SD305を切る。溝 SD306に付随する水口であると考えられる。断面形は4段の階段状に人頭大の石を配置するもので、水田への取排水の水量調節を行っ

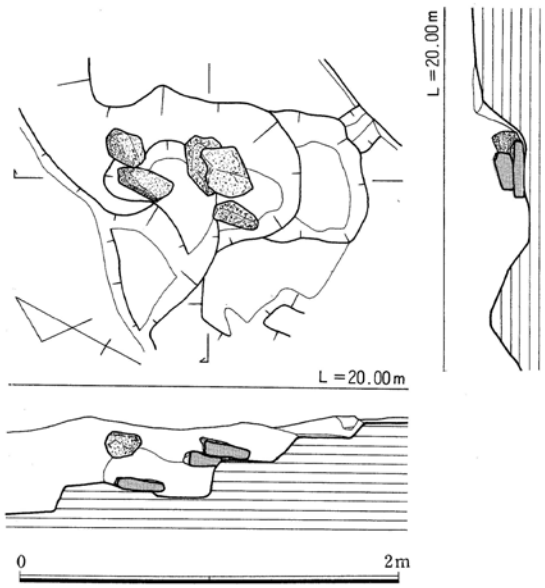


Fig.40 水口 SX403実測図（縮尺1/40）

水口 SX403（北西から）

ていたものと思われる。最大長は1.5m、幅は80cm、最も深い場所で360cmを測る。
遺物は出土していない。

(8) 第4面出土遺物（Tab.2・4参照）

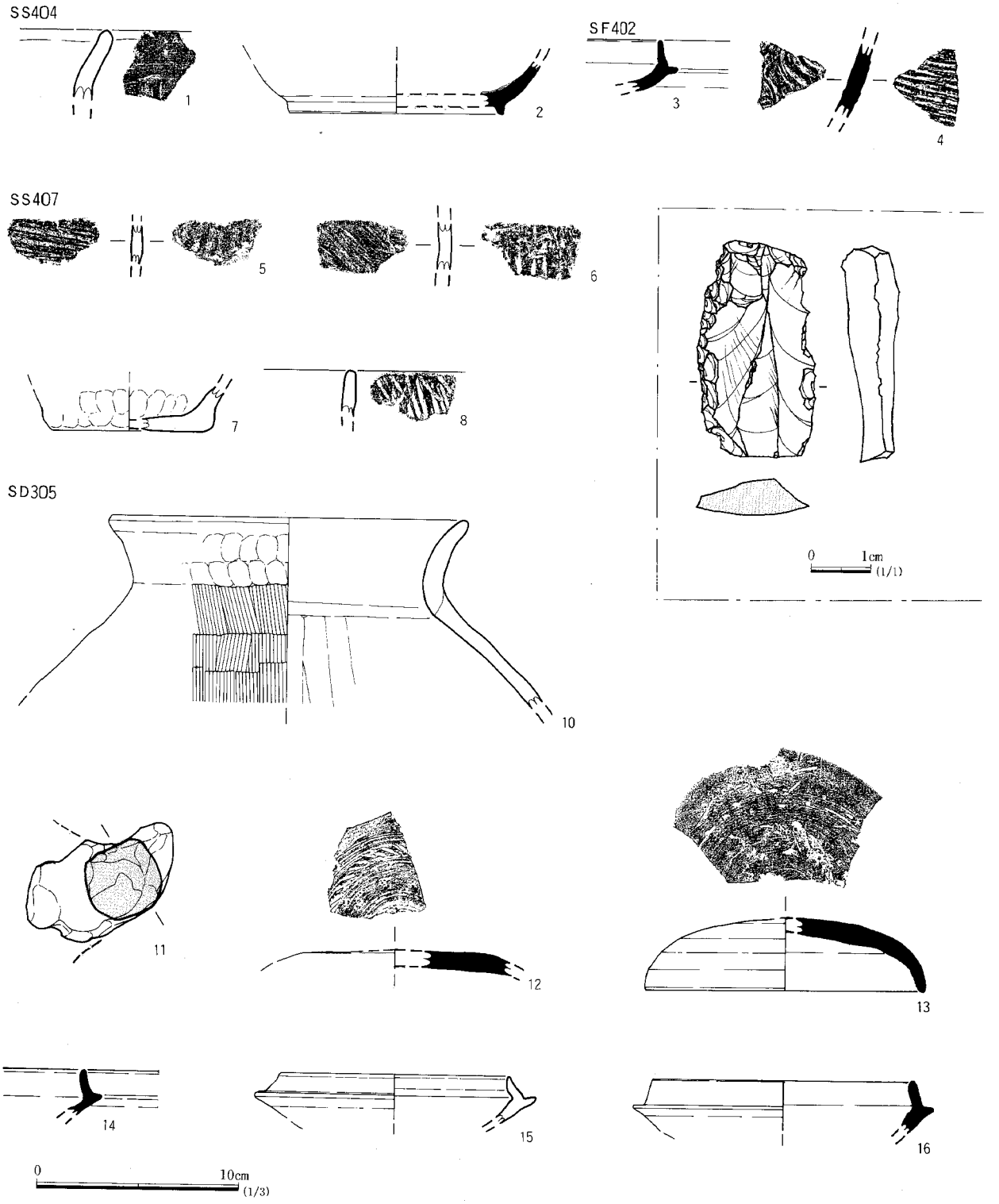


Fig.41 水田跡SS404・407、畦畔SF402、溝SD305出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）

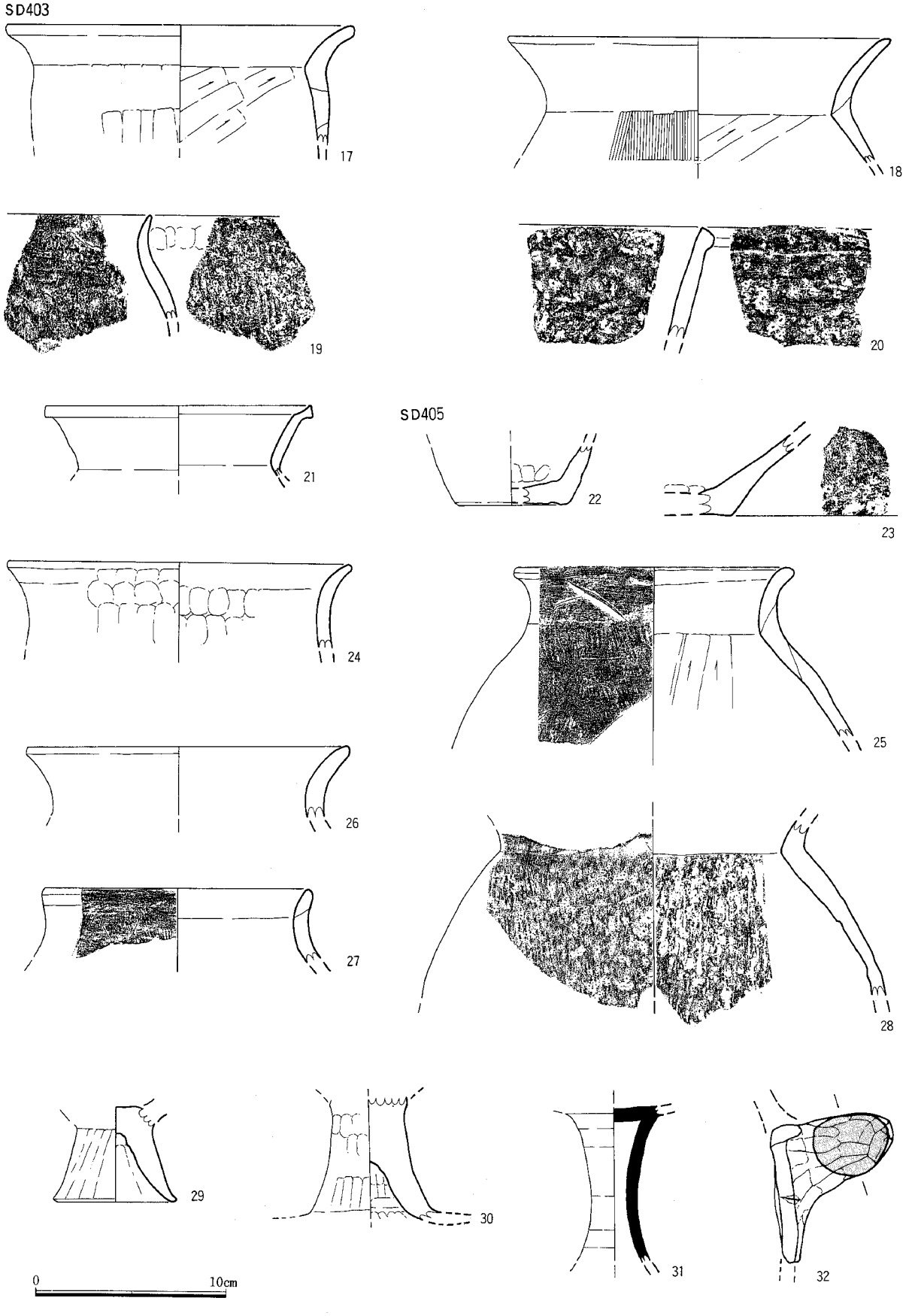


Fig.42　溝 SD403・405出土遺物実測図（縮尺1/3）

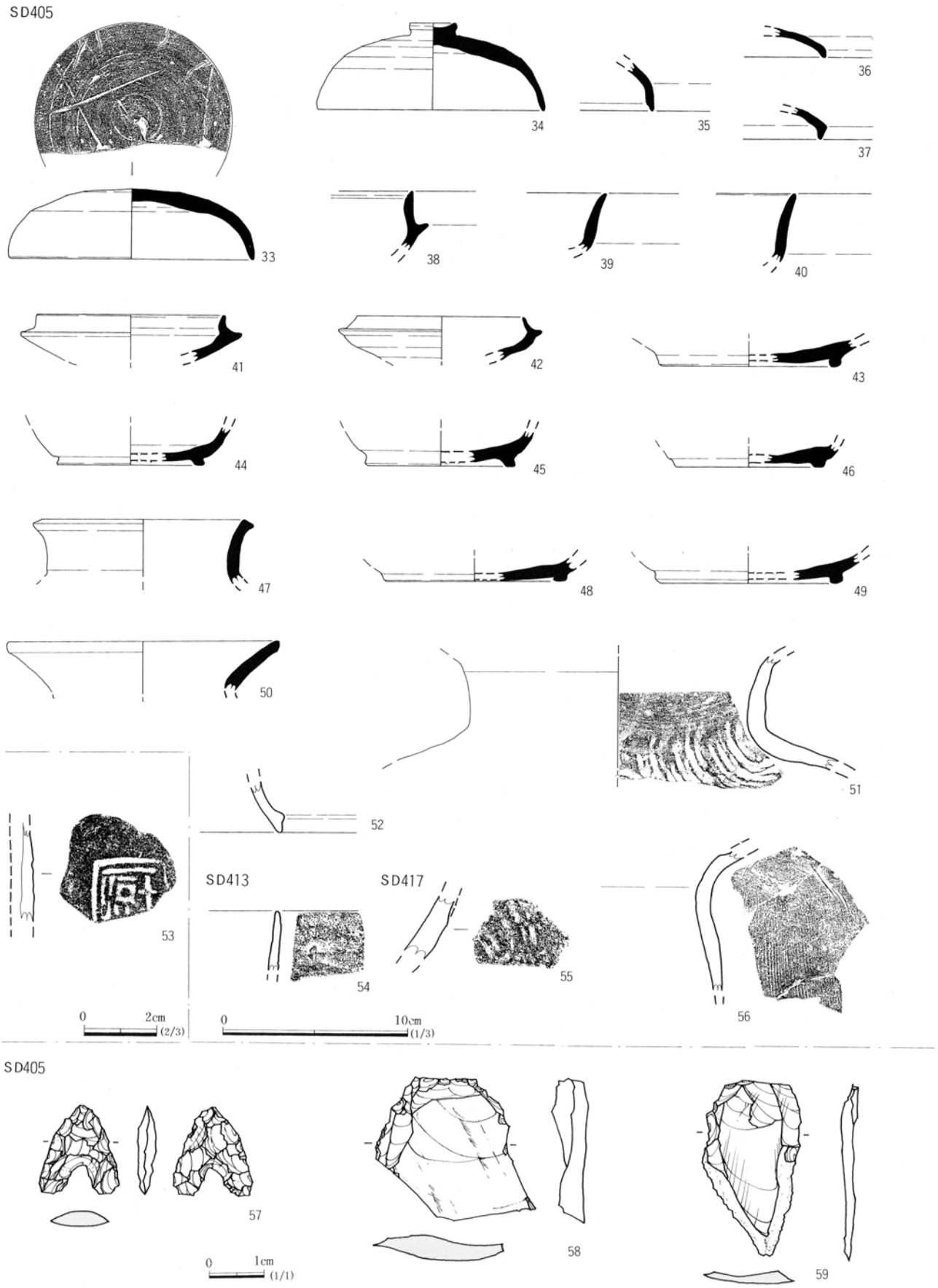


Fig.43　溝 SD405・413・417出土遺物実測図（縮尺1/3・2/3・1/1）

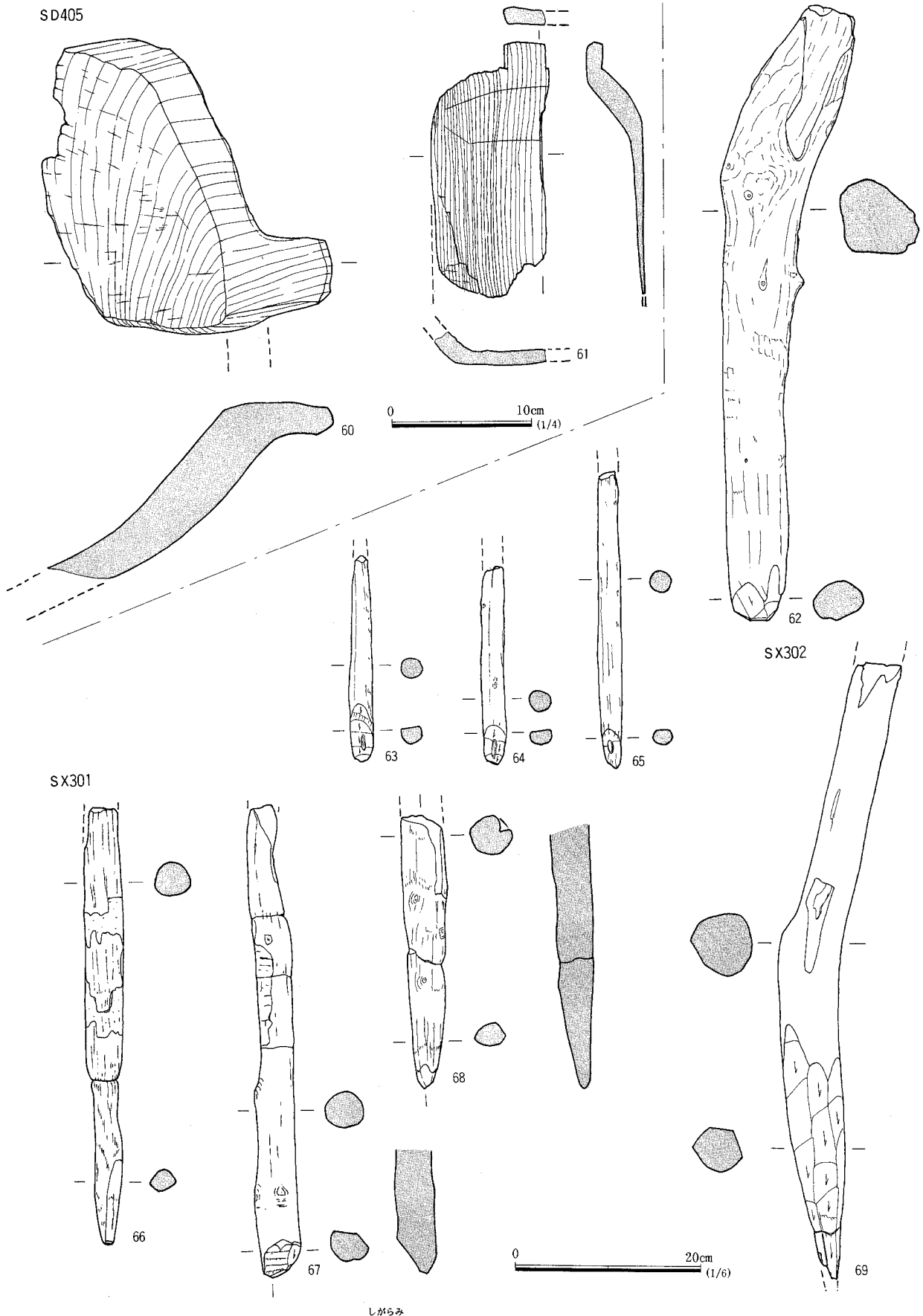


Fig.44　溝 SD405、柵（しがらみ） SX301・302出土木製品実測図（縮尺1/4・1/6）

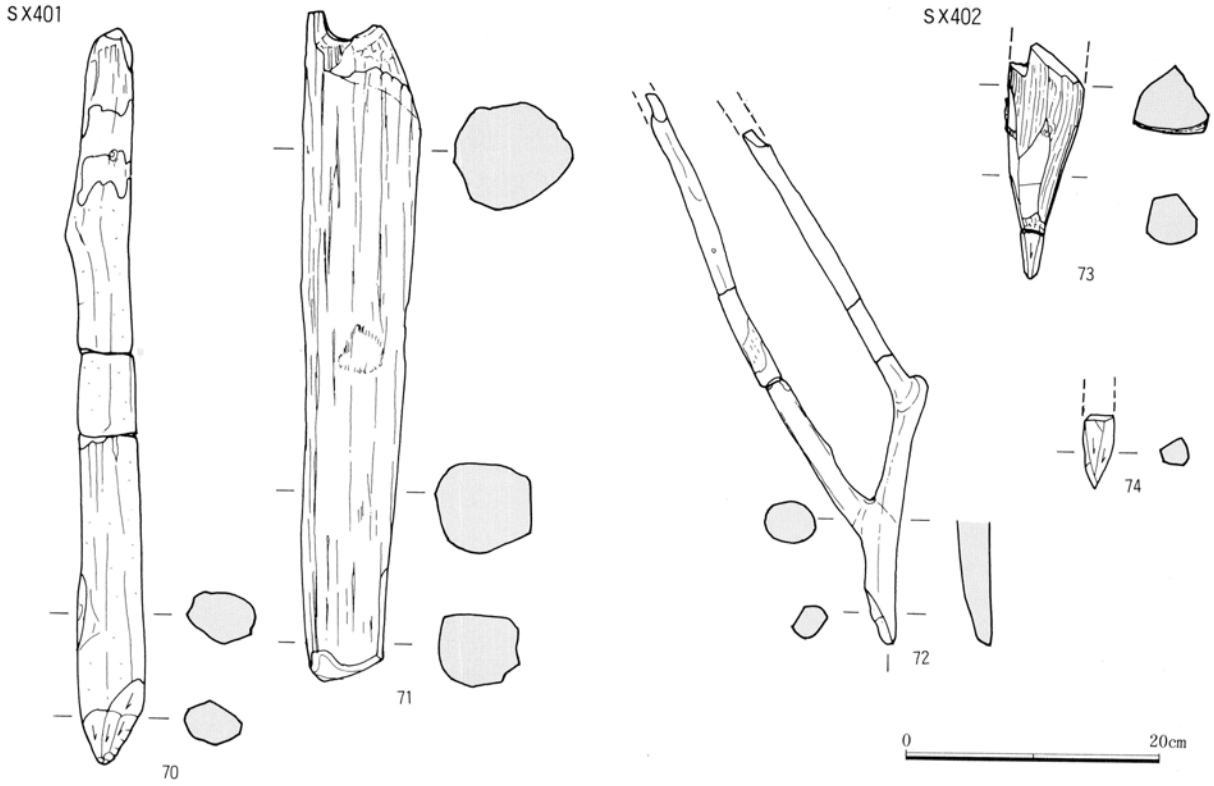
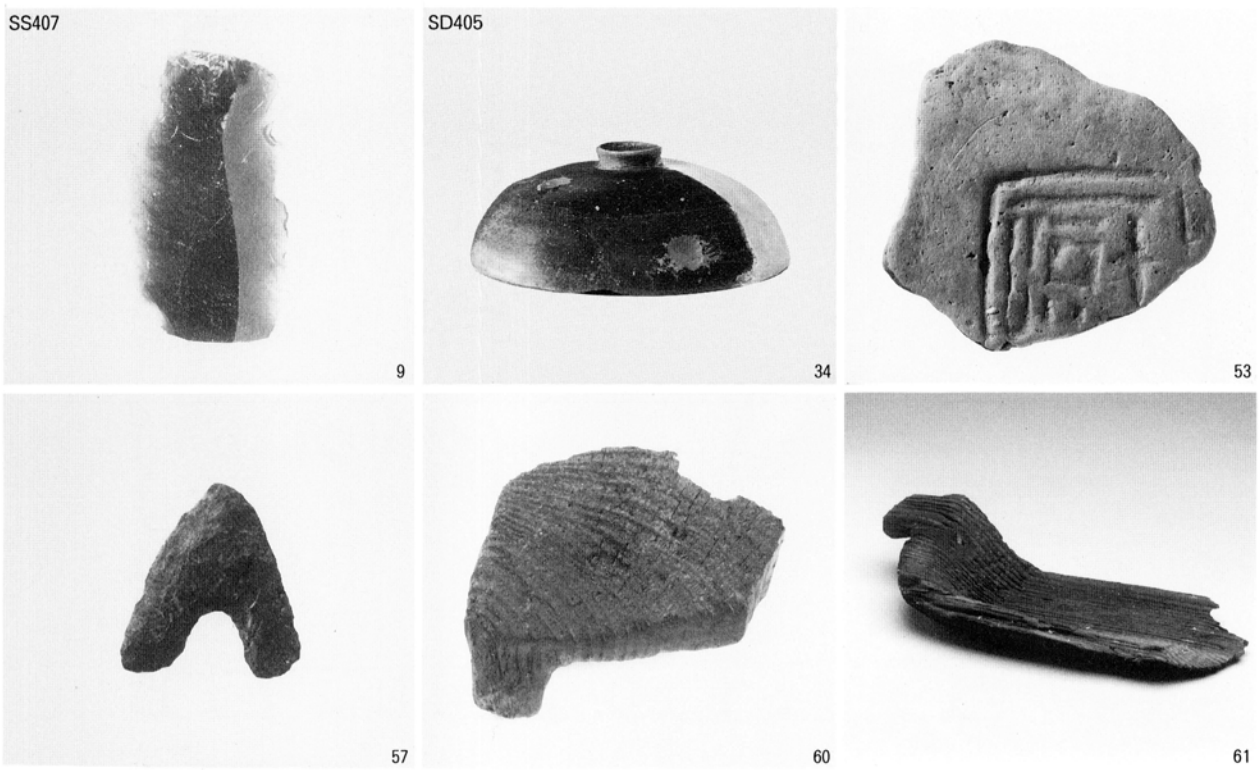


Fig.45 柵（しがらみ） SX401・402出土木製品実測図（縮尺1/6）



第4面出土遺物

※数字は実測図番号に一致する。

⑼ 第5面の調査

第4面の調査終了時において、水田下の基盤の状態を調べるために南北の調査区境にトレンチを設定したところ、 第4面の下層に流木群が存在することが判明したため、発掘調査を実施することにした。調査期間の関係から小規模な範囲に調査を限定した。調査面積は118.8㎡である。

流木群を検出したのは第4面の遺構面より約50㎝深く、標高は18.85～19.15ｍを測る。当初流木群の存在する層については氾濫原であると見なしていたが、護岸状の杭列や柵なども検出するなど、略北方向、北東方向、その他複数の流路が重なっていることが判明した。

これら流木群の樹種は、ヒサカキ、マンサク、スダジイ、センダン、カキノキ属、クスノキ科、その他広葉樹などであることが分析の結果分かっている。

遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、また黒曜石製の石鏃やフレイク、安山岩製のスクレイパーなどの石製品、木槍、編錘、木杭、その他の木製品が出土している。農耕具は出土していない。

① 柵（しがらみ）（SX）

SX501（Fig.46・47・49・52） 調査区の北西側で検出した。護岸状の杭列が2列並び、その間に柵は設けられている。やや大きめの横木を中心におき、これに絡み合うように枝材の横木を並べて杭で固定している。

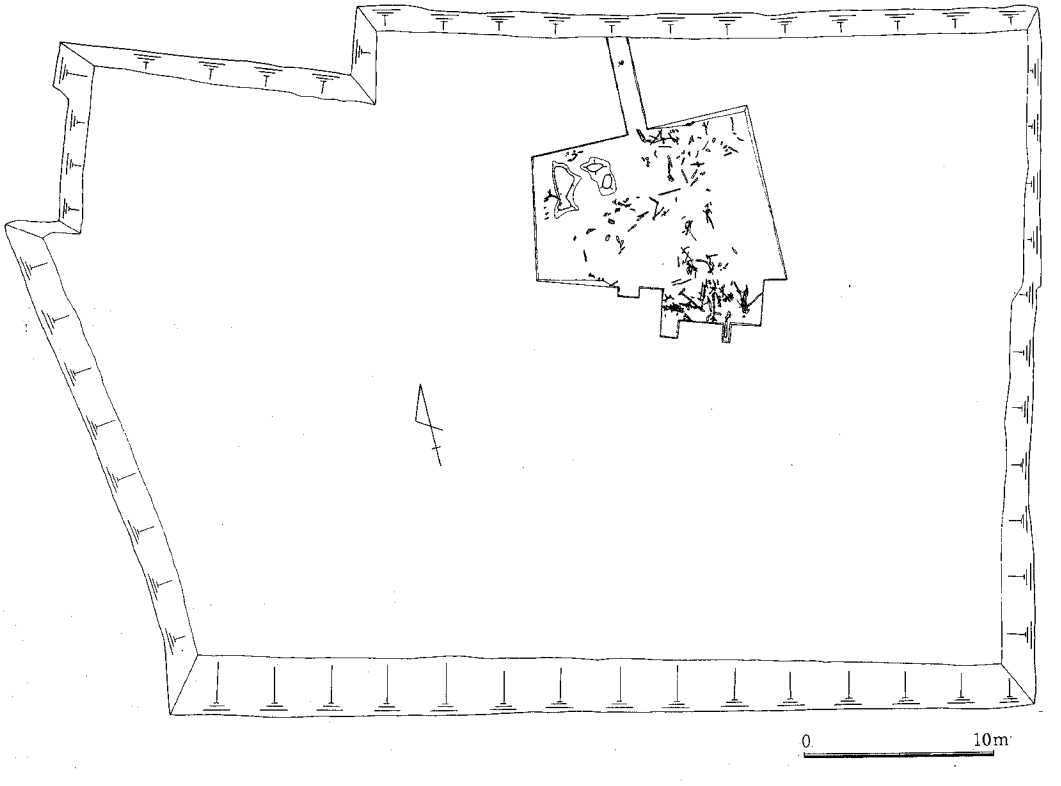


Fig.46 第5面調査位置図（縮尺1/400）

護岸状の杭列にはスダジイなどを使用しており、放射性炭素年代測定の結果、9世紀前後であることが判明した。上面検出の水田跡SS329とSS330の境に沿って存在しており、これらのことから、これらの杭列は上面の第4面遺構に伴うものと考えられる。

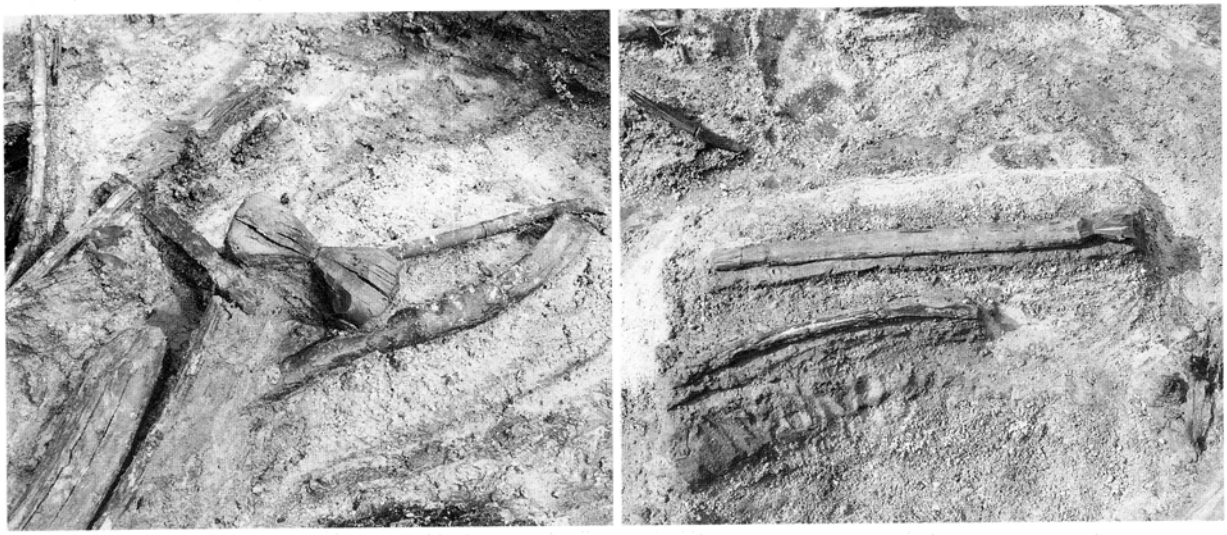
(10) 第5面出土遺物（Tab.2参照）

(11) 表土・遺構面・トレンチ出土遺物（Tab.2参照）

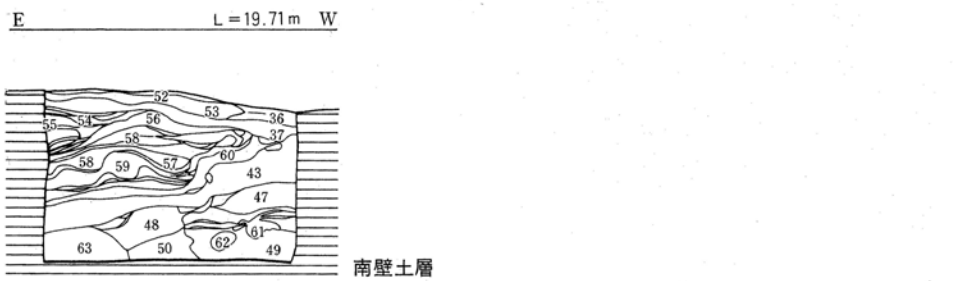
Fig.47 第5面遺構配置図（縮尺1/80）

第5面南側流木群の状態（北から）

第5面拡張区北側全景（南から）



第５面木製品出土状況（南から）



拡張区トレンチ土層名称

1．耕作土（黒灰色粘質土）
2．灰白色シルト
3．灰白褐色シルトと灰黒色シルトの混合土
4．灰白褐色シルト
5．灰褐色シルト
5′．灰褐色シルトと暗灰褐色シルトの混合土　木片含む
6．灰褐色シルト
7．黒灰色シルト
8．灰褐色粗砂層
9．黒灰色粘質土と褐色粗砂層の混合土
10．暗灰色シルト
11．7より暗い
12．7に暗褐色粘質土含む
13．7に粗砂含む
14．灰黒色シルトと灰褐色細砂・粗砂の混合土　木片含む
15．やや明るい灰褐色粗砂層 木片含む
16．やや暗い灰白色粗砂層
17．暗灰褐色シルト
18．灰白色砂礫層
19．暗灰褐色シルト
20．19よりやや明るい
21．灰白色シルト
22．明灰褐色シルト　木片含む
23．灰褐色シルト　木片含む
24．灰黒褐色シルト　木片含む
25．24より暗く炭化物と木片を含む
26．24より灰味が強く、腐食物を含む
27．明灰褐色粗砂層　灰黒褐色シルト含む
28．灰褐色砂礫層（細～中粒砂）
29．灰褐色シルト
30．黒褐色粘質土　暗灰褐色シルト含む
31．灰褐色砂礫層
32．灰黒色シルト
33．灰白色粗砂と灰褐色粗砂の混合層　少量の木片を含む
34．灰黒色粘質土　鉄分含む
35．灰褐色粗砂層
36．灰黒色シルトと砂礫の混合土
37．36より明るい
38．灰褐色粗砂層
39．暗灰黒色シルト　炭化物含む
40．39に灰褐色粗砂含む
41．39に木片を含む
42．39より明るく、灰褐色砂を含む
43．暗褐色シルト　炭化物と木片を含む
44．38と暗褐色シルトの混合
45．灰褐色粗砂と暗褐色シルトの混合土　木片含む
46．暗褐色シルト　炭化物含む
47．46に木片含む
48．46よりやや明るい
49．灰褐色粗砂層
50．暗灰褐色シルト
51．黒灰色粘質土（シルト）
52．灰色シルト
53．灰褐色砂礫層　ヘドロ含む
54．暗灰色シルト
55．灰褐色粗砂層
56．53と同じ
57．54よりやや明るい
58．53と同じ
59．灰褐色砂礫層と灰色砂礫の混合層
60．暗褐色シルト　炭化物含む
61．黒灰色粘質土（シルト）
62．暗灰黒色粘土（シルト）
63．灰褐色砂礫層
64．灰褐色粗砂と灰黒色シルトの混合層　炭化物含む
65．灰褐色粗砂　鉄分含む
67．赤褐色粗砂

Fig.48　第５面トレンチ南・西壁土層実測図（縮尺1/30）

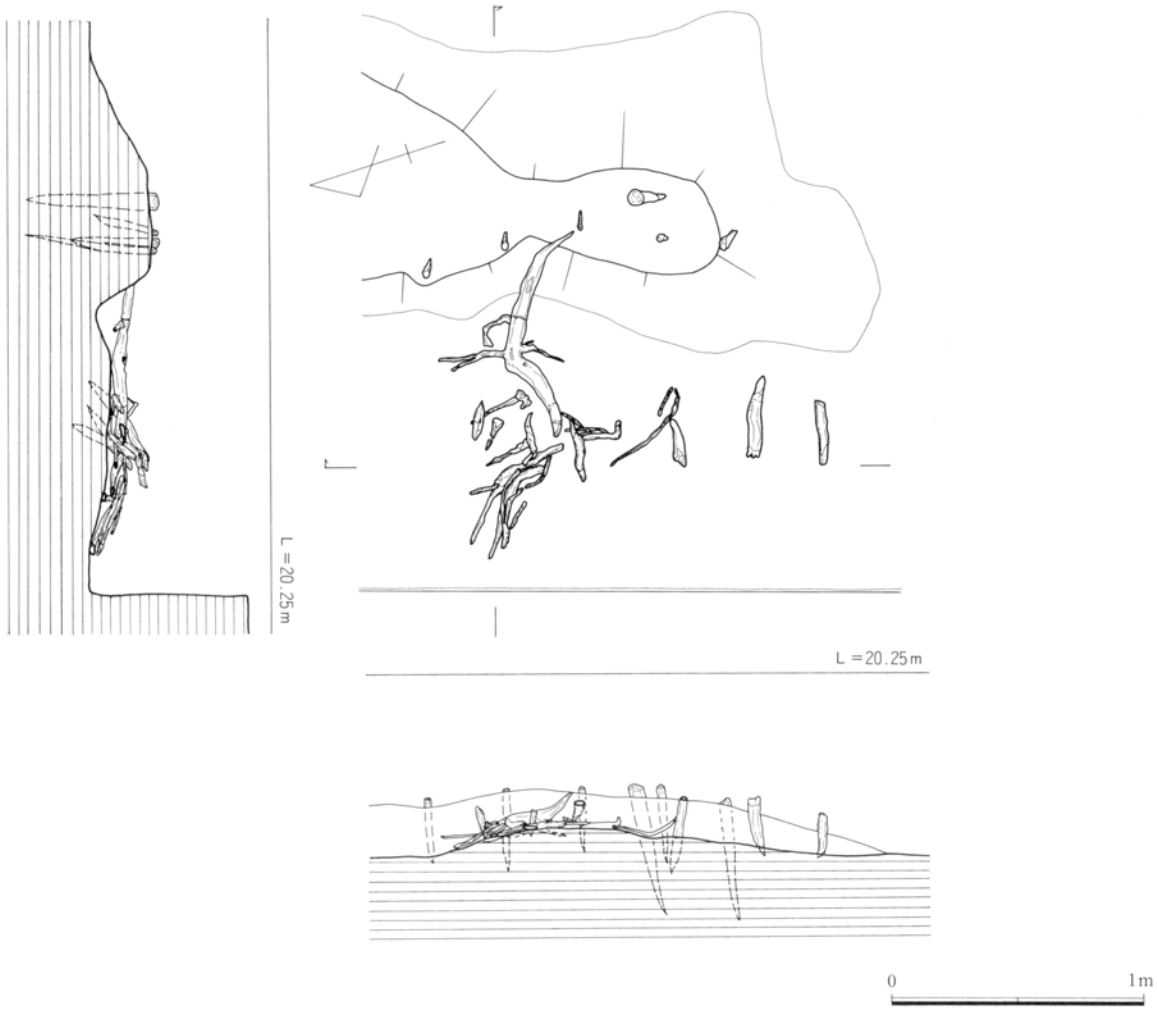


Fig.49　柵（しがらみ） SX501実測図（縮尺1/30）

柵（しがらみ）SX501（南から）

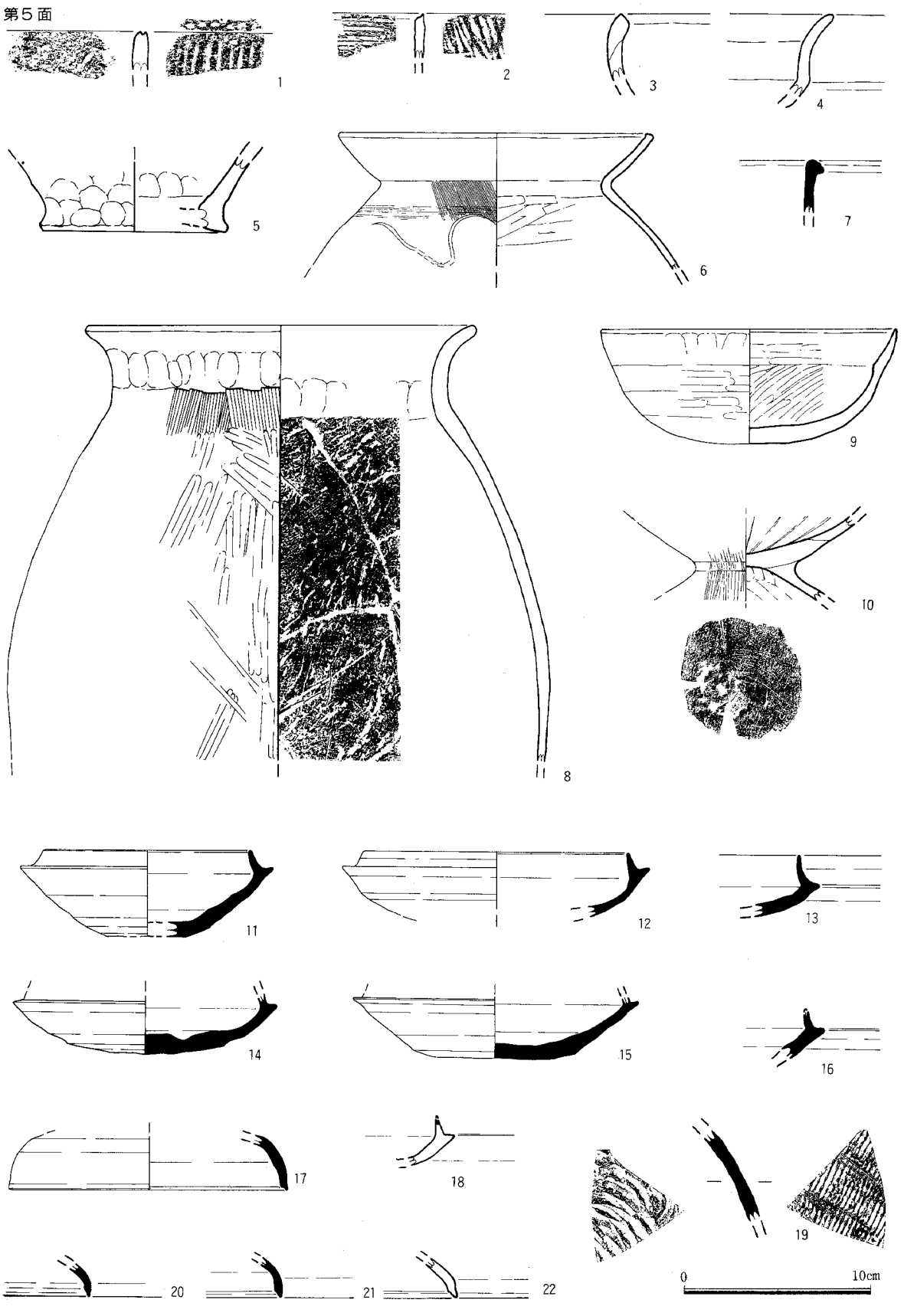
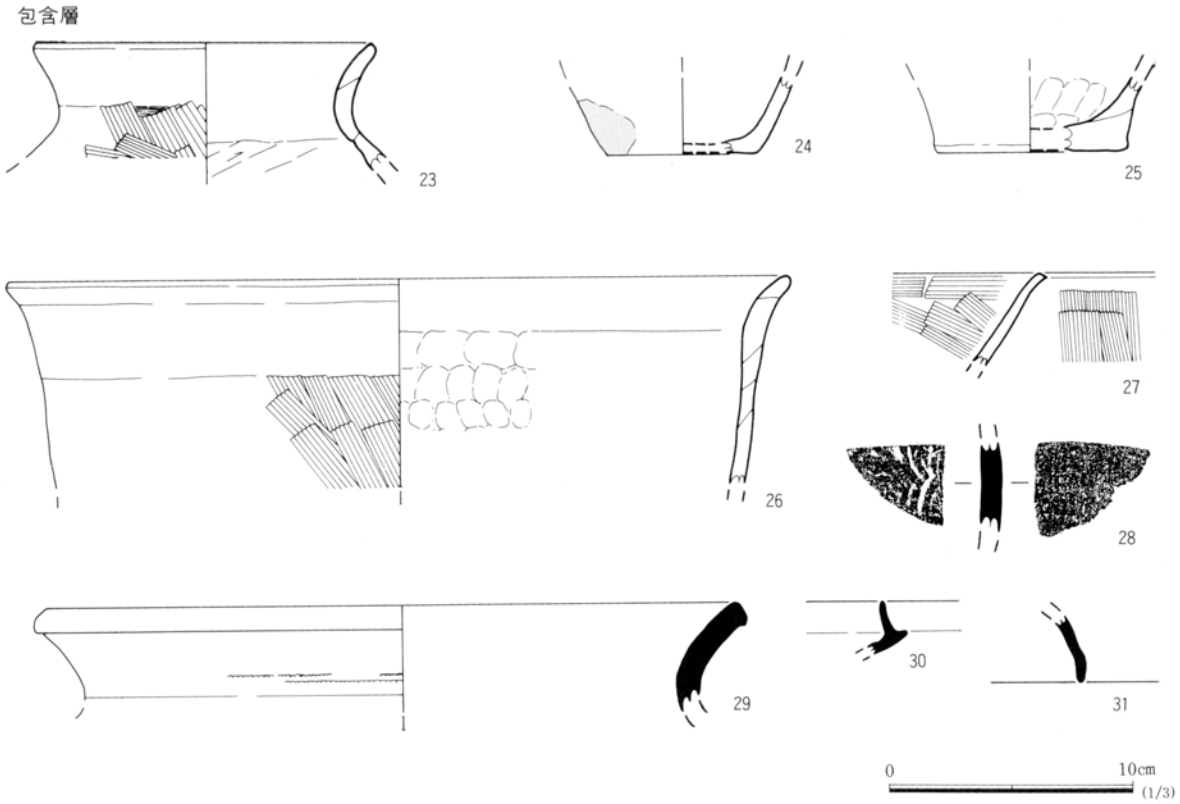
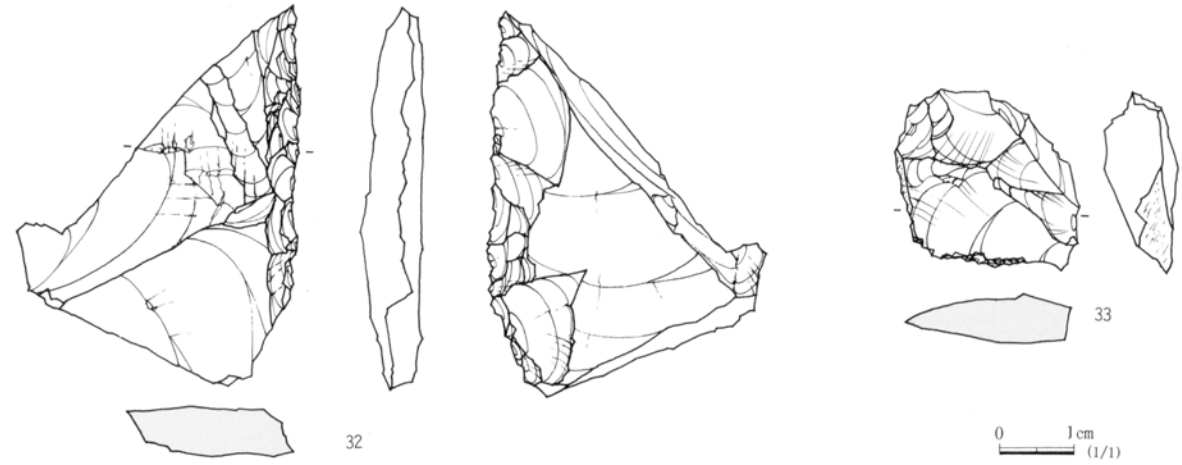
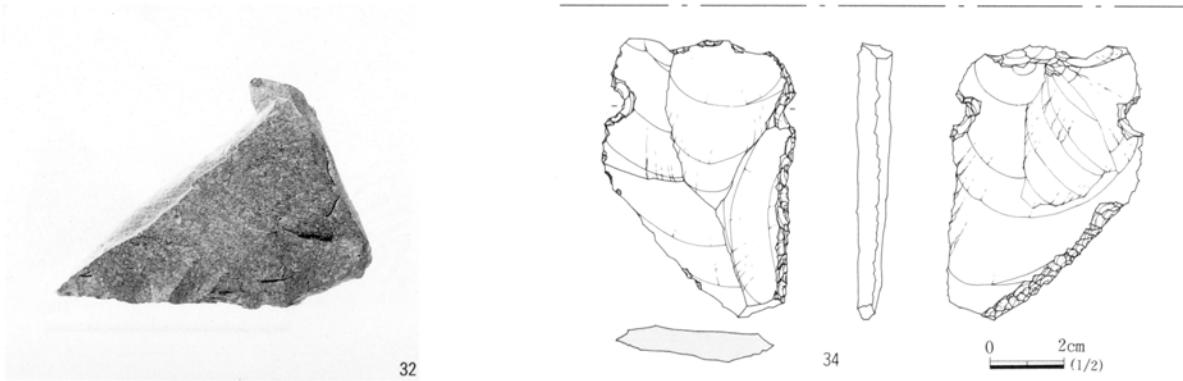


Fig.50　第５面出土遺物実測図①（縮尺1/3）







第 5 面出土石製品　※数字は実測図番号に一致する。

Fig.51　第 5 面出土遺物実測図②（縮尺1/3・1/1・1/2）

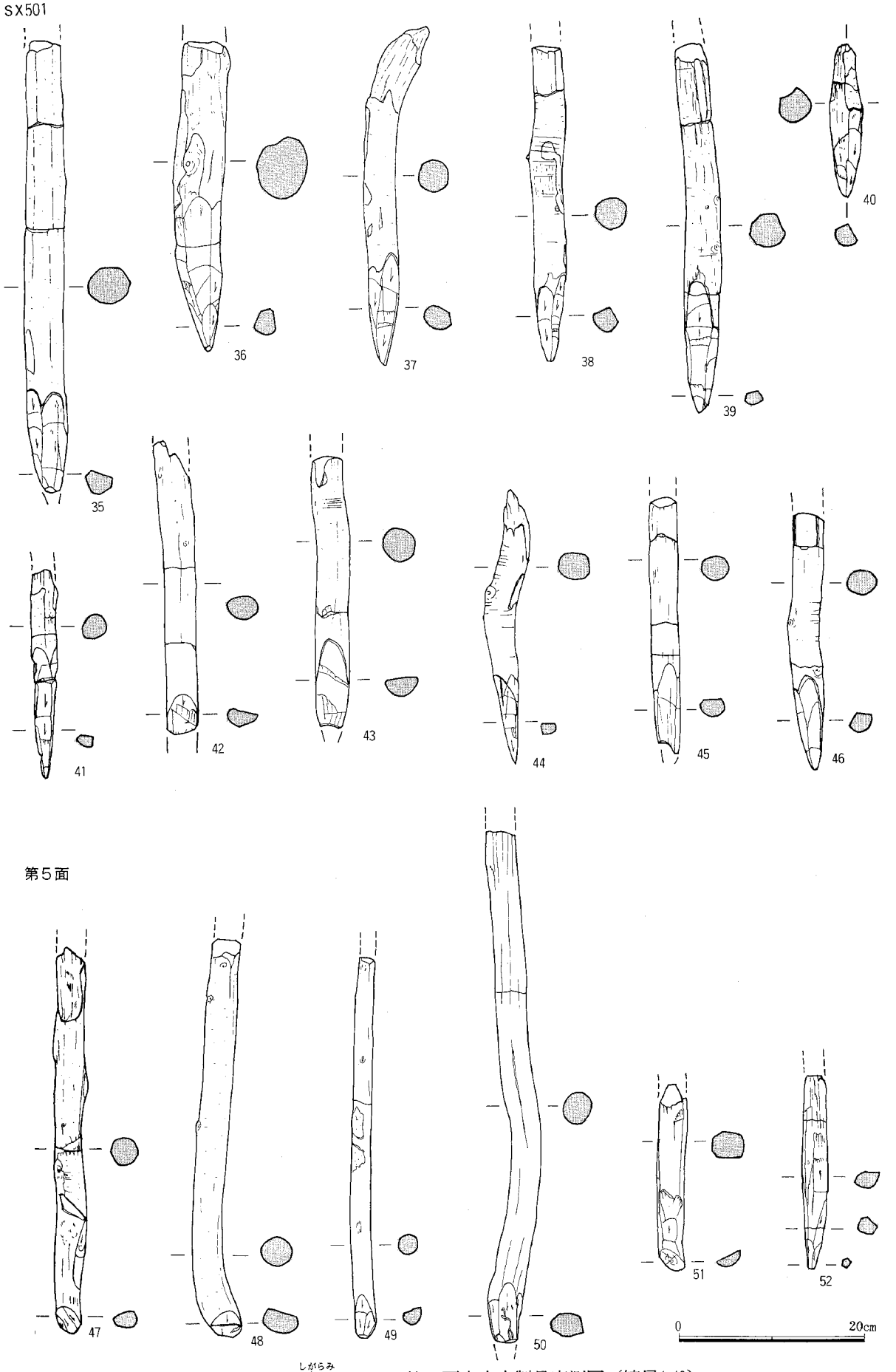


Fig.52 柵（しがらみ） SX501、第5面出土木製品実測図（縮尺1/6）

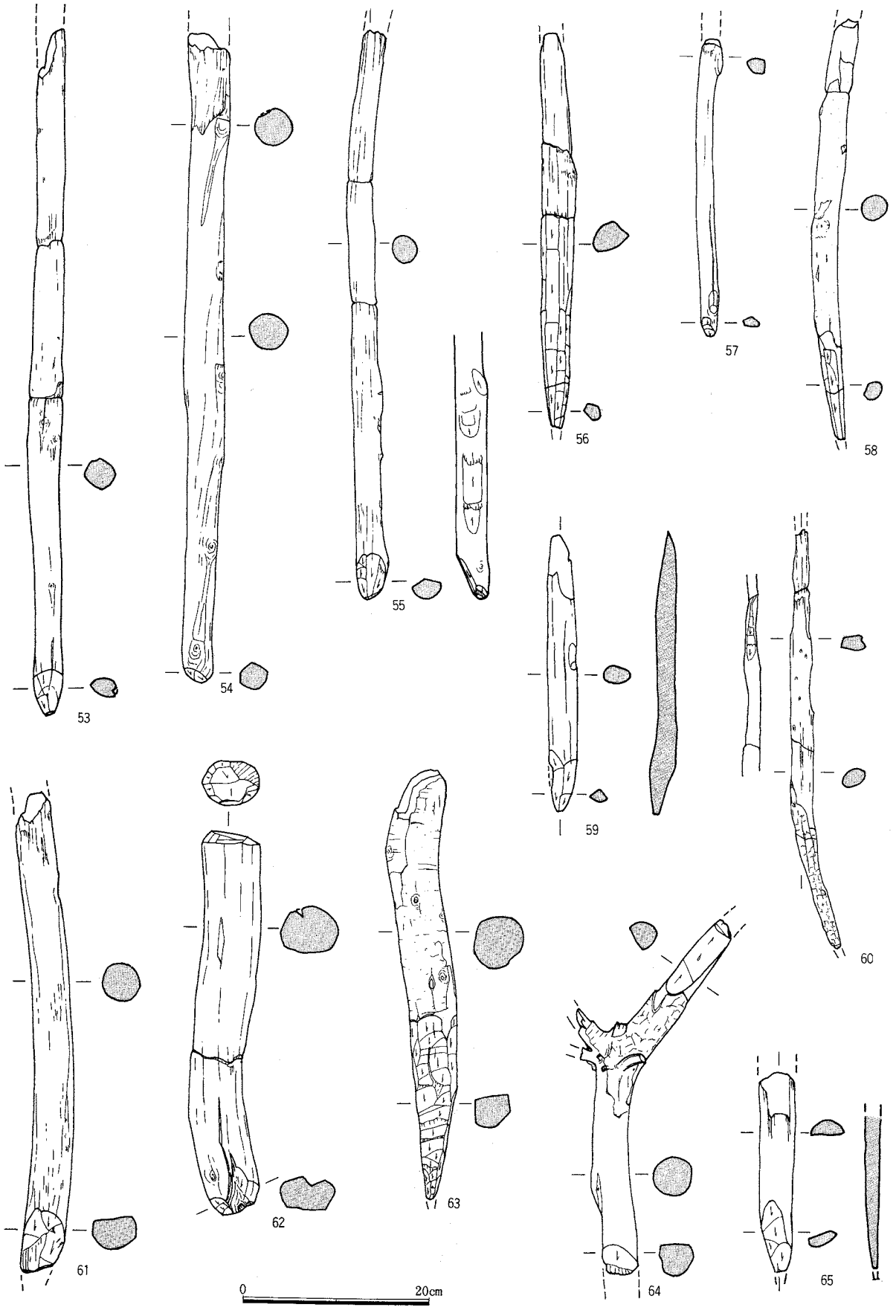


Fig.53　第5面出土木製品実測図①（縮尺1/6）

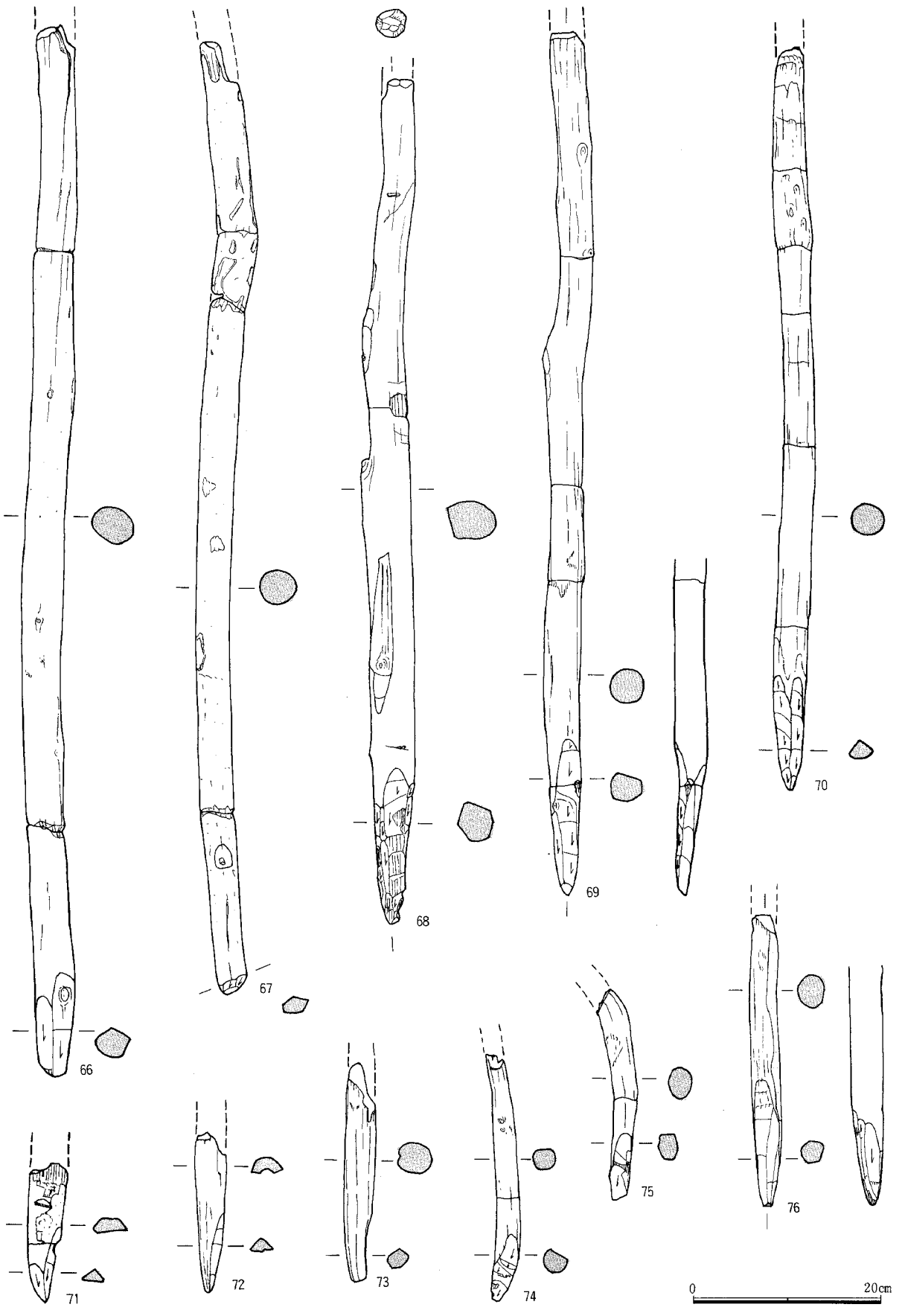


Fig.54　第5面出土木製品実測図②（縮尺1/6）

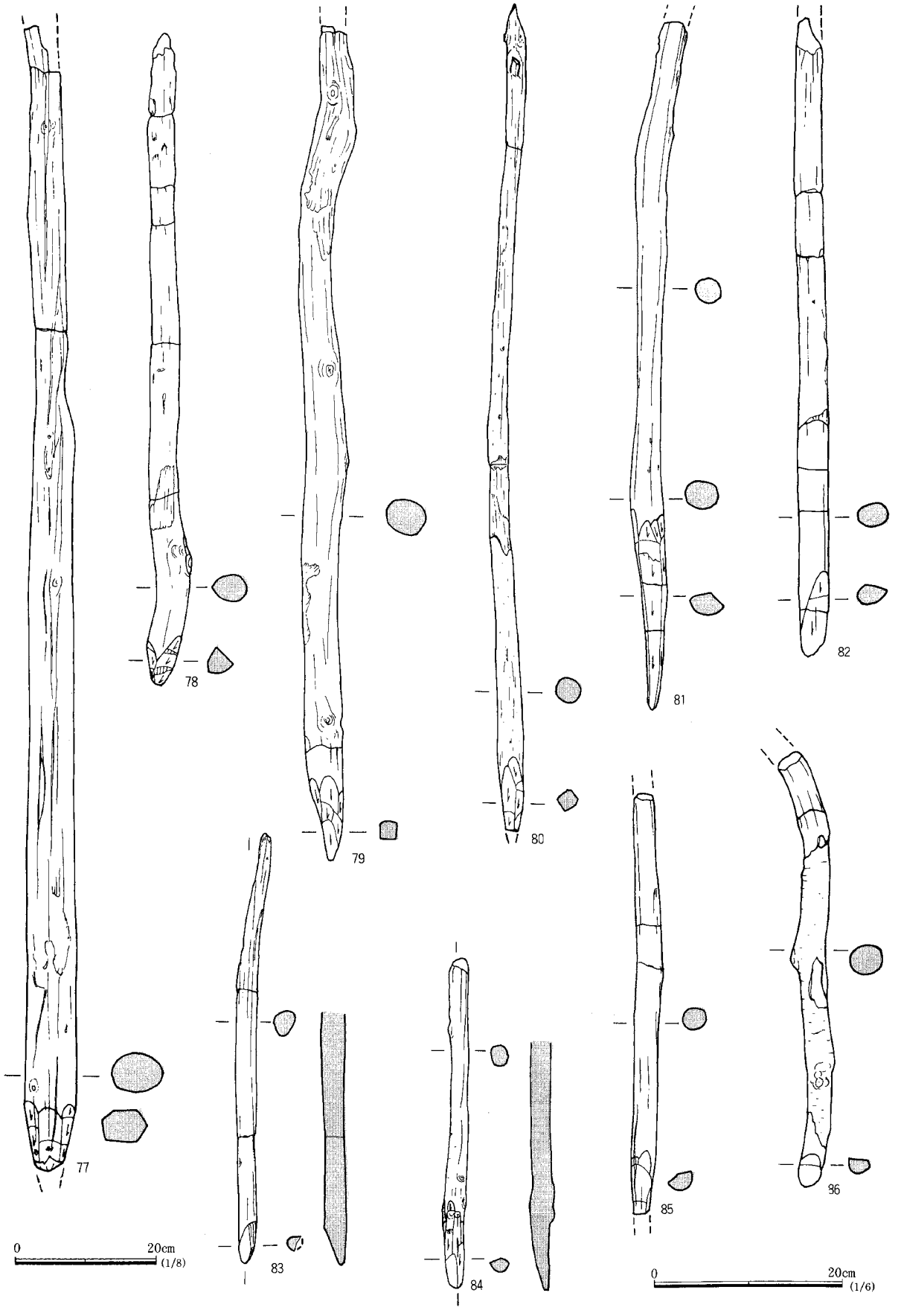


Fig.55　第5面出土木製品実測図③（縮尺1/8・1/6）

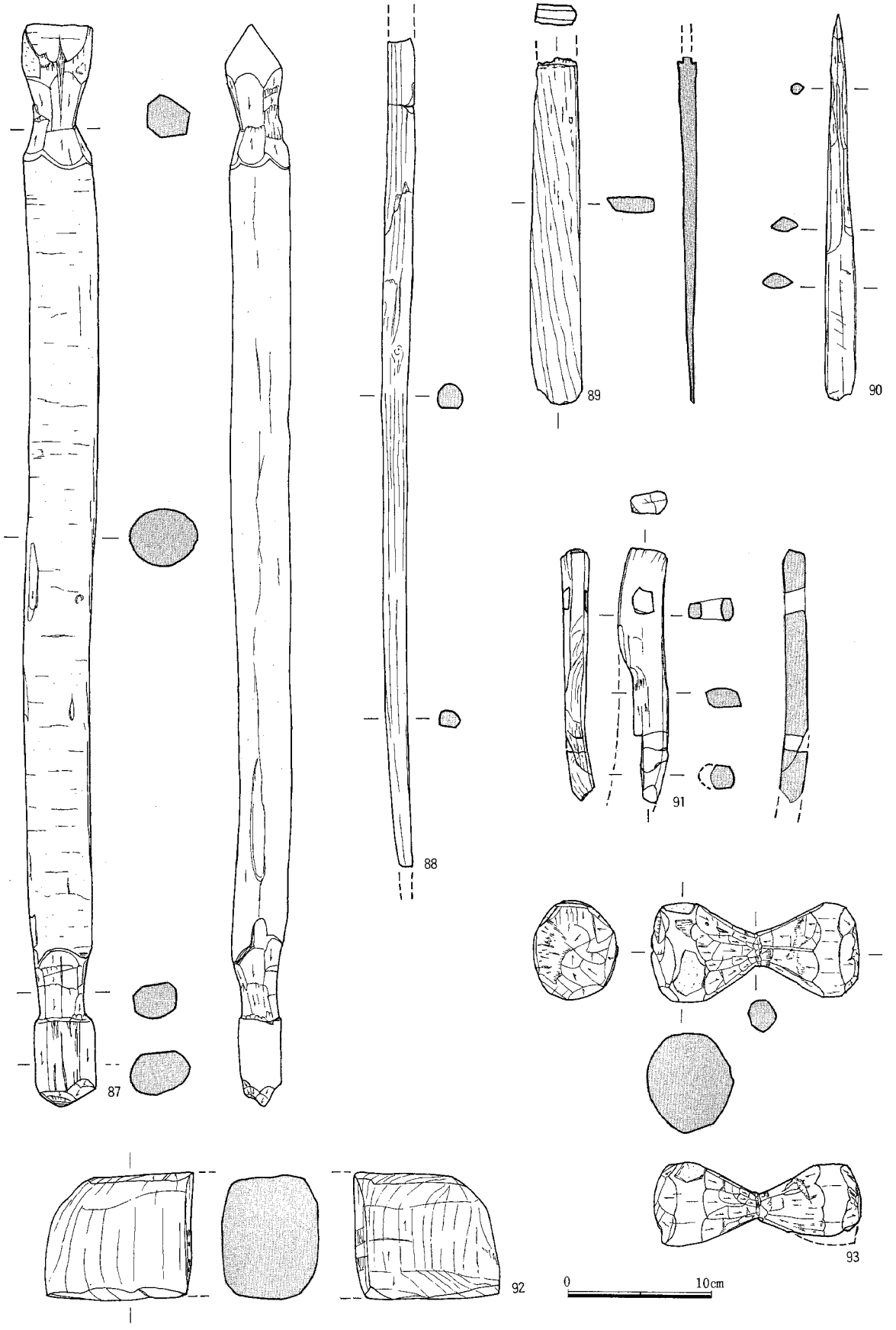


Fig.56　第5面出土木製品実測図④（縮尺1/4）

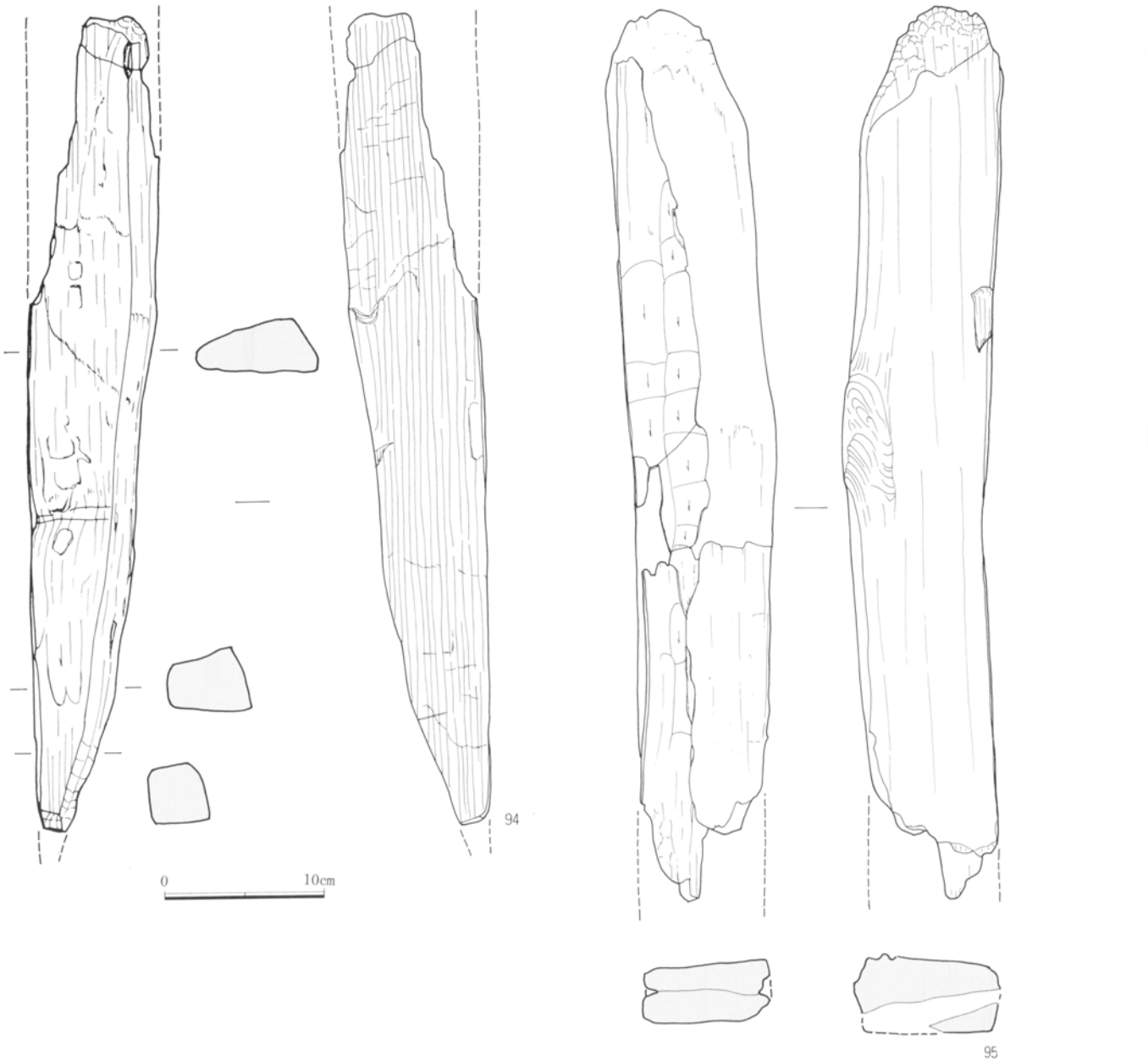


Fig.57　第 5 面出土木製品実測図⑤（縮尺1/4）

第 5 面出土木製品

※数字は実測図番号に一致する。

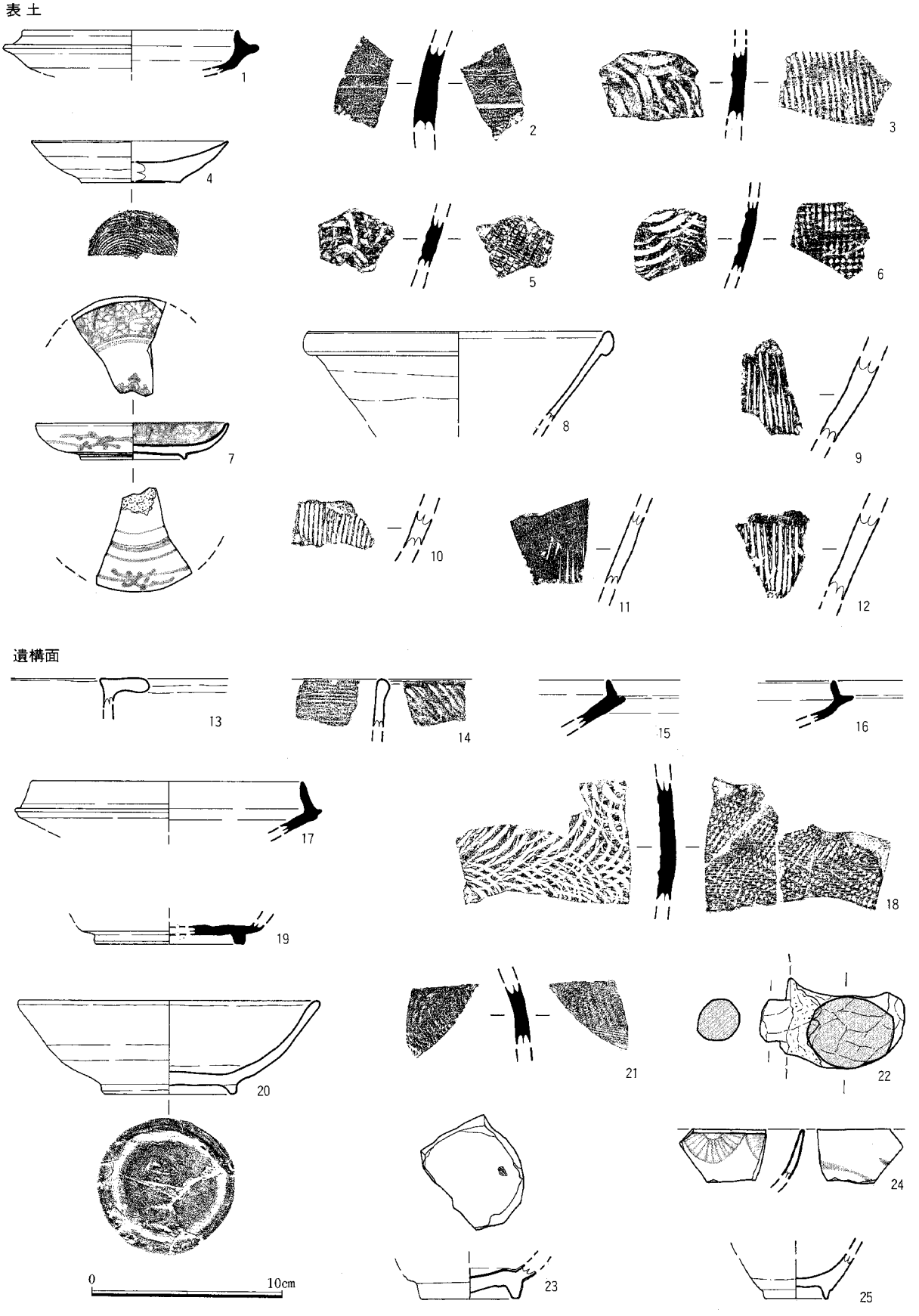


Fig.58　表土・遺構面出土遺物実測図（縮尺1/3）

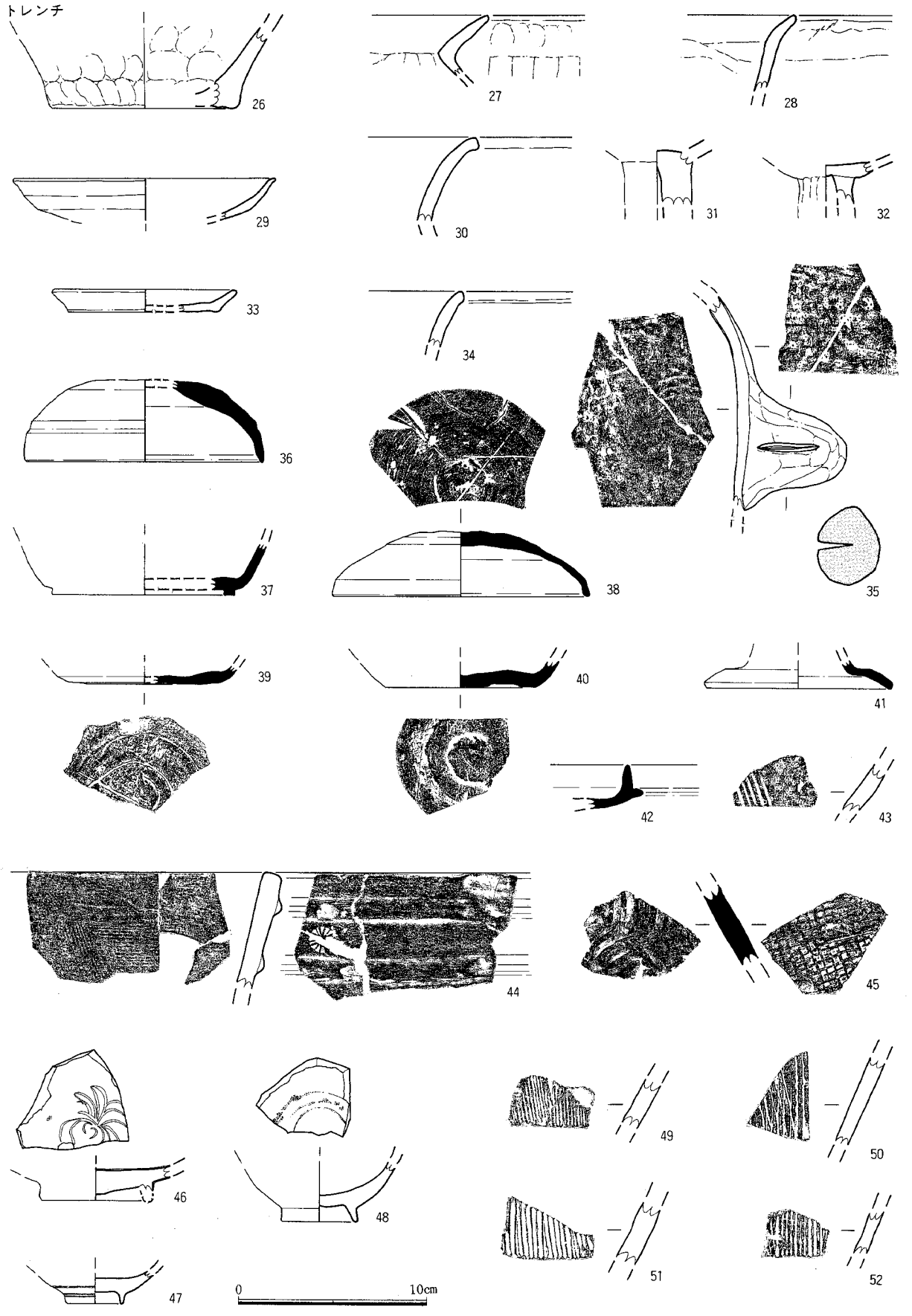


Fig.59　トレンチ出土遺物実測図（縮尺1/3）

Tab. 1　梅林遺跡第3次調査遺構一覧表

遺構名	旧遺構名	遺構の種類	形態（平面形）	規模（cm）		
				長	幅	面積（㎡）
SS101	SS101	水田	方形	1350	550＋α	70.18
SS102	SS102 SS105 SS106	水田	不整形	1110	810	88.32
SS103	SS103 SS114 SS115	水田	略方形	730	890＋α	62.54
SS104	SS104 SS107	水田	長方形	1400＋α	680＋α	87.18
SS108	SS108 SS109 SS116 SS117	水田	略長方形	1750＋α	1430＋α	260＋α
SS110	SS110 SS111	水田	略長方形	1500	400＋α	69.75
SS112	SS112 SS113	水田	略長方形	1600＋α	240＋α	28.68
SS118		水田	略長方形	575	630	33.69
SS119		水田	不整形	730＋α	1335	93.51
SS120	SS125	水田	略長方形	1130＋α	1200	150.45
SS121		水田	不整形	1450	260＋α	23.9
SS125		水田	略長方形	650	550	37.95
SS126		水田	不整形	1700	477	67.62
SS127		水田	不整円形	310	550	13.05
SS202	SS202B SS01～03	水田	不　明	960＋α	1020	97.92
SS204		水田	不整長方形	675	610	41.18
SS207		水田	不整長方形	490	700	34.3
SS208		水田	不整形	1260	907	114.28
SS209		水田	不整長方形	455＋α	375	17.06
SS210		水田	不整長方形	605	730	44.17
SS211		水田	不整長方形	445	243	10.81
SS212		水田	不整形	800	300	12
SS220		水田	略長方形	1030	390	40.28
SS221		水田	不整長方形	1020	520	53.04
SS222	SS222 SS223A	水田	不整長方形	690	607	41.88
SS223	SS223 SS223B	水田	不整形	790	900	35.55
SS224		水田	略隅丸長方形	740	400	29.6
SS225		水田	隅丸長方形	325	570	18.53
SS302		水田	不　明	1350	1010	136.35
SS304A		水田	不整長方形	535	317	16.96
SS304B		水田	不整長方形	560	305	17.08
SS307		水田	不整長方形	410	845	34.65
SS308		水田	不　明	860	480	41.28
SS309		水田	不整形	1040＋α	317	32.97
SS310		水田	不整形	500	410	20.5
SS311		水田	長方形	1250	700	87.5
SS312		水田	長方形	790	483	48.16
SS320		水田	不整長方形	1060	400	42.4
SS324		水田	不整長方形	670	290	19.43
SS326		水田	長方形	220	340	7.48

遺構名	旧遺構名	遺構の種類	形態（平面形）	規模（cm）		
				長	幅	面積（㎡）
SS327		水田	長方形	318	720	22.9
SS328		水田	長方形	415	615	25.52
SS329		水田	隅丸長方形	820	657	53.87
SS330		水田	不整形	740	355	26.27
SS404	SS404A SS404B	水田	略方形	1090	506	55.26
SS407		水田	隅丸長方形	410	843	34.56
SS409		水田	不整形	920	350	23
SS411		水田	不整長方形	890	300	26.7
SS412		水田	不整形	300	280	8.4
SS413		水田	不整隅丸長方形	760	293	22.27
SS414		水田	不整長方形	850	730	62.05
SS415		水田	不整長方形	500＋α	250	12.5

遺構名	旧遺構名	種類	遺構の形態		規模（cm）		
			平面形	断面形	長	幅	深さ
SD101	SD101（A）	溝		袋状	2080	130	45
SD104	SD122	溝		舟底状	3020	73	16
SD110		溝		二段掘り	1000	98	20
SD111		溝		舟底状	2400	230	37
SD112		溝		逆梯形	1050	55	24
SD120		溝		レンズ状	540	32	12
SD121		溝		逆梯形	710	60	7
SD123		溝		舟底状	300	35	7
SD124		溝		逆梯形	710	60	9
SD125		溝		逆梯形	1200	53	18
SD126	SD25B	溝		逆梯形	180	35	9
SD201	SD01	溝		逆梯形	2200	211	58
SD202		溝		袋状	1135	90＋α	58
SD211		溝		舟底状	2530	237	70
SD226		溝		逆梯形	500	40	25
SD306B	SD06	溝		逆梯形	3200	140	70
SD311	SD11	溝		舟底状	2530	190	52
SD326		溝		逆梯形	670	28	5
SD306A	SD306	溝		逆梯形	3210	153	78
SD403A	SD403	溝		舟底状	1770	50	24
SD403B		溝		逆梯形	1080	45	10
SD405		溝		逆梯形	3660	140	80
SD413		溝		舟底状	1830	44	22
SD416		溝		逆梯形	520	35	12
SD417		溝		逆梯形	450	50	37
SD418	SD401	溝		逆梯形	880	190	10＋α

遺構名	旧遺構名	遺構の種類	形態（平面形）	規模（cm）		
				長	幅	高
SF126		畦畔	台形	390	56	9.6
SF127		畦畔	台形	300	90	11
SF201	SF01	畦畔	蒲鉾状	3360	250	20
SF202	SF02	畦畔	台形	1420	83	8
SF203	SF03	畦畔	台形	1330＋α	100	6
SF204	SF04	畦畔	台形	780	90＋α	8
SF205	SF05	畦畔	台形	2140	103	7
SF206	SF06	畦畔	台形	320＋α	45	5
SF207	SF07	畦畔	台形	150＋α	45	5
SF210		畦畔	台形	550＋α	93	10
SF212		畦畔	台形	270	51.3	5
SF213		畦畔	台形	450	58	5
SF214		畦畔	台形	730	77	12
SF301	SF306	畦畔	台形	2000	70	10
SF301B	SF301	畦畔	台形	720	98	6
SF302	SF102	畦畔	台形	850	100	8
SF305	SF05	畦畔	台形	3730	105	8
SF307		畦畔	台形	450	50＋α	5.5
SF308		畦畔	台形	40	40	10
SF309		畦畔	台形	1740	64	7.7
SF310		畦畔	台形	540	60	4.7
SF311		畦畔	台形	780	67	10
SF312		畦畔	台形	480	100	6.1
SF313		畦畔	台形	1850	67	12
SF314		畦畔	台形	240	73	5.5
SF315		畦畔	台形	230	135	9
SF402		畦畔	台形	600	110	10
SF406		畦畔	台形	1300＋α	70	5
SF409		畦畔	台形	2220＋α	190	10
SF410		畦畔	台形	380	60	7
SF411		畦畔	台形	990	78	5
SF412		畦畔	台形	710	53	8
SF413		畦畔	台形	120	65	8

遺構名	旧遺構名	種類	遺構の形態		規模（cm）		
			平面形	断面形	長	幅	深さ
SX101		水口	不明	舟底状	108	104	30
SX102	SX02	水口	不整形	不整形	100＋α	150＋α	34
SK101		土壙	不整隅丸長方形	逆梯形	284	65	28
SK102		土壙	不整楕円形	舟底状	120	85	23
SK103		土壙	不整円形	逆梯形	85	75	13
SK104		土壙	隅丸長方形	逆梯形	3695	130＋α	50
SK105		土壙	不整隅丸長方形	逆梯形	288	93＋α	18
SK106	SX04 SX104	土壙	不整円形	摺鉢状	630	230	60＋α
SX103	SX03	七隈川蛇行部	不整形	不整形	840＋α	400＋α	33
SX106	自然堤防	自然堤防	—	—	—	—	—
SX201		土壙	不整隅丸長方形	逆梯形	118	72	34
SX303	北区 SX301	土壙	隅丸長方形	逆梯形	180	70	13
SX304		土壙	不整円形	逆梯形	110	106	15
SX305	SX205	土壙	逆梯形	不整形	700＋α	375	60
SX301	SD306 北側	柵	—	—	—	—	—
SX302	SD306 南側	柵	—	—	—	—	—
SX401	SD405 南側	柵	—	—	—	—	—
SX402	SD405 北側	柵	—	—	—	—	—
SX403		水口	不整形	不整形	150	80	360
SX501		柵	—	—	—	—	—

Tab. 2　梅林遺跡第3次調査出土土器・陶磁器一覧表

挿図番号	遺物番号	出土遺構	登録番号	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
11	1	SS101	00001	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土に白色の砂粒を多く含む。焼成良好。灰色。	
11	2	SS102	00006	土師器	甕	17.7		(4.1)	口縁部片。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂粒を含む。焼成良好。黄灰色。	
11	3	SS102	00007	土師器	鉢			(3.1)	口縁部片。外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂粒を含む。焼成良好。黄灰色。	
11	4	SS102	00036	土師器	甕			(4.5)	口縁部片。内外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂粒を多く含む。焼成良好。灰黄色。	
11	5	SS102	00042	須恵器	坏蓋			(2.1)	天井部外面は左回りのヘラケズリ調整。内面はヨコナデ。	胎土に1～2㎜の砂粒をごく僅かに含む。焼成堅緻。内面は淡灰色、外面は灰青色。	
11	6	SS102	00008	須恵器	坏蓋	13.2		(2.8)	天井部外面はヨコナデ調整。口唇部内側に沈線がめぐる。	胎土に1㎜の砂粒を僅かに含む。焼成良好。灰色。	
11	7	SS102	00043	須恵器	甕				内面は平行叩き。	胎土に細砂粒を含む。焼成良好。褐灰色。	外面磨滅
11	8	SS102	00009	須恵器	坏蓋			(3.0)	口縁部片。内外面ヨコナデ調整。口唇部内側に浅い沈線がめぐる。	胎土に1㎜の砂粒を僅かに含む。焼成良好。内面は灰色、外面は暗灰色。	
11	9	SS102	00041	須恵器	坏蓋			(2.4)	口縁部片。内外面ヨコナデ調整。	胎土は精良。焼成やや軟質。灰色。	
11	10	SS102	00037	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土は細かい。焼成良好。内面は灰色、外面は暗灰色。	
11	11	SS102	00011	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土に1～2㎜の砂粒を含む。焼成良好。内面は灰色、外面は暗灰青色。	
11	12	SS102	00039	白磁	碗			(3.0)	玉縁口縁部片。	素地は細かい。砂粒を微量に含む。焼成良好。白灰色。釉は淡灰色。	Ⅳ類
11	13	SS102	00010	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は同心円の当て具痕。	胎土に1～2㎜の砂粒を含む。焼成良好。灰色。	
11	14	SS102	00038	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は同心円の当て具痕。	胎土に1～2㎜の砂粒を僅かに含む。焼成良好。内面は灰色、外面は暗灰色。	
12	15	SS103	00108	土師器	甕	19.6		(8.2)	口縁部片～胴部片。口縁部内外面はナデ調整。胴部内面はヘラケズリ調整。	胎土に1～3㎜の白色、灰色の砂粒を含む。焼成良好。褐灰色。	
12	16	SS103	00106	土師質土器	鉢			(5.1)	内外面ナデ調整。口縁部はヨコナデ調整。内面に煤付着。	胎土に白色の微砂粒を少し含む。焼成良好。淡褐色。	
12	17	SS103	00112	土師器	鉢	11.8	10.0	1.75	糸切り底。	胎土は精緻。焼成良好。赤褐色。	
12	18	SS103	00016	須恵器	坏蓋				つまみ。内外面はヨコナデ調整。扁平な擬宝珠形。	胎土は細かい。焼成良好。灰色。	
12	19	SS103	00017	須恵器	硯			(1.1)	口縁部片。外面は5本単位の波状文。内面はナデ調整。口唇部内側に沈線がめぐる。	胎土は細かい。焼成良好。灰色。	
12	20	SS103	00018	須恵器	甕				胴部片。外面は平行叩き。内面は同心円の当て具痕。	胎土に1㎜の砂粒を僅かに含む。焼成やや軟質。暗灰色。	
12	21	SS103	00020	須恵器	甕				胴部片。外面は平行叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土に細砂を僅かに含む。焼成良好。内面は暗灰色、外面は灰色。	内面磨滅
12	22	SS103	00113	須恵器	高坏	10.0		(3.3)	口縁部片。体部との境に段を有する。内外面ヨコナデ調整。	胎土は精緻、白色の微砂を僅かに含む。焼成良好。灰色。外面上面に自然釉。	無蓋高坏
12	23	SS103	00019	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き後カキ目調整。内面は青海波の当て具痕。	胎土は細かい。焼成やや軟質。灰色。	
12	24	SS103	00022	須恵器	瓶				内面はヨコナデ調整。	胎土に細砂を含む。焼成良好。外面は暗灰色、内面は灰色。	
12	25	SS103	00021	須恵器	甕				胴部片。外面は平行叩き後、カキ目消し。内面は同心円の当て具痕。	胎土に1～2㎜の砂粒を含む。焼成良好。灰色。	
12	26	SS103	00025	陶器	鉢	24.8		(3.6)	肉厚L字状口縁部片。	素地に1㎜の砂粒を僅かに含む。焼成良好。灰褐色。釉は濃い褐色。	片口
12	27	SS104	00048	土師器	坏		7.1	(1.4)	底部片。内外面ナデ調整。外底部は糸引き後ハケ調整。	胎土に1㎜の砂粒を僅かに含む。焼成軟質。褐灰色。	赤焼け土器
12	28	SS104	00046	土師器	坏		10.0	(8.0)	底部片。内外面ナデ調整。糸切り底。	胎土に1㎜の砂粒を僅かに含む。焼成良好。褐灰色。	二次火を受ける

挿図番号	遺物番号	出土遺構	登録番号	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
12	29	SS104	00051	瓦質土器	鉢			(2.1)	内外面ハケ目調整。	胎土は1㎜の砂粒を含む。焼成やや軟質。内面は灰黒色、外面は灰黄色。	
12	30	SS104	00049	須恵器	杯蓋		8.0	(2.5)	底部片。内外面ヨコナデ調整。	胎土は精良。焼成堅緻。内面は灰色、外面は灰黒色と灰色。	小型壺か？
12	31	SS104	00050	須恵器	坏蓋			(2.8)	つまみは平坦な擬宝珠形。内外面ヨコナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂粒を僅かに含む。焼成良好。灰色。	摘み付き
12	33	SS104	00026	瓦質土器	鉢	22.6		(5.1)	口縁部片。外面はナデ調整。内面はヨコハケ調整。	胎土に1㎜の砂粒を含む。焼成良好。淡灰色。	
12	34	SS104	00031	青白磁	合子か		2.4	(2.4)	底部片。内底部に貫入が、一部に釉垂れが見られる。底部外面は露胎。外面に縞蓮弁文。	素地は細かい。焼成良好。白灰色。釉は緑色。	片切り彫り
12	35	SS104	00029	白磁	碗			(2.6)	玉縁口縁部片。一部に釉垂れが見られる。	素地は細かい。焼成良好。灰緑色。	Ⅳ類
12	36	SS104	00030	白磁	皿			(2.5)	口縁部片。口縁下部に沈線がめぐる。	素地は精緻。焼成良好。灰色。透明釉。	
12	37	SS104	00052	青磁	小鉢			(2.1)	口縁はくの字に折れ内弯する。	素地は精緻。焼成良好。淡緑色の釉は厚い。	
13	38	SS108	00126	弥生土器	甕				口縁部片。逆L字形口縁。口縁部外面に煤付着。	胎土に白、灰色の微砂粒を多く含む。焼成良好。赤褐色。	後期
13	39	SS108	00070	土師器	高坏	14.2		(2.9)	口縁部片。外面はヨコナデ調整。内面はナデ調整。	胎土は精良。焼成やや軟質。内面は灰黄色。外面は黄灰色。	
13	40	SS108	00057	土師器	鉢				外面に三角形の突帯。後ナデ調整。内面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂粒を多く含む。焼成良好。黄灰色。	
13	41	SS108	00068	土師器	甕			(2.0)	外面は突帯を貼り付け後ナデ調整。内面はナデ調整。	胎土に1㎜前後の砂粒を多く含む。焼成良好。内面は灰色、外面は褐味を帯びた暗灰色。	
13	42	SS108	00056	土師器	把手	長さ3.2		厚み2.2	全体にナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂粒を多く含む。焼成良好。黄灰色。	
13	43	SS108	00131	黒色土器	皿	10.0	7.7	1.3	内外面ヨコナデ調整。ヘラ磨き。糸切り底。	胎土は精緻。焼成良好。淡黒褐色。	
13	44	SS108	00116	土師器	皿	9.6	8.0	1.3	外面はヨコナデ調整。内面に丹付着。糸切り底。	胎土に微砂粒を少し含む。焼成良好。淡褐色。内面に丹付着。	
13	45	SS108	00119	土師器	皿	9.4	7.6	1.6	内外面ナデ調整。内面に煤付着。糸切り底。	胎土は精良。焼成良好。赤褐色。	
13	46	SS108	00118	土師器	皿	10.0	8.2	0.9	内外面ナデ調整。糸切り底。	胎土に1～2㎜の白色の砂粒を含む。焼成良好。暗灰色。	磨滅
13	47	SS108	00121	須恵器	坏	10.2		(3.2)	口縁部片。立ち上がりはやや内傾する。内外面ヨコナデ調整。	胎土に3～4㎜の白、灰色の砂粒を含み粗い。焼成やや甘い。外面は青灰色、内面は濃小豆色。	
13	48	SS108	00123	瓦質土器	碗	11.0		1.5	底部片。内外面ナデ調整。貼り付け高台の断面形三角形状。	胎土は精緻。白灰色砂粒を含む。焼成良好。白灰色。	
13	49	SS108	00117	土師器	皿	10.8	9.6	1.1	内外面ナデ調整。	胎土は精良。焼成良好。.暗褐白色。	磨滅
13	50	SS108	00122	内黒土器	椀	10.0		1.1	底部片。外面はナデ調整。貼り付け高台の断面三角形状。	胎土は精緻。焼成良好。外面は白灰色、内面は黒色。	
13	51	SS108	00069	須恵器	高坏		11.8	(2.6)	胴部片。外面は格子目叩き。	胎土は1㎜の砂粒を僅かに含む。焼成やや軟質。内面は灰色。外面は淡灰色。	
13	52	SS108	00058	須恵器	甕				胴部片。外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂粒を含む。焼成良好。暗灰色。	外面磨滅
13	53	SS108	00059	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は同心円の当て具痕。	胎土に1㎜の砂粒を含む。焼成やや軟質。内面は褐灰色、外面は淡灰褐色。	
13	54	SS108	00061	瓦質土器	鉢	24.8		(4.0)	口縁部片。外面はナデ調整。内面はヨコ・ナナメのハケ目調整。4本（以上）単位の下し目。	胎土に1㎜の砂粒を含む。焼成良好。灰白色。	
13	55	SS108	00060	瓦質土器	坏		8.3	(2.0)	底部片。内外面ナデ調整。底部は糸切り。	胎土に1㎜の砂粒を僅かに含む。焼成やや軟質。暗黄灰色。	
13	56	SS108	00124	青磁	碗			(5.1)	外面に縞蓮弁文を施す。	素地に砂粒を少し含む。焼成やや甘い。灰色。釉は緑黄色。	龍泉窯
13	57	SS108	00134	陶器	鉢				内面は鶴、外面は唐草文様を白と黒の土で象嵌。	素地は精緻。焼成良好。灰色。釉は灰緑色。	李朝
13	59	SS108	00132	染付	碗			(3.1)	口縁部片。内外面呉須による染付。釉に貫入が見られる。	素地は精緻。焼成良好。白灰色。	肥前系

挿図番号	遺物番号	出土遺構	登録番号	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
13	60	SS108	00133	染付	碗			(3.0)	口縁部片。外面に呉須による染付。	素地は精緻。焼成良好。白色。	肥前系
13	61	SS108	00062	陶器	碗			(1.9)	口縁部片。口縁端部をやや外につまみ出す。釉に貫入が見られる。	素地は細かい。焼成良好。やや暗い灰黄色。釉は緑色。	唐津焼
13	62	SS108	00063	白磁	紅皿		3.5	(0.95)	外底部は露胎。	素地は精緻。焼成良好。白灰色。青みを帯びた透明釉。	
14	64	SS110	00087	須恵器	瓶	8.0		(3.8)	口縁～胴部片。ヨコナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。灰色。	
14	65	SS110	00074	須恵器	甕			(5.0)	頸部片。口縁部はヨコナデ調整。外面は格子目叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土に1～2㎜の砂粒と3～5㎜の砂礫を含む。焼成良好。暗灰色。	
14	66	SS110	00072	土師器	甕			(2.7)	口縁部片。外面はナデ調整。内面は指頭圧痕。ナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂粒を多く含む。焼成良好。内面は灰褐色、外面は内面よりやや暗い。	
14	67	SS110	00071	土師器	碗		6.0	(1.0)	底部片。内外面ナデ調整。内底部見込みはへら磨き。貼り付け高台。	胎土に1㎜の砂粒をごく僅か含む。焼成良好。淡灰褐色。内面は一部黒変する。	
14	68	SS110	00086	土師質土器	摺鉢	30.8		(4.0)	口縁部片。外面は指頭圧痕後ナデ調整。内面はヨコ～ナナメハケ調整。下し目を施す。	胎土に白、黒色の微砂粒を多く含む。焼成良好。黄灰色。	片口
14	69	SS110	00075	土師器	皿	8.9		1.0	糸切り底。板目有り。	胎土は細かい。焼成軟質。褐灰色。	
14	70	SS110	00076	陶器	碗			(3.1)	器壁は淡い。	素地は細かい。焼成良好。暗灰色。釉は茶褐色。	天目
14	71	SS110	00077	青磁	碗			(2.0)	外面は猫櫛目文。釉に貫入が見られる。	素地は細かい。焼成良好。淡灰色。緑色の釉。	同安窯系
14	72	SS110	00081	青白磁	紅皿	4.0	1.8	1.2	口縁～底部片。外面は型押しの貝殻文。	素地は精緻。焼成良好。白色釉。	
14	73	SS110	00079	青磁	香炉			(4.4)	体部内面は露胎。	素地は精密。焼成良好。白色。緑色釉。	
14	74	SS110	00080	染付	碗	10.0		(3.6)	外面に呉須で矢羽文を描く。	素地は精緻。焼成良好。灰色。淡緑色釉。	
14	75	SS110	00078	染付	皿	13.7	9.0	3.4	呉須で紋様を描く。外底部畳付けは露胎。	素地は精緻。焼成良好。白色。透明釉。	
14	76	SS112	00101	陶器	鉢			(3.5)	底部片。内外面ナデ調整。	胎土に白色の微砂を僅かに含む。焼成良好。暗灰青色、釉は淡黄褐色。	
14	77	SS112	00091	陶器	摺鉢			(3.3)	内面に8本単位の下し目。	素地は精緻。焼成良好。外面は明茶褐色、内面は茶褐色。	
14	78	SS112	00093	陶器	摺鉢			(3.7)	外面はヨコナデ調整。内面に6本単位の下し目。	素地に白色の微砂粒を含む。焼成良好。赤褐色。	
14	79	SS112	00092	陶器	摺鉢			(3.7)	内面に8本単位の下し目。口縁部はナデ調整。	素地に白色の砂粒を含む。焼成軟。暗い小豆色。	
14	80	SS112	00095	染付	皿	8.0	4.8	2.2	内面に呉須で蝶の文様を描く。口縁は輪花。	素地は精緻。焼成良好。濃青色。釉は透明。	
14	81	SS112	00094	陶器	皿		4.2	(1.5)	底部片。内底部見込みに目痕あり。高台は低い。	素地は精緻。焼成良好。外面は明茶褐色、内面は茶褐色。淡灰青色。透明釉。	李朝
14	82	SS126	00137	土師器	皿	12.5	10.0	1.2	内外面ナデ調整。糸切り底。	胎土に2～4㎜の灰色砂粒を少し含む。焼成良好。赤褐色。	
14	83	SS126	00136	土師器	土器錘	径5.8		厚み1.2	内面に指圧痕後ナデ調整。	胎土は粗い。1㎜前後の白色の砂粒を多く含む。焼成良好。赤褐色。	
14	84	SS126	00141	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き後ハケ調整。内面は青海波の当て具痕。	胎土は精緻。焼成やや軟質。淡茶褐色。	
14	85	SS126	00140	須恵器	坏身			(2.2)	口縁部片。立ち上がりは短く直立する。	胎土に白色の砂粒を僅かに含む。焼成良好。青灰色。	
14	86	SS126	00143	須恵器	蓋			(2.2)	口縁部片。内外面ヨコナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。灰黒色。	
14	87	SS126	00144	須恵器	坏	15.6	10.6	5.1	内外面ヨコナデ調整。底部はヘラケズリ調整。	胎土に白色微砂粒を少し含む。焼成良好。暗灰青色。	
14	88	SS126	00142	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土に白色微砂粒を少し含む。焼成良好。青灰色。	
14	89	SS126	00139	瓦質土器	鉢			(5.1)	口縁部外面はヨコナデ調整。外面はナデ調整。内面はハケ目調整。	胎土に白色の砂粒をわずかに含む。焼成良好。灰色。	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	登録番号	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
14	90	SS126	00138	瓦質土器	鉢			(3.6)	内外面ナデ調整。	胎土に白色の微砂粒を含む。焼成やや甘い。灰白色。	
14	91	SS126	00145	白磁	紅皿	6.0		(1.5)	口縁部片。外面に陽刻の型作り花文。	素地は精緻。焼成良好。白色。透明釉。	
15	92	SD101	00167	土師器	高坏	14.0		3.8	外面はナデ調整。内面はヨコナデ調整。	胎土は精良。焼成良好。褐白色。	
15	93	SD101	00166	土師質土器	椀	6.0		(4.7)	内外面はヨコナデ調整。内底見込みに沈線。貼り付け高台。	胎土は精緻。焼成良好。褐灰色。	
15	94	SD110	00171	縄文土器	鉢				外面はヨコ方向の条痕。口縁部内側に細い沈線がめぐる。	胎土は粗い。1～2㎜㎜の白灰色の砂粒を多く含む。焼成良好。黄土色。	
15	95	SD111	00176	縄文土器	鉢				外面に指頭圧痕、条痕。内面は条痕の後ナデ調整。	胎土に微砂粒と2～3㎜の石英を含む。焼成良好。灰黒色。	
15	96	SD112	00181	縄文土器	鉢			(3.7)	外面は口縁部に2条の沈線。頸部にタテ櫛目描き。	胎土に白色の微砂を多く含む。焼成良好。外面は茶褐色、内面は黒色。	
15	97	SD112	00184	須恵器	坏身		10.4	(1.9)	外面はヨコナデ調整。天井部にヘラケズリ、沈線。	胎土に白色の微砂を含む。焼成良好。青灰色。	
15	98	SD121	00183	土師器	皿	10.2	8.4	1.1	底部は板状圧痕。ハケ目	胎土に白、黒色の微砂を含む。焼成良好。赤褐色。	磨滅
15	99	SX101	00157	須恵器	鉢		8.0	(4.4)	内外面ナデ調整。底部はヘラケズリ調整。糸切り底。	胎土に白色の砂粒を含む。焼成良好。灰色。	
15	100	SX101	00156	土師質土器	碗		6.0	12.8	底部片。内外面ナデ調整。貼り付け高台。	胎土は精良。焼成良好。淡褐白色。	
15	101	SX101	00158	須恵器	器台			(6.8)	外面は7本単位の櫛描き波状文。内面はヨコナデ調整。三角形の透孔を持つ。	胎土は精良。焼成良好。灰色。	
15	102	SX102	00161	須恵器	高坏		8.0	(3.2)	脚部片。内外面ヨコナデ調整。	胎土に白色の微砂を含む。焼成良好。外面は黒灰色、内面は青灰色。	
15	103	SK104	00151	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土に微砂を少し含む。焼成良好。赤褐色。濃青灰色。	
15	104	SK104	00152	陶器	摺鉢				外面はヨコナデ調整。内面は9本(以上)単位の下し目。	胎土に白色微砂を含む。焼成良好。濃小豆色。	
15	105	SX103	00162	須恵器	坏蓋	14.6		(4.4)	天井部外面は右回りのヘラケズリ調整。口唇部内側に沈線がめぐる。	胎土に1～2㎜の砂粒を含む。焼成やや軟質。淡灰色。天井部外面にヘラ記号。	ヘラ記号
25	1	SS202	00204	須恵器	坏身	12.0		(3.3)	口縁部片。口縁部の立ち上がりはやや内傾。内面の体部との境に段を有する。	胎土に白色微砂を多く含む。焼成良好。外面は黒灰色、内面は灰色。	
25	2	SS202	00203	土師器	高坏		8.0	(3.7)	坏部の底部片。内外面はヨコナデ調整。	胎土は精良。焼成良好。微砂を含む。明褐白色。	
25	3	SS202	00201	土師器	甑	長さ5.4		厚み3.2	牛角状の把手。ナデ調整。上面中央に溝を切る。	胎土に1～2㎜の白、灰色の砂粒を含む。焼成やや軟質。淡褐灰色。	欠損
25	4	SS204	00208	須恵器	坏身		14.0	(2.6)	口縁部片。立ち上がりは短くやや内傾。内外面ヨコナデ調整。	胎土に白色の微砂粒を含む。焼成甘い。茶褐色。	赤焼け土器
25	5	SS204	00209	須恵器	坏				口縁部片。立ち上がりは短くやや内傾する。内外面ヨコナデ調整。	胎土に白色微砂を僅かに含む。焼成良好。灰色。	
25	6	SS204	00207	土師器	皿		7.6	(1.3)	外面はナデ調整。内面はヨコナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。暗褐白色。	
25	7	SS207	00211	土師器	皿	12.6	9.8	1.9	内外面はナデ調整。糸きり底。	胎土は精緻。焼成甘い。暗黄色。	
25	8	SS207	00213	須恵器	坏蓋	11.6		(1.7)	内外面はナデ調整。口縁部内面の帰りは小さい。	胎土に白色の微砂粒を含む。焼成良好。灰色。	
25	9	SS207	00212	須恵器	坏	10.6		(1.3)	内外面はナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。淡灰褐色。	生焼け
25	10	SS207	00214	青磁	碗	10.0		(2.2)	底部片。内面見込みに目跡。	胎土に黒色の微砂粒を僅かに含む。焼成良好。外面は赤みがかった灰色。黄緑色釉。	越州窯
25	11	SS209	00216	土師器	甕	28.4		(14.5)	外面はタテハケ調整。ヨコ～ナナメハケ調整	胎土に微砂粒と2㎜前後の石英を多く含む。焼成良好。褐灰色。	二次火を受ける
25	12	SS209	00222	瓦質土器	鼎脚	長さ(7.0)		厚み2.5	全体にナデ調整。指頭圧痕。外面に煤付着。	胎土に黒色の微砂粒を含む。焼成良好。灰色。	
25	13	SS224	00226	須恵器	甕				胴部片。外面は疑似格子目叩き。内面は同心円の当て具痕。	胎土に白色の微砂粒を僅かに含む。焼成良好。内面は暗灰色、外面は黒灰色。	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	登録番号	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
25	14	SS224	00227	陶器	捏鉢			(4.5)	無釉陶器。内面に2段の突帯。	素地に白色の砂粒を多く含む。焼成良好。淡小豆色。	泉州窯
25	15	SF202	00205	染付	小碗	6.0	5.0	3.8	呉須による文様。底部はケズリ調整。露胎。	素地は精緻。焼成良好。白色。呉須は青灰色。透明釉。	
26	16	SD201	00243	須恵器	坏蓋			(4.0)	天井部外面はヘラけずり調整。内面はヨコナデ調整。	胎土に白色の微砂粒を僅かに含む。焼成良好。外面は黒灰色、内面は灰色。天井部外面にヘラ記号。	
26	17	SD201	00241	須恵器	坏蓋	12.0		(2.6)	内外面はヨコナデ調整。	胎土は精緻。白色の微砂粒を僅かに含む。焼成良好。褐灰色。	
26	18	SD201	00239	須恵器	坏蓋	12.0		(2.2)	内外面はヨコナデ調整。	胎土に白色の微砂粒を僅かに含む。焼成良好。黒灰色。	
26	19	SD201	00240	須恵器	坏蓋			(2.3)	内外面はヨコナデ調整。口縁部に溝有り。	胎土は精緻。白色の微砂粒を含む。焼成良好。灰色。	
26	20	SD201	00238	須恵器	坏蓋	10.0		(2.35)	口縁部片。口縁部内側に沈線がめぐる。内外面ヨコナデ調整。	胎土に白色の微砂粒を含む。焼成良好。灰色。	
26	21	SD201	00234	内黒土器	椀	7.6		(1.5)	底部片。内面はナデ調整。貼り付け高台。	胎土は精緻。焼成良好。内面は黒灰色、外面は淡茶褐色。	
26	22	SD201	00246	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土は精緻。焼成良好。灰色。	
26	23	SD201	00244	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土は精緻。焼成良好。外面は黒灰色、内面は灰色。	
26	24	SD201	00245	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は同心円の当て具痕。	胎土に白色の微砂粒を僅かに含む。焼成良好。青灰色。	
26	25	SD201	00233	土師器	甕	14.9		(4.3)	口縁部片。	胎土に1㎜前後の石英、白色の微砂粒を含む。焼成良好。明褐色。	二次火を受ける 磨滅
26	26	SD201	00232	土師器	鉢				頸部外面はナナメヨコのハケメ調整。内面はヘラケズリ。	胎土は精緻。白色の微砂粒を含む。良好。淡茶褐色	
26	32	SD202	00251	韓式土器	鉢	24.0		(8.2)	玉縁口縁部片。内面胴部は青海波当て具痕。	胎土に1～3㎜の石英粒を含む。焼成良好。暗黄土色。	磨滅
26	33	SD202	00252	須恵器	坏	10.0		(2.7)	内外面ヨコナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。灰色。	生焼け 00311と同一
26	34	SD202	00253	須恵器	坏蓋			(2.7)	口縁部片。口唇部内側に沈線がめぐる。外面はナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。外面は黒灰色、内面は灰色。	
26	35	SD211	00257	縄文土器	鉢			(2.9)	外面にヨコ方向の浅い沈線が2条見られる。口唇部に刻み目。	胎土は白、灰色の砂粒を多く含む。焼成良好。濃黄褐色。	
26	36	SD211	00256	縄文土器	鉢				外面に凹線文を施している。内面はナデ調整。	胎土に滑石の粉末と1㎜前後の白色の砂粒を多く含む。焼成良好。濃小豆色。	
31	1	SS302	00304	須恵器	坏	10.0		4.2	立ち上がりは内傾し、蓋受けは丸味を帯び、沈線がめぐる。内外面ヨコナデ調整。	胎土に白、黒色の微砂粒を含む。焼成良好。灰色。断面は暗小豆色。	
31	2	SS302	00301	土師器	飯把手	長さ(6.4)		厚み4.0	全体にナデ調整。	胎土は粗い。2～3㎜の石英の砂粒を多く含む。焼成良好。外面は黒灰褐色、内面は灰色。	
31	4	SS302	00303	須恵器	坏蓋	13.6		3.2	内外面はヨコナデ調整。外面天井部はヘラケズリ、ヘラ記号。	胎土に白色の微砂粒を含む。焼成良好。灰色。	ヘラ記号
31	5	SS304A	00309	土師器	甕	27.8		(15.0)	口縁部はヨコケズリ調整。外面はタテハケ調整。内面はタテ目、ヨコのヘラケズリ。	胎土は精良、1～2㎜の砂粒を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。	
31	6	SS304A	00307	土師器	坏	10.0		(2.3)	内外面はヨコナデ調整．口縁に圧痕、輪花有り。	胎土は精緻。焼成良好。灰褐色。	
31	7	SS304A	00308	土師器	Ⅲ	7.0		(1.7)	外面はナデ調整。	胎土は精緻。微砂粒を含む。焼成良好。淡茶褐色。	
31	8	SS304A	00311	須恵器	坏	12.0		(3.5)	口縁部はナデ調整。内面はナデ調整。	胎土は精緻。焼成やや甘い。灰白色。	生焼け 00252と同一
32	9	SD306B	00331	縄文土器	鉢			(5.1)	口縁部片。5条の刺突文。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の灰白色の砂粒を含み、少し粗い。焼成良好。淡茶褐色。	
32	10	SD306	00332	縄文土器	鉢				外面凹線文、刺突文。	胎土に滑石の粉末を含む。焼成良好。外面は赤褐色、内面は黒褐色。	阿高系
32	11	SD306B	00346	縄文土器	鉢			(4.0)	外面に突帯上に瓜形文。内面はナデ調整。	胎土は粗い。1～4㎜の灰色の砂粒を含む。焼成良好。黒色。	
32	12	SD306A	00318	縄文土器	鉢			(2.7)	口縁部片。外面はタテ方向の押し引き沈線。内面はナデ調整。	胎土に灰色の微砂粒を含む。焼成良好。黒褐色。	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	登録番号	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
32	13	SD306A	00319	縄文土器	浅鉢			(4.4)	口縁部片。外面はタテ方向の条痕。内面はヨコナデ調整。	胎土は粗い。微砂粒、雲母を含む。焼成良好。淡茶褐色。	
32	14	SD306A	00316	縄文土器	鉢		10.0	(2.7)	底部片。内外面ナデ調整。	胎土は粗い。1～5㎜白色の砂粒を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。	
32	15	SD306A	00317	縄文土器	鉢			(5.0)	口縁部片。内外面ナデ調整。	胎土に白、灰色の微砂粒と雲母を多く含む。焼成良好。黒褐色。	
32	16	SD306A	00320	縄文土器	甕				外面は櫛描き文。内面はナデ調整。	胎土は精緻。微砂粒を含む。焼成良好。外面は灰褐色、内面は灰色。	
32	17	SD306A	00324	須恵器	杯		9.0	(1.3)	底部片。底部は回転ヘラケズリ後ナデ調整。内面はナデ調整。貼り付け高台。	胎土は精緻。焼成あまい。淡褐色。	赤焼け土器
32	18	SD306B	00339	土師器	壷	10.6		(10.6)	口縁部内外面指ナデ調整。胴部外面の下部は指ナデ後、ハケ目調整。内面はヘラケズリ調整。	胎土に1～2㎜の砂粒を含む。焼成良好。内面は灰黄色、外面は暗灰黄色。	外面は二次火を受け、一部黒変する
32	19	SD306B	00335	土師器	甕	12.2		(6.3)	口縁部外面はナデ調整、内面は指ナデ調整。胴部内面はヘラケズリ調整。	胎土に微砂粒を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。	
32	20	SD306B	00337	土師器	甑把手	長さ8.8		厚み4.3	接合は挿し込み式。全体に指ナデ調整。	胎土に2㎜前後の白灰色の砂粒を含む。焼成良好。黄白褐色。	表面欠損
32	21	SD306B	00334	土師器	甕			(4.0)	口縁部片。口縁部は強く外反する。内外面ナデ調整。	胎土に白灰色の微砂粒、雲母を多く含む。焼成良好。黄褐色。	
32	22	SD306B	00333	土師器	甕			(3.2)	口縁部片。内外面ナデ調整。	胎土は精良。焼成良好。黄灰色。	
32	23	SD306A	00322	土師器	壷				口縁部片。内外面ナデ調整。器壁は淡い。	胎土に白色の微砂粒を含む。焼成良好。明黄褐色。	
32	24	SD306A	00326	須恵器	甕	20.0		(4.8)	口縁部片。口唇部外面に突帯を貼り付ける。内外面ヨコナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。外面は暗灰色、内面は灰色。	
32	25	SD306A	00325	須恵器	坏			(3.3)	口縁部片。内外面ヨコナデ調整。	胎土は精緻。白色の微砂粒を含む。焼成良好。灰黒色。	
32	26	SD306B	00340	須恵器	甕				玉縁状の口縁部片。	胎土は精良。焼成良好。灰黒色。	
32	27	SD306B	00336	須恵器	壷				胴部片。外面は叩き。内面は同心円の当て具痕。	胎土に灰色の微砂を含む。焼成あまい。黄灰色。	生焼け
32	28	SD306B	00338	須恵器	甕				胴部片。外面は平行き。内面は青海波の当て具痕。	胎土は精良。焼成良好。青灰色。	
33	29	SD306	00352	土師器	壷			(4.0)	口縁部片。内外面ナデ調整。	胎土は微砂を多く含む。焼成良好。内外面は黄灰色。	
33	30	SD306	00353	土師器	鉢			(4.1)	口縁部外面に三角形の突帯貼付。外面はヘラナデ調整。内面はヨコナデ調整。	胎土に白色の微砂を多く含む。焼成良好。黄灰色。	
33	31	SD306	00355	須恵器	坏蓋	13.4	7.8	3.9	口唇部内側に沈線。天井部外面はヘラケズリ、ヘラ記号。	胎土に白色の砂粒を少し含む。焼成良好。灰色。	ヘラ記号
33	32	SD306	00356	須恵器	坏蓋				内外面ヨコナデ調整。天井部外面はヘラケズリ。	胎土はやや粗い。2～3㎜の石英の砂粒を含む。焼成良好。淡青灰色。	
33	33	SD306	00351	土師器	甑	31.2		(7.4)	口縁部は外面を擬似肥厚させて玉縁状にして沈線を施す。胴部外面は格子目叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土は精良。微砂を含む。焼成あまい。黄灰色。	
41	1	SS404	00402	土師器	甕			(3.5)	口縁部片。外面はヨコ方向のヘラナデ調整。	胎土は精緻。砂粒を含む。焼成良好。淡茶灰褐色。	
41	2	SS404	00401	瓦器	皿		10.8	(2.7)	内外面ヨコナデ調整。内面に漆付着。貼り付け高台の断面形は截頭三角形。	胎土に灰色の砂粒を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	須恵器の生焼けか？漆容器か？
41	3	SF402	00411	須恵器	坏身			(2.5)	口縁部片。立ち上がりは直立し、蓋受けに沈線がめぐる。	胎土に微砂粒を多く含む。焼成良好。黒灰色。	煤付着
41	4	SF402	00412	須恵器	甕				胴部片。外面は平行叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土に3㎜前後の砂粒を含む。焼成良好。青灰色。	
41	5	SS407	00407	土師質土器	鉢			(2.2)	外面はナデ。内面は条痕。	胎土に微砂粒、雲母片を含む。焼成良好。黒褐色。	磨滅
41	6	SS407	00409	土師器	鉢				外面はタテの櫛描き、沈線、管文有り。内面はナナメヘラケズリ調整。	胎土は精良。焼成良好。灰黄褐色。	煤付着
41	7	SS407	00408	縄文土器	鉢		7.6	(2.2)	底部片。内外面はナデ調整。煤付着。	胎土に砂粒を多く含む。焼成良好。灰黄褐色。	
41	8	SS407	00406	縄文土器	鉢			(2.5)	口縁部片。外面はナナメ方向の櫛描き文。内面はヨコ方向の櫛目。	胎土に微砂粒を含む。焼成良好。黒褐色。	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	登録番号	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
41	10	SD305	00421	土師器	甕	18.0		(9.3)	口縁部外面はナデ調整。胴部外面はタテハケ調整。	胎土は粗い。1～2㎜の砂粒を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。	
41	11	SD305	00423	土師器	甑	長さ(7.4)		厚み3.6	接合は挿し込み式。全体にナデ調整。	胎土は精良。焼成良好。淡褐白色。	
41	12	SD305	00429	須恵器	高坏				内外面はヨコナデ調整。脚部は貼り付け。	胎土に微砂粒を多く含む。焼成良好。灰色。	
41	13	SD305	00424	須恵器	坏蓋	13.8		3.2	内外面はヨコナデ調整。外面天井部はヘラケズリ。	胎土は精良。白色の微砂粒を多く含む。焼成良好。黒灰色。	
41	14	SD305	00427	須恵器	坏身			(2.3)	口縁部片。立ち上がりは直立気味で、蓋受けは平坦。	胎土は精良。焼成良好。灰色。	
41	15	SD305	00425	須恵器	坏身	13.4		(2.4)	口縁部片。立ち上がりは内傾し、蓋受けは丸みを帯びる。	胎土は2㎜前後の灰色の砂粒を僅かに含む。焼成ややあまい。淡赤褐色。	赤焼け土器
41	16	SD305	00426	須恵器	坏身	13.0		(2.7)	口縁部片。立ち上がりはやや内傾し、蓋受けは小さい。	胎土は精良。焼成良好。灰色。	
42	17	SD403	00417	土師器	鉢	18.2		(6.3)	口縁部片。口縁部は肥厚し、くの字形に屈曲。口縁部はヨコナデ調整。体部外面はタテのハケ目調整。内面はヘラケズリ調整。	胎土に微砂粒を多く含む。焼成良好。褐灰色。	
42	18	SD403	00418	土師器	甕	20.0		(6.6)	外面はタテのハケ調整。内面はヘラケズリ。	胎土に微砂粒を含む。焼成良好。灰色。	表面磨滅
42	19	SD403	00419	土師器	壷				口縁部片。外面上位はヨコナデ、下位はタテハケ調整。内面はヨコナデ調整。	胎土はやや粗く、1㎜前後の砂粒を含む。焼成やや甘い。外面は赤褐色、内面は黒茶褐色。	
42	20	SD403	00416	韓式土器	鉢			(5.9)	口縁部片。口唇部外面は肥厚する。外面はヨコナデ調整。内面は青海波の当て具痕。	胎土に1～3㎜の灰色の砂粒を含む。焼成良好。灰褐色。	磨滅
42	21	SD403	00420	須恵器	甕	14.0		(3.7)	外面はナデ調整.内面はヨコナデ調整。	胎土に微砂粒を含む。焼成良好。淡小豆色。	
42	22	SD405	00431	縄文土器	鉢		5.6	(3.1)	底部片。やや上げ底。内外面ナデ調整。指頭圧痕。	胎土に微砂粒、雲母を僅かに含む。焼成良好。灰褐色。	
42	23	SD405	00432	弥生土器	鉢			(4.2)	内外面ナデ調整。体部は外反する。上げ底。	胎土に微砂粒を含む。焼成良好。淡茶褐色。	丹塗り
42	24	SD405	00438	土師器	甕	18.0		(4.5)	口縁部片。内外面指頭圧痕が残る。	胎土に2～3㎜の砂粒を含む。焼成良好。茶褐色。	内面磨滅
42	25	SD405	00433	土師器	甕	14.8		(8.8)	口縁端部がやや外反する。外面はヘラ磨き。口縁部内外面はナデ調整。胴部内面は、ヘラケズリ。	胎土に砂粒を含む。焼成良好。灰褐色。	
42	26	SD405	00437	土師器	甕	15.8		(3.7)	口縁部片。内外面ナデ調整。	胎土に微砂粒多く含む。焼成良好。淡茶褐色。	
42	27	SD405	00434	土師器	甕	13.8		(3.8)	直口口縁部片。外面はナナメのハケ。内面はヨコナデ調整。	胎土に3㎜前後の砂粒少し含む。焼成良好。淡灰褐色。	
42	28	SD405	00436	土師器	甕	16.0		(9.3)	口縁部を欠く。外面はハケメ調整内面はタテ方向のヘラケズリ。	胎土はやや粗く、3㎜前後の砂粒を多く含む。焼成良好。灰褐色。	
42	29	SD405	00444	土師器	高坏		6.0	(5.1)	脚部片。内外面はナデ調整。指頭圧痕が残る。	胎土に微砂粒を少し含む。焼成良好。淡灰褐色。	
42	30	SD405	00443	土師器	高坏脚部		6.6	(6.5)	坏部、脚裾部を欠く。全体にナデ調整。	胎土は粗い。2～3㎜の砂粒を多く含む。焼成良好。黄灰褐色。	
42	31	SD405	00452	須恵器	高坏			(8.4)	脚部片。内外面ヨコナデ調整。	胎土は精緻。1㎜前後の砂粒を少し含む。焼成良好。暗灰色。	
42	32	SD405	00445	土師器	甑把手	長さ6.3		厚み3.2	接合は貼り付け。全体にヘラナデ調整。煤付着。	胎土に微砂粒を含む。焼成良好。灰褐色。	煤付着
43	33	SD405	00446	須恵器	坏蓋	13.2		3.8	内外面ヨコナデ調整。天井部外面は左方向のヘラケズリ。	胎土は精良。焼成良好。灰色。	ヘラ記号
43	34	SD405	00447	須恵器	坏蓋	12.2		4.7	つまみは擬宝珠形。内外面ヨコナデ調整。天井部外面は左方向のヘラケズリ。	胎土は精良。焼成良好。黒灰色。	
43	35	SD405	00448	須恵器	坏蓋				口縁部片。口唇部内側に沈線がめぐる。内外面ヨコナデ調整。	胎土は精良。焼成良好。灰黒色。	
43	36	SD405	00454	須恵器	坏蓋			(1.6)	口縁部片。口線端部をわずかに内側に折る。内外面ヨコナデ調整。	胎土に微砂粒を多く含む。焼成良好。灰白色。	
43	37	SD405	00460	須恵器	坏蓋			(1.6)	口縁部片。口縁部はナデ調整。内外面ヨコナデ調整。	胎土は精良。焼成良好。淡青灰色。	内外面磨滅
43	38	SD405	00450	須恵器	坏身				立ち上がりは直立し、口唇部内側に沈線。内外面ヨコナデ調整。	胎土に微砂粒を含む。焼成良好。青灰色。	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	登録番号	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
43	39	SD405	00461	須恵器	坏			(3.1)	口縁部片。内外面ヨコナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。淡青灰色。	
43	40	SD405	00463	須恵器	坏			(3.6)	内外面はヨコナデ調整。	胎土は精良。焼成軟質。灰色。	生焼け
43	41	SD405	00455	須恵器	坏身	10.2		(2.5)	立ち上がりは直立。内外面はヨコナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。青灰色。	
43	42	SD405	00449	須恵器	坏身	9.0		(2.35)	立ち上がりは内傾。内外面ヨコナデ調整。	胎土は精良。焼成良好。青灰色。	
43	43	SD405	00459	須恵器	坏		9.6	(1.4)	内外面ヨコナデ調整。外底部はヘラケズリ。貼り付け高台。	胎土に微砂粒を含む。焼成やや甘い。灰色。	内外面磨滅
43	44	SD405	00457	須恵器	坏		8.0	(2.2)	底部片。内外面ヨコナデ調整。貼り付け高台。	胎土は精良。焼成良好。青灰色。	赤焼け土器
43	45	SD405	00456	須恵器	坏		8.0	(1.9)	底部片。内外面ヨコナデ調整。貼り付け高台。	胎土に微砂粒を含む。焼成やや甘い。灰白色。	
43	46	SD405	00458	須恵器	坏		8.0	(1.2)	底部片。内外面ヨコナデ調整。貼り付け高台。	胎土に砂粒を多く含む。焼成やや甘い。灰色。	
43	47	SD405	00453	須恵器	甕			(3.5)	口縁部片。口縁端部を小さく折り返す。内外面ヨコナデ調整。	胎土に白色微砂粒を多く含む。焼成良好。淡青灰色。	
43	48	SD405	00465	須恵器	坏		10.0	(1.2)	内外面ナデ調整。貼り付け高台。高台は低い。	胎土は精良。黒色の微砂粒を含む。焼成良好。灰白色。	内外面磨滅
43	49	SD405	00464	須恵器	坏		9.8	(1.7)	内外面ヨコナデ調整。貼り付け高台で、断面形コの字形。	胎土に微砂粒を含む。焼成やや甘い。灰白色。	内外面磨滅
43	50	SD405	00462	須恵器	甕	14.6		(2.7)	脚部片。内外面ナデ調整。	胎土は精良。焼成良好。灰色。	
43	51	SD405	00435	陶質土器	甕				外面はヨコナデ調整。肩部外面は格子目叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土に微砂粒を多く含む。焼成軟質。外面は黒褐色、内面は茶褐色。	一部に鉄分付着
43	52	SD405	00442	土師質土器	甕			(2.7)	口縁部片。口縁部は外反し、ヨコナデ調整。	胎土に微砂粒を含む。焼成良好。黒灰色。	須恵器の生焼けか？
43	53	SD405	00439	土師器	不明				外面に「厨」印有り。	胎土精良。焼成良好。淡茶灰色。	器種不明 内外面磨滅
43	54	SD413	00471	縄文土器	椀			(3.0)	口縁部片。内外面ナデ調整。外面に櫛描きで文様。	胎土は粗く、砂粒を多く含む。焼成良好。灰褐色。	
43	55	SD417	00481	縄文土器	鉢				外面はヘラ描きによる文様を頬越す。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の白、灰色の砂粒を多く含む。焼成良好。外面は赤褐色、内面は灰褐色。	瀬戸内式
43	56	SD417	00482	土師器	甕				口縁部はヨコなで調整。内面はヘラケズリ調整。	胎土に砂粒を多く含む。焼成良好。淡灰褐色。	外面煤付着
50	1	5面	00501	縄文土器	鉢			(2.2)	口縁部片。口唇部上部に刻目を施す。内外面に条痕。	胎土に1～2㎜の砂粒を多く含む。焼成良好。濃茶褐色。	
50	2	5面	00508	縄文土器	浅鉢			(5.3)	口縁部片。外面はナナメ方向の櫛目文。内面はヨコ方向の櫛描き。	胎土は精良。焼成良好。外面は茶褐色、内面は黄褐色。	
50	3	5面	00507	縄文土器	鉢				外面はナデ調整。内面はヨコナデ調整。	胎土はやや粗く、微砂粒を含む。焼成良好。黄灰褐色。	
50	4	5面	00509	土師器	甕			(3.4)	口縁部片。内外面はナデ調整。	胎土に微砂粒を含む。焼成良好。茶褐色。	
50	5	5面	00502	縄文土器	鉢		10.2	(4.0)	底部片。上げ底。内外面ナデ調整。指頭圧痕が残る。	胎土に1㎜前後の砂粒を多く含む。焼成良好。濃茶褐色。	
50	6	5面	00506	土師器	甕	16		(7.0)	くの字形の口縁部は内弯する。胴部外面はナナメハケ調整。肩部に波状文。内面はヘラケズリ調整。	胎土は精緻。焼成良好。淡茶褐色。	布留式
50	7	5面	00510	須恵器	甕か			(2.7)	口縁部片。内外面ヨコナデ調整。	胎土に灰色の微砂粒を含む。焼成良好。黒灰褐色。	器種不明 生焼け
50	8	5面	00505	土師器	甕	20.6		(23.3)	口縁部は緩く外反。口縁部内外面ヨコナデ調整。胴部外面はタテハケ調整。頸部以下は不整方向のヘラ磨き調整。	胎土は精良。白色の微砂粒を含む。焼成良好。淡茶褐色。	
50	9	5面	00503	土師器	鉢	15.4		5.9	内外面ヘラ磨き調整。	胎土は精良。焼成良好。赤褐色。	二次火を受ける 煤付着
50	10	5面	00521	土師器	高坏			(4.5)	脚部内外面ハケ目調整。坏内面に放射状の暗文。	胎土は精良。焼成良好。灰褐色。	煤付着
50	11	5面	00516	須恵器	坏身	10.6		4.5	立ち上がりは内傾する。内外面ヨコナデ調整。天井部外面はヘラケズリ調整。	胎土に1～3㎜の砂粒を含む。焼成良好。灰色。	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	登録番号	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
50	12	5面	00518	須恵器	坏身	13.6		3.3	立ち上がりはやや内傾。内外面ヨコナデ調整。外面天井部にヘラ記号。	胎土に微砂粒を多く含む。焼成良好。灰色。	
50	13	5面	00517	須恵器	坏身				口縁部片。立ち上がり内傾。内外面ヨコナデ調整。	胎土に微砂粒を含む。焼成良好。灰黒色。	
50	14	5面	00512	須恵器	坏身			(3.3)	口縁部を欠く。内外面ヨコナデ調整。	胎土に1㎜前後の白色の砂粒を多く含む。焼成堅緻。淡青灰色。	
50	15	5面	00511	須恵器	坏身			(3.2)	口縁部を欠く。内外面ヨコナデ調整。天井部外面ヘラケズリ調整。	胎土に砂粒を含む。焼成良好。淡青灰色。	鉄分付着
50	16	5面	00519	須恵器	坏				内外面ヨコナデ調整。蓋受けは平坦。	胎土に砂粒を多く含む。焼成良好。茶褐色。	赤焼け土器
50	17	5面	00522	須恵器	坏蓋	14.4		(2.8)	内外面ヨコナデ調整。口唇部内側に沈線。	胎土に微砂粒を含む。焼成良好。灰色。	外面に自然釉
50	18	5面	00520	須恵器	坏身				口縁部片。蓋受けは平坦で短い。内外面ヨコナデ調整。	胎土に微砂粒を含む。焼成軟質。黄灰色。	
50	19	5面	00539	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土は精良。焼成堅緻。暗青灰色。	
50	20	5面	00514	須恵器	坏蓋			(1.7)	口縁部片。口唇部内側に浅い沈線。内外面ヨコナデ調整。	胎土に1㎜前後の砂粒を含む。焼成良好。濃青灰色。	
50	21	5面	00513	須恵器	坏蓋			(2.2)	口縁部片。口唇部内側に沈線。内外面ナデ調整。	胎土は精良。焼成良好。灰色。	
50	22	5面	00515	須恵器	坏蓋			(2.1)	口縁部片。口唇部内側に浅い沈線がめぐる。内外面ヨコナデ調整。	胎土は精良。焼成良好。茶褐色。	
51	23	5面	00534	土師器	甕	15.6		(5.2)	口縁部片。口縁部はくの字形。口縁部内外面ヨコナデ調整。頸部外面はタテ～ナナメのハケ。内面はヘラケズリ調整。	胎土に1～5㎜の砂粒を含む。焼成良好。灰褐色。	
51	24	5面	00536	土師器	甕		6.0	(3.2)	内外面ナデ調整。	胎土は粗い。1～2㎜の砂粒を多く含む。焼成良好。灰茶褐色。	煤付着
51	25	5面	00531	弥生土器	甕		8.0	(3.0)	底部片。内外面はナデ調整。	胎土に砂粒を多く含む。焼成良好。内外面は灰褐色。	
51	26	5面	00532	土師器	甑	31.6		(8.3)	口縁部は緩く外反し、ヨコ方向のヨコナデ。胴部外面はハケ調整。	胎土に砂粒を多く含む。焼成良好。暗褐灰色。	
51	27	5面	00535	土師器	壷			(3.4)	広口壷口縁部片。端部はコの字形。ハケメ調整後ナデケシ。	胎土は精良。焼成良好。黄灰色	表面磨滅
51	28	5面	00540	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は同心円の当て具痕。	胎土は精良。焼成やや甘い。黄灰色。	
51	29	5面	00533	須恵器	甕	27.0		(4.4)	口縁部片。口縁部外面を突帯状に形成。内外面ヨコナデ調整。外面頸部に貝殻の条痕。	胎土は精良。焼成良好。灰茶色。	須恵器生焼けか？
51	30	5面	00538	須恵器	坏			(1.9)	口縁部片。蓋受けはほぼ平坦。内外面ヨコナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂粒を含む。焼成良好。暗青灰色。	
51	31	5面	00537	須恵器	坏蓋			(2.7)	口縁部片。内外面ヨコナデ調整。	胎土は精良。焼成良好。黒灰色	
58	1	表土	00652	須恵器	坏	11.2		(1.2)	口縁部片。立ち上がりは低く、内傾。内外面ヨコナデ調整。	胎土は精良。焼成良好。灰色。	
58	2	表土	00656	須恵器	甕				胴部片。外面に2条の沈線。その間に7本単位の波状文。	胎土に1㎜前後の白色の砂粒を僅かに含む。焼成良好。黒灰色。	
58	3	表土	00654	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土に1㎜の砂粒を含む。焼成良好。灰色。	
58	4	表土	00657	陶器	皿	10.2	5.2	2.2	内外面はヨコナデ調整。糸きり底。	胎土は精良。焼成良好。暗灰褐色。	
58	5	表土	00653	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は同心円の当て具痕	胎土に1㎜前後の砂粒を多く含む。焼成良好。暗灰色。	
58	6	表土	00655	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土に1～2㎜の砂粒を僅かに含む。焼成良好。暗灰色。	
58	7	表土	00663	染付	皿	5.0	7.6	1.9	内外面とも呉須による文様。内底にコンニャク判。外底部に目痕。釉に貫入。	素地は精良で白色.焼成良好。透明釉。	
58	8	表土	00662	白磁	碗	15.8		(4.9)	口縁部は玉縁状を呈する。体部外面下位は露胎。	素地は精良。焼成良好。灰色釉。	
58	9	表土	00660	陶器	摺鉢				胴部片。外面はヨコナデ調整。内面に5本（以上）単位の下し目。	素地は精良で茶灰色。焼成良好。褐釉。	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	登録番号	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
58	10	表土	00658	陶器	摺鉢				胴部片。外面はナデ調整。内面に10本単位の下し目。	素地に砂粒を少し含み、灰褐色。焼成良好。褐釉。	
58	11	表土	00661	陶器	摺鉢				胴部片。外面はヨコナデ調整。内面に5本（以上）単位の下し目。	素地は精良で茶灰色。焼成やや軟質。褐釉。	
58	12	表土	00659	陶器	摺鉢				胴部片。外面はヨコナデ調整。内面に6本（以上）単位の下し目。	素地は精良で黄灰色。焼成良好。褐釉。	唐津焼
58	13	遺構面	00701	弥生土器	甕			(1.6)	口縁部片。口縁部は逆L字形を呈する。全体にナデ調整。	胎土に2～3㎜の石英の砂粒を含む。焼成良好。淡灰茶色。	
58	14	遺構面	00702	土師質土器	鉢			(3.5)	口縁部片。口唇部上面はヘラによる調整。口縁部外面はナナメの櫛目、内面は条痕。	胎土は精良で、雲母を含む。焼成良好。茶褐色。	
58	15	遺構面	00705	須恵器	坏			(2.5)	口縁部片。立ち上がりは内傾。蓋受けに沈線。内外面はヨコナデ調整。	胎土に微砂粒を含む。焼成良好。青灰色。	
58	16	遺構面	00704	須恵器	坏			(2.0)	口縁部片。立ち上がり内傾。蓋受けは平坦。内外面ヨコナデ調整。	胎土は精良。焼成良好。青灰色。	
58	17	遺構面	00706	須恵器	坏	14.0		(2.9)	口縁部片。立ち上がりは高く、やや内傾。蓋受けは小さい。内外面ヨコナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂粒を含む。焼成良好。青灰色。	
58	18	遺構面	00709	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は同心円の当て具痕。	胎土は精良。焼成やや軟質。灰色。	
58	19	遺構面	00707	須恵器	坏		7.8	(2.2)	底部片。内外面ヨコナデ調整。貼り付け高台、断面はコの字形。内外面ヨコナデ調整。	胎土は精良。焼成良好。青灰色。	
58	20	遺構面	00710	瓦器	椀	15.6	6.8	4.9	内外面はナデ調整。内面はナデ調整。底部に板状圧痕が残る。貼り付け高台は断面は截頭三角。	胎土に微砂粒を多く含む。焼成良好。暗黄灰色。	内外面一部に煤付着
58	21	遺構面	00708	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土に1㎜の砂粒を僅かに含む。焼成やや軟質。灰色。	内外面磨滅
58	22	遺構面	00703	土師器	甑把手	長さ7.5		厚み3.8	接合は挿し込み式。全体にナデ調整。	胎土は粗く、砂粒を多く含む。焼成良好。黄灰褐色。	表面磨滅
58	23	遺構面	00711	青磁	碗		5.2	(1.8)	底部片。高台の断面がコの字形。外底部は露胎。内底見込みに目痕。	胎土は精良で灰白色。焼成良好。緑色を帯びた透明釉。	龍泉窯系
58	24	遺構面	00713	染付	皿			(2.6)	口縁部片。内外面呉須による文様有り。外面は雲文。内面は花文。	素地は灰白色。焼成良好。淡青色の染付。透明釉。	
58	25	遺構面	00712	陶器	碗		3.4	(2.3)	底部片。高台は小さく、直立気味である。体部下位～外底部は露胎。	胎土は精良。焼成良好。透明釉。	唐津焼
59	26	トレンチ	00620	弥生土器	壷		10.0	(4.3)	底部片。上げ底。内外面指ナデ調整。内面に指頭圧痕。	胎土に白色の微砂粒を多く含む。焼成良好。淡灰茶色。	
59	27	トレンチ	00618	土師器	甕			(3.20)	口縁部片。くの字形口縁部。内外面はヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ。	胎土に白、灰色の微砂粒を多く含む。焼成良好。灰褐色。	
59	28	トレンチ	00613	土師器	鉢			(4.0)	口縁部片。口縁部は外反。外面は不整方向のナデ。内面はヨコナデ調整。	胎土に白、灰色の微砂粒を含む。焼成良好。淡灰茶色。	
59	29	トレンチ	00627	土師器	坏	14.0		(2.3)	口縁部片。口縁部端部は外反。内外面ヨコナデ調整。	胎土は精良。焼成良好。黄灰色。	
59	30	トレンチ	00614	土師器	甕			(4.5)	口縁部片。口縁部はやや外反。内外面ヨコナデ調整。	胎土に砂粒を僅かに含む。焼成やや軟質。黄灰褐色。	内外面磨滅
59	31	トレンチ	00602	土師器	高坏			(2.8)	脚部片。内外面ナデ調整。	胎土は精良。焼成やや軟質。淡黄茶色。	脚部径3.6
59	32	トレンチ	00625	土師器	高坏				坏部と脚部の大半を欠く。内外面ナデ調整。脚部の接合は貼り付け。ナデ調整を施す。	胎土はやや粗く砂粒を多く含む。焼成良好。赤褐色。	
59	33	トレンチ	00628	土師器	皿	9.4	8.0	1.2	内外面ナデ調整。糸切り底。	胎土は精良。焼成やや軟質。外面は黄灰色、内面は暗灰色。	
59	34	トレンチ	00619	土師器	甕			(3.1)	口縁部片。口縁部は緩く外反する。内外面ナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂粒を多く含む。焼成良好。外面は黒灰色。内面は淡灰茶色。	
59	35	トレンチ	00615	土師器	甑把手	長さ4.7		厚み2.9	胴部外面は格子目叩き。内面は同心円の当て具痕。把手の接合は貼り付け。把手の上面に縦長の溝。	胎土に2㎜前後の砂粒を多く含む。焼成良好。灰黄色。	磨滅
59	36	トレンチ	00617	須恵器	坏蓋	12.6		(4.35)	口唇部内側に沈線。体部と天井部の境に有段。内外面ヨコナデ調整。天井部外面はヘラケズリ。	胎土に2～3㎜の砂粒を含む。焼成良好。灰青色。	火膨れ1/3現存
59	37	トレンチ	00622	須恵器	坏		9.6	(2.8)	底部片。内外面ヨコナデ調整。貼り付け高台は、断面はコの字形。腰部は強く屈折。	胎土は精良。焼成良好。灰色。	
59	38	トレンチ	00630	須恵器	坏蓋	13.4		3.4	内外面ヨコナデ調整。天井部外面は右方向のヘラケズリ。	胎土に砂粒を多く含む。焼成良好。灰色。	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	登録番号	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
59	39	トレンチ	00626	須恵器	坏		8.0	(1.0)	底部片。底部外面はヘラ切り。内外面ヨコナデ調整。	胎土に微砂粒を多く含む。焼成良好。暗灰青色。	ヘラ記号
59	40	トレンチ	00631	須恵器	坏		8.0	(1.3)	底部片。内外面ヨコナデ調整。ヘラ切り底。	胎土に白色の微砂粒を含む。焼成良好。青灰色。	
59	41	トレンチ	00629	須恵器	高坏		10.0	(1.4)	脚裾部片。裾部は2段に屈折。内外面ヨコナデ調整。	胎土に微砂粒を含む。焼成良好。灰色。	
59	42	トレンチ	00616	須恵器	坏				口縁部片。立ち上がりは直口。内外面ヨコナデ調整。	胎土に砂礫を含む。焼成良好。灰青色。	
59	43	トレンチ	00601	瓦質土器	摺鉢				外面はナデ調整。内面に5本(以上)単位の下し目。	胎土に微砂粒を含む。焼成良好。黄白色。	
59	44	トレンチ	00604	瓦質土器	火舎				口縁部片。口縁部外面に2条の突帯を貼り付け、その間に菊花文を刻印。内面はヨコ・ナナメハケ調整。	胎土は精良。焼成良好。淡灰黒色。	
59	45	トレンチ	00621	須恵器	甕				胴部片。外面は格子目叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土に微砂粒を含む。焼成良好。外面は暗青灰色、内面は灰青色。	
59	46	トレンチ	00624	青磁	碗		(6.0)	(1.9)	底部片。内底見込みに片切り彫りの花文、目痕が見られる。外底部は露胎。	素地は精良で、灰色。焼成良好。緑味を帯びた灰色釉。	
59	47	トレンチ	00623	染付	小碗		3.0	(1.7)	底部片。呉須による圏線が体部下位に1条、高台上位に2条。高台は細く、小さい。	素地はやや粗く白黄色。焼成良好。灰色を帯びた透明釉。	
59	48	トレンチ	00612	陶器	小碗		4.0	(3.2)	内外面とも刷毛目。内底見込みに釉の掻き取り、砂目痕。	素地は精良。焼成良好。赤茶色。	唐津焼
59	49	トレンチ	00608	陶器	摺鉢				胴部片。外面はヨコナデ。内面に8本単位の下し目。	素地に砂粒を多く含む。焼成良好。淡小豆色。	肥前系
59	50	トレンチ	00609	陶器	摺鉢				胴部片。外面はヨコナデ。内面に5本の下し目。	素地は精良。焼成良好。暗い小豆色。	
59	51	トレンチ	00607	陶器	摺鉢				胴部片。外面はヨコナデ。内面に6本単位の下し目。	素地は精良。焼成良好。内面は濃小豆色。外面は黄褐色。	唐津焼
59	52	トレンチ	00606	陶器	摺鉢				胴部片。外面はヨコナデ調整。内面に6本単位の下し目。	素地は精良であるが、微砂粒を少し含む。焼成良好。淡小豆色。	唐津焼

Tab. 3　梅林遺跡第3次調査出土鉄製品一覧表

挿図番号	遺物番号	出土遺構	登録番号	種類	器種	長さ	幅	厚さ	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
12	32	SS104	06001	鉄製品	釘	5.2			断面は四角形		
13	63	SS108	06003	鉄製品	釘	(4.3)	0.5	0.5	断面はほぼ四角形		
26	27	SD201	06002	鉄製品	釘	4.2		0.4	断面は四角形	釘頭に打痕	

Tab. 4　梅林遺跡第3次調査出土木製品一覧表

挿図番号	遺物番号	登録番号	遺構名	器種	長さ（現存長）	幅（最大径）	厚み（最小径）	特徴	樹種	年代
6	—	10155	SX103	—	40+ α	(4.5)	—	実測ナシ。	ヤマグワ	3880 +220 −210
17	123	10101	SX102	杭	(49.5)	4.8	3.2	枝先利用2面加工。枝ハツリ。		
17	124	10103	SX102	杭	(41.3)	4.2	3.8	枝先利用5面加工。杭先端切り込み。枝ハツリ。		
17	125	10108	SX102	杭	(41.3)	3.6	3.0	枝先利用7面加工。枝ハツリ。	マツ属複維管束亜属	modern (140) +150 −140
17	126	10107	SX102	杭	(37.4)	3.4	3.2	枝先利用6面加工。		
17	127	10102	SX102	杭	(37.0)	4.1	4.1	加工部分長く、ていねいに枝先利用5面加工。		
17	128	10104	SX102	杭	(34.4)	3.8	3.7	枝先利用6面加工。加工部分が長い。		
17	129	10307	SA101	杭	(21.3)	3.4	3.3	杭先端4面加工。	かし類？	
17	130	10106	SX102	杭	(30.1)	3.2	3.2	杭先端6面加工。		
17	131	10313	SA101	杭	(43.9)	4.5	4.4	枝先利用5面加工。細枝多少遺存。		
17	132	10306	SA101	杭	(33.1)	3.9	3.8	杭先端6面加工。		
17	133	10314	SA101	杭	(38.6)	3.6	3.7	杭先端4面加工。枝部杭先端加工		
17	134	10303	SA101	杭	(39.5)	3.4	3.4	杭先端6面加工。樹皮遺存。	マツ属複維管束亜属	
17	135	10301	SA101	杭	(9.1)	2.7	2.7	杭先端のみ遺存。		
17	136	10315	SA101	杭	(11.7)	3.0	3.1	全体腐食多い。枝先利用5面加工。		
17	137	10304	SA101	杭	(33.2)	6.5	4.8	枝先利用6面加工。樹皮遺存。		
17	138	10305	SA101	杭	(30.1)	3.9	3.9	杭先端4面加工。厚い樹皮あり。	かし類？	
17	139	10312	SA101	杭	(30.2)	3.4	3.4	杭先端3面加工。樹皮少し遺存。		
17	140	10311	SA101	杭	(41.3)	3.2	3.2	杭先端5面加工。樹皮少し遺存。		
17	141	10309	SA101	杭	(33.3)	5.0	4.9	杭先端4面加工。		
17	142	10308	SA101	杭	(32.8)	3.9	3.6	杭先端3面加工。		
18	143	10321	SA101	杭	(16.4)	4.4	4.1	杭先端5面加工。		
18	144	10322	SA101	杭	(18.5)	4.3	3.5	杭先端4面加工。	竹	
18	145	10331	SA101	杭	(52.0)	4.0	4.1	枝先利用5面加工。樹皮少し遺存。		
18	146	10326	SA101	杭	(44.3)	4.2	4.1	枝先利用6面加工。樹皮遺存。	マツ属複維管束亜属	
18	147	10324	SA101	杭	(45.9)	4.4	4.1	杭先端4面加工		
18	148	10329	SA101	杭	(75.0)	4.0	3.8	枝先利用6面加工。樹皮少し遺存。		
18	149	10327	SA101	杭	(39.0)	3.1	2.3	枝先利用3面加工。		
18	150	10328	SA101	杭	(34.1)	3.8	3.5	枝先利用4面加工。		
18	151	10332	SA101	杭	(29.3)	3.2	3.1	杭先端5面加工。		
18	152	10330	SA101	杭	(45.8)	4.4	4.2	枝先利用4面加工。樹皮少し遺存。	マツ属複維管束亜属	
18	153	10325	SA101	杭	(39.2)	4.5	4.3	枝先利用3面加工。		
19	154	11108	SD104	杭	(22.8)	3.9	2.8	杭先端6面加工。杭先端部腐食欠損。		
19	155	11110	SD104	杭	(23.3)	4.8	4.5	杭先端4面加工。		
19	156	11111	SD104	杭	19.8	4.2	3.7	杭先端3面加工。腐食。		
19	157	11109	SD104	杭	(15.8)	3.3	3.1	杭先端4面加工。		
19	158	11102	SK104	杭	66.6	3.9	4.0	欠損、割れてい調整不明瞭。枝ハツリ。		
19	159	11101	SK104	杭	(38.4)	4.2	3.7	枝先利用5面加工。痛んでいる。		
19	160	10154	SX103	杭	(28.7)	3.20	3.40	頭部欠損。枝先利用6面ていねい加工。枝ハツリ。		
19	161	10153	SX103	杭	(21.7)	3.7	3.2	枝先利用7面ていねい加工。		
19	162	11103	SK104	杭	(11.3)	2.5	2.3	杭先端2面加工。		
19	163	10152	SX103	杭	(20.8)	2.5	2.4	4面加工。割れている。		
19	164	10151	SX103	杭	(7.5)	1.9	1.8	3面加工。杭先のみ遺存。		
20	165	11104	SA102	杭	62.4	6.3	5.7	枝先利用6面加工。		
20	166	11105	SA102	杭	(41.2)	4.4	4.3	杭先端6面加工。樹皮遺存。		

挿図番号	遺物番号	登録番号	遺構名	器種	長さ（現存長）	幅（最大径）	厚み（最小径）	特徴	樹種	年代
20	167	11106	SA102	杭	(55.1)	3.3	4.2	杭先端7面加工。		
20	168	11107	SA102	杭	66.8	5.1	4.8	杭先端6面加工。樹皮遺存。		
26	31	10251	SD201	杭	24.7	3.4	3.2	杭先6面加工。		
34	43	10341	SD306	木製品曲物	－	底径(19.0)	1.1	底の部分約1/2遺存。曲物の底板。		
34	44	10371	SD306B	杭	(20.8)	2.7	2.5	腐食。調整不明瞭。		
34	45	10382	SD306	杭	(19.7)	2.9	2.9	枝先利用2面加工。粗い。		
34	46	10381	SD306	杭	(16.7)	4.2	4.2	枝先利用2面加工。樹皮遺存。		
34	47	10201	SX305	板状	(12.7)	3.6	0.9	釘穴2穴あり。まさ目		
38	－	10355	SX301	横木	－	－	－	実測ナシ。大木	クリ	
39	－	11402	SX401	流木	75.0	－	－	自然木。実測ナシ。	ヤナギ属	
44	60	11411	SD405	槽	38.0	－	4.0	丸木を加工。把手付き容器。	マキ属	
44	61	11412	SD405	槽	(18.2)	8.6	深さ3.8	把手つき。柾目板。		
44	62	11406	SD405	杭	66.3	9.7	9.2	杭先圧迫されて調整不明瞭。自然木を杭として利用。	クリ	
44	63	11404	SD405	杭	(21.6)	2.4	2.3	杭先端1面加工。	ウツギ属	
44	64	11405	SD405	杭	(20.8)	2.3	2.3	杭先端1面加工。		
44	65	11403	SD405	杭／流木	(31.3)	2.5	2.3	腐食して加工面不明瞭。	ウツギ属	1300 +110 −110
44	66	10354	SX301	立杭	50.0	3.8	3.7	腐食が激しい。調整不明瞭。	スダジイ	
44	67	10353	SX301	横木	50.5	4.5	4.4	枝先利用3面加工。樹皮遺存。	コナラ属アカガシ亜属	
44	68	10351	SX301	杭？	(28.7)	4.5	4.2	腐食が激しい。調整不明瞭。	ヒサカキ	1350 +230 −220
44	69	10361	SX302	立杭	(66.3)	7.5	6.9	杭先端3面加工。樹皮わずかに遺存。	シャシャンボ	1310 +120 −120
45	70	10403	SX401	杭	(58.2)	5.4	－	腐食。杭先端2面加工。樹皮遺存。	スダジイ	1240 +210 −200
45	71	10401	SX401	杭	52.7	9.3	8.2	柵の倒杭。全体に面取り。	クリ	
45	72	10402	SX401	杭	(43.1)	2.6	2.4	枝元利用1面加工。自然木、枝。	ウツギ属	
45	73	10412	SX402	立杭	(18.0)	5.6	5.4	杭先端3面加工。樹皮有り。	ツブラジイ	1250 +250 −250
45	74	10411	SX402	杭	(5.7)	2.3	2.3	杭先端3面加工。	ツブラジイ	
47	－	11517	SX501	横木	(60.0)	7.0	－	実測ナシ。流木？	ヤナギ属	
47	－	10502	5面	木製品	(22.2)	4.1	2.6	面取り加工。使途不明。	スダジイ	
52	35	11518	SX501	杭	(48.9)	4.2	3.8	杭先端6面加工。	スダジイ	1180 +210 −210
52	36	11514	SX501	杭	(32.6)	5.4	6.3	枝先利用3面加工。樹皮遺存。枝ハツリ。	ユズリハ属	
52	37	11513	SX501	杭	35.8	3.3	3.4	枝先利用3面加工。樹皮遺存。		
52	38	11519	SX501	杭	(33.3)	3.3	3.3	杭先端3面加工。樹皮遺存。	ユズリハ属	
52	39	11520	SX501	杭	(59.0)	5.7	5.3	杭先端3面加工。樹皮遺存。		
52	40	11515	SX501	杭	(16.2)	3.5	3.4	枝先利用4面加工。樹皮遺存。枝ハツリ。		
52	41	11516	SX501	杭	(22.2)	2.6	2.7	杭先端2面加工。所々に樹皮遺存。		
52	42	11511	SX501	杭	(29.8)	3.2	2.5	杭先端2面加工。		
52	43	11521	SX501	杭	(28.8)	3.5	3.6	杭先端1面加工。樹皮遺存。		
52	44	11512	SX501	杭	(28.8)	3.3	2.9	枝先利用2面加工。樹皮遺存。	サカキ	
52	45	11523	SX501	杭	(27.1)	2.8	2.7	杭先端3面加工。樹皮遺存。		
52	46	11522	SX501	杭	(28.1)	3.2	2.7	杭先端2面加工。樹皮遺存。		
52	47	10518	5面	杭	(35.4)	2.8	2.8	杭先端4面加工。枝ハツリ。樹皮遺存。	スダジイ	
52	48	10514	5面	杭	(42.8)	3.3	3.2	枝元利用2面加工。	クスノキ科	940 +250 −240
52	49	10520	5面	杭	(41.0)	2.1	2.1	杭先端1面加工。わずかに樹皮遺存。	カキノキ属	
52	50	10523	5面	杭	(55.2)	3.8	3.4	杭先端5面加工。	広葉樹（散孔材）	
52	51	10521	5面	杭	(19.8)	2.9	3.2	杭先端1面加工。枝ハツリ。	センダン	
52	52	10515	5面	杭	(20.7)	2.7	1.8	杭先端5面加工。中心部割れ。	ヒサカキ	
53	53	11555	5面	杭	(73.5)	3.4	3.3	杭先端2面以上加工。割れ。		

挿図番号	遺物番号	登録番号	遺構名	器種	長さ（現存長）	幅（最大径）	厚み（最小径）	特徴	樹種	年代
53	54	11559	5面	杭	(69.5)	4.1	4.1	杭先端4面加工。		
53	55	11553	5面	杭	(60.7)	2.9	3.0	枝先利用5面加工。樹皮遺存。枝ハツリ。		
53	56	11577	5面	杭	(68.0)	3.6	2.9	杭先端炭化。調整不明瞭。 5面以上加工。	スダジイ	
53	57	11578	5面	杭	(32.5)	2.0	1.8	枝先利用2面加工。枝ハツリ。		
53	58	11582	5面	杭	(45.4)	2.8	2.7	枝先利用3面加工。樹皮遺存。		
53	59	11573	5面	杭	(30.2)	3.0	2.1	木元4面加工。頭部腐食。		
53	60	11574	5面	杭	(68.0)	4.9	4.5	頭部腐食欠損。杭先端炭化。調整不明瞭。枝ハツリ。		
53	61	11562	5面	杭	(51.3)	4.0	4.1	杭先端2面加工。腐食。		
53	62	11572	5面	杭	40.2	6.1	4.7	加工。割れで調整不明瞭。木元面取り		
53	63	11551	5面	杭	44.7	5.3	5.3	枝先利用3面加工。樹皮遺存。割れ。		
53	64	11561	5面	杭	(37.6)	4.1	4.0	Y字形の自然木の端を1面加工。樹皮遺存。		
53	65	11576	5面	杭	21.4	3.2	1.7	半裁利用。2面加工。	ヤナギ属	
54	66	11558	5面	杭	112.2	4.2	3.4	杭先端3面加工。		
54	67	11556	5面	杭	(102.0)	3.8	3.6	枝先利用5面加工。樹皮遺存。		
54	68	11557	5面	杭	90.3	4.8	4.8	両端を加工。杭先端5面加工。他方は面取り加工。枝ハツリ。		
54	69	11564	5面	杭	(91.5)	3.6	3.8	枝先利用5面加工。腐食。		
54	70	11568	5面	杭	79.2	3.3	3.2	杭先端3面加工。木元も削り。		
54	71	11566	5面	杭	(14.3)	3.7	1.3	半裁利用。 2面加工。		
54	72	11554	5面	杭	16.7	3.1	1.2	半裁利用して加工。		
54	73	11567	5面	杭	(23.0)	3.4	3.2	杭先端4面加工。腐食で調整不明瞭。		
54	74	11563	5面	杭	(25.9)	2.5	2.4	枝元利用1面加工。		
54	75	11565	5面	杭	22.0	2.6	3.1	杭先端1面加工。炭化。		
54	76	11552	5面	杭	(30.6)	2.8	3.4	枝先利用4面加工。樹皮遺存。		
55	77	10513	5面	杭	(162.5)	7.2	5.4	枝元利用6面加工。	マンサク	
55	78	10512	5面	杭	69.5	3.5	3.0	枝元利用5面加工。	ヒサカキ	
55	79	10516	5面	杭	(89.1)	4.2	3.9	杭先端5面加工。腐食激しい。		
55	80	10519	5面	杭	(88.8)	2.4	2.3	枝元利用4面加工。樹皮遺存。		
55	81	10511	5面	杭	(73.4)	3.5	3.5	枝先利用3面加工。	ヒサカキ	
55	82	10517	5面	杭	(68.0)	3.1	3.1	杭先端1面加工。		
55	83	11596	5面	杭	44.8	2.2	2.4	杭先端1面加工。欠損で調整不明瞭。割れ。枝ハツリ。		
55	84	11570	5面	杭	(34.7)	2.0	2.1	杭先端2面加工。欠損で調整不明瞭。割れ。	クスノキ科	
55	85	11571	5面	杭	(43.7)	2.9	2.2	枝先利用2面加工。腐食。		
55	86	11581	5面	杭	(45.5)	3.3	3.2	枝先利用1面加工。樹皮遺存。		
56	87	11502	5面	製品	75.4	4.0	4.0	両端を木錘状と宝珠形に加工。		
56	88	10504	5面	木槍	(57.9)	1.8	1.5	自然面を1面は平らに、他面は丸く加工。	マンサク	
56	89	10506	5面	止め具？	(24.2)	3.3	1.1	板状。		
56	90	10501	5面	剣状木製品	26.7	2.1	1.0	全面を丁寧に削り加工。		
56	91	10505	5面	木製品	(17.7)	2.5	1.6	柄穴有り。頭部面取り。		
56	92	11504	5面	木製品	8.7	(9.1)	6.6	両端面取り加工。割れ。		
56	93	11503	5面	編錘	14.6	6.9	2.1	樹皮わずかに遺存。		
57	94	10503	5面	木製品	(50.7)	7.8	4.2	先端部断面台形。鋤？	スダジイ	
57	95	11501	5面	板材	78.8	13.8	7.0	板材。縦半分に割れ。1面にノミ加工。他面は片端と中心部炭化。		

付編

梅林遺跡第３次調査の古環境解析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

梅林遺跡第３次調査区は、油山山塊から派生した標高30m を測る丘陵に挟まれた狭隘な七隈川の谷底低地に位置する。谷東岸の台地上に位置する第１次調査区では古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物などが確認されており、今回の第３次調査区では古墳時代以降とみられる水田跡が確認されている。

今回の調査では、古墳時代以降の谷底低地の古環境および周辺植生に関する情報を得ることを目的として、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析・土壌理化学分析・軟Ｘ線写真観察を行う。また、出土した杭材を中心とした木材について、放射性炭素年代測定および樹種同定を行い、時代観や用材選択に関する資料を得る。

１．古環境に関する検討

１－１．層序概要

調査区南壁の東側から西側にかけて第１地点～第３地点の調査地点を設定した。各地点の層序を図１に示す。堆積物の層相は第１・２地点の12′層と18層の層準を境として変化する。10・12′層は細礫・粗粒砂混じりの泥質堆積物からなる。擾乱作用が一部及ぶものの部分的に平行葉理が確認される。本堆積物の上位になると、堆積物の粒径が粗粒化する。細礫～砂を主体とするが、シルト・粘土などの泥分を多く含む淘汰の悪い堆積物が累重する。いずれの堆積物も擾乱作用が著しく及んでいる。この上位には近年の耕作土が覆っており、その上位を盛土が覆っている。

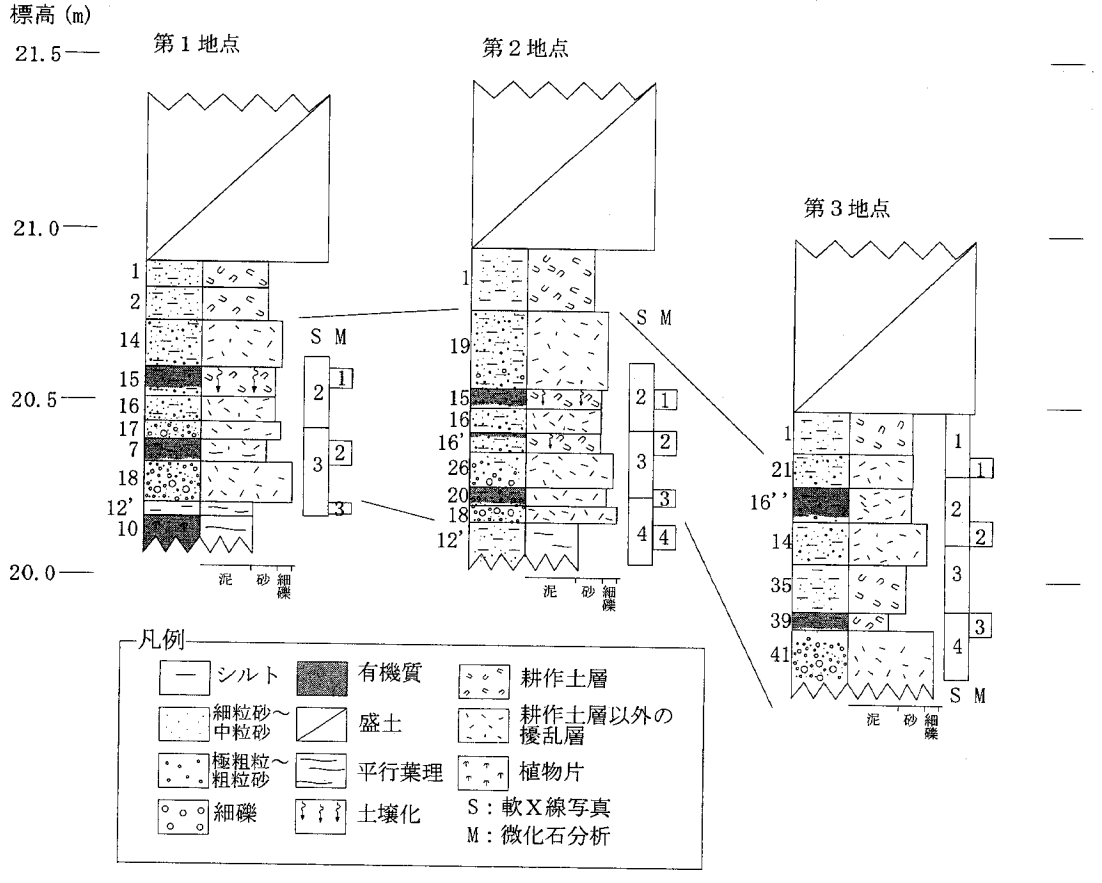


図１　調査地点の層序

1－2．試料

試料は各地点の断面から連続する柱状試料として採取した。室内にて再度層相を観察し、調査目的を考慮しながら分析用の試料を採取した。採取層準は図1に示す通りである。

1－3．分析方法

（1）珪藻分析

試料を湿重で7ｇ前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に100個体以上同定・計数する。種の同定は、Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.（1986, 1988, 1991a, 1991b）、Krammer, K.（1992）、Reichardt, E.（1995）、Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D.（1996）、Lange-Bertalot, H. et al.（1996）、Metzeltin, D. & Witkowski, A.（1996）などを用いる。

同定結果は、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数200個体以上の試料については、産出率2.5%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の分布図を作成する。また、産出した化石が現地性の化石か異地性の化石か判断する目安として完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたっては、汽水生種については小杉（1988）、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai, K. & Watanabe, T.（1995）の環境指標種を参考とする。

（2）花粉分析

試料を湿重で約10ｇ秤量し、水酸化カリウム処理、篩別（250μm）、重液分離（臭化亜鉛，比重2.3）、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝9：1）の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の各種類の出現率は、木本花粉が木本花粉総数からハンノキ属を除いた数を、草本花粉・シダ類胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフォン（-）で結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

（3）植物珪酸体分析

植物珪酸体は、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W, 250KHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステイト，比重2.4）の順に物理・化学処理を行い分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集の層位分布図を作成する。各種類の出現率は短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

（4）土壌理化学分析

全炭素はチューリン法、全窒素は硫酸分解－水蒸気蒸留法、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、陽イオン交換容量（CEC）はショーレンベルガー法でそれぞれ実施した（土壌標準分析・測定法委員会，1986）。以下に各項目の操作工程を示す。

＜分析試料の調製＞

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2㎜の篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5㎜篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

＜全炭素＞

粉砕土試料0.100～0.500ｇを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Ｎクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2Ｎ硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全炭素量（T-C乾土%）を求める。

＜全窒素＞

粉砕土試料1.00ｇをケルダール分解フラスコに秤り、分解剤約3.0ｇと硫酸10mlを加え加熱分解する。分解後、蒸留水約30mlを加え放冷した後、分解液全量を供試し水蒸気蒸留法によって窒素を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素含量（T-N乾土%）を求める。

＜全リン酸＞

粉砕土試料1.00ｇをケルダール分解フラスコにはかり、はじめに硝酸5 mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mlに定容し、ろ過する。上記ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液（バナドモリブデン酸・硝酸液）加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全リン酸含量（P_2O_5mg/g）を求める。

＜陽イオン交換容量（CEC）＞

風乾細土試料5.00ｇを浸透カラムに秤りとり、CEC測定用の土壌浸出装置に装着した後、1Ｎ酢酸アンモニウム溶液（pH7.0）100mlを加え、4～20時間で置換洗浄する。次に80%エタノール（pH7.0）50mlを加え、余剰な酢酸アンモニウム液を4～20時間で洗浄する。その後、10%塩化カリウム（pH7.0）を加え、4～20時間で再び置換洗浄する。置換洗浄された液すべてを200mlメスフラスコに入れ、水で定容する（CEC測定浸出液）。

CEC測定浸出液一定量を100ml三角フラスコに正確に採取し、ホルモル法によってアンモニア態窒素を定量する。この定量値から、試料のCEC（me/乾土100ｇ）を求める。

（4）軟Ｘ線写真撮影観察

各地点の土層断面より採取したブロック状の試料を、幅7㎝、長さ20㎝、厚さ1㎝の板状の試料を分離、成形して軟Ｘ線写真の撮影を行った。撮影は、ニッテツ・ファインプロダクツ釜石文化財保存処理センターの協力を得た。

1－4．結果

（1）珪藻分析

結果を表1、図2に示す。産出分類群数は23属105種で、完形殻の出現率はいずれの試料も50%以下であり、保存が悪い。以下に珪藻化石群集の特徴を地点別に下位から述べる。

表1　珪藻分析結果（1）

種類	生態性			環境指標種	第1地点			第2地点				第3地点		
	塩分	pH	流水		1	2	3	1	2	3	4	1	2	3
Nitzschia compressa (Bailey) Boyer	Meh			E	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Amphora fontinalis Hustedt	Ogh-Meh	al-il	ind		–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	3	–	1	1	–	–	2	3	–	–
Fragilaria construens fo. subsalina (Hust.) Hust.	Ogh-Meh	al-il	ind		1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Nitzschia levidensis var. victoriae Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	U	1	–	–	1	–	–	–	–	–	–
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O. Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		2	–	2	–	1	–	5	1	–	–
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	–	43	2	–	1	4	3	–	1	7
Achnanthes exigua Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Achnanthes inflata (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
Achnanthes spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	2	–	–	–	–	–	–	–	–
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	17	3	13	8	6	–	26	7	1	2
Aulacoseira ambigua (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Aulacoseira spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	6	64	1	–	–	82	–	–	–
Caloneis bacillum (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	–	–	1	–	–	–	6	–	–
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	4	–	–	–	4	–	–
Caloneis silicula var. intermedia Mayer	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	2	–	–	–	8	–	–
Caloneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	1	–	–	–	3	–	–
Cocconeis disculus Schumann	Ogh-ind	al-il	l-bi		–	4	1	–	–	–	2	–	–	–
Cocconeis placentula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.) Cl.	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	–	4	2	–	–	–	2	–	–	–
Cocconeis pseudothumensis Reichardt	Ogh-ind	al-il	l-ph		–	1	–	–	–	–	–	–	–	1
Cocconeis spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	3	–	–	–	–	–	–	–	–
Craticula ambigua (Ehr.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	1	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Craticula cuspidata (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	1	–	–	1	–	–	–	–	–	–
Craticula spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	2	–	–	–	–	–	–
Cymbella amphioxys (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph		3	–	–	–	2	–	–	1	–	–
Cymbella aspera (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O, T	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Cymbella cistula (Ehr.) Kirchner	Ogh-ind	al-il	l-ph	O, T	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–
Cymbella cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind		1	–	5	–	–	–	9	–	–	–
Cymbella mesiana Cholnoky	Ogh-ind	al-bi	l-bi	O	2	–	1	3	1	–	2	1	–	–
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	3	–	–	1	–	–	–	–	–	–
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	9	–	–	3	1	–	1	4	–	–
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.) V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	–	1	1	1	–	–	3	–	–	4
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	–	3	2	3	–	–	4	–	–
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind		–	–	–	–	–	–	2	–	–	–
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	1	–	–	–	–	5	–	–	–
Eunotia arcus Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph		–	–	–	–	1	–	–	1	–	–
Eunotia flexuosa (Breb.) Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	2	–	–	–	–	–	–	–	–
Eunotia formica Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-bi		–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Eunotia implicata Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	–	–	–	–	–	–	2	–	–	–
Eunotia pectinalis (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O, T	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.) Rabh.	Ogh-hob	ac-il	ind	O	–	2	–	–	–	–	2	2	–	1
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB, O, T	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Eunotia serra Ehrenberg	Ogh-hob	ac-bi	l-bi	P	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	4	1	1	3	–	3	2	–	–
Fragilaria capucina Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	–	1		–	–	–	–	–	–	–
Fragilaria construens (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	2	–	–	3	–	–	–	1	–	–
Fragilaria construens fo. binodis (Ehr.) Hust.	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Fragilaria construens fo. venter (Ehr.) Hust.	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	37	–	1	14	–	–	1	5	–	–
Fragilaria exigua Grunow	Ogh-ind	ind	l-ph		10	–	–	2	–	–	–	1	–	–
Fragilaria leptostauron (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph		2	–	–	1	–	–	–	–	–	–
Fragilaria pinnata Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	8	–	1	1	–	–	5	2	–	–
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		–	17	1	2	–	1	–	–	–	5
Frustulia vulgaris (Thwait.) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
Gomphonema affine Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O, U	–	–	–	1	1	–	–	2	–	–
Gomphonema grovei var. lingulatum (Hust.) Lange-B.	Ogh-ind	al-il	l-ph		–	3	1	–	–	–	5	–	–	–
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	2	–	–	7	1	–	–	5	–	–
Gomphonema pseudosphaerophorum H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph		–	–	–	1	–	–	–	2	–	–
Gomphonema pumilum (Grun.) Reichardt & Lange-B.	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Gomphonema subtile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind		2	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Gomphonema sumatorense Fricke	Ogh-ind	ind	r-bi	J	–	1	–	–	–	–	1	–	–	–
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		5	5	1	1	–	–	2	5	–	–
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	2	–	–	3	–	–	–	2	–	–
Navicula confervacea (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB, S	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Navicula elginensis (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O, U	–	–	–	3	–	–	–	2	–	–
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.) Pat.	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	9	–	–	38	–	–	–	48	–	–
Navicula hambergii Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–
Navicula kotschyi Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		9	–	–	18	–	–	–	15	–	–
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	3	1	1	5	–	–	1	11	–	1
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		–	–	–	–	–	–	2	–	–	–
Navicula viridula (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K, U	–	–	–	3	–	–	–	1	–	–
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	–	–	1	–	–	–	1	–	–
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		–	–	–	1	–	–	–	1	1	–
Neidium iridis (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Neidium spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	–	–	1	–	–	1	–	–	–
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Nitzschia terrestris (Pet.) Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	–	–	2	–	–
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	8	–	–	2	1	–	1	5	–	–
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA		–	1	1	–	–	–	–	–	–

表1　珪藻分析結果（2）

種類	生態性			環境指標種	第1地点			第2地点				第3地点		
	塩分	pH	流水		1	2	3	1	2	3	4	1	2	3
Pinnularia brebissonii (Kuetz.) Rabh.	Ogh-ind	ind	ind	U	1	–	–	4	–	–	–	–	–	–
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		–	–	–	2	–	–	1	–	–	–
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		2	–	–	1	–	–	–	–	–	–
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	5	–	–	6	–	–	1	6	–	–
Pinnularia imperatrix Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		–	–	1	–	–	1	4	–	–	–
Pinnularia inconstans Mayer	Ogh-hob	ac-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Pinnularia mesolepta (Ehr.) W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	–	–	–	2	–	–	–	3	–	–
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Pinnularia pisciculus Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind		7	–	–	4	–	–	–	9	–	–
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		1	–	–	–	–	–	2	–	–	–
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	–	–	2	–	–	–	–	–	–
Pinnularia schroederii (Hust.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
Pinnularia senjoensis H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph		3	–	–	1	–	–	–	–	–	–
Pinnularia stomatophora (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph		–	–	–	1	–	–	–	–	–	–
Pinnularia subrupestris Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		2	–	–	1	–	–	–	–	–	–
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		–	–	–	4	1	–	1	1	–	–
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	4	–	2	1	–	–	2	–	–	–
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	–	1	3	–	–	1	2	1	–
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.) Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K, T	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
Rhopalodia gibba (Ehr.) O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	1	–	–	–	–	–	–
Sellaphora laevissima (Kuetz.) Mann	Ogh-ind	ind	ind		–	–	–	3	–	–	–	–	–	–
Sellaphora pupula (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	6	–	–	17	1	–	–	12	–	–
Sellaphora spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Stauroneis acuta W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph		–	–	–	–	–	–	3	–	–	1
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	–	–	–	2	–	–	–	–	–	–
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	–	–	–	1	–	–	–	1	–	–
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	2	–	–	–	1	–	7	–	–	–
Stauroneis phoenicenteron fo. hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	2	–	–	1	1	–	1	1	–	–
Stauroneis phoenicenteron var. signata Meister	Ogh-ind	ind	ind		–	2	–	–	–	–	1	1	–	–
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	1	–	–	1	–	–	–
Surirella ovata var. pinnata (W.Smith) Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Surirella spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	1	–	–	–	–	–	–
Tabellaria flocculosa (Roth) Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	–	–	2	–	–	–	–	1	–	–
海水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種合計					7	1	3	2	1	0	7	4	0	0
淡水生種合計					195	108	106	203	25	6	195	198	6	23
珪藻化石総数					202	109	109	205	26	6	202	202	6	23

凡例

H. R.　：塩分濃度に対する適応性
Meh　：汽水生種
Ogh-Meh：淡水－汽水生種
Ogh-hil　：貧塩好塩性種
Ogh-ind　：貧塩不定性種
Ogh-hob：貧塩嫌塩性種
Ogh-unk：貧塩不明種

pH　：水素イオン濃度に対する適応性
al-bi：真アルカリ性種
al-il　：好アルカリ性種
ind　：ph 不定性種
ac-il　：好酸性種
ac-bi：真酸性種
unk　：pH 不明種

C. R.：流水に対する適応性
l-bi　：真止水性種
l-ph　：好止水性種
ind　：流水不定性種
r-ph　：好流水性種
r-bi　：真流水性種
unk　：流水不明種

環境指標種群

E1：海水泥質干潟指標種（小杉，1988）
J：上流性河川指標種，K：中～下流性河川指標種，N：湖沼沼沢湿地指標種，O：沼沢湿地付着生種，P：高層湿原指標種（以上は安藤，1990）
S：汚濁性種，U：広域適応性種，T：好清水性種（以上は Asai, K. & Watanabe, T., 1986）
R：陸生珪藻（RA：A群，RB：B群，RI群、伊藤・堀内，1991

・第1地点

すべての試料で珪藻化石が100個以上産出する。珪藻化石群集は各試料で異なる。試料番号3は、貧塩不明種、pH 不明種、流水不明種が多産する。これは、*Aulacoseira* spp. が約60％と多産することによる。

本種は、珪藻殻の保存が悪く種の同定ができないものである。

試料番号2は貧塩不定性種が約70％、真＋好アルカリ性種が約70％、真＋好止水性種が約50％を占めることが特徴である。優占種としては、好止水性種であり、清浄な水域に生育する好清水性種（Asai, K. & Watanabe, T., 1995）とされる *Achnanthes crenulata* が約40％産出する。また、流水不定性種の *Fragiralia ulna* が約15％産出する。その他、低率ながら流水不定性種、止水性種、陸生珪藻など様々な生態性の種が産出する。

試料番号1は貧塩不定性種が約80％、真＋好アルカリ性種が約60％、流水不定性種と真＋好止水性種がそれぞれ約40％を占めることが特徴である。優占する種はないが、好止水性種で汚濁した水域に

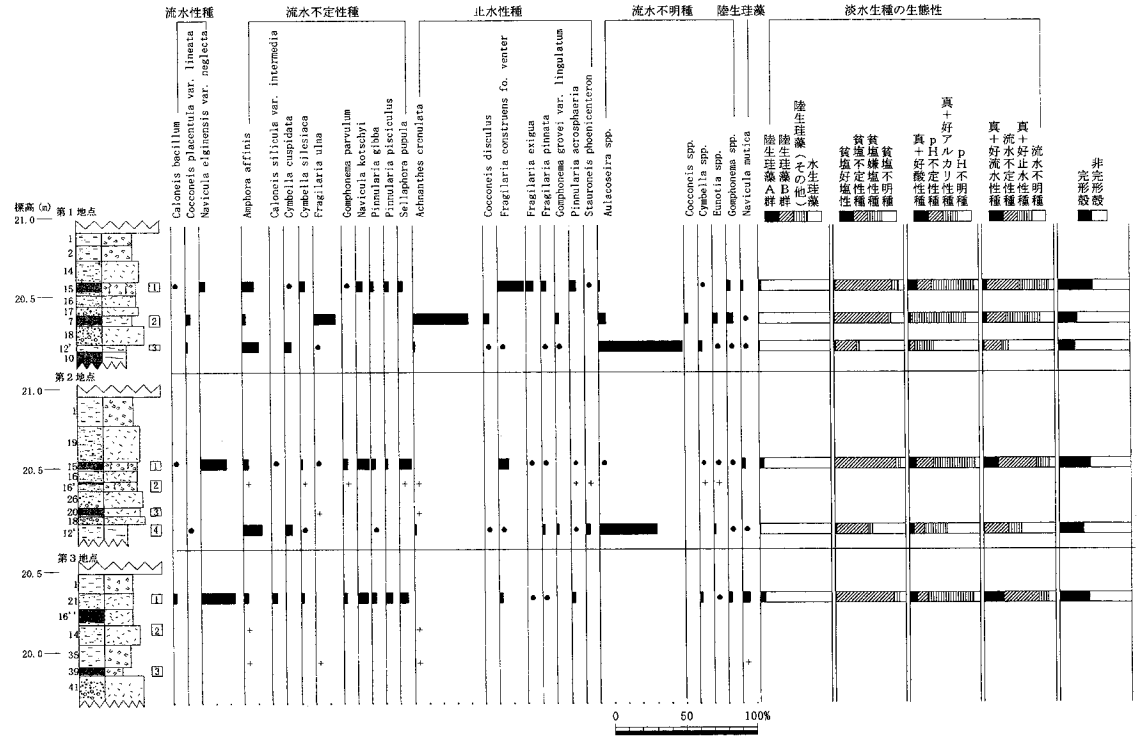


図2　主要珪藻化石群集の層位分布

海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1％未満の試料について検出した種類を示す。

生育する好汚濁性種（Asai, K. & Watanabe, T., 1995）の *Fragilaria construens* fo. *venter* が約20％と比較的多く産出する。その他、低率ながら流水不定性種、止水性種、陸生珪藻など様々な生態性の種が産出する。

・第2地点

試料番号4は、貧塩不明種、pH不明種、流水不明種が多産する。これは、1地点の試料番号3と同様に *Aulacoseira* spp. が多産するためである。試料番号3・2は、珪藻化石の産出数が26個体および6個体と極めて少ない。

試料番号1は貧塩不定性種が約85％、真＋好アルカリ性種が約60％、真＋好止水性種が約50％を占めることが特徴である。優占種としては、好流水性種の *Navicula elginensis* var. *neglecta* が約20％産出する。その他、低率ながら流水不定性種、止水性種、陸生珪藻など様々な生態

表2　花粉分析結果

種類 / 試料番号	第1地点 1	2	3	第2地点 1	2	3	4	第3地点 1	2	3
木本花粉										
マキ属	－	－	3	－	－	－	2	－	－	－
モミ属	－	1	13	－	－	1	71	－	－	－
ツガ属	－	1	21	1	－	－	43	－	－	1
マツ属	－	7	95	－	－	－	70	15	－	1
スギ属	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－
ヤナギ属	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－
ヤマモモ属	－	－	2	－	－	－	1	－	－	1
クマシデ属－アサダ属	－	－	2	－	－	－	3	－	－	－
ブナ属	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－
コナラ属コナラ亜属	－	－	6	－	－	－	7	－	－	－
コナラ属アカガシ亜属	－	－	13	－	－	－	7	－	－	1
シイノキ属	－	－	4	－	－	－	1	－	－	－
ニレ属－ケヤキ属	－	－	1	－	－	－	1	－	－	－
アカメガシワ属	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－
ブドウ属	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－
ノブドウ属	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－
ミズキ属	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－
ツツジ科	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－
ハイノキ属	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－
タニウツギ属	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－
草本花粉										
イネ科	－	1	59	－	－	－	69	3	－	－
カヤツリグサ科	－	－	51	－	－	－	22	3	－	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	－	6	8	－	－	－	27	－	1	－
ソバ属	－	－	－	－	－	－	－	6	－	－
キンポウゲ科	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－
アブラナ科	－	－	－	1	－	－	－	1	－	－
マメ科	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－
アカバナ属－ミズユキノシタ属	－	－	1	－	－	－	2	－	－	－
オミナエシ属	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－
ヨモギ属	－	－	2	－	－	－	5	－	－	－
オナモミ属	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－
キク亜科	－	3	7	－	－	－	53	3	1	－
タンポポ亜科	－	－	1	1	－	－	－	1	－	－
不明花粉	－	－	3	－	－	－	2	－	－	－
シダ類胞子										
シダ類胞子	7	260	857	123	25	25	957	363	100	250
合計										
木本花粉	0	9	165	1	0	1	212	15	0	4
草本花粉	0	10	131	2	0	0	180	17	2	1
不明花粉	0	0	3	0	0	0	2	0	0	0
シダ類胞子	7	260	857	123	25	25	957	363	100	250
総計（不明を除く）	7	279	1153	126	25	26	1349	395	102	255

性の種が産出する。

・第３地点

試料番号３・２は、珪藻化石の産出数が23個体および６個体と少ない。試料番号１は貧塩不定性種が約80%、真＋好アルカリ性種が約60%、真＋好止水性種が約50%を占めることが特徴である。優占種としては、好流水性種の *Navicula elginensis* var. *neglecta* が約20%産出する。その他は流水不定性種、止水性種、陸生珪藻など様々な生態性の種が低率で産出する。

（２）花粉分析

結果を表２、図３に示す。花粉化石は、全体的に保存状態が悪い。特に第１地点試料番号３と第２地点試料番号４を除いて検出個体数が極めて少ない。

第１地点試料番号３と第２地点試料番号４における木本花粉の出現傾向は、モミ属・ツガ属・マツ属が多産する。また、草本花粉では、イネ科・カヤツリグサ科・サナエタデ節－ウナギツカミ節・ヨモギ属などが検出される。木本花粉および草本花粉の出現率は低く、総数の約７割以上がシダ類胞子である。

（３）植物珪酸体分析

結果を表３、図４に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態の悪いものが多く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、各地点ごとに産状を述べる。

・第１地点

試料番号３～１にかけて栽培種のイネ属の増加する傾向が見られ、特に短細胞珪酸体で顕著である。

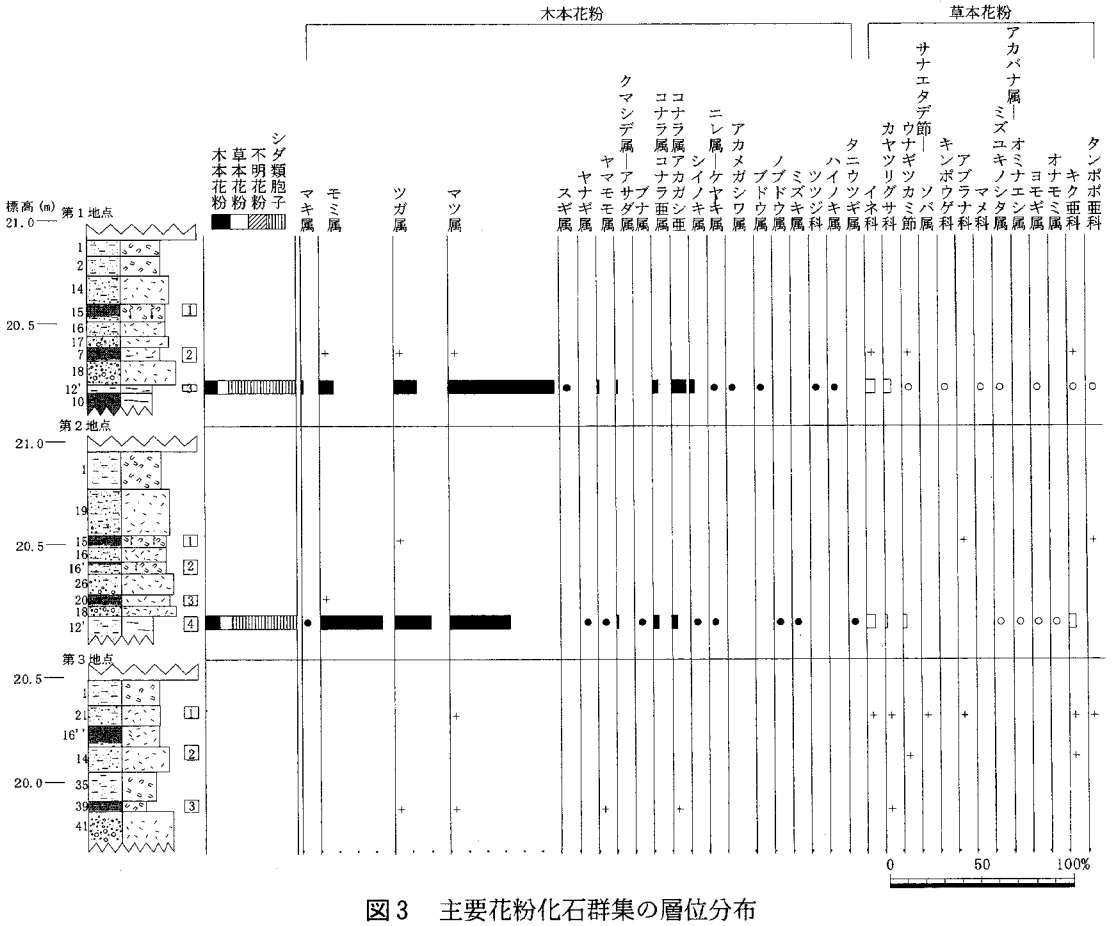


図３　主要花粉化石群集の層位分布

出現率は木本花粉が木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は１%未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

この他、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族（コブナグサ属・ススキ属を含む）、イチゴツナギ亜科などが検出され、タケ亜科の増加する傾向が見られる。

表3　植物珪酸体分析結果

種類 / 試料番号	第1地点 1	2	3	第2地点 1	2	3	4	第3地点 1	2	3
イネ科葉部短細胞珪酸体										
イネ族イネ属	63	10	7	56	98	22	4	84	57	3
キビ族チゴザサ属	−	11	4	1	1	1	−	−	1	5
タケ亜科	176	206	36	168	229	199	20	206	208	141
ヨシ属	7	38	7	7	11	13	9	7	6	30
ウシクサ族コブナグサ属	4	69	9	4	6	8	23	1	11	27
ウシクサ族ススキ属	37	78	36	22	26	23	65	13	39	50
イチゴツナギ亜科	18	35	17	21	27	16	19	22	33	22
不明キビ型	123	241	164	99	148	134	115	137	84	139
不明ヒゲシバ型	7	17	6	8	13	9	10	16	5	4
不明ダンチク型	38	140	66	33	45	53	43	36	23	62
イネ科葉身機動細胞珪酸体										
イネ族イネ属	12	2	11	10	12	5	9	15	14	6
タケ亜科	70	30	58	75	63	70	72	75	65	60
ヨシ属	2	2	3	2	4	3	6	1	3	3
ウシクサ族	6	13	17	10	16	13	28	15	24	36
シバ属	4	−	−	3	−	2	−	1	1	−
不明	22	19	23	20	23	19	18	9	14	15
合　計										
イネ科葉部短細胞珪酸体	473	845	352	419	604	478	308	522	467	483
イネ科葉身機動細胞珪酸体	116	66	112	120	118	112	133	116	121	120
総　計	589	911	464	539	722	590	441	638	588	603
組織片										
イネ属穎珪酸体	−	−	−	3	−	1	2	1	6	1
イネ属短細胞列	−	−	−	6	3	−	1	4	4	−

・第2地点

植物珪酸体の産状は、第1地点と類似する。試料番号4から1にかけてイネ属が増加し、特に試料番号2・1で顕著である。この中には、稲籾殻に形成される穎珪酸体や葉部に形成される短細胞列も認められる。この他、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族（コブナグサ属・ススキ属を含む）、イチゴツナギ亜科などが検出される。このうちタケ亜科は増加、ウシクサ族は減少傾向を示す。

・第3地点

試料番号3～1ではイネ属が増加傾向を示す。特に試料番号2・1で顕著である。この中には、稲籾殻に形成される穎珪酸体や葉部に形成される短細胞列も認められる。この他、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族（コブナグサ属・ススキ属を含む）、イチゴツナギ亜科などが検出され、第2地点と同様にタケ亜科が増加し、ウシクサ族が減少する。

（4）土壌理化学分析

結果を表4に示す。今回対象とした土壌はいずれも土色が5Y系であることから、比較的還元作用の影響を強く受けた低地土壌の特徴を有すると予想される。一方、土性についてはそれぞれSCL（砂質埴壌土）、SC（砂質埴土）、HC（重埴土）であることから、大きく砂質的な土壌（SCL、SC）と粘

表4　土壌理化学分析結果

地点	番号	土性	土色	全炭素 (%)	全窒素 (%)	C/N	P_2O_5 (mg/g)	CEC (me/100g)
第1地点	1	SCL	5Y4/2　灰オリーブ	0.32	0.04	8.3	0.46	3.4
	2	HC	5Y3/1　オリーブ黒	0.89	0.06	16.1	0.54	10.8
	3	HC	5Y4/1　灰	0.68	0.04	16.9	0.55	8.7
第2地点	1	SC	5Y5/2　灰オリーブ	0.24	0.03	7.3	0.47	3.9
	2	SCL	5Y5/3　灰オリーブ	0.25	0.03	7.4	0.45	4.4
	3	SCL	5Y4/1　灰	0.35	0.03	12.2	0.33	6.2
	4	HC	5Y4/2　灰オリーブ	0.56	0.04	14.9	0.48	8.6
第3地点	1	HC	5Y5/1　灰	0.38	0.05	7.7	0.64	5.1
	2	HC	5Y5/1　灰	0.33	0.04	9.0	0.49	5.3
	3	HC	5Y5/1　灰	0.60	0.04	13.9	0.57	8.3

注1）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
注2）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。
SCL……砂質埴壌土（粘土15～25%、シルト0～20%、砂5～85%）
SC……砂質埴土（粘土25～45%、シルト0～20%、砂55～75%）
HC……重埴土（粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%）

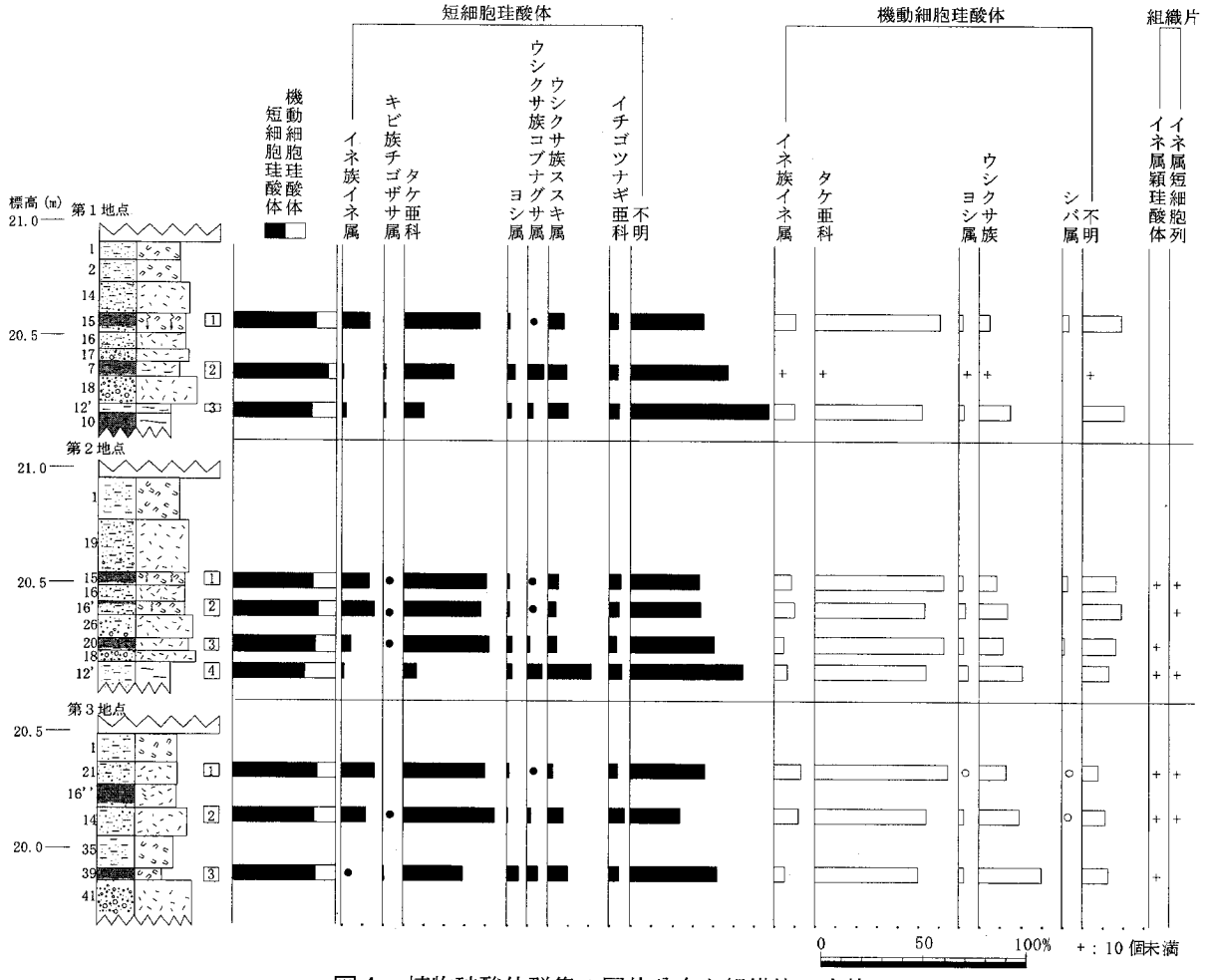


図4　植物珪酸体群集の層位分布と組織片の産状

出現率は、イネ科葉部の短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は1％未満の種類、＋はイネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により＋の記号で示す。

土質な土壌（HC）の2種に分けられると考えられる。したがって、この砂質的な土壌と粘土質な土壌では粘土含量の違いから、土壌の持つ陽イオン交換容量（CEC）が大きく異なることが予想されたが、実際の結果ではどちらの土壌においても陽イオン交換容量が低い値であり（3.4～10.8me/100ｇ）、粘土含量の違いによる陽イオン交換容量の差は認められない。

一方、土壌の陽イオン交換容量を左右する要因として、粘土鉱物種やその含有量のほかに土壌中における腐植物質の存在の影響が大きいことは周知の事実であるが、土壌腐植の量的把握の指標である全炭素や全窒素含量もまた低い値であり、陽イオン交換容量に大きな影響を与えている可能性は低いものと考えられる。ただし、第1地点試料番号2・3や第3地点試料番号3などでは、全炭素含量が低い中でも他の試料と比較してわずかに高い傾向にあり、同時にC／Nも高い傾向にあることから、腐植含量、腐植化度ともに高い傾向にあることが推察され、これら試料では陽イオン交換容量もわずかに高い値となっている。なお、今回は土壌中の腐植（有機物）の間接的な量的指標として全リン酸含量も測定したが、全リン酸含量は0.33～0.64mg/g と著しく低い値であり、各試料における有意な特徴は認められないものと思われる。これには全炭素含量が低いことから、もともとのリン酸含量が低いものであること、還元的な条件下ではリン酸の可溶化が促進され、下方へと流亡するなどの要因が考えられ、今回のような土壌では全リン酸含量から土壌の特徴を把握することは難しいと思われる。

（5）軟X線写真撮影観察

各地点の軟X線写真の観察結果を以下に記載する。

・1地点

12′層は細礫混じりの泥質堆積物からなる。葉理構造が認められるが、擾乱作用により不明瞭となっている。18層は淘汰の悪い細礫・粗粒砂からなる砂礫である。砂礫の隙間を泥が充填する、マトリクスサポート（基質支持）である。擾乱作用が及んでおり、上位の7層から伸びる植物根跡が認められる。7層は細礫混じりの泥質堆積物からなる。葉理構造を呈するが擾乱作用により乱れている。本層上面から下方に伸びる植物根跡が密に認められ、上部1㎝程度は有機質に富む。本層と上位の17層との層界は明瞭である。17層～15層は細礫混じり粗粒～中粒砂からなり、いずれも淘汰が悪い。各層の層界は不明瞭である。いずれの層位も著しい擾乱作用が及んでおり、縦方向に伸びる植物根が密に認められる。また、砂を核としたペッド状の構造も認められる。ペッドの大きさは5㎜～8㎜程度と、比較的揃っている。この傾向は15層で顕著であり、さらに有機質に富む。

・2地点

12′層は細礫混じりの泥質堆積物からなり、葉理構造が認められるが擾乱作用により不明瞭となっている。上部では擾乱作用が顕著であり、有機質にやや富む。下方に延びる植物根が認められる。18層は淘汰の悪い細礫・砂からなり、孔隙を泥が充填するマトリクスサポート（基質支持）である。擾乱作用が及んでおり、細礫の配向性は不定である。縦方向・斜方向に不連続な植物根が認められる。26層は淘汰の悪い細礫混じり粗粒～中粒砂からなる。擾乱作用が及んでおり、上部2㎝ほどで顕著である。26層は淘汰の悪い、基質支持の粗砂～細礫からなる。全体に擾乱作用が及んでおり、ペッド状の構造が認められる。孔隙の間を下方に不連続な植物根が認められる。16′層は細礫混じりの粗粒～細粒砂からなり、淘汰が悪い。擾乱作用が及んでおり、上部では有機質に富む。縦方向に延びる植物根が認められる。16層は淘汰の悪い細礫混じり粗粒～中粒砂からなり、マトリクスサポートの状態を呈する。擾乱作用が及び、砂・細礫を核としたペッド状の構造が認められる。下方に伸びる植物根跡が密に認められ、上部はやや有機質に富む。15層は細礫混じり粗粒～中粒砂からなり、淘汰が悪い。著しい擾乱作用が及んでおり、砂を核としたペッド状の構造も認められる。ペッドの大きさは5～8㎜程度と、比較的揃っている。19層は細礫混じり粗粒～中粒砂からなり、淘汰が悪い。著しい擾乱作用が及んでおり、植物根が密に認められる。

・3地点

41層は淘汰の悪い細礫・粗粒砂からなる。上部に向かい粒径が小さくなる。擾乱作用が及んでおり、不連続な細い植物根が認められる。39層は淘汰の悪い細礫～中粒砂混じりの泥質堆積物からなる。擾乱作用が及んでおり、下方に伸びる植物根跡が認められる。有機質に富む。35層は細礫混じり粗粒～中粒砂からなり、淘汰が悪い。著しい擾乱作用が及んでおり、縦方向に伸びる細い植物根と横方向に延びる比較的太い植物根が密に認められる。14層は淘汰の悪い細礫～粗粒砂からなる。擾乱作用が及んでおり、不明瞭なペッド状の構造が認められる。細い植物根と太い植物根跡が認められる。16″層は淘汰の悪い細礫・粗粒砂混じり細粒砂～シルトからなる。著しい擾乱作用が及んでおり、細い植物根が密に認められる。また、砂を核としたペッド状の構造も認められる。ペッドの大きさは5㎜程度と比較的揃っている。21層は淘汰の悪い細礫～粗粒砂からなる。擾乱作用が及んでおり、細礫・砂を核としたペッド状の構造が認められる。細い植物根と太い植物根跡が認められる。1層は淘汰の悪い細礫混じりの細粒砂・シルトからなる。著しい擾乱作用が及び、ペッド状の構造が認められる。縦方向・横方向の植物根が密に認められる。

1－4．考察

（1）低地の古環境

調査区が位置する谷底低地の古環境について、層序および各分析結果に基づいて、下位層準より順に検討する。

今回の調査層準中で最下位の12′層は、細礫混じりの泥質堆積物からなる。擾乱作用が及んでいるため構造は乱れているが、基本的には平行葉理構造を呈している。本層から珪藻化石では *Aulacoseira* spp. が多産した。保存状態が悪く種を特定するには至らなかったが、*Aulacoseira* 属に含まれる種の多くが水中で浮遊して生活する浮遊性種であることから、本層堆積期の調査地点は比較的静穏な止水域であったことが推定される。一方、本層の土壌の理化学性は、潜在的な地力評価の一つである陽イオン交換容量が他の層位と比較して高く、炭素含量や窒素含量も同様な傾向を示した。また、本層の構造は擾乱作用により乱れており、第2地点では上部でその傾向が顕著であった。これらのことと、後述する花粉化石の保存状態から、本層は常に鹹水するような状態ではなく、植生に覆われ、腐植が集積するような状況が継続する場所であったことが推定される。本層中の植物珪酸体組成は、ススキ属を含むウシクサ族の多産が特徴であり、栽培種のイネ属も検出された。これらの植物が調査地点ないしその周辺に分布していたとみられる。

12′層の上位になると堆積物の層相が大きく変化し、粗粒堆積物が累重するようになる。これら粗粒堆積物の構造は、いずれの層準も擾乱作用が及び乱れており、堆積構造は不明瞭となっている。調査区内には溝が確認されている。溝内には淘汰の良い砂礫が堆積し、砂礫堆積期に溢流した堆積物が側方に拡がっている状況が認められる。このことから、粗粒砕屑物の堆積成因として洪水等による氾濫堆積が考えられる。このように18層の堆積期以降、谷底平野は比較的粗粒な砕屑物が堆積する場所へと変化したことが窺える。この変化の原因として、谷底平野および周辺台地上の地形変化、植生変化等が考えられるが、今後の周辺地域での情報の蓄積をもって再評価するようにしたい。また、この粗粒堆積物の構造はほとんどの層準で著しい擾乱作用の影響を受けていた。この原因としては人為的な影響も含めて評価する必要がある。次に粗粒堆積物各層の特徴についてみてみる。

7層は粗粒堆積物中に挟在する泥質堆積物である。本層中の珪藻化石群集は止水性種が多産し、中でも *Achnanthes crenulata* が約40%と高率に出現した。12′層と同様な止水環境を示唆することから、氾濫時以外には静穏な止水環境が拡がる時期が存在したことを示しているものと思われる。土壌の理化学性についても12′層と同様に陽イオン交換容量が比較的高く、炭素含量や窒素含量も同様な傾向を示し、同様な堆積物の構造が認められたことから、常に鹹水するような状態ではなく、植生に覆われ、腐植が集積するような状況が継続する場所であったことが推定される。

39層は淘汰の悪い細礫～中粒砂混じりの泥質堆積物からなり、本層上面では水田遺構が検出されている。珪藻化石は保存状態が悪く、破片が多数認められた。堆積物の理化学性は12′層と同様であり、地力的に問題はなかった可能性がある。栽培種のイネ属植物珪酸体が検出されており、調和的な結果となっている。

15層は淘汰の悪い細礫混じり粗粒～中粒砂からなる。珪藻化石群集は第1地点と2地点で多少出現率に違いが認められた。第1地点では真＋好止水性種が高率を占め、その中では好止水性種・好汚濁性種の *Fragilaria construens* fo. *venter* が多産した。これに対して第2地点では好止水性種の占める割合が低く、好流水性種の *Navicula elginensis* var. *neglecta* が多産した。このように出現率において多少の違いはあるが、両地点の距離や種類構成が同様であることから局地的な堆積環境の違いを反映しているとは考えにくく、むしろ化石群集の形成過程に起因するものと思われる。本層準の珪藻化石

群集は止水性種・流水性種・陸生種という相反する環境を指標する種群から構成されており、このような群集を混合群集と呼ぶ。混合群集は氾濫堆積物や水田耕土などで特徴的に確認されており、ここでも同様な状況が想定される。本層ではイネ属短細胞珪酸体の出現率が下位層に比較して高い値を示した。本層上面において水田遺構が確認されていることと調和的な結果である。また、堆積物の構造は著しい擾乱作用により乱れており、ペッド状の構造が認められた。このような擾乱作用の要因として水田耕作に伴う擾乱があげられ、氾濫堆積物である砂・泥を攪拌している状況が想定される。先に述べたように本層以外の粗粒堆積物においても同様な構造が認められていることから、少なからず人為的な影響が及んでいる可能性がある。なお、本層の理化学性は、陽イオン交換容量が低く、また他の成分も低い傾向にある。したがって、地力的には砂質的な性格が強いため、やや低い結果になったと思われる。

以上、古墳時代以降の谷底平野の古環境を整理すると次のようになる。10層・12′層堆積期は比較的静穏な堆積環境であった。堆積後には草本植生が覆っていたとみられる。その後、堆積環境が変化し、氾濫堆積物の累重をみるようになる。この堆積間隙には静穏な水域環境が拡がる時期も存在した。また、氾濫堆積物とみられる粗粒堆積物は、いずれも擾乱作用が著しく及んだペッド状の構造が発達する構造を示した。この構造は水田遺構が確認されている作土層の構造と類似していることから、それ以外の土層についても人為的な擾乱作用が及んでいた可能性がある。なお、栽培種のイネ属は調査を行った全層準から出現し、その出現率は上位で高くなる傾向があった。

（2）遺跡周辺の古植生

各調査地点のほとんどの調査層準で花粉化石が検出されなかった。僅かに検出された化石の保存状態は全般に悪く、花粉膜の表面にはカーペット状の穴が多数認められ、膜構造が不明瞭なものが多く認められた。このような花粉化石の産状は、花粉が堆積物中に取り込まれなかったことを示しているのではなく、堆積時・後に風化作用の影響を受け分解していることを示しているものと思われる。

比較的花粉・胞子化石が多産した第1地点試料番号3と第2地点試料番号4では、木本・草本花粉・シダ類胞子の構成比では70%前後がシダ類胞子が占め、木本花粉ではモミ属・ツガ属・マツ属といった針葉樹花粉が卓越した。一般に花粉の風化・腐敗に対する抵抗性は、広葉樹花粉よりもシダ類胞子や針葉樹花粉の方が強いとされる（例えば、徳永・山内，1971）。このことから、第1地点試料番号3と第2地点試料番号4の花粉組成もまた、風化作用の影響を受け偏った組成となっている可能性がある。花粉化石の分解過程については未だ不明な点が多く、今後の基礎研究により検証していく必要がある。ただし、今回の調査層準は上記したように著しい擾乱作用を受けており、ペッド状の構造が認められること等を考慮すると、常に還元状態にあったのではなく、好気的条件になる時期が存在したことが推定される。このような乾・湿の変化が花粉の分解に関係しているのかもしれない。いずれにしても両地点・試料の花粉組成は偏っていると判断されることから、ここでは第1次調査区の結果（パリノ・サーヴェイ，2000）も含めて、当時の植生について概観しておく。

第1次調査区では古代および平安～戦国時代の堆積物において、マツ属が優占する花粉群集が得られている。このほか、アカガシ亜属・シイノキ属・ヤマモモ属・マキ属・イスノキ属・センダン属などの暖温帯林の構成要素、ツツジ科・アカメガシワ属などの広葉樹、ツル性植物のブドウ属などが認められている（パリノ・サーヴェイ，2000）。今回の結果でも同様な種類が確認されており調和する。これらことから、谷底平野周辺の台地および後背丘陵地には、マツ属の卓越する林分の存在が推定される。この林分の成立時期については特定できない。種類構成からみて、暖温帯常緑広葉樹林からマツ属卓越の林分へと退行ないし偏向遷移していることが窺える。この植生変化については、今後、台

地や丘陵上の土地条件の変化、当時の人間社会における樹木の利用形態の変化などとの関連性を含めて再評価するようにしたい。

2.出土木材の年代と樹種

2－1．試料

試料は、出土した杭材や自然木などの木材40点（試料番号1～35）である。放射性炭素年代測定は、試料番号1,5,9,12,14,15,17,28,35の計11点について行う。また、樹種同定は試料番号1～40の計40点について行う。

2－2．方法

（1）放射性炭素年代測定

a）前処理

水でよく洗浄して表面の異物を取り除いた。乾燥、粉砕後、塩酸で煮沸した。塩酸を水で充分洗い流した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にした。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼させて二酸化炭素とし、アンモニア水に捕集した。これに塩化カルシウムを反応させ、純粋な炭酸カルシウムを回収した。

b）測定試料の調製

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン5ml（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して5mlとした）にシンチレイターを0.075g加えたものを測定試料とした。

c）測定

測定は、1回の測定時間50分間を繰り返し行った。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料を一緒に測定した。

d）計算

放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用した。

（2）樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

2－3．結果

（1）放射性炭素年代測定結果

測定結果を表5に示す。試料番号1は、年代値が誤差＋ 2σ よりも小さいため、MODERNと表記し、() 内に得られた年代値を参考値として記した。その他の試料は、3880BP～500BPまでの値が得られた。

（2）樹種同定

樹種同定結果を表6に示す。試料番号23は、散孔材の道管配列を有する広葉樹材であるが、保存状態が悪く、樹種の同定には至らなかった。その他の試料は、針葉樹2種類（マツ属複維管束亜属・マキ属）と広葉樹15種類（ヤナギ属・コナラ属アカガシ亜属・クリ・ツブラジイ・スダジイ・ヤマグ

ワ・クスノキ科・マンサク・サカキ・ヒサカキ・ウツギ属・ユズリハ属・センダン・シャシャンボ・カキノキ属）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　　マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・マキ属（*Podocarpus*）　　マキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部との境界は不明瞭。樹脂細胞が早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1～2個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・ヤナギ属（*Salix*）　　ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2～3個が複合して年輪全体にほぼ一様に散在し、年輪界付近でやや管径を減少させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1～15細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）　　ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1～4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・ツブラジイ（*Castanopsis cuspidata*（Thunberg）Schottky）　　ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと集合～複合放射組織よりなる。

・スダジイ（*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii*（Makino）Nakai）　　ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、孔圏部は2～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

表5　放射性炭素年代測定結果

番号	出土地点	旧遺構名	登録番号	質	年代値	誤差		Lab-No.
						$+\sigma$	$-\sigma$	
1	SX102	SX02（水口）	10108	生木	MODERN（140）	（150）	（140）	PAL-744
5	SX301	SD306北側柵	10351	生木	1350	230	220	PAL-745
9	SX302	SD306北側柵	10361	生木	1310	120	120	PAL-746
12	SX401	SD405南側柵	10403	生木	1240	210	200	PAL-747
14	SX402	SD405南側柵	10412	生木	1250	250	250	PAL-748
15	SX103	七隈川蛇行部	10155	生木	3880	220	210	PAL-749
17	第5面	T406, A, 拡張区	10514	生木	940	250	240	PAL-750
28	SX401	SD405	11403	生木	1300	110	110	PAL-751
35	SX501柵	5面柵	11518	生木	1180	210	200	PAL-752

1）年代値は、1950年を基点とした値。基点との差が誤差2σより小さい場合、基点より小さいとしてMODERNと表示し、年代値を参考として（　）内に記した。

2）放射性炭素の半減期は、LIBBYの5570年を私用した。

・ヤマグワ（*Morus australis* Poiret）　　クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は1～5列で、晩材部へ移行は緩やか、年輪界に向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・クスノキ科（Lauraceae）

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～20細胞高。柔細胞には油細胞が認められるが顕著ではない。

・マンサク（*Hamamelis japonica* Sieb. et Zucc.）　　マンサク科マンサク属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2～3個が複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性Ⅱ型、1～2細胞幅、1～20細胞高で時に上下に連結する。

・サカキ（*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.）　　ツバキ科サカキ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2～3個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1～20細胞高。

・ヒサカキ（*Eurya japonica* Thunberg）　　ツバキ科ヒサカキ属

表6　樹種同定結果

番号	出土地点	旧遺構名	取り上げ番号	遺物の種類	登録番号	樹種
1	SX102	SX02（水口）	8	杭	10108	マツ属複維管束亜属
2	SA101	SS302杭列	A-13	杭	10303	マツ属複維管束亜属
3	SA101	SS302杭列	B-6	杭	10326	マツ属複維管束亜属
4	SA101	SS302杭列	B-10	杭	10330	マツ属複維管束亜属
5	SX301	SD306北側柵	3	杭	10351	ヒサカキ
6	SX301	SD306北側柵	4	杭	10355	クリ
7	SX301	SD306北側柵	8	横木	10353	コナラ属アカガシ亜属
8	SX301	SD306北側柵	10	立杭	10354	スダジイ
9	SX301	SD306北側柵	58	立杭	10361	シャシャンボ
10	SX401	SD405南側柵	1	杭	10401	クリ
11	SX401	SD405南側柵	5	杭	10402	ウツギ属
12	SX401	SD405南側柵	17	杭	10403	スダジイ
13	SX402	SD405南側柵	1	立杭	10411	ツブラジイ
14	SX402	SD405南側柵	2	立杭	10412	ツブラジイ
15	SX103	七隈川蛇行部	7	流木	10155	ヤマグワ
16	第5面	T406, A, 拡張区	5	杭	10512	ヒサカキ
17	第5面	T406, A, 拡張区	8	杭	10514	クスノキ科
18	第5面	T406, A, 拡張区	22	杭	10515	ヒサカキ
19	第5面	T406, A, 拡張区	42	杭	10518	スダジイ
20	第5面	T406, A, 拡張区	70	杭	10520	カキノキ属
21	第5面	T406, A, 拡張区	72	杭	10521	センダン
22	第5面	T406, A, 拡張区	4	杭	10511	ヒサカキ
23	第5面	T406, A, 拡張区	43	杭	10523	広葉樹（散孔材）
24	第5面		木製品6	杭	10513	マンサク
25	第5面	T406, A, 拡張区	木製品4	木製品	10504	マンサク
26	第5面		木製品2	木製品	10502	スダジイ
27	第5面	T406, A, 拡張区	木製品3	木製品	10503	スダジイ
28	SD405	SD405	7	流木	11403	ウツギ属
29	SD405	SD405	8	流木	11402	ヤナギ属
30	SD405	SD405ベルト南側	－	杭	11404	ウツギ属
31	SD405	SD405ベルト南側	－	流木	11406	クリ
32	SX501	5面柵	6	杭	11514	ユズリハ属
33	SX501	5面柵	2	杭	11512	サカキ
34	SX501	5面柵	9	横木	11517	ヤナギ属
35	SX501	5面柵	11	杭	11518	スダジイ
36	SX501	5面柵	12	杭	11519	ユズリハ属
37	第5面	SX501	595	杭	11570	クスノキ科
38	第5面	SX501	616	杭	11576	ヤナギ属
39	第5面	SX501	619	杭	11577	スダジイ
40	SD405			木製品（容器）	11411	マキ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2～3個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、1～4細胞幅、1～40細胞高。

・ウツギ属（*Deutzia*）　　ユキノシタ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、ほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有する。放射組織は大型の異性で、1～4細胞幅、50～100細胞高を越えるものまである。放射組織には鞘細胞が認められる。

・ユズリハ属（*Daphniphyllum*）　　トウダイグサ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、単独および2～3個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～2細胞幅、1～20細胞高で、時に上下に連結する。

・センダン（*Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel）　　センダン科センダン属

環孔材で、孔圏部は1～4列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、2～8個の道管が集まって複合し、漸減しながら配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状、ターミナル状および帯状。

・シャシャンボ（*Vaccinium bracteatum* Thunb.）　　ツツジ科スノキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で年輪界一様に散在する。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ型、単列で8細胞高前後のものと5～7細胞幅、30～60細胞高のものとがある。放射組織には鞘状の細胞が認められる。

・カキノキ属（*Diospyros*）　　カキノキ科

散孔材で、管壁は厚く、横断面では楕円形、単独または2～4個が時に年輪界をはさんで放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は低い。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型、1～3細胞幅、10～20細胞高で、階層状に配列する。

2－4．考察

（1）年代値について

木材の年代値は、試料番号1がMODERNであった。参考値は140BPであることから、江戸時代末頃の杭材の可能性がある。その他の木材では、3880BP～500BPまでの年代値が得られた。これらの年代値は、3880BP（試料番号15）、1350～1180BP（試料番号5, 9, 12, 14, 28, 35）、940～890BP（試料番号17, 42）、500BP（試料番号41）に分けられる。

試料番号15の年代値は、九州地方における縄文時代中期の放射性炭素年代（キーリ・武藤，1982）に一致する。七隈川蛇行部から出土した流木で、ヤマグワに同定されていること、出土遺物の年代観を考慮すると、上流部の古い地層から洗い出され再堆積した木材の可能性がある。

試料番号5, 9, 12, 14, 28, 35の年代値は、7世紀～8世紀後半頃に相当する。試料番号28を除く5点は杭材であり、4種類に同定されている。一方、試料番号28は流木であり、ウツギ属に同定されている。この結果から、これらの杭材が出土した遺構は、7世紀～8世紀頃にかけて構築・利用されたことが推定される。遺構による年代値の違いは、遺構の構築時期の違いを示している可能性がある。しかし、誤差範囲で重なる試料が多いことや、樹齢の問題（東村，1992）等を考慮すると、断定はできない。

試料番号17の年代値（940BP）は、11世紀初頭に相当する。試料番号17が出土したSX501では、この他にも試料番号35で年代測定を行っており、1180BPの年代値が得られている。年代値の差は、古材の再利用などを示している可能性や誤差範囲で一致することから樹齢の問題や試料が小片のために測定誤差が生じた可能性等考えられる。そのため、この他の試料についても年代測定を行い、確認したい。

（2）用材選択について

試料の多くは杭材であり、他に容器と用途不明の木製品が4点、流木が1点ある。杭材のうち、SX102の杭材は、年代測定の結果から江戸時代末頃の可能性がある。樹種は複維管束亜属（ニヨウマツ類）であった。複維管束亜属の杭材は、本遺跡のこれまでの調査でも確認されている。黒田・畑中（1979）やHatanaka（1985）等によれば、古代以降の農耕などの人間活動の拡大により、マツ属等の花粉が増加することが指摘されている。本遺跡でも1次調査区の花粉分析結果から同様の傾向が窺える。遺跡周辺で複維管束亜属の木材が得やすい環境にあったことが推定され、その木材を杭材として利用したことが考えられる。SX302の杭材も全て複維管束亜属であることから、同様の可能性が指摘できる。

他の杭材は、年代測定の結果から基本的には古代の杭材と考えられる。これらの杭材には15種類の広葉樹材が認められており、様々種類が利用されていたことがうかがえる。杭材については、これまで各地で行われた調査でも多くの種類が確認されている（島地・伊東，1988；伊東，1990）。これらの結果から、杭材には遺跡周辺で入手可能な木材、加工時に生じた枝等の余材など、入手できる様々な木材が利用されていたことが推定される。

流木は、SX103でヤマグワ、SX401でウツギ属、SD405でクリが認められた。このうち、SX103のヤマグワは、年代測定の結果から、縄文時代中期頃の自然木が再堆積したものと考えられる。ウツギ属とクリは、杭材にも認められており、遺跡周辺の植生を構成する要素であったとみられる。クリについては、果実が食用となることから、食料としても利用されていたことが推定される。また、縄文時代には栽培されていたことも指摘されていることから、遺跡周辺に植えられていた可能性もある。

木製品では、容器にマキ属が認められた。マキ属の容器はこれまでの報告（島地・伊東，1988；伊東，1990）では出土例がほとんどない。民俗事例でも、指物、浮子、風呂桶などに利用するが、刳物、曲物、ろくろのいずれにも利用されない（農商務省山林局，1912）。今後同様の類例が出土するか注目したい。その他の木製品については、用途が不明である。樹種はマンサク1点、スダジイ2点であった。今後、用途などの詳細を明らかにしたうえで、用材選択について検討したい。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，p.73-88.

Hatanaka K.（1985）PALYNOLOGICAL STUDIES ON THE VEGETATIONAL SUCCESSION SINCE THE WURM GLACIAL AGE IN KYUSHU AND ADJACENT AREAS. Journal of Faculty of Literature, kitakyushu University (Series B), 18, P.29-71.

伊東隆夫（1990）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ．木材研究・資料，26，

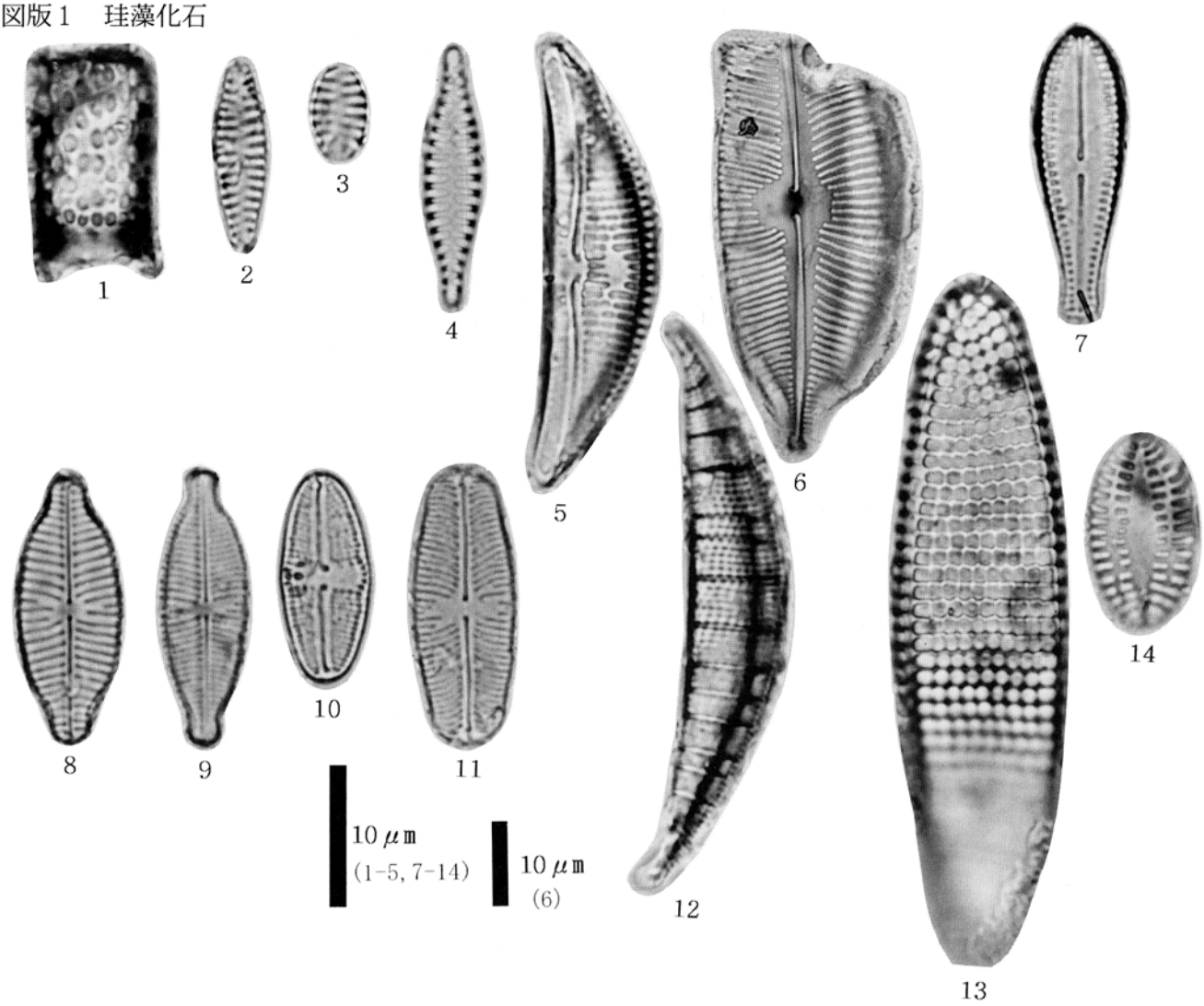
K. Asai & T. Watanabe（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.

キーリ C. T.・武藤康弘（1982）縄文時代の年代．加藤晋平・小林達雄・藤本　強編「縄文文化の研究1　縄文人とその環境」，p.246-275，雄山閣.

黒田登美雄・畑中健一（1979）花粉分析よりみた北九州の過去2万年間の植生変遷．花粉，13，p.3-8.
農商務省山林局編（1912）木材ノ工藝的利用．1308p.，大日．本山林會.
土壌標準分析・測定法委員会編（1986）「土壌標準分析・測定法」．354p.，博友社.
堀内誠示・高橋　敦・橋本真紀夫（1996）珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について．－混合群集の認定と堆積環境の解釈－，日本文化財科学会，第13回大会研究発表要旨集，p.62-63.
伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p.23-45.
近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64.
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1-20.
K. Krammer (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26, p.1-353, BERLIN・STUTTGART.
K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
Lange-Bertalot, H., Kuelbs, K., Lauser, T., Noerpel-Schempp, M. & Willmann, M. (1996) Dokumentation und Revision der von Georg Krasske beschriebenen Taxa. Iconographia Diatomologica3, 358p., Koeltz.-Koenigstein.
Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D. (1996) Oligotrophie-Indikatoren. 800 Taxa repraesentativ fuer drei diverse Seen-Typen. Iconographia Diatomologica2, 390p., Koeltz.-Koenigstein.
Metzeltin, D & Witkowski, A. (1996) Diatomeen der Baeren-Insel, Suesswasser-und marine Arten. Iconographia Diatomologica4, 287p., Koeltz.-Koenigstein.
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）「新版標準土色帖」.
ペドロジスト懇談会編（1984）「土壌調査ハンドブック」．156p.，博友社.
Reichardt, E. (1995) Die Diatomeen (Bacillariophyceae) in Ehrenbergs Material von Cayenne, Guyana Gallica (1843). Iconographia Diatomologica1, 107p., Koeltz.-Koenigstein.
島地　謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．296p.，雄山閣．p.91-189, 京都大学木材研究所.
竹迫　紘・加藤哲朗・坂上寛一・黒部　隆（1980）神谷原遺跡への土壌学的アプローチ．「神谷原Ⅰ」，p.412-416，八王子市椚田遺跡調査会.
徳永重元・山内輝子（1971）花粉・胞子．「化石の研究法」，p.50-73，共立出版株式会社.
田中宏之・中島啓治（1985）群馬県老神・奥平・梨木・嶺・赤久縄温泉及び福島県元温泉小屋温泉のケイソウ，群馬県立歴史博物館紀要，6，p.1-22.
東村武信（1990）改訂　考古学と物理化学．212p.，学生社.

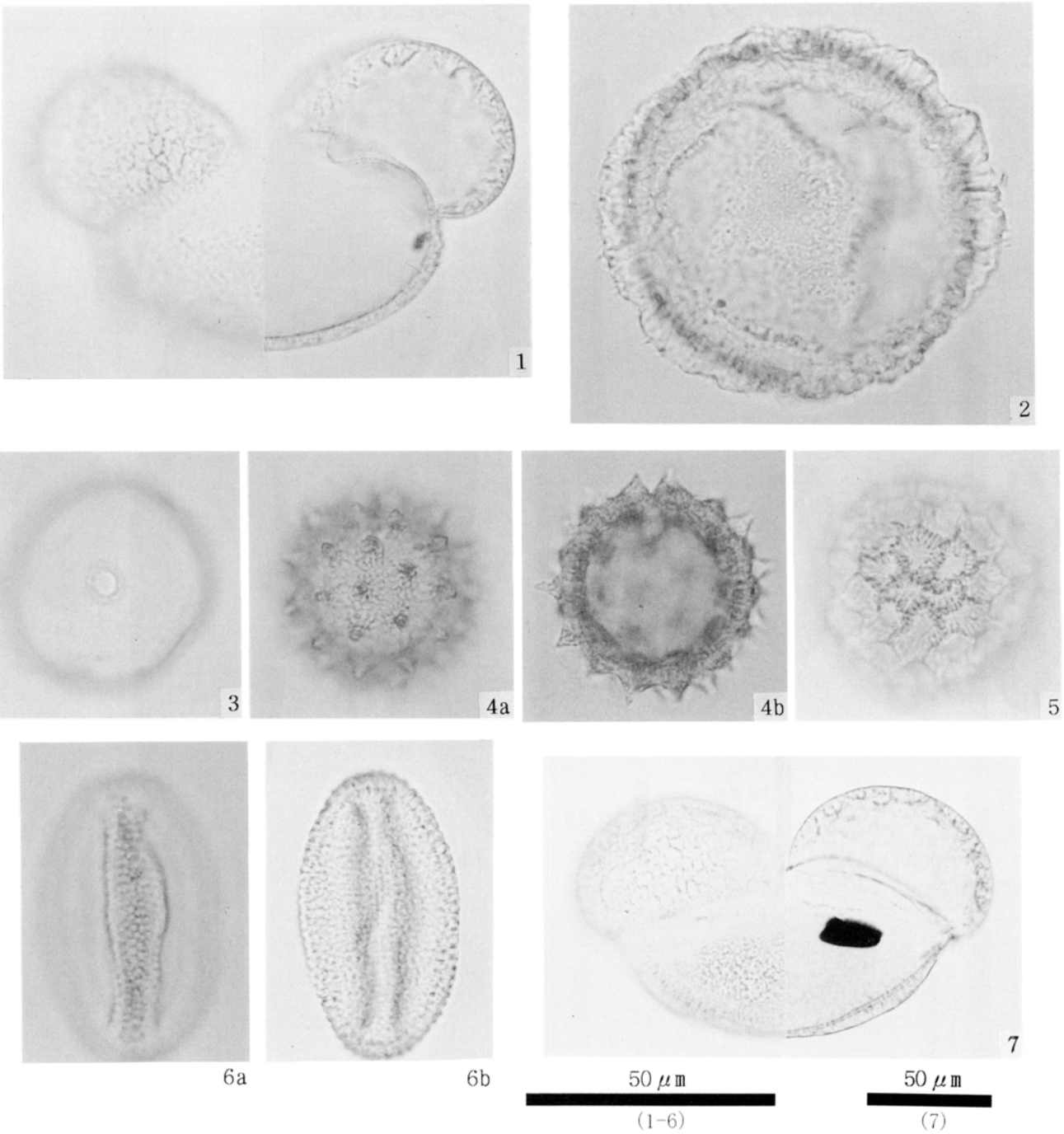
分析関連写真図版

図版１　珪藻化石



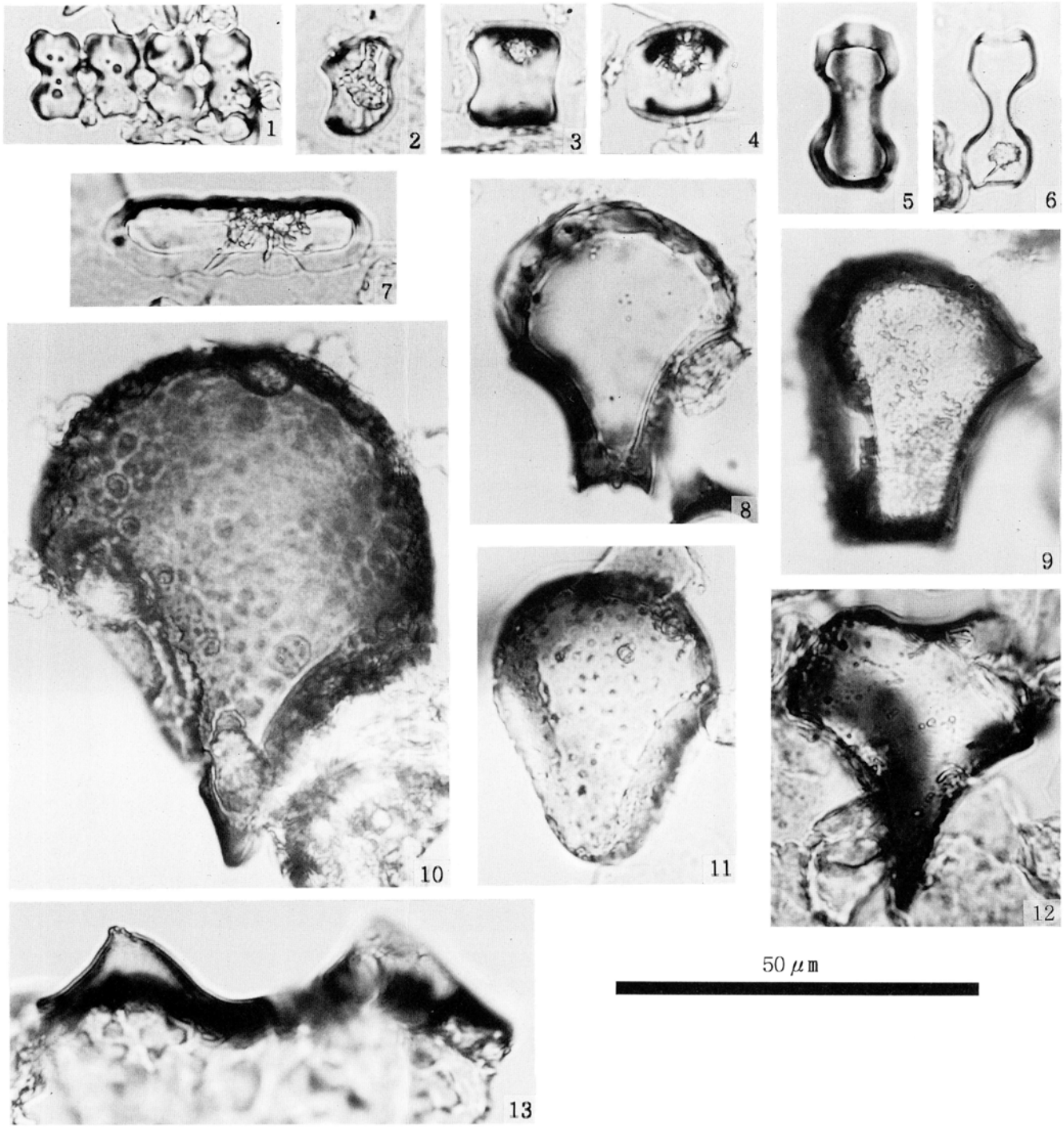
1. *Auliscus* sp. (1地点;3)
2. Fragilaria construens fo. *venter* (Ehr.)Hustedt (2地点;1)
3. *Fragilaria construens* fo. *venter* (Ehr.)Hustedt (1地点;1)
4. *Fragilaria pinnata* Ehrenberg (1地点;4)
5. *Amphora affinis* Kuetzing (1地点;3)
6. *Cymbella cuspidata* Kuetzing (1地点;3)
7. *Gomphonema grovei* var. *lingulatum* (Hust.)Lange-Bertalot (1地点;4)
8. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.)Patrick (2地点;1)
9. *Navicula kotschyi* Grunow (2地点;1)
10. *Navicula mutica* Kuetzing (1地点;2)
11. *Sellaphora pupula* (Kuetz.)Mereschkowsky (2地点;1)
12. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.)O.Muller (1地点;4)
13. *Achnanthes crenulata* Grunow (1地点;2)
14. *Cocconeis disculus* (Schum.)Cleve (2地点;4)

図版 2　花粉化石



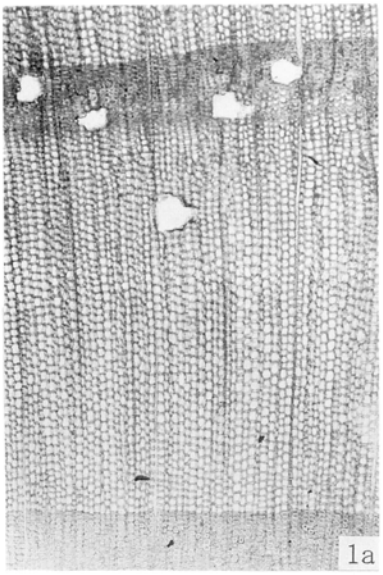
1. マツ属（1地点;3）
2. ツガ属（2地点;4）
3. イネ科（2地点;4）
4. キク亜科（2地点;4）
5. サナエタデ節－ウナギツカミ節（2地点;
6. ソバ属（3地点;1）
7. モミ属（1地点;3）

図版 3　植物珪酸体



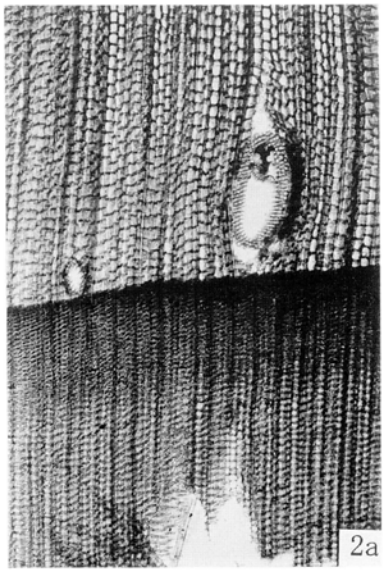
1. イネ属短細胞列（2地点;1）
2. チゴザサ属短細胞珪酸体（1地点;2）
3. タケ亜科短細胞珪酸体（2地点;3）
4. ヨシ属短細胞珪酸体（3地点;3）
5. コブナグサ属短細胞珪酸体（2地点;4）
6. ススキ属短細胞珪酸体（2地点;4）
7. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（1地点;
8. イネ属機動細胞珪酸体（2地点;2）
9. タケ亜科機動細胞珪酸体（3地点;1）
10. ヨシ属機動細胞珪酸体（2地点;2）
11. ウシクサ族機動細胞珪酸体（3地点;3）
12. シバ属機動細胞珪酸体（1地点;1）
13. イネ属穎珪酸体（2地点;1）

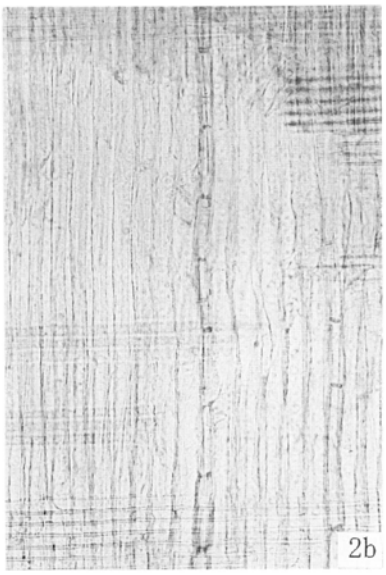
図版4　木材（1）

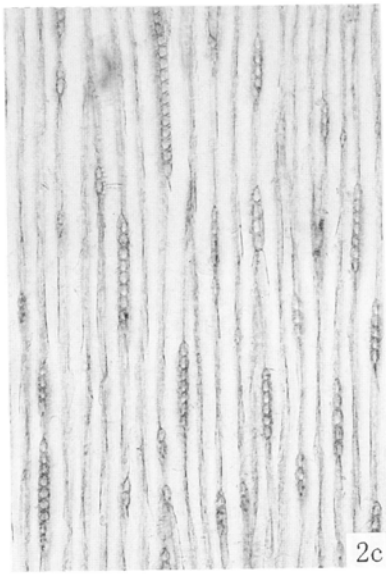

1a

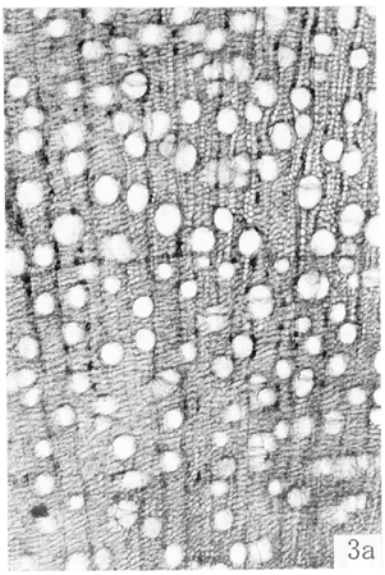
1b

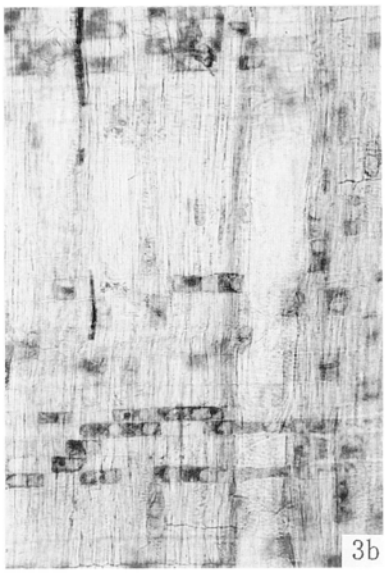
1c

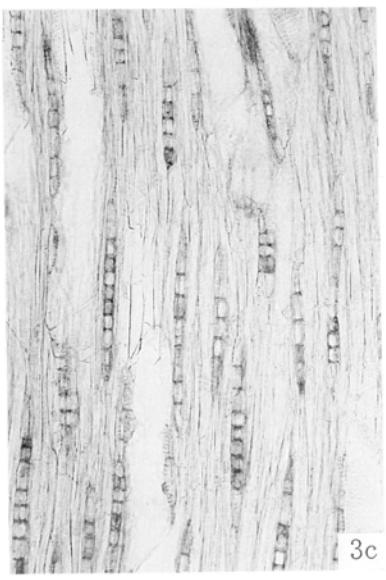

2a


2b


2c


3a

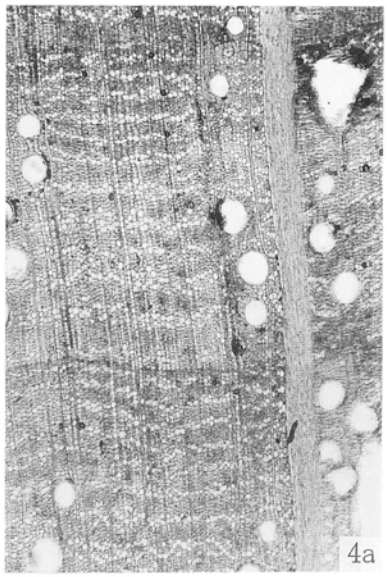

3b

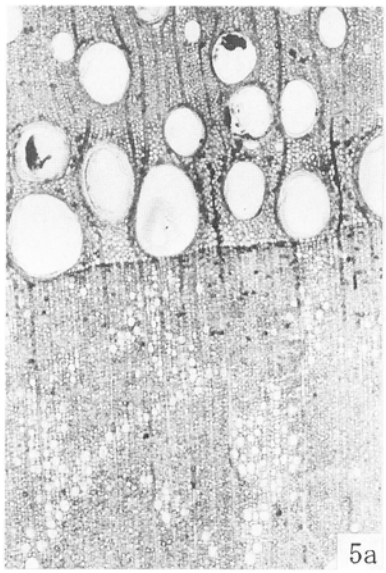

3c

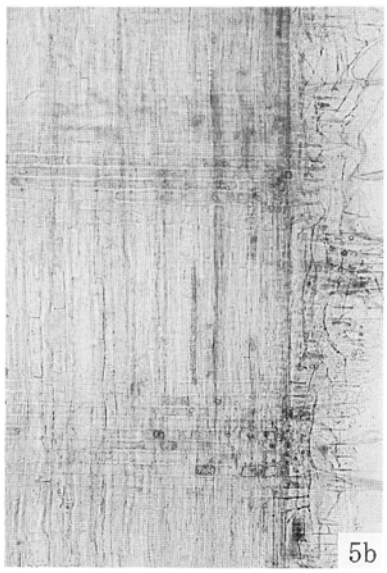
1. マツ属複維管束亜属（試料番号1）
2. マキ属（試料番号40）
3. ヤナギ属（試料番号34）
   a：木口，b：柾目，c：板目

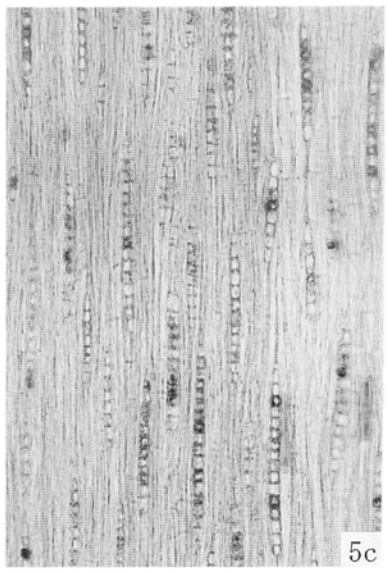
200μm：a
200μm：b, c

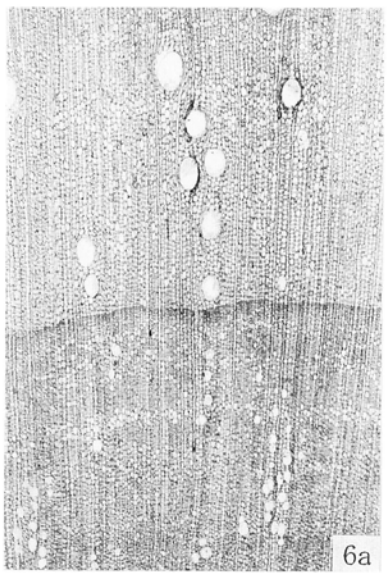
図版5　木材（2）

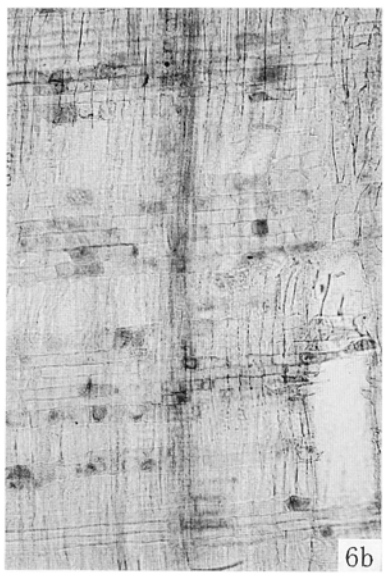








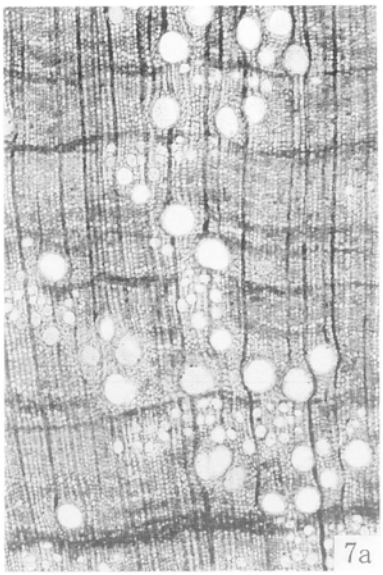


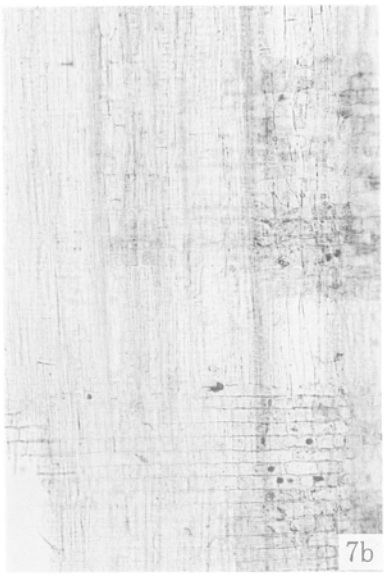


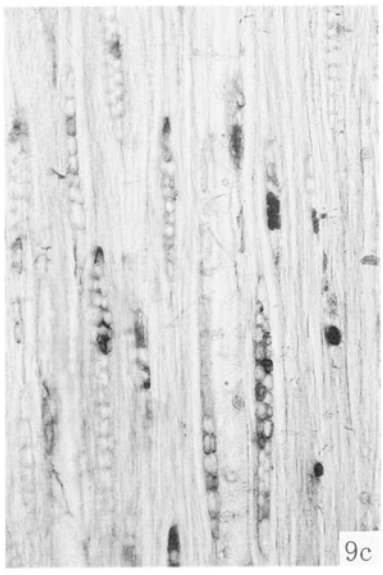
4. コナラ属アカガシ亜属（試料番号7）
5. クリ（試料番号6）
6. ツブラジイ（試料番号13）
   a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm：a
200 μm：b, c

図版6　木材（3）



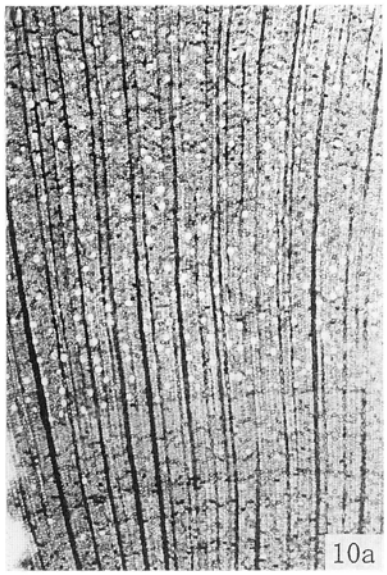


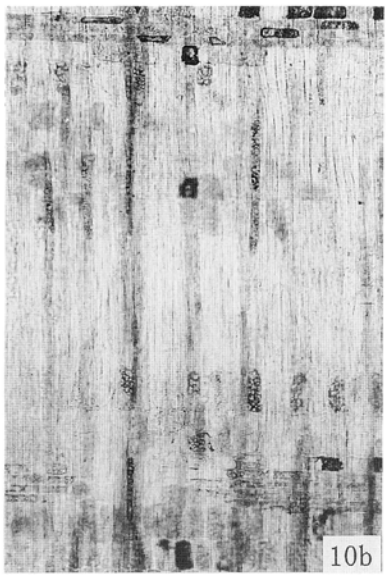


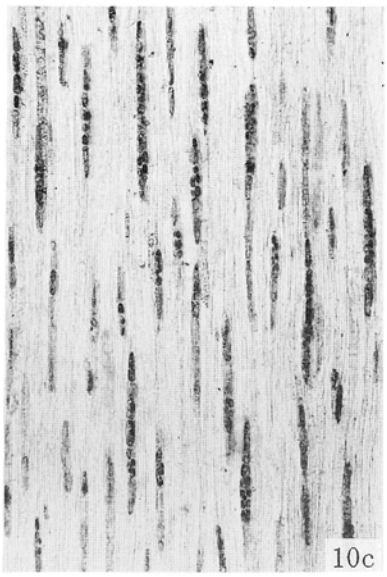
7. スダジイ（試料番号8）
8. ヤマグワ（試料番号15）
9. クスノキ科（試料番号17）
   a：木口，b：柾目，c：板目

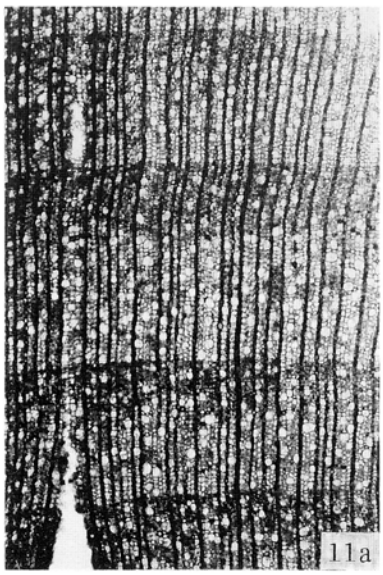
200 μm：a
200 μm：b, c

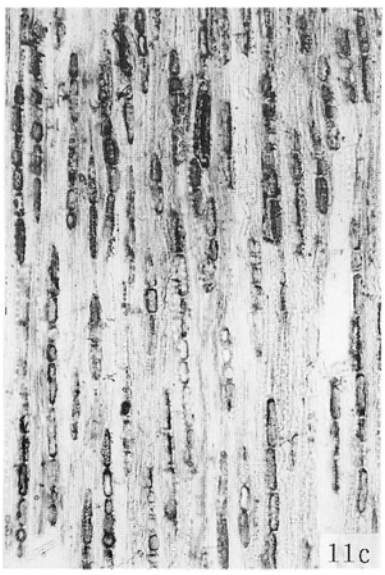
図版7　木材（4）

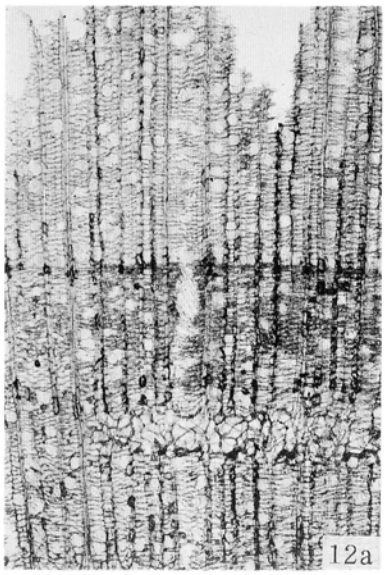


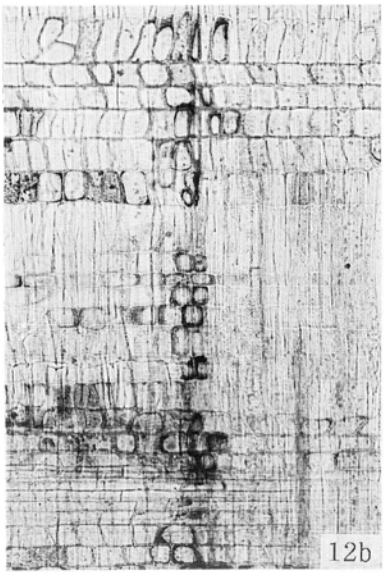


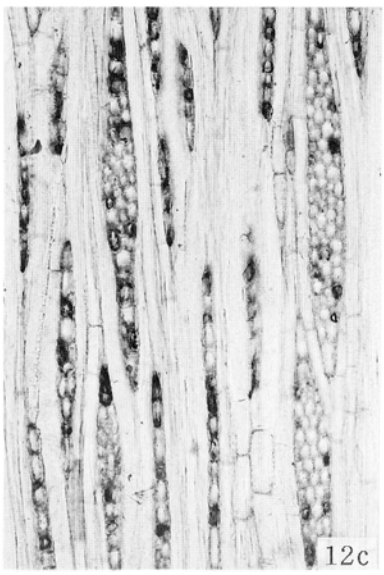








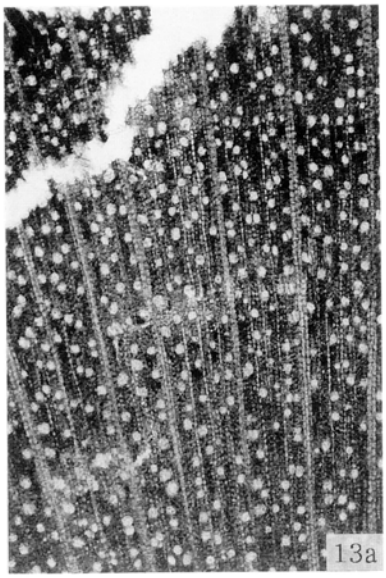


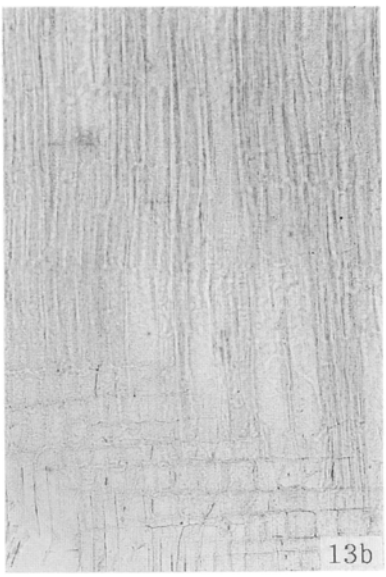


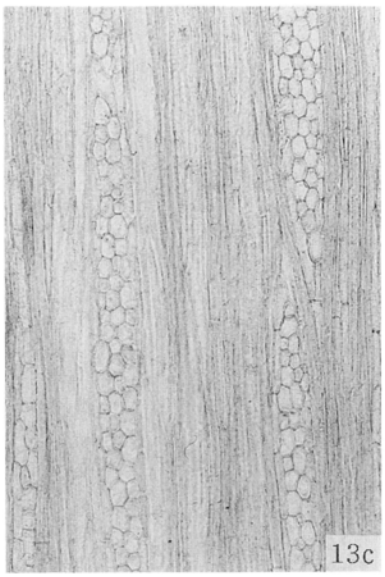
10. マンサク（試料番号24）
11. サカキ（試料番号33）
12. ヒサカキ（試料番号5）
　a：木口，b：柾目，c：板目

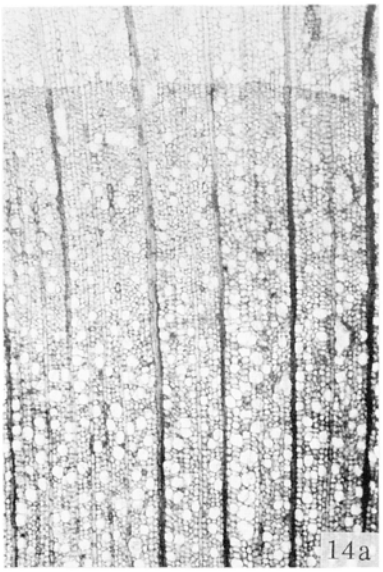
200 μm：a
200 μm：b, c

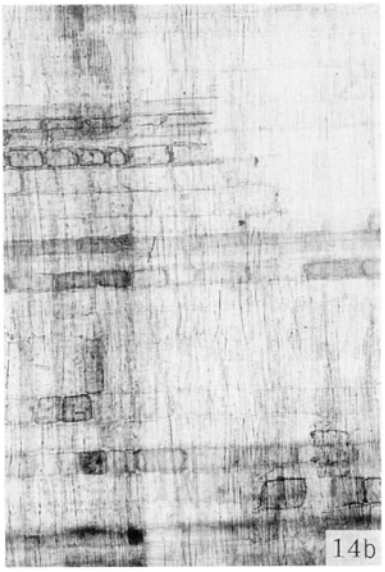
図版 8　木材（5）

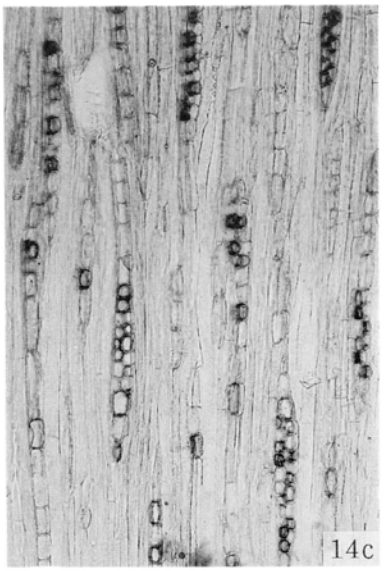

13a

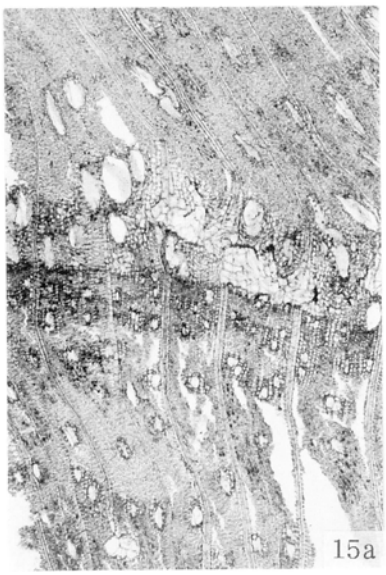

13b

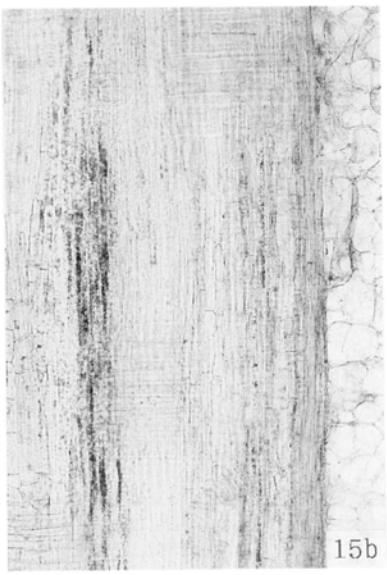

13c


14a


14b


14c


15a

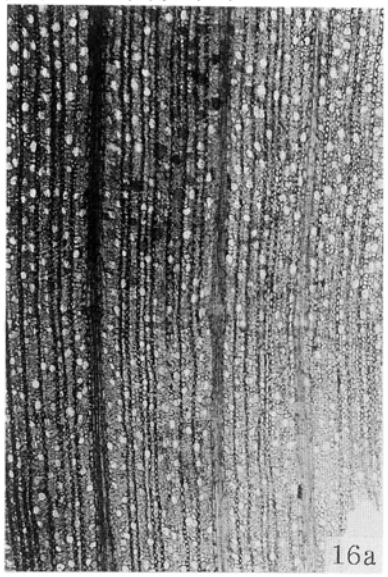

15b

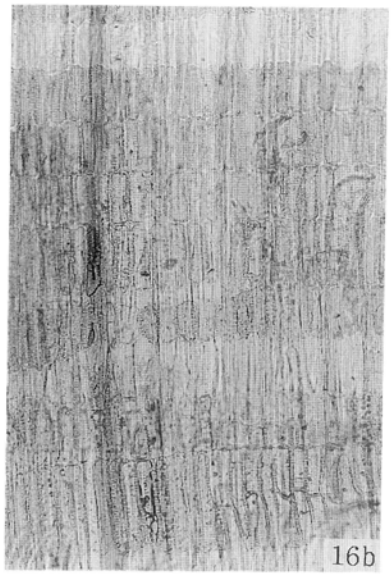
15c

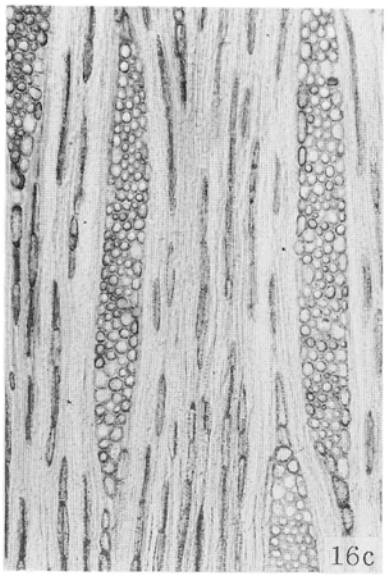
13. ウツギ属（試料番号11）
14. ユズリハ属（試料番号32）
15. センダン（試料番号21）
a：木口，b：柾目，c：板目

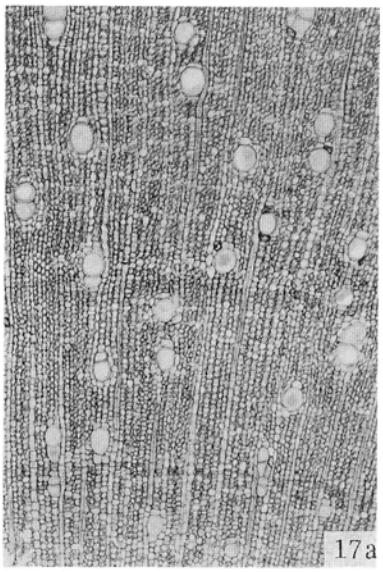
200 μm：a
200 μm：b, c

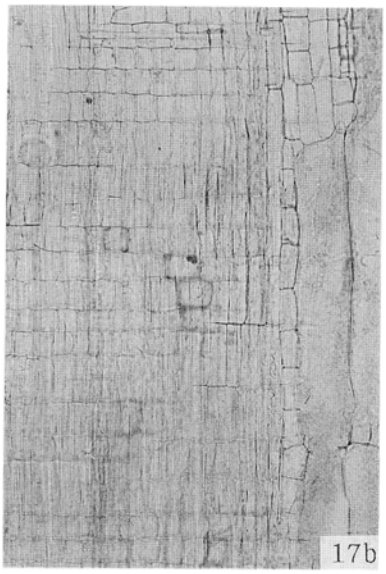
図版9　木材（6）

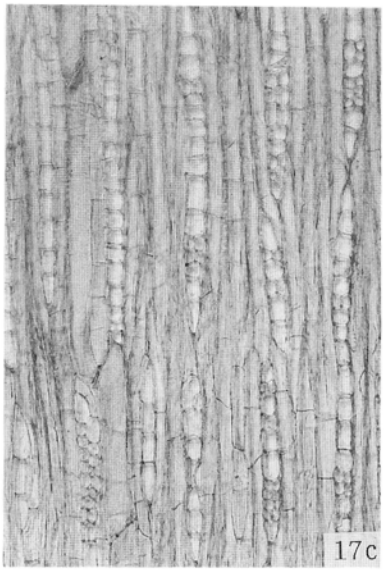












16. シャシャンボ（試料番号9）
17. カキノキ属（試料番号20）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

作業風景

梅林遺跡 第3次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第698集

2002年（平成14年）3月5日

編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8－1
電話（092）711－4667

印　　刷　博巧印刷株式会社
福岡市南区那の川一丁目9－7
電話（092）521－0001